

札内台地の縄文時代集落址

北海道登別市千歳6遺跡発掘調査報告書

Prehistoric Settlement in the Satsunai Plateau

The Report of the Archaeological Investigations
at Chitose 6 site, Noboribetsu, Hokkaido

登別市教育委員会

Noboribetsu Board of Education
Hokkaido

1982

札内台地の縄文時代集落址

北海道登別市千歳6遺跡発掘調査報告書

Prehistoric Settlement in the Satsunai Plateau

The Report of the Archaeological Investigations
at Chitose 6 site, Noboribetsu, Hokkaido

登別市教育委員会

Noboribetsu Board of Education
Hokkaido

1982

執筆・編集
大島直行
瀧川拓郎

遺物実測・抄費 遺稿因浄費

長沢佳枝
下山京子

原本
中畑隆子

遺物写真
桑安繁画

発行

登別市教育委員会
登別市中央町6丁目11番地
TEL (01438) 5-2111

印刷

北海道図書企画
TEL (011) 663-5220

昭和57年3月25日 印刷
昭和57年3月30日 発行

目 次

緒言	5
第1章 遺跡の概観と調査の方法	8
第1節 千歳6遺跡の立地と周辺の遺跡	8
第2節 発掘調査の方法	11
第3節 出土資料の整理方法	17
第4節 記載の方法	18
第2章 遺構および遺構に関連する遺物	20
第1節 S R 25 整穴	20
第2節 X L 25 整穴	31
第3節 R G 05 整穴	37
第4節 T L 12 整穴	43
第5節 C B 75 整穴	50
第6節 M T 05 整穴	56
第7節 X R 80 整穴	63
第8節 W I 65 整穴	68
第9節 M B 05 整穴	74
第10節 X J 40 整穴	80
第11節 K E 12 整穴	86
第12節 R Z 25 整穴	98
第13節 S P 38 整穴	104
第14節 N O 31 整穴	122
第15節 D C 12 整穴	124
第16節 Z R 40 整穴	126
第17節 E R 34 整穴	127
第18節 E L 12 整穴	129
第19節 K L 25 整穴	131
第20節 A B 12 整穴	134
第21節 B M 75 整穴	137
第22節 F U 69 整穴	138
第23節 P 002 小整穴	144
第24節 P 003 小整穴	148

第25節	P004小竪穴	149
第26節	P006小竪穴	150
第27節	P005小竪穴	150
第28節	P007小竪穴	152
第29節	P008小竪穴	152
第30節	P012小竪穴	153
第31節	P009小竪穴	154
第32節	P001・P010小竪穴	155
第33節	F004屋外炉址	156
第34節	F001・002・003・005屋外焼土	157
第35節	P-8区磁群	158
第3章 包含層出土の遺物		
第1節	土器	160
第2節	土製品	216
第3節	石器	217
第4章 考察		
第1節	千歳6遺跡における竪穴の構造と集落の変遷	249
第2節	「短期線土器群」と「余市式土器」の製作手法と器種構成	267
結論		286

緒言

本書は、登別市千歳6遺跡の発掘調査報告書である。調査データの記載に先立ち、まず、調査ならびに整理作業の経緯について述べるとともに、本書の内容についてもふれておきたい。

千歳6遺跡は、1980年4月に北海道教育委員会が実施した市内埋蔵文化財包蔵地分布調査によって発見された遺跡のひとつである。遺跡の所在するこの地域一帯は、地元北海道曹達株式会社敷地であり、他にも同社敷地内には、いくつかの遺跡が存在する。

1980年7月、会社は、千歳6遺跡を含む敷地の一部を宅地化することから、関係機関に事前発掘調査の協議を求めた。北海道教育委員会は、これを受けて1980年9月、工事計画に示された99,800㎡の地域について、遺跡の範囲確認調査を実施し、千歳6遺跡の全域3,875㎡について、発掘調査が必要であるとの調査結果を、会社ならびに登別市に示した。

1981年2月、登別市では、同市教育委員会がこれを主催することとし、さっそく調査体制と調査の実施計画作成にとりかかった。市教育委員会は、調査担当者を大島直行に依頼し、調査員を瀬川拓郎に、また調査補助員を大久保徹也（岡山大学学生）に委嘱した。さらに、40名の調査作業員を地元市民より募集し、60日間にわたる調査の体制をととのえた。調査の方法など、具体的な実施計画については、北海道教育委員会の範囲確認調査結果をもとに、大島・瀬川がレイアウトしたが、これには、分布調査と範囲確認調査を担当した、文化課文化財保護主事宮塚義人、長沼孝氏の助言があった。また、前年度、近接する千歳4遺跡の調査をおこなった北海道埋蔵文化財センターの中村福彦、植市幸生、西田茂、青柳文吉氏をはじめ、同センターの諸氏より多くの助言を得た。明記し、深く感謝したい。

調査は、1981年5月11日より開始したが、これに先だつ5月7日から準備作業に入り、表土ならびに有珠も火山灰の除去、調査区の設定、現地事務所の開設、調査作業員との打合わせを行なった。11日からは、まず北海道教育委員会の試掘溝で確認されていた5基の竪穴(図2)を中心に、遺構の全体数の把握につとめた。調査は、不順な天候に災わいされ、予定通り進行せず、遺跡の全容がつかめたのは6月に入ってからであった。6月1日段階で、21基の竪穴と数基の土壌を確認し、本遺跡が縄文中期終末のかなり短期間に形成された集落遺跡であることがほぼ明らかになった。6月2日からは、包含層の調査と併行し、竪穴の発掘にも着手し、6月30日まで続けた。包含層の調査も7月3日までに終了することができた。この段階で、調査面積は、3,975㎡に達し、調査対象面積のすべてを処理し終えたが、遺跡の範囲は、なお周辺部にまで広がっていることが当初より予想されていたので、7月9日までこの調査にあたっ

た。ここでは、遺物の包蔵がほとんどみられないことから、重機を用いてローム面まで黒色土を除去し、遺構の確認につとめ、約2,000m²を調査して堅穴1基を検出した。これによって、本遺跡が所在する舌状台地は、その基部がすでに遺跡の範囲外として開平されていたが、残された台地尖端部約6,000m²については、すべて調査することができ、7月10日に全日程を完了した。検出した遺構は、住居址を含む大・小の堅穴34基、屋外炉址5ヶ所、竈群1ヶ所、また、出土した遺物は18ℓコンテナに200箱であった。遺物については、調査期間中に水洗と注記を実施したが、全体の90%を処理するにとどまった。

整理作業と報告書の作成は、札幌に事務所を開設して1981年8月1日より1982年3月31日まで行なった。整理作業は、主として瀬川が行ない、中垣隆子、長沢佳枝、下山京子がこれを補佐した。

8月中は、現地で処理することのできなかつた遺物の水洗と注記を行ない、さらに、全出土遺物の集計を行なった。9月からは、遺構出土遺物の整理にとりかかり、これに2ヶ月を要した。土器と土製品は中垣が担当し、接合と拓本図の作成を行なった。石器は、長沢が割片石器、下山が礎石器を担当し、実測とトレースを行なった。遺構図については、瀬川が整理・編集し、これを長沢・下山・大島が浄書した。12月からは、包含層の遺物にとりかかり、遺構出土遺物と同様の分担で作業を進め、3月31日に全日程を完了した。

報告書の作成にあたっては、調査成績の概略にとどまることなく、調査所見と出土資料の全体について十分に記載しようつとめた。ただし、短期間の整理期間であり、特に報告書は少ない人管で作成しなければならなかつたことから、なお内容的に不十分な点を残した。将来、さらに充実を期したいと考えている。

遺構の記載内容は、調査に専従した大島・瀬川・大久保の所見にもとづくが、一部は精査にたずさわった調査協力者の所見によった。W165堅穴の炉址の記載は、北海道大学林謙作助教授の、W165・S R25堅穴の炭化材出土状況についての記載は、札幌医科大学第2解剖西本豊弘氏の、それぞれ精査結果にもとづくものである。B M75堅穴は、北海道教育委員会高橋和樹・長沼孝尚氏が、確認面から床面の検出に至るまでのすべてについて精査を行なったもので、記載は、この両氏の調査所見にもとづいた。また、X R80堅穴の炉址実測は三浦龍一氏が、M B05堅穴炉址の精査ならびに実測は永江加代子女史が、F U69堅穴炉址の精査は山下かず子女史が、それぞれ行なったものである。本書では、以上の所見をまとめ、これを瀬川が記載した(第2章)。また、第1章についても、瀬川がまとめた。

遺構出土遺物については、ほぼ全点を報告の対象として記載を進めたが、包含層出土遺物は出土量も多く、また紙数の制約もあるため、全出土数の10%にとどめた。報告資料の抽出とその記載は、主として土器と土製品を大島が、石器を瀬川がそれぞれおこなった。

遺物の写真は、札幌医科大学解剖学第一講座兼安整面助教授の撮影によるものである。

最後に、現地調査と整理作業を通して、終始協力下さった多くの関係機関ならびに個人に対し、深く感謝の意を表したい。

本調査は、文化庁ならびに北海道教育委員会の指導のもとに行なわれたが、文化庁からは、期間中、桑原滋郎調査官の視察があり、多くの助言を得た。また、北海道教育委員会ならびに胆振教育局の諸氏からも、同様に多くの助言、指導があった。特に、畑宏明・宮塚義人・長沼孝文化庁文化財保護主事には、準備段階でお世話になり、また酒向氏には、予算等の面で幾度となく指導をいただいた。さらに、調査ならびに整理期間中には、多くの方が現地あるいは整理事務所をおとずれ、この調査を側面からささえてくださった。山田秀三、峰山嵐、近藤義郎、藤本英夫、石附真三男、野村崇、富樫泰時、横山英介、石橋孝雄、松岡達郎、木村尚俊、種市幸生、越田賢一郎、西田茂、工藤研治、石浦節子、小山田真弓、小田野哲憲の諸氏に心よりお礼申し上げたい。調査の原因者である、北海道曹達株式会社についても、林工場長をはじめ、社員の方々のおしみなない協力が本調査を成功に導いた。同社の宅地造成工事の施工を担当していた伊藤組職員の協力とともに、これを明記しておきたい。

大島の調査担当と整理作業への参加を快諾くださった札幌医科大学解剖学第二講座三橋公平教授、百々幸雄助教授はじめ教職員各位に感謝し、謝言を終えたい。

第1章 遺跡の概観と調査の方法

第1節 千歳6遺跡の立地と周辺の遺跡

登別市は、北海道の南西部にあり、登別温泉を包摂していることで広くその名を知られている。登別市の地勢は、大まかに言って北に高く南に低く、火山性山地から台地、沖積地と続き、その尽きるところが太平洋となっている。沖積地はところどころ湿原をはさみ、海浜には砂丘が発達している。この登別市の中央部に広がる札内台地は、幌別川・登別川・栗馬川などの河川によって大きく解析されており、千歳6遺跡は、それら河川の一つである岡志別川の下流北東岸の台地端部に所在する(図1)。

遺跡のある古地は、海岸からおよそ0.6km内陸に位置し、背後の丘陵から舌状に張り出した標高20m前後の平坦なもので、改修河川である岡志別川がその周囲をなぞるように流れている。

本遺跡の周辺には、千歳1～5・7の6遺跡が確認・登録されている。我々は、調査

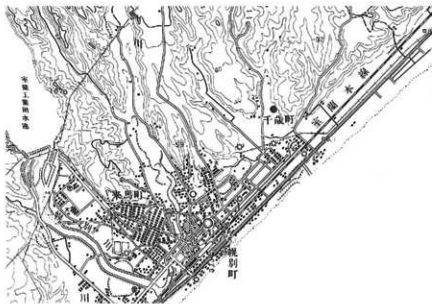


図1 千歳6遺跡の位置図 この図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「登別温泉」を複製したものである。図中、●印が千歳6遺跡である。



図2 千歳6遺跡の範囲確認調査概況図 太線で囲んだ範囲が平地造成予定範囲で、遺跡調査員が、これに囲まれた28年の成層構造を調べ、遺構・遺物の有無を調査した。その結果、a～jにおいて遺構・遺物の出土があった。遺構・遺物の内容は次のとおりである。a：住居跡1、土器片1、b：土器片1、c：土器片1、d：住居跡1、土器片2、e：土器片1、f：土器片3、住居跡1、g：住居跡1、土器片2、h：住居跡1、土器片5、石器4、i：土器片1、j：土器片1、k：礎1、l：礎3

査期間中に、本遺跡の所在する台地付近を中心に踏査を行ない、新たにこれに4遺跡を加えることができた(図3)。図中1は、背後の丘陵から舌状に張り出す台地で確認した遺跡で、丘陵頂部へ続く道路の建設によって切られた台地断面から遺物を採集した。貝殻文土器、台石、黒曜石割片などがある。図4-11は、採集遺物の一つで、胎土に砂粒を多く含み、口縁端部に厚い貼付帯を巡らす土器破片である。貼付帯上には先端を丸めた縄文原体による刺突文が巡っている。千歳6遺跡でのⅢ2b群に該当する資料である。2は、千歳6遺跡をのせる台地が丘陵へと続く斜面上に位置する。この地点から発掘調査区である台地先端部にかけては大きく削平されていた。東側路Ⅲ



図3 遺跡の調査範囲と周辺遺跡 図中央の線で囲まれた部分は、千歳6遺跡の調査対象範囲を、1～4の番号を付したスクリーン線の部分は、調査によって新たに確認した遺跡のおよその範囲を、それぞれ示している。

式と思われる薄手の土器片を数点採集した。3は、丘陵が急傾斜で下る斜面上に位置する。ここも土取が行なわれており、その土取を受けた丘陵の断面から遺物を採集した。胎土に砂粒を多く含み、二本単位の沈線による文様モチーフ、口唇部に縄文の施された手稲砂山式（図4-1・6～8）と、入江式（図4-2～5）の他に、磨石と両面加工の刃器（図4-9・10）がある。4は、1の遺跡が所在する台地の基部東側の斜面に位置する。円筒下層式に伴うと考えられる北海道式石甕を採集した。

以上の周辺遺跡と千歳6遺跡の内容から、千歳6遺跡をのせる台地を含めた同一丘陵から派生する台地一帯は、晩期を除く各期の遺物を出土しつつも、大きくわけて早

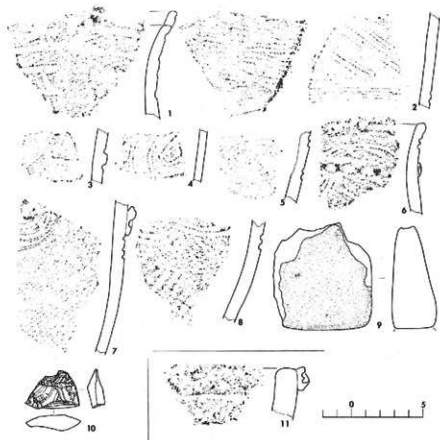


図4 周辺遺跡の表様遺物 1-10は、図3の3地点で、11は1地点でそれぞれ表した遺物である。

期と中期後半～後期前半の二つの時期を中心に、わずかつづ地点を違えて占地され、生活が営まれたことがわかる。

第2節 発掘調査の方法

発掘区の設定とその調査方法

遺跡の所在する台地の基部側はほぼ南北に削られていたので、我々はこれと平行して南北・東西に軸をもつ発掘区を組んだ。5×5mの発掘区を一単位とし、各柱には南から北に1-34、東から西にA-Uの番号を与え、南東角を各発掘区の見出し柱と

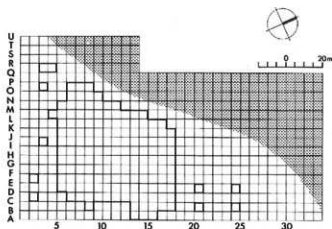


図5 調査区と調査の概況図 5m×5mの調査区を同のように配置した。このうち、太線で囲んだ159区について発掘調査を実施した。白抜き部分については、重機を用いて遺構の確認をおこなった。トーンでつぶした範囲は未調査である。

定めた。Q-Uの各列は、斜面にかかるため13列までとした。不規則な千島格子状に発掘区の調査を進めながら遺構の確認を行ない、最終的には遺構の分布範囲を中心に道教委の指示による予定調査面積を手掘りによって調査した。図5に示した発掘区のうち、太線で囲んだ範囲がそれである。遺構の分布状況から、台地上に所在する遺構の大半が確認できたと判断したが、調査範囲外に若干の遺構が分布する可能性も予想された。予定面積の調査を終了した段階で、時間的にこの範囲外を手掘りで精査する余裕がなかったので、止むをえず重機を投入してルーム面まで掘り下げ、遺構の確認を行うことにした。重機の投入範囲は、台地斜面をのぞいて当初設定した発掘区のほぼ全体に及んだ。この結果、新たに整穴を一基確認することができた（NO31整穴第2章第14節）。

基本層序の確認

台地を東西に横断する数本のラインに壁を残し、土層の堆積状況を観察した結果、ルーム面上に以下に述べる土層の堆積を確認した（図6・7）。上層から順に述べる。

S：黒色腐植土の表土で層厚は5cm内外。1：明灰色の火山灰で、1663年の有珠岳噴火に伴うU S-b火山灰と考えられる。S層と1層については、調査前に重機でこれを削りだため、整穴の凹みや微地形の凹みにわずかに残るだけであった。層厚は20cm内外を計る。2：やや灰色を帯びる黒色土層。層厚は2～3cm前後で、遺物の出土はない（1層）。3：紫がかった火山灰で、1640年の駒ヶ岳の噴火に伴うK o-d火

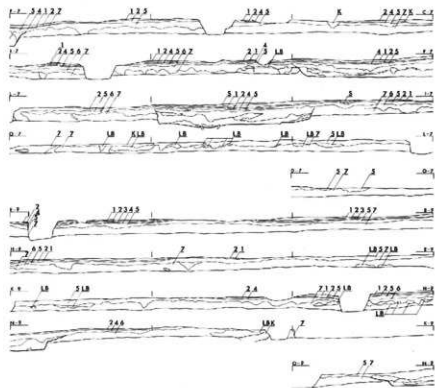


図6 遺物の土層断面図 7ライン、9ラインでの土層断面を示す。断面にか
かる型穴復土については、本文中の各型穴ごとの土層説明を参照されたい。S
赤土層、1 U・B層、2 I層、3 K層、4 II a層、5 II b層、6 III層、
7 IV層、L・Bはロームブロック、Kあるいは特に番号のないものは攪乱を示す。

山灰と考えられる。層厚は2~3cmで、型穴の落ち込みを中心として分布する。4：
粒子が細かく、粘質のある漆黒土層。層厚は5cm前後を計る。III 2 a 群土器を主とする
遺物が出土した(II a層)。5：粒子が粗く、しまりのない黒色土層。層厚は20cm前
後。III 2 a 群土器を主とする遺物が出土した。地点により4層との区分別できない(II
b層)。6：ロームブロックを多く混じえる黒褐色土層。層厚は20cm前後。I 1 群を主
とする遺物が出土した(III層)。7：褐色土層。層厚は30~40cm前後。I 1 群を主と
する遺物が出土した。地点により6層との区分別できない(IV層)。L・B：ロームブ
ロック。K：攪乱。以上の記載中カッコで示したI~IV層は、遺構の土層説明文中で用
いた層番号と対応する。

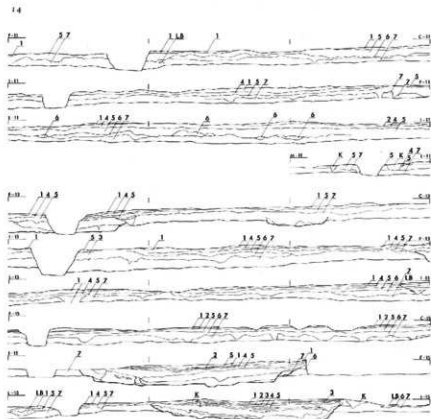


図7 遺跡の土層断面図 11, 13, 15ラインでの土層断面を示す。断面にかか
る堅穴遺土については、本文中の各堅穴ごとの土層説明を参照されたい。S表
土層、1 U a-b層、2 I層、3 K o-d層、4 II a層、5 II b層、6 III層、
7 IV層、L、Bはロームブロック、Kあるいは特に番号のないものは埋込を示す。

遺構の調査方法

検出した遺構には、堅穴、屋外炉・焼土、礎群がある。

堅穴は、その確認面での長さが大略2mを超える大形のもの、それ以下の小形の堅穴に分け、大形の堅穴については、アルファベット2字、アラビア数字2字を無作為に抽出して組み合わせ、遺構名とした。小形の堅穴については、最初にPを冠し、確認順に001, 002……の番号を組み合わせ、遺構名とした。包含層中の焼土・石岡炉址については、最初にFを冠し、小形の堅穴同様、確認順に番号をつけ、遺構名とした。

堅穴の調査は、その覆土を床土10cm以内と床土10cm以上の二つのレベルに分けて行ない、出土遺物のとり上げは、これに従った。床面遺物と、床面上10cm以内の覆土中出土遺物(床面直上)については、すべて出土位置を記録した。一括出土土器や注意

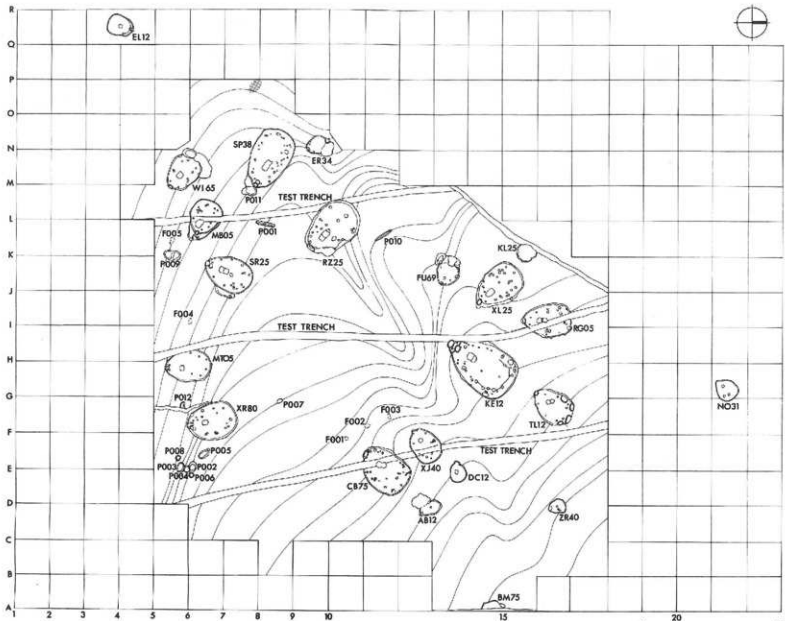


図4 T点の遺跡：遺物の分布状況図 図中、スクリーンで示した部分は地盤の分布範囲を示す。F001、2、3、5については、本文中に範囲図をのせず本文による説明を行なっているので、それぞれの位置関係については本図を参照されたい。TEST TRENCHは、道義委による試掘痕を示す。

すべき出土状況を示す遺物、覆土中の覆土中の焼土や炭化材については、出土レベルにかかわらず、すべて実測図を作成した。覆土の堆積状況は、遺構確認時に設けた、長軸、短軸2本の壁によって観察し、これを採図した。竪穴床面の炉址は、長軸方向に壁を設け、焼土の堆積状況を観察し、これを採図した。包含層より出土した焼土、磁群についても、出土レベルを確認するため、同様に断面観察を行ない、採図した。

各遺構とも、精査、写真撮影後に平面図を作成した。M T 05・X R 80・W 165竪穴については、平板実測を行ない、他は、遺構上に50cm方眼を水糸で組み実測した。写真は、35mmと6×6版カメラを使用し、モノクロ、リバーサルカラー、ネグカラーフィルムによる撮影を行なった。

第3節 出土資料の整理方法

遺構実測図面

発掘調査時に作成した実測図は、総数147枚である。実測図は用紙一枚に一図を原則として作製したため、これを遺構ごとにまとめ、ポリエステルフィルムに浄書を行ない、第2原図とした。原図・第2原図は、ともに登別市教育委員会が保管する。

遺物

遺物は、調査と平行して水洗、土器と石器の分類、註記を行なった。調査終了後、遺物を遺構出土分と包含層出土分に分け、それぞれプラスチックコンテナに収容した。その場合、土器・土製品のコンテナのうち、遺構出土分には緑の、包含層出土分には白のラベルを貼付し、出土遺構・発掘区の別の記入を行ない、割片・礫石器のコンテナのうち、遺構出土分には黄の、包含層出土分には青のラベルを貼付して、識別の便宜を計った。なお、緑ラベルのコンテナは23、白ラベルのコンテナ15、黄ラベルのコンテナ2、青ラベルのコンテナ6である。これらの遺物のうち、土器・土製品は、まず遺物番号ごとに整理カードを作製して、群の別、破片数を記入した。さらに、群の認定が可能な破片とそうでない破片に分類して報告書掲載の遺物を選別したが、遺構出土遺物のうち、床面出土遺物および床面直上出土遺物は、選別することなく全点の掲載を行なうことにした。このようにして抽出した遺構の出土遺物について、さらに1点1枚の観察カードを作製して観察を行なった。このカードには、色調・胎土・保存の状態・内面調整・施文、その他気づいた諸点を記入し、断面図と拓本、実測可能なものについては全点実測図を作製してこれを付した。石器は、1点に1遺物番号を与えたので、この遺物番号ごとに作製した整理カードに、群の別・長・幅・厚・重量・石質、その他の観察事項を記入し、裏に実測図を付した。石器は、石片の細破片を

除いて、遺構・包含層の別なく全点の掲載を行なうことにした。これらの遺物およびカードは、登別市教育委員会が保管する。

第4節 記載の方法

遺構

遺構の記載については、調査の経過、遺構の位置・規模、床面の状況、柱穴様の掘り肩、周溝、炉址、柱穴と区別されるその他の掘り肩、遺物の出土状況、炭化材・ロームブロック・焼土の出土状況のうち、該当する項目をもつものについては全て記載を行なった。これらの記載順序は、2章冒頭に述べた通りである。なお、竪穴の大半は、平面形が卵形をなす独特な形態であったため、これらの竪穴の記載を行なう場合、各部の呼称については以下のように定めた。すなわち、卵形の平面形の尖った部分を上にして、尖端の部分を「先端部」、底の部分を「基部」、両脇の部分を「側縁」とするものである。遺構図版は、竪穴・包含層中焼土を1/80、竪穴の石囲炉址微細図・包含層中石囲炉址・小竪穴・礎群を1/40の縮尺とした。

遺物

土器の群別は、3章で詳しく述べるが、およそ以下のように行なった。

I群：早期の遺物で、I1群を貝紋文、I2群を東銅路III式とした。II群：前期円筒下層式。III群：中期の遺物で、大きく前後二つの時期にわけ、それぞれIII1群、III2群とした。III1群としたものは、天神山式、柏木川式の二つである。III2群は、a、b、cの三つに細分を行なった。III2a群としたものは、貼付帯、短刻線文、縄線文などの文様要素をもつ土器群で、調整・施文の共通性からこれを一括した。大木式系統と思われる沈線文土器もこれに含めた。III2b群としたものは、口唇に及ぶ縄文、復節縄文、貼付帯、縄線文などの文様要素をもつ粗雑な成形・調整の土器群である。III2c群としたものは、円形刺突を口縁部に巡らせる筒形の器形の土器で、トコロ6類と呼ばれるものに近い。

遺構出土土器の群別、色調、内面調整については、2章のおわりに一括して記載した。また、第2章の遺物説明文中においても、III2a群以外のものは全てその群を示した。縄文の記載については、復節や、単節であっても縦位の回転施文を行なっているものについては、2章の説明文中にその旨を記したが、単節で横位回転施文のものについては述べていない。土器の内面調整で、刷毛目とは区別されるか類似の擦痕を見せるものについては、横山浩一「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」⁴⁾を参考とし、「細密条痕」の語をあてた。遺構出土の石器の重量、石質については、章のおお

りに一括して記載した。第2章の石器説明文中用いたa面、b面は、正面図2面のうち左側をa面、右側をb面としたものである。石斧の観察、特にその用語については、佐原真「石斧論」⁵⁾を参考にした。

- 註1) 「第一章 登別町の自然環境」『登別町史』1977年を参考にした。
- 2) 洞志別川の「オカシベツ」はアイヌ語源で、「o(川尻) kas(魚鱗小屋) pet(川)のようにも聞こえる」という。知里真志保・山田秀三「登別・空復のアイヌ語地名を尋ねて」。
- 3) このうち千歳4遺跡は、1980年に北海道埋蔵文化財センターによって調査が行われた。本遺跡のⅡa群に該当する資料を含む、中期後半から後期前半の遺物が主に出土している(『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』北海道埋蔵文化財センター 1980年)。また、千歳1遺跡については、千歳6遺跡と平行して我々が調査を行ない、前期の遺物・遺構を検出した。報告は本冊と別に行なう予定である。
- 4) 横山浩一「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」『九州文化研究所紀要』第二巻 第十四号 1979年
- 5) 佐原真「石斧論—横斧から縦斧へ—」『松崎寿和先生六十三歳記念論集』1977年

第2章 遺構および遺構に関連する遺物

はじめに

本遺跡の調査により、竪穴22基、小竪穴12基、包含層中の石囲炉1基、包含層中の焼土4基、磁群1基の遺構を検出した。本章では、これらの遺構の構造と、出土した遺物について述べるとともに、遺構の性格とその構築された年代についても若干の考察を行なう。各遺構の記載は、上記の、竪穴・小竪穴・石囲炉……の順に行なう。ただし、P011小竪穴については、S P38竪穴と切りあっていたため、S P38竪穴の項でまとめて記載を行なう。遺構の個別記載は、調査の経過、竪穴の位置と形状、床の状況、柱穴状の掘り込み、壁の状況、周溝、枳、柱穴や窠品と区別される竪穴内の掘り込み、その他の順で行なう。関連する遺物については、土器・土製品、次いで石器の順に記載を行ない、それぞれ、床面出土・床面直上出土（床面から高さ10cm以内の覆土中から出土）・埋土出土（床面から高さ10cm以上の覆土中から出土）の三つについて述べる。さらに、これらの記載の最後に小括を設け、若干の考察を行なう。

第1節 S R25竪穴

竪穴の構造

J-7区の包含層の調査を行なっている段階で、細かな炭片が多量に出土した。このため、本調査区にかかって焼失家屋が存在する可能性があると考え、J-7区の四隅でローム面に達する試掘を行なったところ、埋土中に炭化材の詰まった竪穴を確認することができた。このような事情から、J-7区と隣りあう区についても、J-7区と同時進行で包含層の掘り下げを行ない、炭化材や土層の変化に注意を払いつつ、ローム面で竪穴の平面形を確認した。覆土中からは多くの遺物を検出した。

結果として、本竪穴は、J-6区、7区にまたがって所在するものであった。平面形は、先端が南南西に向かう卵形で、長さ7.1m、幅4.8mを計る。竪穴東側縁には、張り出し状の掘り込みを確認した。

床は、壁から40cm内側の竪穴平面形に沿う線の内と外で、固さに違いが認められた。すなわち、内側の部分では、床面に移植こてが刺さらないほど固くしまり、ロームの床の表面が黒色かかってウロコ状をなしていた。これに対して外側の部分では、床は平坦であるが内側ほど固くしまって、床面がウロコ状をなす状況も認められな

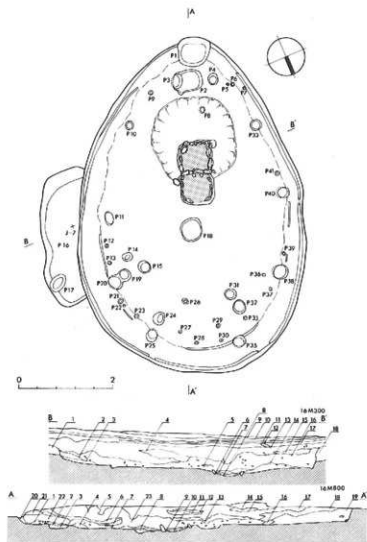


図9 S R 25号大の平面図と断面図 平面図中、---で囲んだ範囲は、図く踏みしまった床を示す。P 3 上面には、ロームの残りがみられた。断面図A-A' : 1・10・21・23炭化材とローム粒を含んだ黒色土。2 P 3 上面のロームによる粘り層。3・4・7・8 ロームブロック。5 黒色土 (炭灰)。6 炭化物とローム粒を含む黒褐色土。9・10 伊祉断面同物類。11 ローム粒を含む褐色土。12 黒色土。13・18 ローム粒をおよかに含んだ黒色土。14 Ⅱ a・Ⅱ b 層。15・16・22 粘土ブロック。17 Ⅱ a 層。Ⅱ a 層 : 1・13・14 Ⅱ a 層。2 ローム粒を含む黒褐色土。3 黒色土。4・15 黒褐色土。5・6 ロームブロック。7・8 伊祉断面同物類。9 灰土。10 U a-b 火山灰。11 Ⅱ 層。12 Ⅱ a 層。14 炭化物とローム粒を含む黒褐色土。16 炭化物とローム粒を多量に含んだ黒色土。17 Ⅱ b 層

かった。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18
深さ (cm)	4	6	15	18	18	3	46	14	10	18	39	26	29	12	26	14	14	9
ピット番号	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P36	P36
深さ (cm)	18	22	11	32	17	10	20	15	28	9	20	31	6	12	10	20	25	39
ピット番号	P37	P38	P40	P41														
深さ (cm)	16	38	15	39	34													

柱穴状の小形の掘り込みが、上述の囲い床の周縁に沿って並んでいるのが観察できた。このうち、しっかりした掘り肩を持ち、底面が平坦で、内部にやわらかな黒色土の詰まるものは、P10、11、15、20、25、31、33、35、38、40および径5cm前後で深い掘り込みを持つ一連の小穴群であった。なおP15、P31は、上面にロームが貼られており、P31では、貼られたローム土が、周囲の床面から1cmほど沈んでいるのを観察した。なお、P6、P9は、いずれも平面形、掘り肩が乱れており、内部にはロームを主体とした土が詰まっていたため、これを木の根による擾乱と判断した。

竪穴の壁は、垂直に近く立ち上がっており、崩落はわずかに認められるだけであった。

周構は、壁際と、囲い床の周縁に沿って二重に巡っていた。幅4cm前後と狭く、所々で途切れている。

炉は、竪穴長軸に沿ってやや先端寄りに確認した。炉の前方は、囲い床面が皿状に凹んでいた。当初、炉は、先端部寄りの石囲いをもつ第1炉1基かと思われたが、後方床面におよそ60cm四方の割れ口が認められ、この内側のローム床を剥がしたところ、さらにもう1基の炉が現われた(第2炉)。第2炉は、床面が約60cm四方に掘りくぼめられており、その周縁に凹凸の見られるもので、この凹凸は、石囲いの礎の抜きとりあとと判断した。第1炉は、第2炉の先端部側の側面に一辺を重ねさせ、先端部寄りに設けられたもので、第2炉と同規模の平面形をもつ。浅く掘りくぼめたあと、周縁に扁平な長円形の礎を巡らしてあり、さらに竪穴基部寄りの側面端から羽状に礎を配し、断面三角の柱状の礎を二つに折って側面の外側に2本立て並べている。なお、羽状の配石の一方は、板状の礎を2枚立て並べ、その先に円礎を置いている。

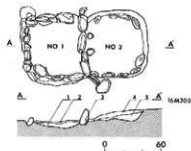


図10 S R 25竪穴炉址の平面図と断面図
構築順序は、No.2炉址が先、厚く堆積した
地上の上に、ロームによる掘りかみられる。
A-A' : 1 No.1炉址の礎土、2炭化物と土
土を含む褐色土、3黒色土、4ロームの掘
り、5 No.2炉址の礎土。土層説明のないも
のは、炉石を示す。



図11 S R 25窯穴の炭化材出土状況 本窯穴からは、覆土中から床面にかけて分布する炭化材・焼土が検出された。図中、二点破線部分は茅材の、点部分は焼土の分布をそれぞれ示している。炭化材は、窯跡を中心としてほぼ窯穴全体に分布している。窯跡に分布する炭化材には、壁に沿って並ぶ径7~8cmの丸木材に直交して径3~4cmの細めの材が上下に重なるという一定の組合わせが認められた。窯穴中央部付近で検出された材は、径10cm前後と、窯跡の壁側に比べてやや太めであった。炭化材は、窯穴中央部付近では床面に露出し、窯跡では窯穴中央部に向かって下層まで分布する傾向が認められた。焼土の分布は、炭化材のそれとややずれており、W I 65型穴における焼土の分布傾向と良く似ている。断面図中、番号を示していないものは、炭化材を数回している。C-C'：1ルーム粒を含む褐色土、2・6ルーム粒と炭化材を多量に含む褐色土、3・4・5焼土、7若干のルーム粒と炭を含む黒褐色土、D-D'：1ルーム粒と炭化材を多量に含む褐色土

断面を見ると、第1炉の炉石振り屑は、第2炉址上にルームを貼ったのち、そのルームを切っている。

柱穴や掘乱とは異なる掘り込みをいくつか確認した。P1は、窯穴先端部に位置す

る深さ4～5cmの浅い皿状の掘り込みで、底面がやや固くしまっていた。P2は、この皿状の掘り込みの後方に確認した隅丸方形の浅い掘り込みである。底面左端には一段低い掘り込みがある。内部には黒色土が詰まり、上面にはロームの貼り床を確認した。炉址後方のP18は、径およそ30cm、深さ10cmの円形の掘り込みである。底面は平坦で、壁もほぼ垂直に立ち上がる。竪穴東側縁に張り出すP16は、不整形の浅い掘り込みであるが、底面は平坦であった。また、土層断面の観察によれば、このP16は、竪穴と同時に埋没しており、竪穴と併行して存在していた可能性が高い。

炭化材の出土状況について

炭化材の分布は、竪穴のほぼ全面におよんでいた。なかでも特に密な分布を示すのは、竪穴の壁に沿う部分であった。この壁際の炭化材には、一定の出土状況が認められた。すなわち、径7～8cmの丸太材が壁に平行して並び、これに直交して径3～4cmの細めの材がその上下に重なるものである。この壁際の炭化材は、壁から竪穴内に下傾して並ぶ傾向がある。竪穴中央部では、炭化材の分布がやや稀薄だが、壁際に検出される炭化材より径10cm前後とやや太めの丸太材が分布している。また、竪穴中央部で検出した炭化材は、床に密着するものが多かった。茅材は、竪穴の壁寄りに分布しており、特に、竪穴左側壁付近に著しい。しかし、丸太材を検出する過程でほとんどが粉末化し、原形を留めてこれを記録することはできなかった。壁に密着して出土した例が認められたが、これは写真によって記録した。

焼土は、炭化材の分布とややずれて分布している。なお、焼土と炭化材の分布が重なる場合には、焼土が炭化材を覆った状況であった。

出土遺物

床面出土土器(図13-1・2) 2片とも胴部破片で、条の通る縄文、砂粒をよく静めた凹凸のない内面から、Ⅲ2a群に分類されるものである。

床面直上出土土器(図13-3) 底部付近の破片である。内面はナデ調整され、砂粒をよく鎮静化している。

埋土出土土器(図13・14・15-4～81) 4～8は、I1群土器である。5は、無文で、4・8は外面に、6・7は内外両面に貝殻条痕文が施されている。9～23は、貼付帯上に短刻線文を施すものである。9・10は、いずれも口縁端に短刻線文の施された陸帯をもち、その下方を施文後にナデで無文帯としている。11は、口縁端に貼付帯を巡らし、その帯上と下方の器面に、平行する2条の短刻線文を施すものである。14は、横位に平行して2条の貼付帯と、それに直交して下方の帯から上方に伸びる貼付帯とを巡らし、それぞれの帯上に短刻線文を施すものである。18は、貼付帯を1条横位に巡らし、帯上と、帯から右斜め下方に伸びる器面上に短刻線文を施している。20

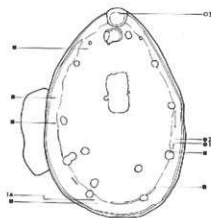


図12 S.R.25器穴出土遺物の位置 床面遺物と床面より15cm以内の覆土中（床面直上）より出土した遺物の位置を示した。土器と右器は、図13・14・15・16の番号に一致する。ただし、壁を削片は除く。（●床面直上、○床面直上の土器、▲床面直上、■床面の壁と削片）

は、薄い器壁をもつもので、帯下方にL.R横位、上方にL.R縦位の縄文を施している。22も、L.R縦位の縄文を施すものである。23は、底部破片で、底から上方6cmのところに貼付帯を巡らし、短刻線文を施している。復元底径は8cmを計る。24~30は、貼付帯をもたず、短刻線文のみが施されているものである。27は、器面が荒れており、縄文の捺りは不明。26は、復元口径15cmを計るやや小形の深鉢である。30はへら状工具による細い短刻線文をもつものである。24・31は、底部破片で、それぞれ復元底径8.5cm、8.0cmを計る。32~35は、貼付帯をもたず、縄線文のみが施されるものである。32は、口唇下に横位に巡る一条と、そこから垂下する四本の縄線文を施すものである。縄線文原体は、33・35ではL.R、32ではR.Lを用いており、34については、器面が風化しているため明らかでない。36~53は、貼付帯をもつもので、そのうち、36~51は、口縁端に一条の貼付帯をもつもの、52・53は、胴部に一条の貼付帯をもつものである。36では、胴部に、帯状の隆起が認められ、そこを境に縄文が羽状をなしているが、断面観察からこの隆起は、粘土帯接合に伴うものと考えられる。粘土帯合わせ目の隆起を利用して、帯状の効果を出している良い例である。なお、縄文は、この隆起の下方はR.L縦位、上方はR.L横位を施している。復元口径は、30.5cmを計る。41は、L.R縄文を、横位・縦位に用いて羽状としており、42もL.R縦位の縄文をもつものである。50は、口唇下に間隔をおいて貼付帯を巡らすもので、帯下方は、縄文後幅1cmにわたって強くナデられている。52・53は、複合しないか同一個体と思われ、薄い器壁と、器面との境が明瞭な幅のせまい貼付帯が特徴的である。54~58は、意図的に作り出された無文帯をもつものである。54・55とも、貼付帯を2条横位に巡らし、縄文後両帯間をナデて無文帯とするものである。ただし、55の下方の帯については、器面の縄文施後に粘土帯が貼られた可能性もある。55は、復元底径11cmを計る。56・57は、いずれも小形の壺状の器形をもつものである。丸みのある胴部から緩やかに「く」の字状

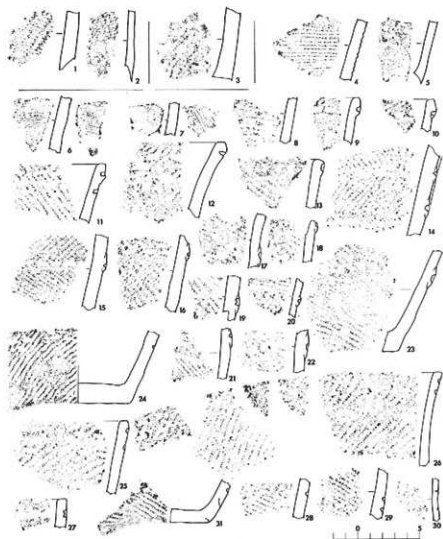


図13 S R 25 壺穴出土土器の拓本図 1・2は床面, 3は床面直上, 4~31は
覆土中より出土。

に外背する口縁をもち、胴部から口縁のくびれに短刻線文を施して上方を無文とするものである。56は、貼付帯上に短刻線文が施文されている。いずれも口径は、11~12 cm前後であろう。58は、粘土帯を貼り付け、上下方の器面をナデて調整を行なったあと、帯から下方の器面にかけて施文を行ない、帯上方を無文としている。59~75は、

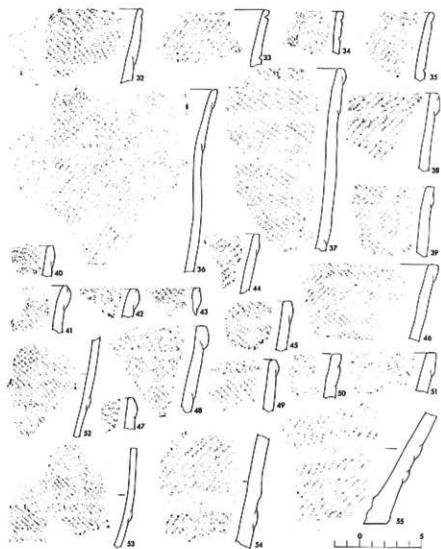


図14 S R 25整穴出土土器の断本図 すべて床面から10cm以上の復土中に位置した。36は、図16-1に復元実測図を示した。

縄文のみのものである。59は、復元口径7cmを計る小形土器の破片で、器面は成形時の凹凸を残し、縄文は浅く不揃いである。65・71は、ともにやや小形の深鉢の破片である。65は、口縁部破片で、復元口径は11cm前後を計る。71は、底部破片で、底径は3.7cmである。器面の縄文は筋が明瞭でなく、叩き目状を呈する。72～75は、底部破片

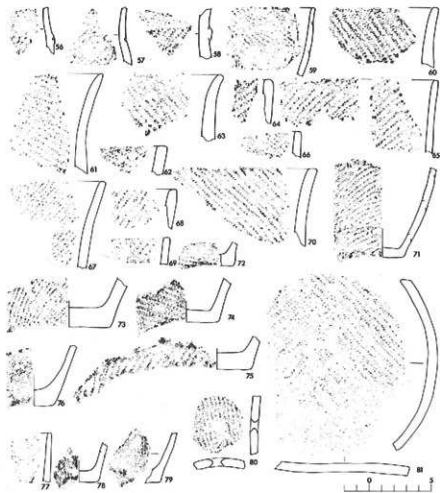


図15 S R 25型穴出土土器の拓本圖 すべて底面から10cm以上の覆土中に位置した。80・81は、土器片を加工した円盤状土製品。59・71・72・76・79については、それぞれ図16に復元断面図を示した。72は、小形土器の底部である。

で、それぞれ復元底径および底径は順に、2.4cm、6.7cm、5cm、5.5cmを計る。72は、R L斜位の縄文が施されている。76～79は、無文のものである。いずれも小形土器の破片と思われる。76・78・79は底部で、復元底径および底径は順に、3.1cm、3.3cm、2.5cmを計る。どれも底部端に近く指頭圧痕が残る。80・81は、土製品である。80は、土器片の周縁を打ち欠いて整形を行っており、中央に両面からの穿孔がある。周縁には、所々ではあるがほぼ全体にわたって磨滅痕があり、光沢を見せている。81は、

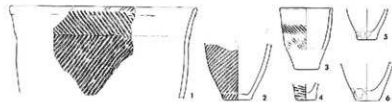


図16 S-R25形式出土土器の実測図 すべて床面から10cm以上の発土中より出土した土器。いずれも、拓本図14—30、図15—59・71・72・76・79に示した破片より復元実測した。縮尺1/4。

大形の円盤形の上製品で、土器片の周縁を打ち欠いて整形を行なっている。拓本左側は、粘土帯接合面からの割れ口で、直線状をなしている。周縁の剥離整形時に、誤って割ってしまったものであろう。

以上、特に記載がない場合、拓本中右下がりの織文はR L横位、左下がりの織文はL R横位である。

成形法のわかる底部について 図17は、底部の成形法がわかる例で、本竪穴の埋土中から出土した無文の土器である。径2cmの粘土円盤をつくり、その周縁に粘土ひもを巡らせて底径を整え、さらに粘土帯を巡らせて壁を形成している。破片上端は、第一段目の粘土帯接合面である。

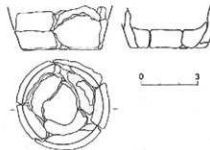


図17 S-R25形式出土の成形法のおもな断部 本例は、底径4.2cmを計る無文の土器底部で、各破片が粘土帯の接合面から割れているため、その成形法がわかるものである。最初、径2cm前後の粘土円盤をつくり、その周縁に粘土ひもを巡らせて底径を整え、さらにその周縁に粘土帯を巡らせて器壁を形成していったことが、断面図および裏面から見た割離状況図によって理解できる。器壁を形成する粘土帯の上端は、接合面からの割離を示している。このような小径の底部でも、一度に底部円盤をつくらず、二度にわたる成形手順を経て底部円盤をつくり出していることがわかり、興味深い。

床面出土石器(図18—1) スクレイパーである。縦長剣片を素材に、正面には全面を覆う深い調整を施し、背面には縁辺に粗い調整を行なっている。先端を形成する一側縁には、楕状の剥離が加えられている。

埋土出土石器(図18—2—16) 2は、かなり薄手の石鏃で、先端を欠く。強い挟り込みによって基部を作り出している。3は、石鏃で、刺突部から柄部の境に強い張り出しをもつ。先端に顕著な磨滅紋は認められない。4—8・10・11は、スクレイパーである。6は、上面に原石面を残す縦長剣片の左右側縁に急角度の刃部を作り出している。7は、b面に、全面を覆う深い剥離を施して平坦面を形成し、左右側縁に細か

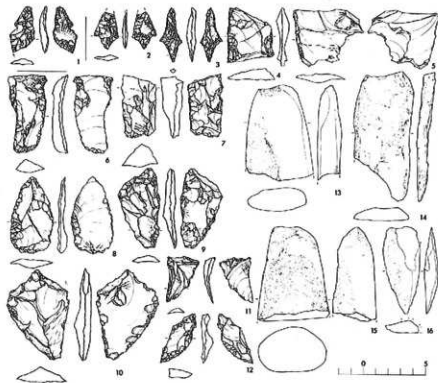


図18 S R 25 層穴出土の石器実測図 1は床面、2～16は断面からの高さ10cm以上の覆土中から出土した。

い調整を加え、刃部を直線に整えている。4は、縦長切片の上下端を打刺した台形の切片を用い、正面左側縁に浅い調整を施して刃部を作り出している。8は、木の葉状の縦長切片の副縁を簡単に加工して刃部を設けている。5・10・11は、不定形の切片の縁辺に、粗い加工の見られるものである。9・12は、両面加工の石器である。側縁は、いずれも波状をなしており、直線的な刃部の作出は見られない。13～16は、いずれも石斧の破損・未製品である。13は、基部破片で、やや不明瞭ながら側面が砥ぎ出された定角式の磨製石斧である。整形制離破片は、基部にわずかに認められるのみで、素材形状をほぼ生かして製作されている。14は、側縁から半割状に割れた斧身破片で、側縁の一部に階段状の整形制離が認められるが、敲打、研磨は認められない。整形途中の未製品であろう。15は、比較的大形の石斧の基部破片で、側面をもたず、断面が楕円形の乳棒状のものである。密な敲打調整後、研磨が行なわれている。16は、定角式の磨製石斧の破片である。斧主面は素材面を残しており、研磨は側面に施されている。

小括

炉の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。さらに、炭化材の出上状況から、本竪穴は焼失家屋であったと考えられる。第2炉から第1炉へ作りかえの行なわれた石囲炉、二重に巡る間溝、ローム貼り床がなされた掘り込みは、少なくとも二度にわたって竪穴の建て替え・建て増しが行なわれたことを示すものであろう。床面からはⅢ2a群土器が出上しており、さらに、床面からⅢ2a群土器を出土した他の竪穴の平面形および炉形態との共通性から、本竪穴はⅢ2a群土器の時期に帰属するものとする。

第2節 XL25竪穴

竪穴の構造

J-14区をローム面まで掘り下げた段階で、南壁から区の半分を占めて広がる掘り込みを確認した。そこで、近接する発掘区についてもローム面まで掘り下げ、竪穴全体を確認した。竪穴には、ローム粒を含む褐色土が詰まり、それにまじって遺物を数多く検出した。

発掘の結果、竪穴は、先端が尖り基部の腹みの弱い脚形の平面形をもつものであった。先端は南東を向いており、I-14・15、J-14・15の四区にまたがって所在する。長さ7.9m、幅5.3mを計る。

床は、ロームを掘り込んで作り出している。壁から50-60cmの幅をおいた内側の床は固く、表面がウロコ状をなしていた。また、炉の前には、さらに固い床が広がっていた。

竪穴内には53ヶ所の掘り込みが存在した。このうち、しっかりした掘り肩をもち、掘り肩が確かで、やわらかな黒色土のつまるものは、P3・4・9・10・14・17・18・24・27・40-42・44・47・51であった。P1・20・21は、木の根による擾乱と判断した。

ビット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18
深さ (cm)	掘削	2	22	23	7	13	6	4	13	40	25	20	2	45	13	9	26	26
ビット番号	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P35	P36
深さ (cm)	6	4	6	8	9	27	11	5	16	8	10	15	10	16	9	15	11	1
ビット番号	P37	P38	P39	P40	P41	P42	P43	P44	P45	P46	P47	P48	P49	P50	P51	P52	P53	
深さ (cm)	2	3	18	15	7	43	8	17	4	4	47	15	8	4	25	15	12	

壁は、床面近くでは急な立ち上がりを見せるが、上方に行くに従って崩落が強くなり、特に竪穴北側壁から先端にかけて著しかった。

間溝については、精査を行なったが検出できなかった。

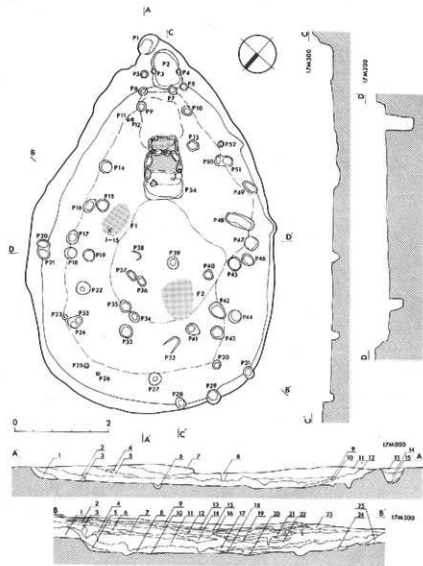


図19 X.L.25壙穴の平面・断面図 A-A'：1多量のローム粒を含んだ黒褐色土、2多量のローム粒を含んだ黒色土、3・4・15ロームブロック、5・10粘質のある黒色土、6・13黒色土、7H・a・H層、8黒色土（埋込）、14・19褐色土、11わずかにローム粒を含んだ黒褐色土、12ローム粒を含んだ黒褐色土 B-B'：1・25腐・厚層、2・15K・d火山灰、3・4・6不明、5・24炭化物を含んだ黒色土、7茶褐色土、8多量の炭・ローム粒を含んだ黄褐色土、9U・a-b火山灰、10・18・20黄土、11炭・ローム粒を多量に含んだ明茶褐色土、12H層、13I層、14黒色土、16H・a層、17・19・22多量の炭・ローム粒・黒色土ブロックを含んだ明茶褐色土、21ロームブロック、23黒色土（埋込）床面積上F1の厚さは4cm、F2は3cm、なお、一点破線で囲んだ部分は深い床の範囲を、二点破線で囲んだ部分は11そのなかでも特に深い床の範囲を示している。先端部付近の二点破線で囲んだ部分は、陥り床の行なわれている範囲を示す。

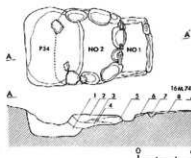


図20 X L25竪穴の炉址平面図と断面図 No.1炉址が古く、No.2炉址の構築によって壊られ、さらに貼りがみられた。P54は、No.2炉址の構築以前につくられたピットで、これが埋めもどされた後にNo.2炉址が構築されたことがわかった。炉址およびピット内の層積土A-A'：1木炭と焼土粒のまじったローム、2ロームブロック、3No.2炉址の焼土、4砂、5多量の焼土・炭粒を含む褐色土、6赤化したローム、7木炭・焼土まじりの黒色土、8ロームの貼り（No.1炉址）

炉は、床を検出した段階で、まず第2炉を確認した。第2炉の竪穴基部寄りには、平面形が明瞭でなく、ほぼそのローム土が広がっていた。断面を残しながら、このほぼそのロームを掘り進むと、図中に示したような隅丸方形の掘り込みが現われた（P54）。断面観察から、この掘り込みは、第2炉に先行して設けられ、なおかつ埋め戻しが行なわれているものと理解できた。第2炉は結局、この埋め戻しの行なわれた掘り込みに一部かかって設けられたものであった。竪穴基部寄りの炉掘り屑についても、P54を掘り進む前に精査を行えば、確認できたものとする。第2炉は、推定80cm四方を掘りくぼめるもので、周縁には凹凸が見られた。一部に残る礎の在り方から、この凹凸は、石囲いの礎の抜き取り跡であろうと判断した。この第2炉から竪穴先端部にかけて、ロームの貼り床が広がっていたため、貼り床を剥いでいったところ、中央に赤化したロームが広がる「コ」の字状の黒色土の落ち込みを確認した。この黒色土を取り除くと、落ち込みの周縁に溝状の凹凸が表われた。他の例から考えて、この凹凸を石囲いの礎の抜き取り跡と判断し、この石囲炉址を第1炉と名づけた。第1炉は60cm四方の掘り込みをもつもので、竪穴基部側は第2炉によって破壊されていた。焼土が掻き出されたあと、第2炉構築に際し、上面にロームが貼られたものであろう。これら石囲炉址とは別に、床面上の焼土を、2ヶ所認めた。F1は70×40cmの広がりを持ち、焼土の厚さは4cm、F2は80×60cmの広がりを持ち、焼土の厚さは3cmである。なお、覆土中にも焼土を認めた（図21）。

柱穴以外の掘り込みとして、先端部に設けられたP2がある。深さ2cmで、底面は四くしまっていた。

出土遺物

床面出土土器（図22-1・2） 1は、口縁がゆるやかに外反する深鉢である。口縁に二条、LR原休による縄線文を施している。復元口径は18.5cmを計る。内面の口縁付近に横方向の細密条痕が認められる。2は、口縁に貼付帯を巡らし、その上に短斜線文を施すものである。内面には、細密条痕を残すナデが加えられている。本例の特

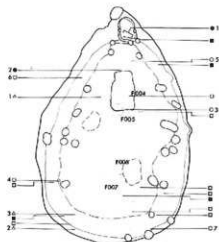


図21 X1.25整穴出土遺物と覆土中の焼土の位置 遺物については、床面遺物と床面より10cm以内の覆土(床面直上)の遺物の位置を示した。土器と石器(礎・割片を除く)は、図22・24の番号と一致する。(●床面土器、○床面直上の土器、▲床面石器、△床面直上の石器、●床面の礎・割片、○床面直上の礎・割片) 覆土中地上の床面からの高さはF006が25cm、F005が20cm、F006・F007については確認していない。

徴として、口唇部にまで縄文が施されている点があげられる。口唇部の縄文は、Ⅲ2 b群として分類したものにはしばしば伴うもので、調整・施文全てにわたってⅢ2 a群の特徴をもつ本例に認められるのは珍しい。

床面直上出土土器(図22-3~7) 3は、縄文のみのもので、やや小形の深鉢破片である。復元口径は、12cm前後と思われる。4は、口縁が直立気味の深鉢である。F U69整穴の図135-27と、接合はしないが同一個体である。器面は全体に凹凸がある。複節縄文が施されるが、粗密が著しい。口唇は、ナデによって平坦につくられている。以上の特徴からⅢ2 b群に分類される。5~7は、いずれも縄文のみのもので、5・7はそれぞれ、復元口径18.5cm、底径11cmを計る。7は、施文後、底部端をナデしている。

埋土出土土器(図22-8~25) 8は、I a群土器である。貝殻条痕文が横位に走る。9は、所々に浅くLR横位の縄文が認められるが、文様構成は良くわからない。I b群土器であるかもしれない。10~15は、短刺線文をもつものである。11・14は、貼付帯をもたず器面に直接短刺線文を施している。16~19は、貼り付け、あるいは折り返しによる帯をもつものである。19は、帯以下が無文となっている。20~22は、縄文のみのものである。23は、帯が巡っていたと思われるが、その部分だけ剥落している。

24・25は底部破片である。25は、無文土器で、底部端は丸みを帯び、底面を含めて



図22 X.L.25彫穴出土土器の拓本図 1・2は片面土器、3～7は片面直土。
8～25は甕土中からの出土。縮尺1/3。1・4・25については、図23に裏面図
(一部復元推定)を示した。

器面には凹凸が著しい。Ⅲ2b群に属するものである。それぞれ復元底径は、5.5cm、5cmを計る。

以上、縄文について特に記載がない場合、拓本中右下がりの縄文はR.L横位、左下がりの縄文はL.R横位である。

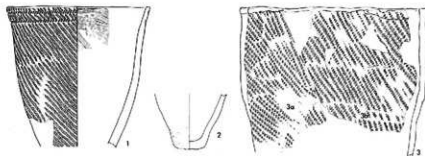


図23 X L25壁穴出土土器の実測図 1は床面土器、2は甕土中、3は床面直上の土器、3bとした破片は、F Uの壁穴の甕土中出土土器（邦本図134-27）で、接合はしないが、3aと同一個体である。各々、図22に拓本を示した。1は図22-1、2は図22-25、3は図22-4。

床面直上出土石器（図24-1~3） 1、2は、スクレイパーで、いずれも刮片正面の左側縁に、連続しない粗い横部調整をもつものである。3は、断面三角形の擦り石で、断面三角形の素材の両端を打ち欠き、一つの稜を擦り面として用いている。

埋土出土石器（図24-4~15） 4~6は、いずれも基部をもつ石錐である。6は、

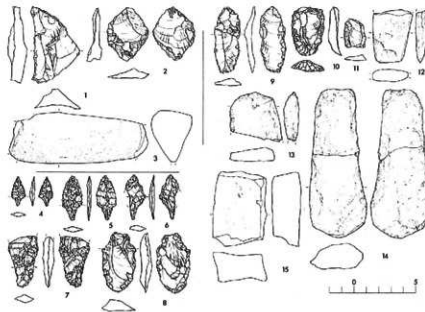


図24 X L25壁穴出土の石器実測図 1~3は床面からの高さ10cm以内の甕土中から、4~15は床面からの高さ10cm以上の甕土中から出土した。

側縁が菱形に近い形状を示すもので、逆刺の一方を欠いている。7は、槍先の茎部片である。8～11は、スクレイパーである。8・9は、左右両側縁に浅い調整を行っており、8のa面左側縁はやや急角度の刃部が作り出されている。10は、縦長の剥片を利用し、下縁に急角度に調整された刃部をもつ。11は、正面左側縁に細かい加工がある。12～14は、それぞれ石斧破片、木製品である。12は、定角式の磨製石斧の刃部破片で、刃部から基部に向かって広がる斧身形状から、もともとは基部であったものに研磨を加え、利用したものと考えられる。13は、基部破片で、側縁、基部それぞれからの階段状の剝離痕が認められる。研磨は行われていない。14は、石斧木製品で、埋土中から別々に出土した二点が接合した。全体に粗割りを行なって整形しており、a面の高い稜をもつ部分が敲打が加えられている。研磨は行われていない。敲打途中の破損により廃棄されたものであろう。15は、礫石で、上下面を除く四面を利用している。

小括

伊の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。石四脚は第1伊から第2伊へ作りかえが行われており、竪穴の建て替え・建て増しを示唆する。床面から出土した土器は、Ⅲ2a群土器の一部に特徴的な内面の細密条痕と、微弱な貼付帯上に短刺線文をもつもので、口唇に縄文が施される点は異例だが、Ⅲ2a群と判断された。Ⅲ2a群土器を床面から出土した他の竪穴の平面形、伊形形態との共通性をも考慮し、本竪穴の帰属をⅢ2a群の時期と考える。

第3節 RG05竪穴

竪穴の構造

I-16区をローム面まで掘り下げた段階で、道教委の試掘溝に南北に切られた落ち込みを確認した。試掘溝断面を観察したところ、ローム底面の一部に礫土があり、試掘溝底面にも柱穴状の掘り屑がいくつか分布していた。これらの事実から、本竪穴が居住遺構の可能性をもつと考え、隣接する発掘区をローム面まで掘り下げ、竪穴全体の確認を急いだ。

調査の結果、本竪穴は、H-16、I-15・16区の三区にまたがって所在し、先端の尖る卵形の平面形をもつことがわかった。先端は南を向いており、長さ6.9m、幅4.8mを計る。

床は、ロームを掘り込んで作り出しており、全体に平坦である。壁から40～80cm内

側の、竪穴平面形に沿って巡る線の内側の床は、特に固く踏みしまり、ローム表面がウロコ状をなしていた。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18
深さ (cm)	9	5	8	15	3	28	6	4	15	14	9	5	4	10	5	22	29	40
ピット番号	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P35	P36
深さ (cm)	28	16	14	31	33	25	4	23	3	16	15	39	9	25	9	8	21	35
ピット番号	P37	P38	P39	P40	P41	P42	P43	P44	P45	P46								
深さ (cm)	18	33	17	12	12	5	17	3	44	15								

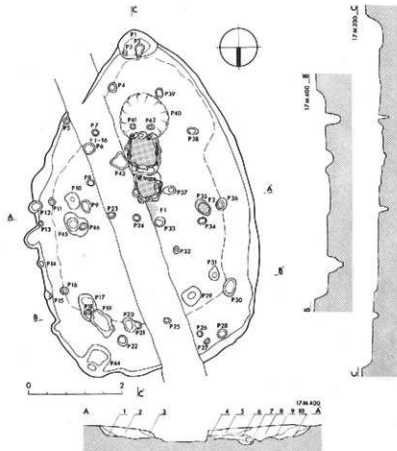


図25 R G02竪穴の平面図と断面図 A-A': 1・10黄褐色土、2・9ローム
 粒をおずかに含む黒褐色土、3ロームブロックを含む黒褐色土、4・7粘土、
 5・6黒色土、8大さめのローム粒を含む黒褐色土、床面焼土F1の厚さは6
 cm、床面焼土F2は10cm、一点破線で囲まれた部分は、固い床の範囲を示して
 いる。

柱状の掘り屑をもつ小穴は、固い床の周縁と、炉を中心とした周辺に分布していた。個々の小穴については、その覆土や掘り屑についての具体的な記録ができなかった。

壁の立ち上がりは急で、特に崩落した部分はない。

周溝は、精査を行なったが検出できなかった。

炉は、竪穴長軸上の先端寄りに2基、その後方に床面焼土を2ヶ所検出した。先端寄りの2基の炉については、最初に、石囲いの礎が残る先端寄りの第2炉を確認した。この後方を清掃したところ、方形の褐色土の広がりを確認し、褐色土の下に焼土が広がっていたため、これを第1炉と名付けた。まず、先端寄りの第2炉は、後方基部寄りの第1炉を切る80×70cmの略方形の掘り込みをもち、周縁に礎を配していた。礎は大部分が遺存していた。基部側の側面は、掘り屑が礎の並びより20cm近く外側に広がっていた。これが第2炉構築前に掘り込まれた別の炉址の掘り屑である可能性は、土層断面の観察の結果、第2炉の炉石の掘り屑がこの掘り屑の内側に検出できなかったため、考えられなかった。内部の焼土は全て掻き出されていた。なお、第2炉の前方は、固い床が浅く皿状に凹んでおり、礎が分布していた。第1炉は、65×60cmのやや不整な方形を呈する掘り込みがあり、周縁には凹凸が見られた。他の炉址の例から、この凹凸は石囲いの礎の抜き取りあとと考えた。先端寄りの一辺を第2炉に切られている。第1炉の炉内には焼土が厚く堆積し、上面を褐色土が覆っていた。第1炉後方のF1は、試掘溝によりそのほとんどが削られている。焼土の厚さは6cmを計る。F2は、第1炉の後方で、竪穴長軸から西にずれて位置している。地床炉というより、掘り込み後、焼土を埋めたものと思われた。深さは10cmを計る。

柱状以外の掘り込みとしては、先端部に設けられたP1がある。浅い皿状の掘り込みである。深さ9cmを計る。

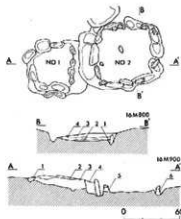


図26 R G 05竪穴炉址の平面図と断面図 構築順序は、No.1が先で、これを切ってNo.2が構築されている。No.1炉址上での顕著な陥りはみられず、土層説明2に示す褐色土が厚く堆積していたにすぎない。
断面図A—A': 1褐色土、2褐色土、3No.1炉址の炉石抜き取り痕、4No.1炉址の焼土、5炉石の下の土、6褐色土、途中、層序説明のないものは、卵石を平す。縮尺1/40。

出土遺物

床面出土土器(図28—1~2・25) 1・2は、いずれも胴部破片で、条の通る縄文、砂粒をよく鎮静化している内面のナテ調整から、Ⅲ2a群と考える。26は、底部破片で、底部端とその上方に二条貼付帯を巡らし、器面に縄文を施したのち、それぞれの帯上に器面と異なる撚りの縄文をさらに施している。底面は平坦で、ナテが行なわれている。

床面直上出土土器(図28—3~5) 3・5は、いずれも貼付帯をもつものである。4は、横位に巡る貼付帯上と、そこから垂下して、器面に一条短刻線文を施している。埋土出土土器(図28—6~24, 26) 6~15は、I1群土器である。6は、貝殻腹縁の圧痕文、7は沈線、10は貝殻条痕がそれぞれ施されている。残りの例は、いずれも無文である。15は、底部破片で、外面は無文。16~19は、短刻線文をもつものである。16は、口縁に巡らした貼付帯上と、それに平行して下方の器面に短刻線文を施している。17は、破片のほぼ中央に、円形刺突が加えられたボタン状の貼り付けをもつもので、どのような構成をとるか不明だが、貼り付けの左・右下に短刻線文が認められる。18は、器面が荒れているため縄文が不鮮明だが、LR横位の縄文である。19は、貼付帯を横位に二条巡らし、その上に、ヘラ状工具による幅のせまい短刻線文を施している。20は、口縁に二条、LR原体による縄文を施している。21~24は、貼付帯をもつものである。22は、胴部に貼付帯を一条巡らし、帯下方の器面にLR縦位の縄文の

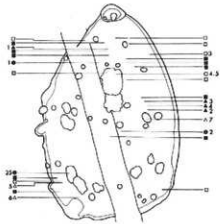


図27 R G05埋土出土遺物の位置 床面遺物と床面より10cm以内の直上(床面直上)中より出土した遺物の位置を示した。土器と石器は、図28・30の番号と一致する。ただし、礎・割片は除く。(●床面土器、○床面直上の土器、▲床面石器、△床面直上の石器、■床面の礎・割片、□床面直上の礎・割片)

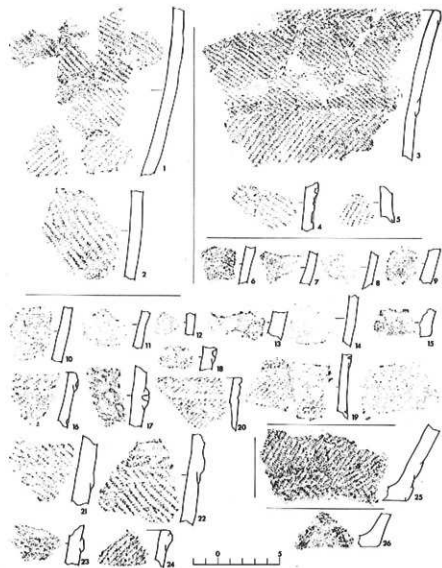


図28 RG09整穴出土土器の断片図 1・2・25が断面、3～5が体面表上。
6～24が覆土中より出土した。3については、復元実測図を図29に示した。

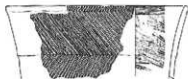


図29 H G05型穴出土土器の実測図 圧面より10cm以上の覆土中(床面直上)より出土した拓本図28-3の上層片を直光実測した。図中には、裏面の調整痕も一部示した。断面径29.5cm、縦尺1/6。

施文を行なったのち、帯上にLR横位の縄文を施している。帯上方の器面は無文である。26は、底部破片で、器面が荒れて不鮮明だが、LR原体の縄文を横位・縦位に施している。復元底径は6cmを計る。

以上、縄文について特に記載がない場合、拓本中右下がりの縄文はLR横位、左下がりの縄文はLR縦位である。

床面出土石器(図30-1~4) 1は、つまみ付ナイフである。正面は、全体を覆う深い割離が施され、急角度の刃部を作り出している。つまみは、左側縁は正面から、右側縁は背面から調整を行なって抉りを作り出している。2~4は、スクレイパーである。2は、強く内湾する厚みのある剥片の両側縁に、急角度の刃部を作り出している。3は、不定形の剥片を用い、左右側縁に両面調整の刃部を作り出している。4は、上端を除く周縁に刃部をもつ。

床面直上出土石器(図30-5~7) 5は、スクレイパーで、上端を除く周縁に刃部を作り出している。6は、定角式の磨製石斧で、刃部は弱凸強凸、刃縁は直線をなす。7は、石斧未製品で、粗割り後、b面を中心に敲打を行なっている。7aは、MB05型穴の覆土中から出土し、7bと接合した。

埋土出土石器(図30-8~16) 8、9は、基部の作り出された石錐である。9は、全体に作りが粗い。10は、石錐で、先端が増減している。11、13はスクレイパーで、11は正面側縁に調整が巡っている。13は、下縁を中心にていおいな調整を行なって刃部を作り出している。12は、両面加工の石器であるが、明瞭な刃部の作り出しは認められない。14は、定角式の磨製石斧破片である。両側面を残して、欠損・剥落している。15も、磨製石斧破片であるが、刃部の一部を残して、剥落・欠損している。16は、石斧未製品で、基部を欠損している。左側縁に階段状の剥離を行なって整形したのち、刃部と左側縁を中心に敲打を行なっているが、研磨は施されていない。

小括

炉の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本型穴を居住遺構と判断する。石圍炉は、第1炉から第2炉へつくりかえが行なわれており、型穴の建て替え・建て増しを示唆する。床面からはⅢ2a群土器が出土しており、また、床面からⅢ2a群土器を出土した他の型穴の平面形・炉形態との共通性から、本型穴の層属をⅢ2a群の時期と考える。

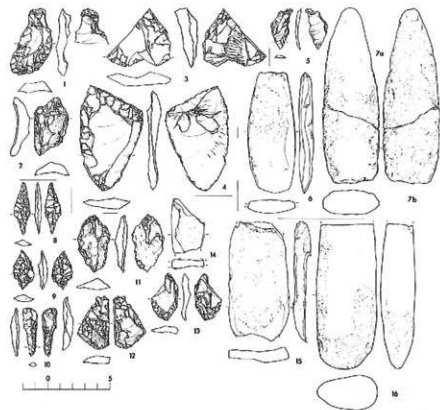


図30 R G05竪穴出土の石器実測図 1-4は床面、5-7は床面から10cm以内の覆土中、8-16は床面からの高さ10cm以上の覆土中からそれぞれ出土した。7bはM H05竪穴の覆土中から出土し、本竪穴出土の7aと接合した。

第4節 T L12竪穴

竪穴の構造

F-16区をローム面まで掘り下げた段階で、西壁からは発掘区の全体に広がる落ち込みを確認した。そのため、近接する発掘区についてもローム面まで掘り下げを行ない、竪穴の全体を確認した。竪穴内部には褐色土が詰まっており、これにまじって土器破片を中心に100点を越える遺物が検出した。また、覆土を掘り進む過程で、竪穴側壁付近に、混じりのないロームの堆積を検出した。これについては後述する。

調査の結果、本竪穴は、先端の尖る卵形の平面形をもつことがわかった。先端は南

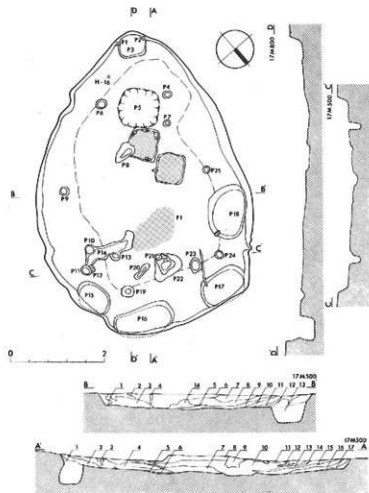


図31 T L12壁穴の平面・断面図 A—B: 1ボツボツのルーム, 2ルーム粒を含んだ黒色土, 3壁穴, 4・15ルーム粒まじりの黄褐色土, 5・10・16ルーム粒まじりの褐色土, 6床面絶上F1で、厚さは3cm, 7・13黒色土, 8黒褐色土, 9・17ルーム粒含む黒褐色土, 11H1層, 12ルームブロック, 14褐色土 B—B': 1・2ルーム粒含む黒褐色土, 3・5・14ルームブロック, 4壁穴, 6H1層, 7褐色土, 8・10・12ルーム粒含む褐色土, 9・11黒色土, 13ボツボツのルーム, 一点破線で囲まれた部分は、掘り戻しの範囲を示している。

西に向っており、F-16、G-16の1は二区にまたがって所在する。長さ6.4m、幅4.6mを計る。

床は、ルームを掘り込んで作り出しており、平坦であった。壁から60～80cm内外の

竪穴平面形に沿って巡る線の内側には、強く踏みしめられた固い床が広っており、表面がウロコ状をなしていた。その外側の床についてもしまっていたが、内側の床の固さは明らかに区別された。なお、竪穴基部付近の床はしまりがなく、凹凸を見せていた。これは後述するように、基部付近の壁に沿って掘り込まれた一連の小竪穴と関連するものであった。

ビット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	
深さ (cm)	20	11	3	34	10	35	16	10	26	8	24	10	15	8	20	27	30	35	
ビット番号	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25												
深さ (cm)	18	13	12	13	15	22	21												

柱穴状の掘り崩は、固い床の周縁に巡るように分布していた。個々の掘り込みについての記録をおこなわなかったため、どれが柱穴の可能性があり、どれが攪乱であるかは明らかでない。

壁は、急な立ち上がりを見せ、著しい崩落は認められなかった。

周溝は、十分に精査を行なったが検出できなかった。

炉は、竪穴長軸上の先端寄りに2基、中央からやや基部寄りに1基検出した。された。先端部寄りの2基については、先端寄りを第1炉、そのやや基部寄りに置位するものを第2炉と名付けた。第1炉は70×65cmの正四角形に近い掘り込みをもつもので、周縁に凹凸が巡っていた。この凹凸は、1個だけ残る礎の在り方、他の竪穴の炉址との比較から、石圍いの礎が抜き取られたあとと判断した。また、竪穴基部側の側面左隅は、木の根によると思われる攪乱がかかっていた。焼土は全て掻き出されており、赤化したロームだけが検出できた。第2炉は、第1炉に較べやや小形で、65×60cmの正四角形に近い掘り込みをもつ。炉周縁にかかって礎が1個認められ、炉の周縁には凹凸が巡っていた。この凹凸は、1個だけ残った礎の在り方からして、石圍いの礎の抜きとりあとと判断した。炉内には、焼土がわずかであるが分布していた。両炉とも、

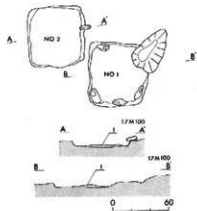


図32 T.L.12竪穴炉址の平面図と断面図 図1・2炉址ともに、炉石の痕跡が不明瞭であるが、いずれも炉石を抜き取られた石圍炉と考えられる。構築時期の前後は不明。図1炉址コーナー部のピットは、炉址に付属しない。断面図A-A'、B-B'は赤化したローム。图中、炉址中の堆積物の記載がないが、いずれも焼土は認められず、また、ロームの粘りもない。

上面にロームの貼り床は認められず、先後関係は確認できなかった。基部寄りのF1は、黄土の厚さ3cmを計り、周縁には礎の抜き取り跡は検出できなかった。

柱穴と思われぬ用途不明の掘り込みとしては、先端部に設けられたP3がある。深さ3cmの浅い掘り込みで、底面の状況、しまりについては記録がない。基部の壁に沿って掘り込まれたP15~P18は、調査最終日の遺構再確認の際に検出した。竪穴基部寄りの床は、先に述べたようにしまりのないやや汚れたロームで、壁への立ち上がりが不明瞭であった。そのためこれを掘り進んだところ、4基の小竪穴を確認した。平面形はいずれも隅丸方形で、壁は垂直に近い立ち上がりを見せる。P16、P17については、竪穴の側壁面が崩落して、袋状に近い立ち上がりを見せていた。いずれの小竪穴も、底面に薄い黒色土の堆積があり、内部にはもろいロームが詰まっていた。

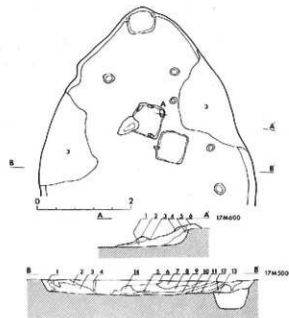


図33 T1.12竪穴のローム分布・層積状況 T1.12竪穴の先端部寄りの両断面
付近で検出されたロームの分布・層積状況を示している。图中、ローム分布部
に示した3の数字は、それぞれ断面図A-A、B-Bにおける3層と対応する。
ロームは、壁から竪穴中央に向かって層状に分布しており、壁との間に薄い三
角堆積をはさんで、竪穴中央部に向かって下積・層積している。
A-A: 1 灰土、2・4・6 ローム粒を含む茶褐色土、3 ロームブロック、5
炭を含む黄褐色土 B-B: 1・2 ローム粒を含む黒褐色土、3・5・14 ロ
ームブロック、4 埋土、6 土層、7 褐色土、8・10・12 ローム粒を含む褐色土、
9・11 黒色土、13 汚れたボツボツのローム

竪穴内ロームの堆積状況について

竪穴覆土を掘り進む段階で、竪穴先端寄りの両側壁から半月状に床面に広がる混り
のないロームの堆積を検出した(図33)。断面を設けこれを観察した結果、どちらのロ
ームも壁との間に褐色土の薄い三角堆積をはさんで、壁から竪穴中央に向かって下傾
して堆積していた。ロームの厚さは、最厚部で20cmを計る。

遺物

床面出土土器(図35-1~4) 1は、貼付帯を巡らすもので、帯下方は無文帯とな
っている。2~4は、いずれも同一個体に属するものと思われ、2・3はR.L原体に
よる縦線文を、4は短刻線文を施している。貼付帯は認めない。

床面直上出土遺物(図35-5・6) 5・6とも、縄文のみのものである。5の4片
は同一個体に属するものと思われる。

埋土出土遺物(図35-7~25) 1~10は11群土器である。1は、貝殻腹縁の瓦痕
文を縦位に施し、その上から横位に沈線を巡らすものである。口縁は波状をなし、内
切する口唇部にも貝殻腹縁によるキザミ目か加えられている。8~10は、外面がナデ
られており、にふい光沢を見せる。10は底部破片。9は、貝殻助条の条敷文が横位に
走る。11・12は、12群土器である。11は、単軸絡状体による施文が行なわれている。
12は、無文の底部破片である。13~15は、貼付帯をもち、その上に短刻線文の施され
るものである。13は、口縁と胴部に二条帯を貼り付けており、それぞれの帯と帯下方

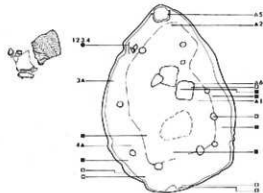


図34 T.L.12竪穴出土遺物の位置 床面遺物と床面より10cm
以内の覆土(床面直上)中より出土した遺物の位置を示した。
上図とおおむね、図35・36の番号と一致する。ただし、破・剥
片は除く。(●床面土器、○床面直上の土器、▲床面石器、
△床面直上の石器、■床面の破・剥片、□床面直上の破・剥
片)



図35 T L12型穴出土土器の断面図 1-4は断面、5-6は断面直上、7-25は覆土よりそれぞれ出土した。

の器面に直接短刻線文を施し、さらにその間にも縦走・斜走する短刻線文を施している。16は、ヘラ状工具による細い短刻線文を、「Y」字状とそれに直交して横位に一条施している。17は、短刻線文と縄線文の組み合わせをもつものである。口縁に間をおいて貼付帯を二条巡らし、上方の帯上には短刻線文を、下方の帯下縁の器面にはR・L原体による縄線文を施している。両帯間は無文である。18・19は、貼付帯をもつもので、19については、粘土帯が貼り付け面から剥落しており、粘土帯上の施文については不明である。20～22は、縄文のみのものである。23は、2本の沈線が縄文地の上を横走している。意図的に施されたものか、傷様のものであるかは、器面の風化が著しく不明である。24は、底部破片で、器面の風化によって縄文が不鮮明だが、L・R横位が施文されている。25は、Ⅲ1群土器で、内外にR・L縦位・斜位の縄文を施文し、口唇と外面に半藏竹管内面による押し引きを施している。

以上、縄文について特に説明がないものは、拓本中右下がりの縄文がR・L横位、左下がりの縄文がL・R横位を示している。

床面出土石器(図36-1~4) 1・2はともに槍先と思われるもので、1は明瞭な基部の作り出しをもつ。3・4は、3は、周縁に急角度の刃部を作り出している。4は、縦長切片の正面左側縁に急角度の刃部をもつ。

床面直上出土土器(図36-5・6) 5・6ともに、定角式の磨製石斧である。5は、

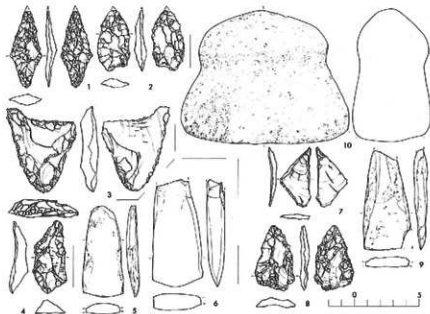


図36 T・L12層出土の石器典拠図 1～4は床面、5・6は床面から10cm以内の覆土中、7～10は床面からの高さ10cm以上の覆土中からそれぞれ出土した。

刃縁を欠く以外は欠損のないもので、研磨はていねいで全面におよんでいる。弱凸強凸気味の刃部をもち、刃縁は緩やかな「へ」の字状をなす。刃縁は、弱凸側の面から加わった力によって剥落している。6は、ていねいな研磨が全面におよんでいるが、左側面は、素材面をそのまま利用しており、調整を行っていない。刃部は両凸で、刃縁はほぼ直線をなしている。

埴土出土石器（図36-7~10） 7・8は、スクレイパーである。7は、a面左側縁に刃部をもつ。8は、両面加工で、a面左側縁に特に鋭い刃部を見せている。9は、定角式の磨製石斧で、基端、刃部の一部を欠いている。刃部は、明らかに片刃として作り出されており、刃縁は緩やかに弧を描いている。刃部は、平坦面をなす刃面側から力が加わって剥離・欠損している。10は、石冠で、握り面には握り面の長軸に平行する握り痕が見られる。把柄から頸部にかけての曲線は緩やかである。

小括

炉の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。石囲いが行なわれていたと推定される炉を2基検出したが、他の竪穴での例から推して、この2基が同時に用いられていたものとは考えにくい。炉の竪穴内での位置関係から、第2炉から第1炉への作りかえを想定できるかもしれない。竪穴基部の壁に沿って並ぶP15~18は、いずれも底面に黒色土が薄く堆積したのち、一気に埋没しており、掘り込まれたのち一定期間開口していたものと判断した。竪穴内に分布するロームは、全く混じりがいいことから、自然に流入・堆積したとは考えられない。投げ込まれたか、あるいは壁周境として積まれたか、上屋を覆っていたかしたロームが、崩れて一気に堆積したものであろう。床面からはⅢ2a群土器が出土しており、Ⅲ2a群土器を床面から出土した他の竪穴の平面形・炉形態との共通性から、本竪穴はⅢ2a群の時期の所産と考える。

第5節 C B75竪穴

竪穴の構造

D-12区をローム面まで掘り下げた段階で、発掘区南壁から広がる落ち込みを確認した。そこで、隣接する発掘区についてもローム面まで掘り下げたところ、ほぼ南西北東に伸びる落ち込みを確認した。これには南北に試掘溝がかかっており、その底面に石囲炉が削き出しになっていたところから、これを居住遺構と判断した。

調査の結果、本竪穴は、D-11、12区、E-11、12区の4区にまたがって所在するものであった。平面形は、卵形というにはやや底辺が直線気味である。先端は南西を

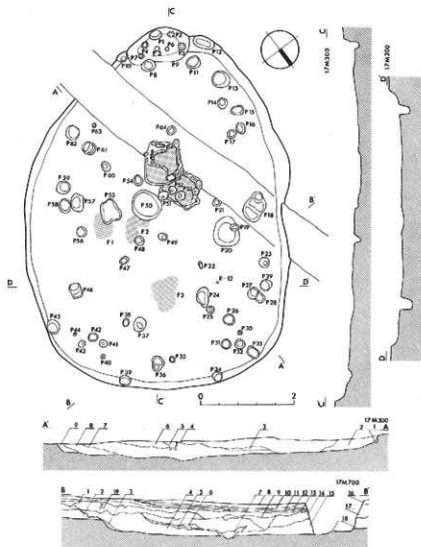


図37 C B 75号穴の平面図と断面図 断面図A-A: 1・9黒褐色土。2・7
 ローム粒を多く含む黒褐色土。3黒色土。4・6・8細かいローム粒を若干含
 む黒褐色土。5擾乱。B-B: 1擾乱。2・16砂層。3粗かいローム粒を含む
 褐色土。4・15細かいローム粒と炭を含む黄褐色土。5・7黒色土。6ローム
 ブロック。8・16U a-b層。9ローム粒を若干含む茶褐色土。10I層。11K
 o-d層。12II a層。13・17II b層。14ローム粒と炭を含む明黄褐色土。19面
 層。地床がF 1堆土の厚さ3cm。F 2堆土の厚さ4cm。F 3堆土の厚さ7cm。
 本発穴においても壁から60cm前後内側に深い層の分層が認められたが、記載後
 れのため断面は示していない。

向いており、2mほど離れて横に並ぶXJ40と、同方向に軸をもつ。長さ7.7m、幅5.7mを計る。

床はロームを掘り込んで作り出しており、平坦である。全体によく踏みしめられている。特に固く踏みしめられた床も観察されていたが、この分布範囲は、記録しなかったため不明である。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18
深さ (cm)	5	11	7	9	4	10	8	11	4	4	16	5	11	5	10	15	18	35
ピット番号	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P35	P36
深さ (cm)	27	10	18	21	18	9	23	25	19	10	22	5	5	12	12	8	9	9
ピット番号	P37	P38	P39	P40	P41	P42	P43	P44	P45	P46	P47	P48	P49	P50	P51	P52	P53	P54
深さ (cm)	30	18	11	10	16	21	22	12	13	32	27	16	10	7	4	5	4	18
ピット番号	P55	P56	P57	P58	P59	P60	P61	P62	P63	P64								
深さ (cm)	10	21	12	38	9	14	27	39	13	13								

柱状の掘り込みは、壁から40~50cm内側に巡っていた。このうち、やわらかな黒色土が詰まり底面が平坦なものは、P16・17・18・25・27・29・35・37・46・47・49・56・58・61・62・64である。なお、炉址にかかるP51~53とP55、P60は、木の根による擾乱と判断した。壁は、急な立ち上がりを見せており、著しい崩落はなかった。周溝は、十分に精査したが検出できなかった。

炉は、竪穴中央のやや先端寄りに石囲炉を3基、その後方に地床炉を3基検出した。3基の石囲炉は、当初、竪穴先端部寄りの互いに重複する第2、第3かが確認されていた。第3炉は、推定80×70cmの長方形に掘り込みを行ない、周縁に礫を配するものであるが、礫の半数近くは抜き取られていた。焼土は掻き出されており、内には、焼土粒や炭片、砂、黒曜石のチップを含む褐色土が詰まっていた。この第3炉の掘り肩を追求していく過程で、第3炉の炉石掘り肩の外に別の掘り肩が検出されたため、これを第2炉と呼ぶことにした。第2炉は、90×80cmの長方形の浅い掘り込みをもつもので、周縁には、石囲いの礫の抜きとりあとと思われる凹凸が見られた。第3炉は、この第2炉の2側面をそのまま利用して構築していた。第1炉は、この第2、第3炉

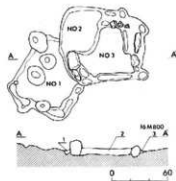


図38 C-B75竪穴炉址の平面図と断面図 No. 1炉址が最も古く、No. 2、No. 3の順に構築されている。No. 3は、No. 2炉址の西・北側面にあり、炉石はNo. 3炉址のものが一部残るだけで、他はすべて抜き取られて、痕跡だけが残る。No. 2・3とも焼土の層は薄い。掻き出されたようである。No. 1炉址の焼土も薄く、上面にはロームの層がみられた。断面図は、これを除去した後に記録したもので、記載がない。炉石の厚さは1~2cmであった。断面図A-A': 1・3黒曜石のチップ・炭化物を含んだ砂、2黒曜石チップ・焼土粒と炭化物を含む褐色土。

の後方に、壁穴長軸から45°ほどずれて位置する。第2・3が後方の床面がやや汚れたロームであったため、これを割がしたところ、一部が第2、第3層によって切られる75×70cmの方形の浅い掘り込みを検出した。掘り込みの周縁には凹凸が巡り、石間の壁の抜きとりあとと判断した。炉内には焼土が薄く堆積しており、この上にロームの貼り床が行なわれていた。断面図は、このロームを取り去った後に実測を行なったため、ロームの貼り床の状況は書き込まれていない。3基の地床層F1～F3は、それぞれ焼土の厚さ3cm、4cm、7cmを計る。F1、F2はそれぞれP55、P50によって切られている。いずれも、壁の抜き取り跡は検出されなかった。

柱穴以外の掘り込みとして、P9がある。深さ4cmの浅い皿状の掘り込みである。

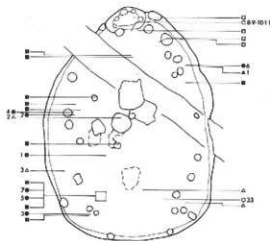


図29 C B75壁穴出土遺物の位置 床面遺物と床面より10cm以内の壁土(床面直上)中より出土した遺物を示した。土器と石器は、図40・41・43の番号と一致する(壁・割片は除く)。(●床面土器、○床面直上の土器、▲床面直上の壁・割片、△床面直上の石器、■床面の壁・割片、○床面直上の壁・割片)

出土遺物

床面出土土器(図40—1～7) 1は、口縁部破片で、L R縦位の縄文が施されている。2～3は、貼付帯を横位に巡らすものである。4～7は、縄文のみの胴部破片で、いずれも内面はていねいなナア調整が行なわれている。

床面直上出土土器(図40—8～11・33) 8～11は、いずれも貼付帯を横位に巡らすもので、同一個体に属すると思われる。帯の上下端は器面との間にやや段をもつが、帯の貼付は施文前に行なわれている。33は、口縁が直立気味の深鉢である。L L Rの複節縄文を、口縁付近は横位に、それより下半は縦位に施し、口縁に同一原体による

縄文を一条巡らせている。口唇は平坦であるが、やや凹凸をもつ。内面口唇下には、指頭圧痕が残る。復節縄文や砂粒の多い胎土、内面に指頭圧痕を残すことから、Ⅲ 2 b群に含まれる。

埋土出土土器(図41-12~32) 12~14は、I 1群土器である。12・13は、口唇下に三条連続刺突を行ない、その下方に貝殻取縁の圧痕文を施している。両者は同一個体に属するものであろう。13には、外面一方からの穿孔による補修孔が一眼所認められる。14は、斜位に貝殻筋条の条痕文が走る。15~17は、短刻線文をもつもので、15は貼付帯上に、16・17はそれぞれ器面上に直接施文が行なわれている。18は、口唇下にLR原体による縄文が巡るもので、その下方の器壁の剝落にかかって貼付帯が認められる。19~25は、貼り付け、あるいは折り返しによる粘土帯をもつものである。19は、口縁破片で、帯断面は三角形をなす。20は、口唇下3cmのところに帯を巡らすものである。口縁端部はやや肥厚するが、粘土帯が貼付されていたかどうかは不明であ

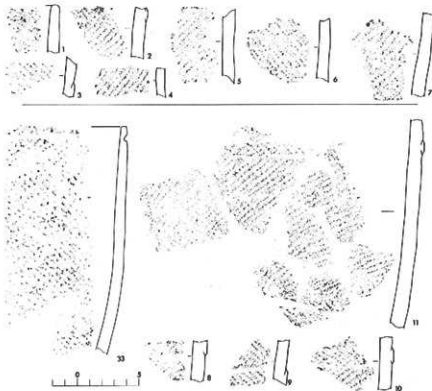


図40 C B 75 掘穴出土土器の断片図 1~7は床面、8~11・33は床面より10 cm以内の覆土中より出土した。33は、破片の一部を複製に示した。図42に復元実測図を載せた。

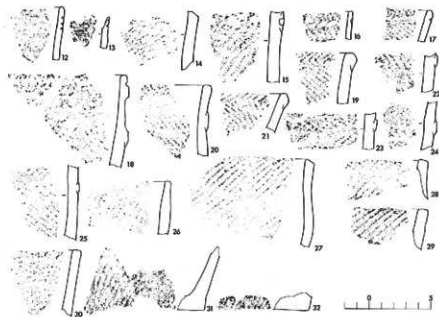


図41 C B 75 號穴出土土器の拓本 図40のつづきで、すべて覆土中出土の土器。32は底部破片。

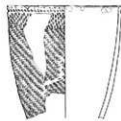


図42 C B 75 號穴出土土器の実際
図 拓本図40-32に示した土器破片の復元裏面図。縮尺1/6。

る。口唇下1cmから帯までは縄文が認められず、無文帯を意図したものかもしれない。であるかもしれない。ただし、器壁が荒れているため断言できない。26-30は、縄文のみのものである。26は、小形土器破片と思われ、復元口径は8.0cmを計る。27と28は同一個体に属するものと思われる。口唇は外切する。30は、外面口唇下に炭化物の付着が認められる。31・32は底部破片で、復元底径はそれぞれ、8.0cm、7.0cmを計る。床面出土石器（図43-1） スクレイパーである。左右両側縁に刃部を作り出している。

床面直上出土石器（図43-2・3） 2は、基部の作り出された石鉄である。3は石冠で、底面には底面長軸に平行する撓り痕が見られる。また、底面の左寄り是一部割

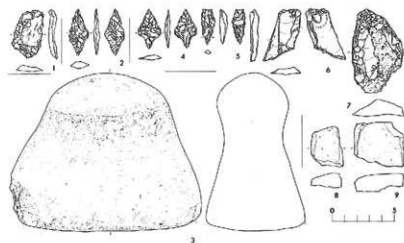


図43 C B75竪穴出土の石器実測図 1は床面、2・3は床面からの高さ10cm以内の覆土中、4～9は床面からの高さ10cm以上の覆土中から出土した。

落している。

埋土出土石器(図43、4～9) 4は、基部をもち、逆刺の強く張り出す石鏃である。5は、両面加工の石器で、断面は三角形を呈する。先端には磨滅痕は認められないが、石鏃であろう。6・7は、スクレイパーである。7は、厚手の縦長剥片の周縁にやや深めの調整を行って急角度の刃部を作り出している。6は、縦長剥片の正面左側縁に細かな加工を加えて刃部を作り出している。8・9は、礫石の破片である。

小括

竪穴の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。石囲炉は、第1炉から第2炉、次いで第3炉と作りかえが行なわれており、竪穴の建て替え・建て増しを示唆する。床面からⅢ2 a群土器が出土しており、また、床面からⅢ2 a群土器を出土した他の竪穴の平面形・形形態との共通性から、本竪穴をⅢ2 a群の時期の所産と考える。

第6節 MT05竪穴

竪穴の構造

G-5、H-5二区をローム面まで掘り下げた段階で、黒褐色土の落ち込みを確認

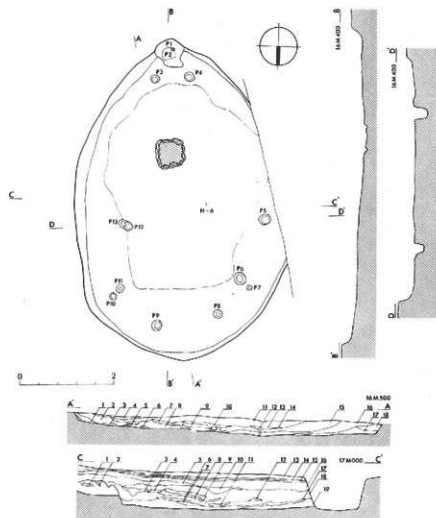


図44 M丁055号穴の平面・断面図 A-A': 1・2ロームブロック, 3・4・9ローム粒を含む黒色土, 5・10灰褐色土, 6多量にローム粒を含む黒褐色土, 7・17黒色土, 8ローム粒をわずかに含む黒色土, 11・12緑土, 13U-se-t火山灰, 14II-a層, 15黒色土, 16磁層, 18粘質のない黒色土, 19ロームブロックまじりの褐色土, C-C': 1・3・5・6・11・13黒色土, 2多量にローム粒を含む黄褐色土, 4茶褐色土, 7褐色土, 8・10ローム粒・ブロックを含む黄褐色土, 9・15黄・ローム粒を含む茶褐色土, 10・12・14ロームブロック, 17わずかにローム粒を含む黒色土, 18茶褐色土, 断面図中, 一点破線で囲んだ部分は深い底の範囲を示している。

した。そこで、隣接するG-6、H-6区をローム面まで掘り下げて、竪穴の全体を確認した。覆土中からは、中規模の竪穴のなかでは最も多量の遺物を検出した。

調査の結果、本竪穴はG-5・6区、H-5・6区の四区にまたがって所在することがわかった。先端を南に向けた卵形の平面形をもち、長さ6.8m、幅は推定で4.5mを計る。

床はロームを掘り込んで作り出しており、平坦である。竪穴の壁から60~120cm内側の竪穴平面形に沿って巡る線の内側は、固く踏みまわっており、表面はウロコ状をなしていた。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13
深さ (cm)	不明	2	14	17	27	12	13	24	24	25	20	23	5

柱状の掘り込みは、固い床の周縁に沿って巡っていた。

壁は、側壁の一部が試掘溝によって破壊されていたが、その他の部分は壁の立ち上がりか急で、著しい崩落はみられなかった。

周溝については、十分に精査を行なったが検出できなかった。

炉は、竪穴長軸上の先端寄りに一基確認した。65×65cmの方形の浅い掘り込みをもつもので、周縁には石囲いの礎の抜きとりあとと推定される凹凸を検出した。

柱穴や擾乱とは異なる掘り込みとしては、P1がある。深さ5cmほどの浅い皿状のもので、底面は固くまわっていた。

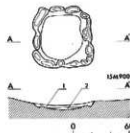


図45 MT06竪穴炉址の平面図と断面図
断面図A-A': 1 底面、2 底面の
硬化したローム

出土遺物

床面出土土器(図47-1) 底部破片である。器面に縄文を施文したのち、ある程度乾燥の進んだ段階で、底部から1.5~2.0cm間をナデ消している。

床面直上出土土器(図47-2~5) 2は、口縁端部と胴部に微かな貼付帯を巡らしその上に短刻線文を施すものである。3は、鉢形の土器で、丸みを帯びた胴部からややくびれて口縁の外反する器形をもつ。頸部にR.L.原体による縄線文を二条横位に巡らしており、頸部から口縁端部までは無文である。復元口径はおおよそ14cmを計る。口唇は外切している。4は、口縁が直立気味の深鉢である。R.L.縦位の縄文を施している。内面は、乾燥の進んだ段階でナデしている。5は、底部破片で、底面にはミガキが

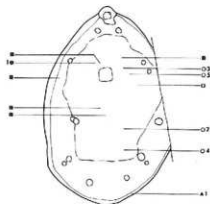


図46 MT05塚穴出土遺物の位置 床面遺物と床面より10cm以内の覆土(床面直上)中の遺物を示した。土器と石器(礎・剥片を除く)は、図47・48・50の番号に一致する。〔●床面土器、○床面直上の土器、▲床面石器、■床面の礎・剥片、□床面直上の礎・剥片〕

および、

埋土出土土器(図47・48-6~32) 6はI1群土器で、外面に貝殻助条による横位の条痕文が施されている。7~13は、横位に巡らされた貼付帯上に短刺線文をもつものである。7は、微弱な貼付帯を巡らす口縁破片で、器面が荒れているが、LR横位の縄文を施している。9は、隆帯中央を境に羽状縄文を施している。13は、底部付近の破片で、隆帯中央を境に羽状縄文を施したのち、帯下方をナデ滑している。14~24は、貼付帯をもつものである。15は、帯中央を境に羽状縄文を施している。16・23は、ともにRL縦位の縄文をもつ。17は、帯断面が三角形をなし中央に隆をみせる。18は、帯の大半が貼付面から剥落している。24は、底部破片で、復元底径は10cmを計る。25は、弱いくびれのある肩部破片で、貼付帯上端の器面にLR原体による縄線文を巡らしており、帯から上方を無文帯としている。26~32は、縄文のみのものである。30は、小形土器の口縁部破片で、復元口径は8cmを計る。31・32は、底部破片で、復元底径はそれぞれ6cm、7cmを計る。33は、小形土器の底部で、無文と思われるが器面が風化しており定かでない。底径は3.8cmを計る。

以上、縄文について特に記載が無い場合、拓本中右下がりの縄文はRL横位、左下がりの縄文はLR横位である。

床面出土石器(図50-1) 定角式の石斧で、刃部を欠損している。側縁、特に基部寄りの側縁に、深い剝離整形を行なっている。研磨はほぼ全面におよんでいるが、基端は、素材面を残している。

埋土出土石器(図50-2~8) 2・3は石銀である。いずれも明瞭な茎部の作り出しが認められる。4・5は、スクレイパーである。全面を覆う深い調整によって整形

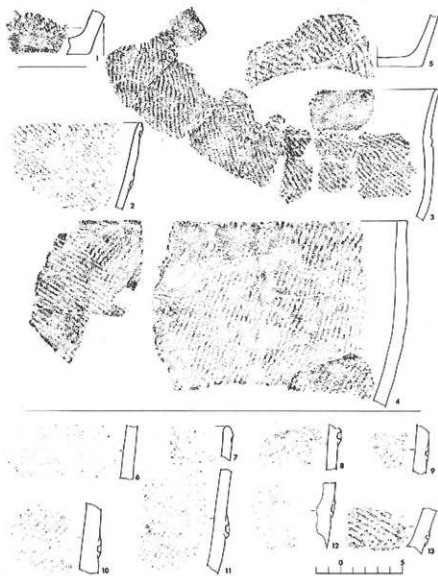


図47 MT05壱次出土土器の拓本図 1が表面、2-5が表面より10cm以内の底土中、6-13がそれ以上の底土中より出土した。3・4については、図46-1・2に復元実測図を示した。4は、他に4片の未接合の破片があるが、図示していない。

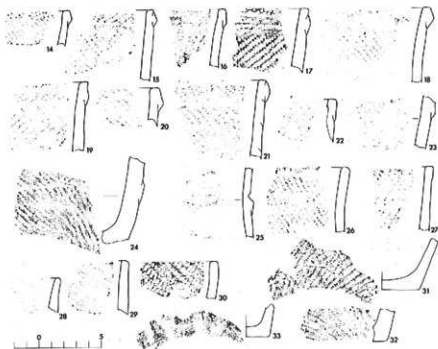


図48 MT05型穴出土器の拓本図 図47のつづきで、すべて覆土中出土器。33については、図49-3に実測図を示した。

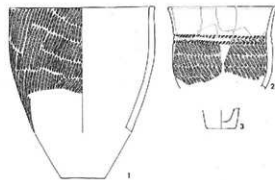


図49 MT05型穴出土器の実測図 1・2は断面、3は覆土中からの出土。1・2は、拓本図47-3・4に示した破片からの復元実測である。3は無文土器で、図48-33に拓本を示した。縮尺1/6。

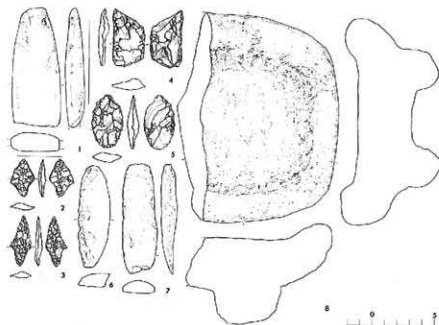


図50 MT05掘穴出土の石器実測図 1は床面から、それ以外は床面からの高さ10cm以上の黄土中から出土した。

を行ない、その後、a面左側縁に細かい調整を加えて刃部を作り出している。上・下端は、調整後の剥離であろう。5は、粗い階段状の剥離によって、上方基部がすぼまる楕円形に形を整え、下方先端部に片面からの調整を加えて厚みのある刃部を作り出している。6は、石片の未成品の破片である。原材の側縁に階段状の剥離を加えたあと、敲打を行なって整形しており、研磨作業に入る以前に剥離したものと思われる。7は、刃部をわずかに欠いているが、片凸刃に近いものである。全面におよぶ深い階段状の剥離を行なったのち、刃部と、基端付近の一部のみを研磨している。刃部の研磨も、凸刃の裏面は、刃縁のみである。8は、脚付の石皿であるが、半身を欠いている。皿の部分は、敲打による凹凸を見せており、明らかな磨滅は認められない。本来は四脚のものであろう。

小括

炉の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本掘穴を居住遺構と判断する。石四脚のつくりかえがみられず、柱状の掘り屑も少数で互いに近接して掘り込まれた例がないことから、掘穴の建て替え・建て増しが行なわれた可能性は考えにくい。床面からは、施文後の底部端にナデを巡らすという、III 2 a 群土器に特徴的な調整をも

つ底部破片が検出されており、Ⅲ2 a 群土器を床面から出土した他の竪穴の平面形・炉形態との共通性から、本竪穴をⅢ2 a 群の時期の所産と考える。

第7節 XR80竪穴

竪穴の構造

E-6, F-6区をローム面まで下げた段階で、褐色土の落ち込みを確認した。このため、近接する発掘区についてもローム面まで掘り下げ、竪穴の全体を確認した。竪穴内部には褐色土が詰まっており、遺物がこれに混じって出土した。

調査の結果、本竪穴は、E-6, F-6・7区の三区にまたがって所在するもので、長円形に近い卵形の平面形を示すことがわかった。先端は、やや東にずれて南を向いており、長さ7.3m、幅5.2mを計る。

床は、ロームを掘り込んで作り出しており、平坦である。床は固く踏みしめており、ウロコ状の表面をなす現象を認めたが、その分布については、記載洩れのため不明である。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	
深さ (cm)	7	10	49	9	15	11	35	7	2	5	23	9	25	19	25	5	9	3	
ピット番号	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33				
深さ (cm)	16	13	6	6	7	24	48	18	20	12	13	31	5	7	12				

柱穴状の掘り削が、壁から60cm内外のところに分布しているのを認めたが、個々の掘り込みについて覆土の状況など、記録化できなかった。

壁は、急な立ち上がりを見せ、著しい崩落はみられなかった。

階溝は、十分に精査を行なったが、検出できなかった。

炉は、竪穴長軸に沿って先端寄りに2基、基部寄りに、2基検出した。先端寄りの2基は切り合っており、先端側の炉を第2炉、基部側の炉を第1炉と名付けた。第2炉は、65×55cmのやや不整な方形の掘り込みをもち周縁に長円形の円礫を配している。礫は、半数以上抜き取られ、抜き取り跡と思われる凹凸を、周縁に検出した。第1炉は、70×65cmの不整な方形の掘り込みをもつもので、周縁には右側の礫の抜き取り跡と思われる凹凸を検出した。結局、第2炉は、第1炉の二側辺の一部をそのまま利用して掘り込まれたものであるとわかった。第1炉以上にロームの貼り床はみられなかった。基部寄りのF1は、ひょうたん形の平面形を見せる地床炉である。焼土の厚さは不明である。礫の抜き取り跡は検出できなかった。F2は、F1の後方に位置する径30cmの円形の焼土の広がりを認めるもので、焼土の厚さは2cmを計る。上面に、ロームの貼り床が行なわれていた。礫の抜き取り跡は検出できなかった。

柱穴以外の掘り込みとして、先端部に掘り込まれたP1がある。深さ7cmの浅い掘

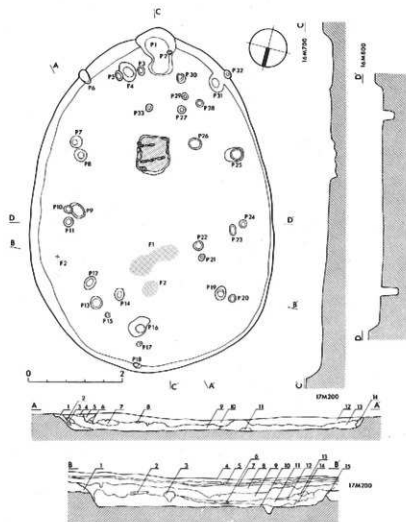


図51 X R 90形穴の平面図と断面図 卍址を中心に、固く踏みしまった床面を
確認したが、正確な範囲を記載していない。大略、最も外側のピットを結んだ
線の内側であった。トーンでつぶしたF1・F2は、床面上の焼土址。断面図
A-A' : 1 ローム粒をわずかに含む茶褐色土、2・11 ロームブロック、3・6
・7・8・14 黒色土、4・11 ローム粒と炭化物をわずかに含む黒褐色土、5 埋
乱、9 粗いローム粒を含む黒褐色土、12 ロームブロックを含む茶褐色土、細い
ローム粒を含む黄褐色土 B-B' : 1・15 泥・石膏、2 焼土、3・13 黒色土、
4 泥・火山灰、5 土層、6 ロームブロック、7 泥層、8 目土層、9 ロ
ーム粒と炭化物を含む茶褐色土、10・14 ローム粒を含む黄褐色土、11 粗いロ
ーム粒を含む黒褐色土、12 茶褐色土。

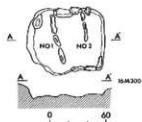


図52 XR60竪穴伊址の平面図と断面図 横穴順序は、No. 1が址が丸。図中の伊石はすべてNo. 2伊址のもの。いずれの伊址にも、境上の発掘がみられない。ただし底面のロームは着色している。

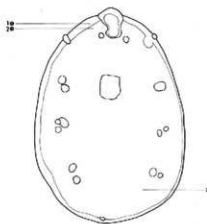


図53 XR60竪穴出土遺物の位置 床面遺物と床面より10cm以内の復土（床面直上）中より出土した遺物の位置を示した。土器は図54の番号に一致する。（●床面土器、○床面直上の壘と製片）

り込みである。

出土遺物

床面出土土器（図54—1・2） 1は、縄文のみの口縁破片である。2は、無文で、破片下端近くにRL原体の縄線文を横位に巡らしている。
 埋土出土土器（図54—3～25） 3～14は、貼付帯をもち、その上に短刻線文を施すものである。このうち、7は、横位に2条の短刻線文を巡らせているが、上方の口縁の短刻線文は、帯をもたず器面に直接施されている。同様に、8・14も、貼付帯上に施された短刻線文と器面に直接施された短刻線文との組み合わせをもつものである。8では縦の短刻線文が、14では縦および貼付帯下方の短刻線文が、器面に直接施されている。10は、垂下する貼付帯上に短刻線文を施している。12は、狭い無文帯をはさんで粘土帯を2本横位に巡らし、その上に短刻線文を施している。13は底部で、貼付帯上にへら状工具による細い短刻線文を施している。復元底形は5cmを計る。なお、

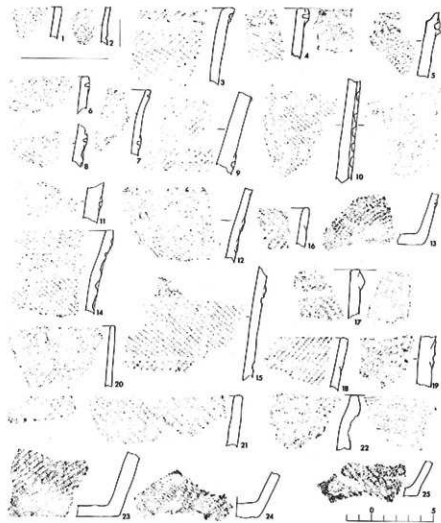


図54 X R線型式出土土器の拓本図 1・2は半面出土、3-25は覆土中より出土した。

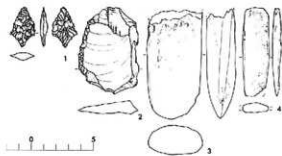


図56 X.R.80竪穴出土の石器実測図 いずれも床面からの高さ10cm以上の複土中から出土した。

5の縄文はL.R縦位である。15は、破片上端近くに貼付帯を巡らし、帯直下とその下方の羽状縄文の交点にR.L原体による縄線文を施している。16～19は、貼付帯のみのものである。18の隆帯については、粘土帯接合に伴う肥厚かもしれない。19は、帯上に縄線文(R.L原体)かと思われる凹みがみられる。20～25は、縄文のみのものである。22は、口縁部に貼付帯があったものと思われるが、器外面のほとんどが剥落しており、判じ難い。23～25は、底部破片で、それぞれ復元底径は8.5cm、4.0cm、5.0cmを計る。23は、底部端に施文後ナデ消しを加えられている。

以上、縄文について特に記載がない場合、拓本中右下がりの縄文はR.L横位を、左下がりの縄文はL.R横位を示す。

埋土出土石器(図55-1～4) 1は、莖部の作り出しが行なわれた石鏃である。2は、スクレイパーで、縦長剥片正面の左側縁に細かい調整を加えて刃部を作り出している。3は、定角式の磨製石斧で、刃部は両凸、刃縁は直線をなす。研磨はていどいである。4は、小形の定角式磨製石斧で、刃の一部を欠損しているが、ほぼ完品である。刃部は弱凸強凸で、刃縁は緩やかな「へ」の字状をなしている。

小括

埴の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。石囲いが第1がから第2がへつくりかえが行なわれており、竪穴の建て替え・建て増しを示唆する。床面からはⅢ2 a群土器が出土しており、Ⅲ2 a群土器を床面から出土した他の竪穴の平面形・埴状態との共通性から、本竪穴をⅢ2 a群の時期の所産と考える。

第 8 節 W I 65 竪穴

竪穴の構造

L-5 区をローム面まで掘り下げた段階で、西壁側に黒色土の落ち込みを確認した。また、この黒色土中には炭化材が多量に含まれており、焼失家屋であろうと判断した。このため、発掘区を M-5 区にまで拡張し、炭化材や焼土に注意を払いながらローム面まで掘り下げ、竪穴の全体を確認した。この時点で、竪穴基部が不整な平面形を見せるため精査を行なってみたところ、2 基の擾乱墳が竪穴を切っているのを確認した。この擾乱墳は不整な平面形と立ち上がりを見せており、木の根による擾乱の可能性が高いものであった。竪穴内には、炭化材、焼土、ロームブロックを含む褐色土が詰まっていた。覆土中の遺物量は、同規模の他の竪穴と比較して少量であった。

結果として、本竪穴は L-5、M-5 区にまたがって所在することがわかった。平面形は、基部が擾乱を受けているが、先端が尖り、胴のふくらみが強い卵形を呈する。先端は南東を向いており、近接する M B 05 竪穴と長軸方向を同じくするものであった。長さは、推定で 5.7m、幅は 4.2m を計る。

床はロームを掘り込んで構築しているが、固い部分とやわらかい部分に明確に二分できた。固い部分は、壁から 40cm 前後内側の竪穴平面形に沿う線の内側に広がっていた。ただし、基部左方では壁付近まで固い床が続いていた。固い床の表面は黒みがかかり、ウロコ状の表面をなしていた。やわらかい床はその外側に広がっており、ウロコ状の表面は観察できなかった。

ビット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18
深さ (cm)	3	36	20	2	24	13	4	17	7	6	7	35	12	14	7	11	16	16

ビット番号	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29
深さ (cm)	13	16	41	34	23	4	30	7	19	42	24

柱状の掘り込みは、先端寄りではやわらかな床の範囲に、基部寄りでは主に固い床の範囲内に分布していた。

壁は急な立ち上がりを見せており、著しい崩落はみられなかった。ただし、竪穴左側壁の先端部寄りで、壁の崩落によって平面形がたわみをみせていた。

周溝は、十分に調査を行なったが検出できなかった。

炉は、竪穴長軸に沿って先端部寄りで検出した。炉前方は固い床がなだらかに 7~8cm 低くなっていた。石皿をもつ第 2 炉を検出した時点で、その後方に「コ」の字状に黒色土が落ち込んでいるのがみえ、炉の改築が行なわれていると判断した。旧炉であるこの第 1 炉は、60cm 四方に掘り込みを行っており、周縁に礫の抜きとり跡と思われる凹凸が巡っていた。ただし、先端部側の抜き取り跡は確認できなかった。これは、第 2 炉の掘り込みによって、第 1 炉の抜き取り跡が破壊されたためと判断した。

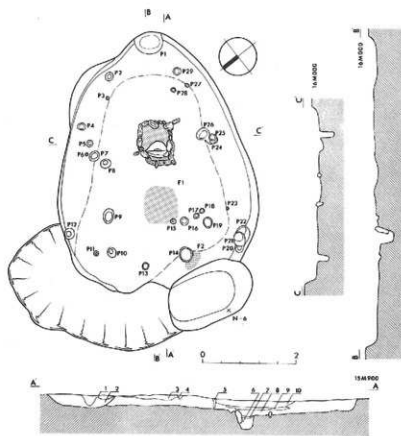


図56 W165煙穴の平面・断面図 A-A: 1 灰・ローム粒をわずかに含んだ褐色土, 2 灰・ローム粒をわずかに含んだ褐色土, 3・10 不明, 4・5 褐色土 (褐色土, 6・7 炉壁筋線部, 8 炭灰層・ロームブロックを含んだ黄褐色土, 9 黄褐色土中に灰・ローム粒が層状に入る。断面地土D1は、地土厚3cm, F2の地土厚は不明。平面図中、一点破線部分は深い底の範囲を示している。

第1炉の抜き取り跡中央に、板状の礫を炉側面に直交するように立てているが、これはその配石の仕方から、第2がに伴うものと考えた。

第2がは、第1炉より大形の80cm四方の浅い掘り込みを設けるもので、周縁には円礫を配している。ただし、竪穴先端部に向かって左上方の礫数個が既に抜き取られていた。礫は、板状のものに限らず、全体にごろんとした丸みのあるものを利用してはいる。基部側の側面は、深さ30cmにも達する掘り込みを行なって、そこに板状の大きな礫を埋め込んでいる。内部には、掘り返したロームの埋め戻しと思われるしまりのないロームが詰まっていた。また、炉から放射状に礫を配しているのが観察できた。こ

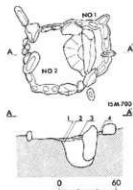


図57 W160竪穴炉址の平面図と断面図
 構築順序は、No.1が先、断面図A-A: 1 No.2炉の焼土、2 炉石の掘り戻り焼土はローム、3-4ロームまじりの黒色土。

れには、竪穴先端に向かって、右上の隅と、基部側の側辺外側中央に配された礎の他に、左下の隅と、第1炉の基部側側辺の右端に検出された抜き取り跡も含めてよいものと考えた。左上の隅については、抜き取り跡を確認できなかった。

これら石囲炉の他に、地床炉を2基検出した。F1は、石囲炉後方50cmに位置するもので、70cm四方を浅く掘りくぼめている。焼土は厚さ3cmで、上面にはロームの貼り床を行なっている。礎の抜き取り跡は認められない。F2は、P14に切られており、20×40cmの広がりをもつものである。焼土の厚さについては、記載浅れのため不明である。礎の抜き取り跡は認められない。

柱穴以外の掘り込みとしては、P1が、先端部に設けられた深さ3cmほどのごく浅い皿状の掘り込みである。竪穴基部にかかる擾乱については、調査の経過の記述中に既に述べたところである。

炭化材の出土状況について

炭化材の分布は竪穴の全面におよんでいる。炭化材は、径3cmから10cmとばらつきをみせ、出土位置も床面直上から床土30cmにわたっている。S R 25の例と同様に、壁に沿って丸太材が並び、その下に他の材が直交するという構造を、竪穴の左右側壁で確認した。また、先端が二股に別れる炭化材を、竪穴長軸に沿って石囲炉上に倒れた状態で検出した。P2では、丸太材が掘り込みに立ったままの状態でも遺存していた。丸太材は、床から25cm上までの部分が遺存していたが、土中に運まれている部分は腐植したためか材は遺存せず、やわらかい黒色土が内部に詰まっていた。これは写真によって記録を行なっている(図版27)。

茅材として図中に示したものは、いずれも床面に分布するものである。竪穴右側壁上方に分布する焼土では、茅材が焼土の上面から床面にまで一連にはりついていた。



図58 W165号穴の炭化材出土状況 床面から覆土中にかけて分布する炭化材、焼土を示している。图中、斜線部は炭化した茅材を、一点線部は焼土を表わす。S R 25号穴での炭化材出土状況と同様、壁に沿って形ふ丸土材と、それに直交し、水心状の分布を示す丸土材の組合わせが認められた。

また、先端部の壁に挟んで検出した焼土では、焼土と壁にはさまれて茅材が詰まっていた。

焼土の分布は、S R 25号穴と同様、炭化材の分布とややずれている。

出土遺物

床面出土土製品（図60—1） 土器破片の周縁を円く打ち欠いた土製品で、中央には両面からの穿孔による貫通孔が認められる。周縁に磨滅は見られない。P 9内から検出した。

埋土出土土器・土製品（図60—2～25） 2は1 a 群土器である。貝殻助条による条状文が横走する。3～6は、短刻線文をもつものである。3は、貼付帯を、口縁に横位に一条とそこから垂下して一条巡らしている。両帯の交点は、コニャテ状に隆起しており、ここに円形刺突を加えている。4～6は、貼付帯をもたず、器面に直接短刻線文を施すものである。7～9は、縄線文が施されるもので、いずれも貼付帯をもた

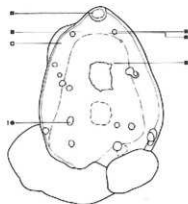


図59 W165型大皿土遺物の位置 床面遺物と床面より10cm以内の遺土(床面直上)の遺物の位置を示した。土器は、図50の番号に一致する。(●床面土器、■床面の段・割片、○床面直上の段・割片)

ない。縄線文は、どれもLR原体を用いて施文を行なっている。10は、縄線文と短刻線文の組み合わせをもつもので、LR原体による縄線文を横位に一条巡らし、そこから垂下する短刻線文を施している。貼付帯は認められない。11は、口縁に貼付帯をもつものである。12～20は、縄文のみのものである。15は、やや小形の深鉢土器破片かと思われ、復元口径は11.5cmを計る。18は、口縁から幅4cmの間にミガキを加え、無文帯としている。21は、その半身を欠損している円形の土製品である。土器破片の周縁を円く打ち欠いて成形しており、中央には両面からの穿孔による未貫通孔が認められる。22は、底径2.9cmを計る小形土器である。底部に近くRL原体による縄線文を一条横位に巡らしている。底は、上げ底気味である。上端の割れ口は、打ち欠いて整えたように高さがそろって一周しており、打ち欠きによって作出された二次的な口縁かもしれない。23は、貼付帯上に短刻線文をもつものである。24、25は底部破片である。24は、底部端に底部成形に伴うと思われる貼付帯を巡らし、RL斜位の縄文を施している。III 2 b群の土器である。25は、縄文施文後底部端から5mm幅をナデ消している。それぞれ底径、復元底径は、9.4cm、5cmを計る。

以上、縄文について特に記載がない場合、拓本中右下がりのものはRL横位、左下がりのものはLR横位である。

埋土出土土器(図62-1~4) 1、2は、ともにスクレイパーである。1は、a面左側縁から下縁にかけて、2は、a面右側縁に、それぞれ、片面、両面からの細かい調整が行なわれている。3・4は、ともに磨製石斧で、4は側面の作り出しが明瞭だが、3は、部分的に側面が砥ぎ出されている。3は、深い階段状の剥離後、ほぼ全面に研磨を行なっており、刃部は両凸を呈する。4も深い階段状の剥離後研磨を行なうもので、刃部断面は割凸強凸、刃縁は「へ」の字状を呈する。

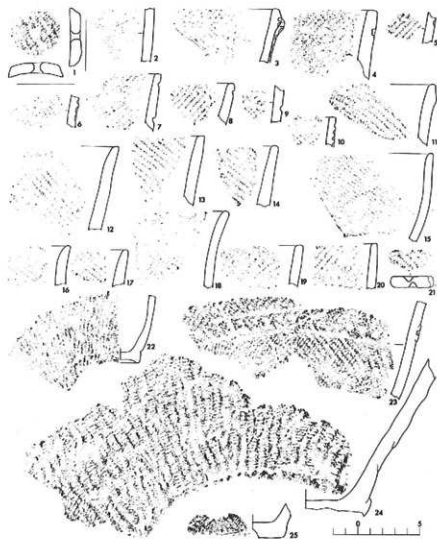


図60 W I 60 整穴出土土器の拓本図 1は床面出土の内盤状土製品。2～25は床面より10cm以上の高さに位置した覆土中の土器。24は、底部破片で、他に同一破片が30数点あるが接合しない。21は内盤状土製品。



図61 W165竪穴出土土器の実測図 竪穴の覆土中より出土した土器の実測図（図尺1/6）で、拓本を図69～72に示した。

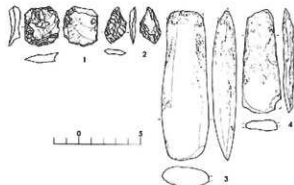


図62 W165竪穴出土の石製実測図
いずれも床面からの高さ10cm以上の覆土中から出土した。

小括

炉の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。覆土中から床面にかけて多量に出土した炭化材・焼土は、本竪穴が焼失したことを示すものである。石圍炉は、第1炉から第2炉に作りかえが行なわれており、竪穴の建て替え・建て増しを示唆する。床面に掘り込まれた掘り屑内からは、Ⅲ2a群土器の破片を二次的に加工した土製品が出土しており、Ⅲ2a群土器を床面から出土した他の竪穴の平面形・炉形整との共通性から、本竪穴はⅢ2a群の時期に構築・利用されたものと考えられる。

第9節 MB05竪穴

竪穴の構造

L-6区をローム面まで掘り下げた段階で、道教委の試掘溝によって南北に切られた落ち込みを確認した。断面観察の結果、落ち込みの底面に焼土を認め、また、試掘溝底面には柱穴状の掘り屑をいくつか認めた。そのため、これを居住遺構と判断し、

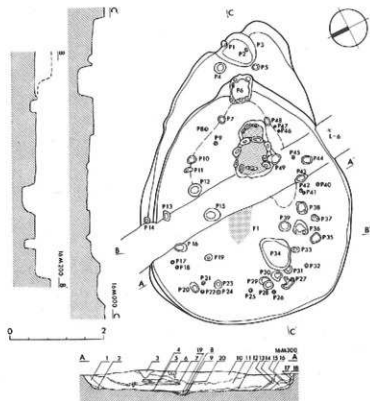


図53 M1505竪穴の平面図と断面図 A-A: 1ロームブロック含む黄褐色土、2・5・7・10・13・16黒色土、3・6擾乱、4黒色土、8ロームブロック、9赤化したローム(床面焼土F1)、11ローム粒・ブロック含む褐色土、12ローム粒・ブロック含む黒色土、15ロームブロックを含む褐色土、16不明、19砂、20床面焼土F1で、厚さは2cm、焼土下のロームは4cmが赤化。平面図中、一点破線で囲んだ部分は古い床の範囲を示している。

隣接する発掘区についてもローム面まで掘り下げ、竪穴全体の確認を急いだ。竪穴掘土中の遺物はわずかであった。

調査の結果、本竪穴は、K・L-6区の2区にまたがって所在することがわかった。平面形は、後述する竪穴先端のテラス状の張り出しを除いた場合、胴の強く張る丸みの強い卵形を、先端部のテラスを加えた場合には、先端に向かってすばまる卵形を呈する。先端は東南東を向いており、後方2.5mほど離れて位置するW165竪穴と同じ長軸方向をもつ。長さは、テラスから基部まで6.4m、幅は4.5mを計る。

床は、ロームを掘り込んで作り出しており、平坦である。炉の周辺は、特に固く踏みしめていた。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	
深さ (cm)	3	18	9	11	10	7	18	13	22	26	20	10	11	2	6	15	13	25	
ピット番号	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P35	P36	
深さ (cm)	14	7	28	23	25	19	31	21	20	28	18	8	5	17	9	28	26	15	
ピット番号	P37	P38	P39	P40	P41	P42	P43	P44	P45	P46	P47	P48	P49						
深さ (cm)	10	12	15	20	34	33	27	19	18	23	31	38	28						

柱穴状の小穴は、竪穴壁から60～80cm内側の線上に分布していた。このうち、覆土がややわかい黒色土で、底が平坦面をなすものは、P4・5・7・10・12・16・23・29・35・39・43・44・48および径6cm前後の一連の小穴群であった。

壁の立ち上がりは急で、特に崩落した部分はない。

周溝については、十分に精査を行なったが検出できなかった。

炉は、竪穴長軸上の先端寄りに2基、その後方に1基検出した。先端寄りの2基のうち、最初に確認した第2炉は、90×80cmのやや不整な方形の掘り込みをもつもので、周縁には石囲いの礫の抜きとりあとと思われる凹凸が巡っていた。炉内には炭片・焼土・ローム粒のまじった褐色土が詰まっていたが、焼土の堆積はない。ただし、床面のロームの赤化は顕著である。炉にかかるP49は、炉構築後の攪乱である。第2炉の竪穴先端部寄りに検出した第1炉は、第2炉に一部切られている。掘り屑は推定60×60cmの方形を呈する。底面に黒色土が薄く堆積しており、その上にロームが詰まっている。埋め戻しと貼り床を行なったと考えられる。焼土は検出できなかったが、掘り込み周縁に礫の抜き取り跡と思われる凹みを確認した。竪穴基部寄りの地床炉のF1は、一部が試掘溝に削られている。焼土の厚さ2cm、赤化したロームの厚さ4cmを計る。

柱穴以外の掘り込みとしては、竪穴先端のP6がある。深さは7cmで浅い。この周縁に深さ10cm前後の掘り込みを7個検出した。柱穴かどうかは明らかでない。

尖端部の張り出しから考えられる重複住居の可能性について

竪穴先端に、張り出したテラス状の掘り込みを検出した。当初、切り合う別個の竪穴と判断したが、覆土に差が認められず、テラスから竪穴内にかけて、一連の土層の

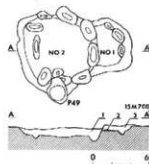


図64 M805竪穴炉址の平面図および断面図。横断番号は、No.1炉址が先、No.1炉址の焼土は掻き出されたようで、確認できなかった。ロームによる掘りが全体にみられた。No.2炉址にかかるP49は、炉址構築後の攪乱。A-A': 1 黒炭・焼土まじりの褐色土、2 黒色土、3 ロームによる貼り。

堆積を認めたため、同時に併存していた可能性が高いと考えた。ロームを浅く掘り込んでおり、底面はしまりがなくやわらかであった。テラスの先端には、深さ9cmの浅い掘り込みを認めた。なお、このテラスから、ほぼ完形のⅢ1群土器(図66-14)を検出した。土器は、テラスとの間に数cmの黒色土をはさみ、口縁を壑穴内に向けて落ち込んでいた。この土器の出土状況と、覆土の堆積状況から、テラスと壑穴が平行して存在し、同時に埋没したと判断した。それゆえ、テラスが壑穴の附属施設である可能性はあっても、重複住居である可能性は考えられない。

出土遺物

床面出土土器(図66-1~3) 1は、器面に斜位の条痕が認められる。器面の風化が著しく明瞭でないが、貝殻肋条による条痕文であろうか。2・3は、縄文のみのもので、3には外面一方からの穿孔による補修孔が認められる。

埋土出土土器(図66-4~16) 4は、貼付帯をもたず、器面に直接R.L原体の縄線文を2条巡らしている。5・6は、貼付帯をもつもので、6では、粘土帯の貼り付け前にL.R縦位の縄文を施し、その上に粘土帯を巡らしている。Ⅲ2a群の土器では珍しい施文順序をもつものである。あるいはⅢ2b群に含めるべきかもしれない。隆帯上には同一原体横位の縄文を施している。7~13は、いずれも縄文のみのものである。7・8は、小形土器の口縁破片で、8は、復元口径4cmのコップ形の器形をもつものと思われる。9は、成形痕が明瞭である、2.5~3cm幅の粘土帯を底部側から横

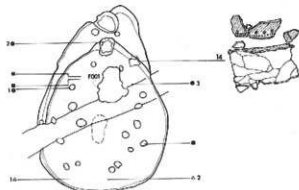


図65 M B 05壑穴出土遺物と覆土中の坩土の位置 遺物については、床面遺物と床面より10cm以内の覆土(床面直上)の遺物位置を示した。土器と石器(破・剥片は除く)は、図66・68の番号と一致する。(●床面土器、△床面直上の石器、■床面の破・剥片) 覆土中の坩土 F001は、床面からの高さ10cm、坩土の厚さ5cm、記号のない14は、埋土中から出土した土器で、出土状況の微細図を横に示している。

上げるもので、粘土帯合わせ目の器面が弱く隆起し、貼付帯状の効果を出している。9～13は、破片上下端が粘土帯合わせ目からの剥離を示すものである。全て同一個体かと思われる。10は、外表面の器壁が薄く剥落し、粘土帯著地が露出している。11の上方の接合面は平坦で、よくナデられており、口縁かと見間違ふほどである。14・15は、いずれもⅢ2c群土器である。14は、口縁がやや開き気味の筒形の器形をもつもので、口径26cmを計る。口縁部には2段にわたって、径約7mmの半截竹管による反時

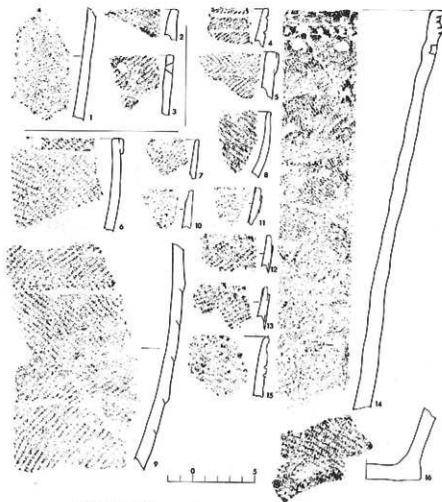


図66 MB05整穴出土土器の断片図 1～3は厚面出土土器、4～16は、断面から10cm以上の高さ位置した層土中出土。8・14については、図67に復元実測図を示した。



図67 MB05竪穴出土土器の実測図 1は、竪穴先端部分の登きお覆上より出土した、口縁部を竪穴内部に向け、床面に埋射した状態であった。出土状況の大幅は、図65の遺物分布図中に示した。土器は、全体の1/3を占めている。実測図中、裏面の点線による隅みは、断面による成形痕と器表面からの剥落によってできた突眼文を区別する。器表面については、一部を図66-14に拓本中示した。2は、床面から10cm以上の高さ位置した埋土中出土の小破片からの復元実測図。拓本図66-8。

計回りの内面押し引きが認められる。そのうち、下段の押し引きは、粘土ひもの貼り付けによって成形された隆起帯上に施されている。隆起帯下には、押し引き原体を刺突・回転させた円形刺突文が施されており、この施文によって内面に微弱な隆起が生じている。内面に関しては、指頭圧痕がほとんど成形時そのままに遺存している。口唇は平坦な面を持つ。15は、外面の器壁が剥落しており、外面の調整・施文は不明であるが、深く施された円形刺突文が一個認められる。内面には指頭による成形痕が明瞭に残る。16は、底部破片である。復元底形9cmを計る。

以上、縄文について特に記載がないものは、拓本中右下がりの縄文はR.I.横位、左下がりの縄文はL.R.横位である。

なお、竪穴基部付近で、床面との間に数cmの間層をはさんで小形のコップ形土器を検出した。土器は、器高10cm前後のⅢ2a群土器であったが、調査中の盗掘により粉砕したため、図はのせていない。

床面直上出土石器(図68-1・2) 1はスクレイパーである。横長削片の刃縁に、やや深めの調整を行なって刃部を作り出している。正面右側縁の刃部は、やや急な角度をなす。2は、小形の磨製石斧で、明瞭な側面を形成していない。刃部は、刃縁を欠いているが、弱凸強凸の刃部形態をもつことは間違いない。刃縁は、弱凸側から加えられた力によって欠損している。

埋土出土石器(68-3~6) 3・4は、スクレイパーである。3は、縦長削片の両側縁に加工が行なわれている。4は、原石面の残る縦長削片の両縁に調整を施し、急角度の刃部を作り出している。5は、磨製石斧の欠損品である。ほぼ側面中央で半割したように割れている。刃部は両凸と思われ、刃縁は直線をなしている。6は、断面三角形の擦り石で、断面三角形の柱状の礎の両端を打ち欠いて長さを整え、一つの液を擦り面として用いている。

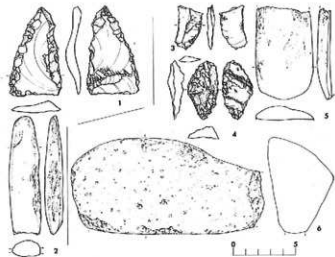


図68 MB06竪穴出土の打礫実例図 1・2は床面からの高さ10cm以内の覆土中、3-6は床面からの高さ10cm以上の覆土中から出土した。床面からの高さ10cm以上の覆土中には、他に石斧製品の破片が一点出土したが、X L25竪穴の覆土中出土のものと同接したため、図はX L25竪穴のものにのせてある。

尚、埋土中から石斧破片がもう一点出土しているが、X L25出土のものと同接したため、図および説明はX L25竪穴の遺物の項にのせている。

小括

炉址の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。石囲い炉は、第1炉から第2炉へ作りかえが行なわれており、竪穴の建て替え・建て増しを示唆する。竪穴先端部には、重複住居状の張り出しを検出したが、断面観察と、張り出しから竪穴にかけて落ち込んでいた土器の出土状況の検討の結果、これは竪穴と同時に併存していたもので、重複住居ではないと判断した。床面からはI 1群土器とIII 2 a群土器が出土しているが、竪穴の平面形と炉形態が、床面からIII 2 a群土器を出土した他の竪穴のそれと共通することから、本竪穴はIII 2 a群の時期に構築・利用されたと考える。

第10節 X J 40竪穴

竪穴の構造

E-12区をローム面まで掘り下げた段階で、褐色土の落ち込みを確認した。落ち込

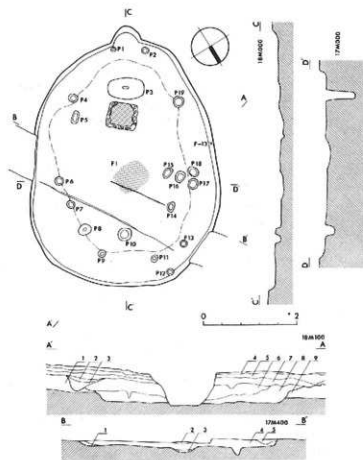


図69 X J 40 竪穴の平面図と断面図 竪穴の南北方向に道教委の試掘溝がかか
る。---で囲んだ部分は、特に深く掘りこまれた床面の範囲を示す。トーンで
つぶした F 1 は、床面上の焼土柱で、焼土の厚さは 6 cm、焼土下のロームは 3
cm が赤化している。A-A' : 1・9 箇・厚層、2 黒色土、3 茶褐色土、4 U・
-b 火山灰、5 目・層、6 ローム粒を含む茶褐色土、7 目・層、8 ローム粒と
ブロックを含む黄褐色土 B-B' : 1・5 黒色土、2 焼土、3 床面焼土柱 F 1、
4 ローム粒を含む茶褐色土

み内部には褐色土が混じって磁が多数分布していた。そこで、近接する発掘区もローム面まで掘り下げ、竪穴の全体を確認した。覆土中には遺物が多数混じり、全体に細かな炭片が含まれていた。また、竪穴を横断する道教委の試掘溝によって床面の炉址が破壊されていた。

調査の結果、本竪穴は、E-12・13、F-12の三区にまたがって所在するもので、

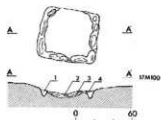


図70 XJ40竈穴伊址の平面図と断面図
A-A': 1・4 伊石の抜きとり痕に充填した木炭片と焼土まじりの褐色土、2 焼土、3 赤化したローム

平面形は丸みの強い卵形を呈し、先端が舌状にわずかに張り出すことがわかった。長さ5.5m、幅4.0mを計り、先端は南西に向いている。

床は、ロームを掘り込んで構築しており、平坦である。壁からおよそ60cm内側の竈穴平面形に沿って走る線の内部は、固くしまった床が広がっており、表面がウロコ状をなしていた。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19
深さ (cm)	18	16	2	37	6	21	4	8	9	12	13	11	21	7	6	7	62	7	43

竈穴内には、この固い床の周縁に並ぶように掘り込みが分布していた。個々の掘り込みの覆土や掘り肩の状況については、記載浅れのため不明である。

壁は、立ち上がり急で、著しい崩落はない。

周溝は、十分に精査を行なったが検出できなかった。

がは、竈穴長軸上の先端部寄りに1基、その接方に1基の計2基が検出された。先端部寄りのがは、60cm四方を浅く掘りくぼめるもので、周縁には右開きの煙の抜き取り跡と考えられる凹凸が巡っており、煙が1個残っていた。がの先端部寄りの側辺では、伊の抜き取り跡と思われる凹凸を検出できなかったが、この部分にもともと煙が配されていなかったかどうかは不明である。伊の前方には、浅い皿状の窪みがあり、この底面は固くしまっていた。この石圍がの後方に位置するがは、60cm四方を浅く掘り窪めたもので、周縁に煙の抜き取り跡は検出できなかった。焼土の厚さ6cm、赤化したロームの厚さ3cmを計る。なお、覆土中の竈穴右側壁中央付近と竈穴中央部で焼土を検出したが、焼土の厚さについては、記載浅れのため不明である。

竈穴先端部の舌状の張り出しについては、床面に達する掘り込みは検出できなかった。先端部に設けられる掘り込みは、本遺跡のどの竈穴においてもごく浅いものであるため、調査の不備によってこれを確認できなかった可能性も考えられる。なお、ローム面で竈穴平面を確認した時点で、張り出し部中央に柱状の煙の立石が存在した。立石は長さ20cmほどのものであったが、調査過程で見失ってしまった。張り出し部とどのような関係にあるのかは不明である。単に覆土中に混入した煙であったかもしれない。

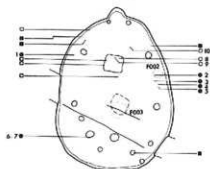


図71 XJ40彫穴出土遺物と覆土中の埋土の位置 遺物については、床面遺物と床面より10cm以内の覆土(床面直上)の遺物位置を示した。土器と石器(曜・剥片を除く)は、図72・73・75の番号と一致する。(●は床面上部、○は床面直上の土器、■床面の曜・剥片、○床面直上の曜・剥片) F002、F003は覆土中の埋土、床面からの高さは確認していない。

出土遺物

床面出土土器(図72—1~7) いずれも胴部破片である。1・2は、いずれも貼付帯を一条横位に巡らし、縄文施文後帯上に縄線文を施すものである。縄線文は、両者ともLR原体を用いて施文を行なっている。3は、貼付帯を持たずに直に縄線文が施されるもので、LR原体の縄線文を横位に二条巡らしている。4~7は、いずれも縄文のみのものである。6・7は同一個体に属するものであろう。

床面直上出土土器・土製品(図72—8~10) 8は、円盤状の土製品である。深鉢の胴部破片を用い、周縁を打ち欠いて整形を行なっている。9は、口縁に折り返しの凸帯を作り出すもので、凸帯下の器面は、施文後およそ5mmの幅でナデられている。口唇は、やや丸みを帯びている。10は、貼付帯上に縄線文が施されている。縄線文にはLR原体を用いている。

埋土出土土器(図73、11~31) 11~17は、いずれも貼付帯上に短刻線文を施すものである。12は、短刻線文状の刺突が口縁端部に施されるもので、意図的な短刻線文かどうかかわからない。16の貼付帯はごく薄弱なものである。18~23は、貼付帯上に縄線文を施すものである。18は、口縁端を折り返して幅の狭い隆帯を作り出し、その下にもさらに貼付帯を巡らすものである。縄線文には、いずれもLR原体を用いている。24~26は、貼り付けあるいは折り返しによる帯をもつものである。24は、口縁の外背する大形の深鉢破片で、口縁部に折り返しによる帯を一条、胴部に貼り付けによる隆帯を一条巡らせている。25は、底部破片で、貼り付けによる隆帯を一条巡らしている。施文前に隆帯の上下端をナデて帯を強調している。底部端は、施文後1cm幅でナデている。27~30は、小形土器、異形土器の破片である。27は、直口壺状の器形をもつ

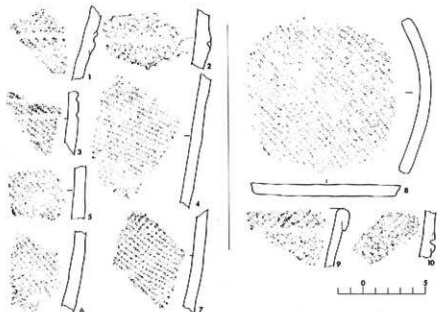


図72 XJ40発掘出土土器の拓本図 1～7は床面、8～10は床面直上からの出土。8は、大形の円盤状土製品で、土器片を加工したもので、

のであろう。直立部は無文で、胴へ移行するくびれ部には、先端の丸い棒状工具による浅い刺突が加えられている。28・29は、小形土器破片かと思われる。30は、くびれ部に隆帯を一帯巡らしており、その下方は無文である。口径は推定で9cm前後を計る。31は底部破片で、底部端を縮文後ナデている。

以上、縄文について特に説明がないものは、拓本中右下がりの縄文がR1横位、左下がりの縄文がL R横位である。

埋土出土石器(図75、1～4) 1・2はいずれも石鏃である。1は薄手の作りで、強く張り出した逆刺、蓋部をもつ。基部は基端を欠いているが、残りの部分には、ターレット状の黒色物質が薄く表面に付着している。2は、先端を欠くもので、逆刺から基部への境はそれほど明瞭でない。3・4は、スクレイパーである。3は、縦長剥片の正面右側縁を中心に、両面から深めの調整を行なって刃部を作出している。4は、正面左側縁に、粗く作り出された刃部をもつ。

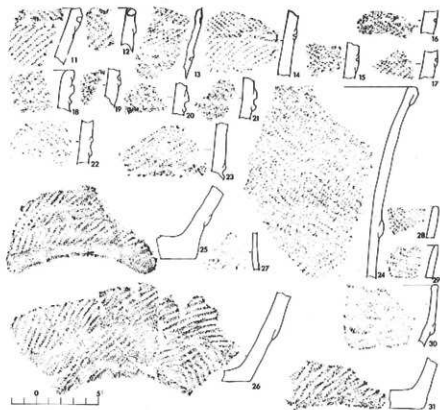


図73 X J 40竪穴出土土器の拓本図 すべて床面から10cm以上の高さに位置した覆土中の破片。30については、復元実測図を図74に示した。



図74 X J 40竪穴出土土器の復元図 覆土中より出土した土器で、拓本図73-30に示した破片を復元実測。縮尺1/6。



図75 X J 40竪穴出土の石器実測図 いずれも床面からの高さ10cm以上の覆土中から出土した。

小括

炉の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。床面からはⅢ2 a 群土器が出土しており、床面からⅢ2 a 群土器を出土した他の竪穴の平面形・炉形態との共通性から、本竪穴はⅢ2 a 群の時期に構築・利用されたものと考えられる。

第11節 KE12竪穴

竪穴の構造

G-15区をローム面まで掘り下げた段階で、南壁から広がる落ち込みを確認した。試掘を行ない、竪穴遺構であることを確認したうえで、隣接する各区もローム面まで掘り下げ、竪穴の全体の平面をとらえた。覆土中には遺物が多数混入しており、また、壁際に近く焼土(F007)が検出されたため、これを固化しつつ掘り進んだ。

調査の結果、本竪穴は、G-13・14・15区、H-13・14・15区の6区にまたがって所在するもので、基部がやや直線気味の卵形の平面形を呈することがわかった。先端部寄りの西側壁を試掘溝によって破壊されているが、長さ11.1m、幅7.0mを計る本遺跡最大の竪穴である。

床は、ロームを掘り込んで作り出しており、全体に平坦である。壁から80～120cm内側の竪穴平面に沿って巡る線の内側は、床が特に固く、表面がウロコ状をなしていた。基部側には、壁から1m前後の幅で、高さ6cm前後の低いベンチ状の段が設けられており、固い床の範囲は、基部側ではこの段の下地の線にはば対応していた。竪穴中央から後方にやや下がったところに、固い床のなかに一部やわらかいしまりのない床の分布を認めた。竪穴先端部付近から右側前方にかけて、厚さ1.0～1.5cmのロームの貼り床を認めた。

ビット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18
深さ (cm)	9	5	4	9	8	37	15	9	30	8	27	17	22	18	46	12	6	10
ビット番号	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P35	P36
深さ (cm)	20	13	9	18	39	26	6	44	5	10	46	8	10	43	21	32	15	12
ビット番号	P37	P38	P39	P40	P41	P42	P43	P44	P45	P46	P47	P48	P49	P50	P51	P52	P53	P54
深さ (cm)	55	17	23	18	21	24	5	19	5	6	10	61	13	67	73	25	23	7
ビット番号	P55	P56	P57	P58	P59	P60	P61	P62	P63	P64	P65	P66	P67	P68	P69			
深さ (cm)	8	14	22	56	32	30	11	22	22	8	24	22	13	39	25			

柱状の掘り込みは、固い床の周縁に沿って分布していた。このうち、内部にやわらかい黒色土が詰まり、底が平坦な面をなすものは、P24・26・29・34・37・48・50・51・53・57・68であった。P43・52については、木の根による擾乱痕、P7・8につ

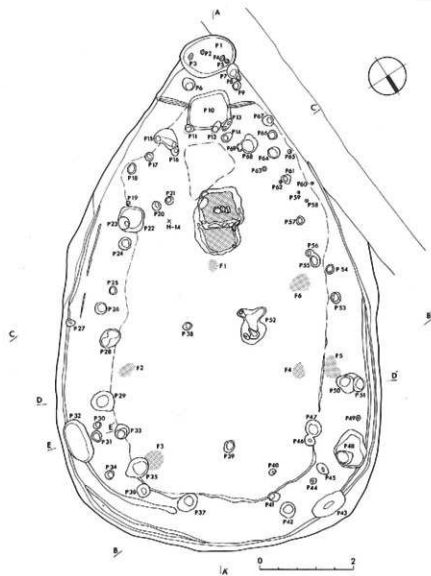


図76 KE 12整式の平面図 西側壁の一部が道教会の紙張溝にかかる。床面の状態のうち、固く踏みしめられた範囲を---で囲んだ。また、-----は、覆土中にみられたルームの貼りの範囲で、床上約10cmにあり、南北方向にわずかに傾斜する（図77の断面図参照）。貼りは、壁趾の直側の床面上にもわずかに認められたが、正確な範囲は記録できなかった。断面のみ図76に示した。P 10は、その上面がルームによる貼り床となっていた。P 11-13は、これを利用してつくられていた。P 10の東側にワインディング状にのびる溝にもルームの貼りがあった。トーンでつぶしたF 1-F 6は、床面上の盛土趾。F 3については、床面との間に1cmの黒色土が入る。

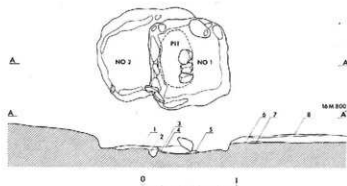


図18 KFE12竈穴炉址の平面図と断面図 炉址の構築順序はNo.2が先で、No.1が後。No.1炉址中央の3箇の礎は、No.1・2両炉址を切ってつくられたピットに俵うものであることが、断面によって観察できた。ただし、発掘の経緯でこれらのプランを確定にたえられなかった。推定される範囲を点線で示した。断面図には、伊井瀬製の床面上と焼土中のロームによる貼りも示した。層号説明の7と8がそれである。A-A' : 1焼土、2炭化層とロームまじりの黄褐色土、3・5赤化したローム、4木炭片と焼土まじりの黒色土、6黒曜石のチップを多量に含んだ黒色土、7・8ローム貼り床、土層説明のないものは、ピット中の礎を示す。

った。

炉は、竈穴長軸上の先端寄りに石囲炉を2基、そのすぐ後方と、圍い床の周縁に分布する地床炉を6基検出した。石囲炉の2基は切りあっており、竈穴先端寄りの1基を第1炉、その第1炉に切られて後方に位置する1基を第2炉と名付けた。第1炉は、90×80cm四方の掘り込みを行っており、周縁には礎の抜きとり跡と思われる凹凸を検出した。焼土は掻き出されており、底面が赤化していた。この第1炉中央には礎が3個並んでおり、当初、第2炉に伴う炉石と考えた。しかし、礎の傾きが、第2炉に伴うと考えた場合逆傾斜を示すものであるため、断面の観察を行なったところ、第1炉を切って掘り込まれた浅い掘り屑を検出し、礎はこの掘り屑に伴うものであることが判明した。第2炉は、推定で長さ100cm、幅90cmの長方形の掘り込みをもち、周縁には礎の抜き取り跡と思われる溝を検出した。炉内には焼土が堆積していたが、これは第1炉の炉石抜き取り跡の上面から広がっており、第2炉に本来的に伴った焼土ではない。地床炉はF1からF6の6基が確認されている。F1については、焼土の厚さは記載浅れのため不明である。F2は焼土の厚さ2cm、赤化したロームの厚さ2cmを計る。F3は、掘り穿めたローム底面と焼土との間に黒色土を1cmはさんでおり、P35に切られていた。焼土は厚さ4cmを計る。F6は、焼土、赤化したロームとも厚さ2cmを計る。F4、F5については、焼土厚は記載浅れのため不明である。F5はP50に切られていた。なお、石囲炉前方には、ロームの貼り床が、床面との間に黒曜石のチップを多量に含んだ層をはさんで広がっていた。これは、ローム床面上に直接ロ

ームを貼った後この上にチップを含む黒色土が被り、さらにその上面に再び貼り床を行なっているものである。

柱穴と考えられるもの以外の掘り込みとしては、まずP1がある。P1は先端部に検出した深さ9cmの浅い皿状の掘り込みである。P10は、P1の後方に検出した方形の掘り込みで、上面にはローームの貼り床が行なわれていた。P32は、壁際に掘り込まれた隅丸方形の平面形をもつ小竈穴で、覆土中から小形土器を検出した。その形や規模、位置は、TL12で検出した、壁際の4基の小竈穴に類似するものである。

なお、覆土中からは炭化した茅材、焼土を数個所で検出した。

出土遺物

床面出土土器(図80—1—17) 1・2は、貼付帯をもつものである。1は、口縁にかなりの厚めの粘土帯を巡らし、帯下端を境に卍状の縄文を施すものである。3～7・9・11—15は、いずれも縄文のみのものである。8は表面が剥落しており、施文は不明である。10・17は、それぞれ無文帯をもつもの、無文のものである。10は、下半にLR縦位の縄文を施し、その交点を強くナデて無文帯としている。17は、縄の先端の丘状文が施されている。16は、底部付近の破片で、下端は施文後ナアが加えられている。18は、黒縁に調整が認められることから、円盤形土製品の欠損品であろう。以上の土器のうち、1・7・15・17・18はLR縦位の、11はRL縦位の施文が行なわれている。

床面直上出土土器(図81—19—27) 19は、口縁端部に貼付帯をもつ深鉢で、器面にLR縦位の縄文施文後、その上から帯を貼り付けているものと思われる。帯上には、LR横位の縄文を施している。粗い成形から、Ⅲ2b群に含めてよいものと考えられる。20は、やや小形の深鉢である。口縁端部には、器面と明らかな段差をもつ帯を貼り付け、底部には、微少な隆起をもつ帯を2条巡らしている。その後、底部の帯から肩部にかけてLR縦位の縄文を施し、口縁端部と底部の帯上にLR横位の縄文を施してから、肩部に同一の縄文原体による丘状文を一条巡らせている。頸部は無文帯となっている。器厚は4mm前後と薄く、底面はわずかに凹面をなしている。内面に指頭圧痕を残し、凹凸をみせる器面の状態から、Ⅲ2b群に属するものと考えられる。21は、無文のI1群土器破片である。22・23は、貼付帯上に短刻線文をもつもので、24・25は、器面上に直接縄線文の施されるものである。24・25とも、縄線文原体はLR縄文である。26・27は、底部破片で、いずれも底部端を施文後にナデている。26は、LR縦位の施文である。

埋土出土土器・土製品(図81・82・83・84—28—103) 28—34は、いずれもI1群土器である。28・29は、口縁破片で、ともに外切する口唇をもつ。28は、口縁に3条の連続する刻線を施し、その下方に「ハ」の字状の沈線を加えている。29は、数条の沈線が横位に走り、その間に貝殻筋の押し引きが入るもので、内面にも貝殻筋が加

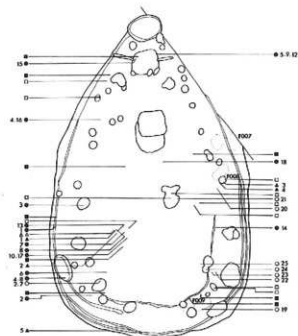


図79 KE1222穴出土遺物と覆土中の焼土の位置 遺物については、床面遺物と床面より10cm以内の覆土(床面直上)の遺物位置を示した。土器と石器(彫・刻片を除く)は、580・81・82・83・84・86の番号と一致する。(●床面直上、○床面直上の土器、▲床面直上の石器、△床面直上の石器、■床面の彫・刻片、○床面直上の彫・刻片) 覆土中の焼土の床面からの高さは、F 007が5cm、F 008が床直上、F 009が10cm。

えられている。28は、口唇に縦の刻み目が施されるが、29には認められない。30・31は、無文で、器面にはケズリあるいは粗いナデの痕が残る。32は、沈線の、33は、刻線文の施されるものである。34は、貝殻助条による押し引きを施したのち、破片上方に横位の沈線を一条施し、その下に刺突文を巡らせている。35・36・58は、Ⅲ1群土器である。35は、半蔵竹管内面による押し引きが器面と口唇に加えられている。36は、口縁の山形部を肥厚させ、そこから横・縦・斜めに半蔵竹管内面の押し引きを施すものである。35・36とも、内面に縄文が施されているが、35については器面の風化によって縄文が不鮮明なため、拓本は示していない。58は、器面上に隆帯を施し、その上に半蔵竹管内面の押し引きを加えている。37～57・59は、いずれも短刻線文をもつものである。このうち、37～40・42・46は、帯上に短刻線文の施されるもの、49～57・59は、器面上に直接短刻線文の施されるもの、41・48は、隆帯上と器面上両方に短刻線文の施されるもの、47は、隆帯をもつかどうか不明のものである。41は、隆帯上に

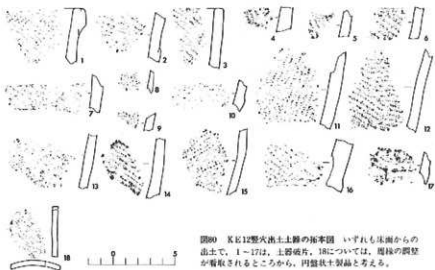


図80 Ⅴ区12型穴土器土器の拓本図 いずれも片面からの
 出土で、1～17は、土器破片、18については、器縁の調整
 が看取されるところから、円錐状土製縁と考える。

短刻線文を施し、さらにそこから斜め上方に伸びる2条の短刻線文を施している。43は、へら状工具による幅のせまい短刻線文をもつものである。47は、口縁端部に短刻線文が巡るが、その下方は器面が剥落しており、施文は不明。52は、短刻線の施された器面に強く隆起しているが、これは粘土帯接合によるものである。貼付帯状の効果を意図したのであろう。53は、へら状工具による短刻線文をもつものである。55は、「十」字に短刻線文を施し、さらにその右上に「V」字状に短刻線文を施している。56は、半蔵竹管内面による短刻線文をもつ。59は、底部付近の破片で、器面右側にへら状工具による短刻線文を縦に一条、左側に棒状の工具による短刻線文を縦に一条施しており、左側の短刻線文は上半が「Y」字状に二股（あるいは三股の可能性もある）に別れている。60～66は、いずれも貼付帯をもたず器面上に直接縄線文が施されるものである。60は、口縁端部から肩部にかけて4条の縄線文を巡らし、下方の2条の縄線文間を無文としている。拓本からは、上から2段目と3段目の縄線文の間にもう1条縄線文があるようにみえるが、これは器面の凹部である。64は、縄線文の上方を無文帯とし、66は、2条の縄線文間を無文帯としている。縄線文の原体は、60・61・63・64・66がL R、62・65がR Lである。67・76・80は、いずれも貼付帯のみの一群である。このうち、74・75は、Ⅲ2b群の土器である。74は、幅のせまい貼付帯を巡らせ、その後施文を行なっているが、縄文は浅く糸が揃わず、内面に指頭圧痕を残し、口唇は凹凸がありゆがんでいる。また、胎土には粗い細砂を含むが、砂粒は少なく、器面は全体にぶい光沢をみせる。75は、口縁端部に貼付帯をもつが、帯下縁は不揃いな波状を呈する。縄文は隆帯上と下方の器面とで羽状をなすが、全体に粗密があり、浅く、糸が揃わない。口唇は平坦な断面をもつが、凹凸やゆがみが認められる。内面

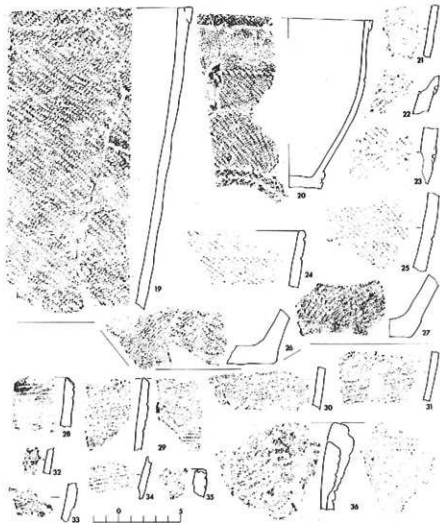


図81 K E 12型式出土土器の標本図 19-27は、深から10cm以内の産土中より出土した破片、28-36は、それ以上の産土中から出土、19・20については、大形破片の一面のみを縮率図にした。これらについては、図85-1・2に埋蔵実測図を示した。

には指頭圧痕を残し、胎土は砂粒が多い。80は、器面の風化が著しいが、R.L.横位の織文が施されている。77-79は、沈線文をもつもので、いずれも同一個体に属するものである。沈線による文様のモチーフは、左右逆の「6」の字を横にしたもので、沈線は浅く幅広である。81-84は、いずれも無文の土器である。82は、小形壺状の器形

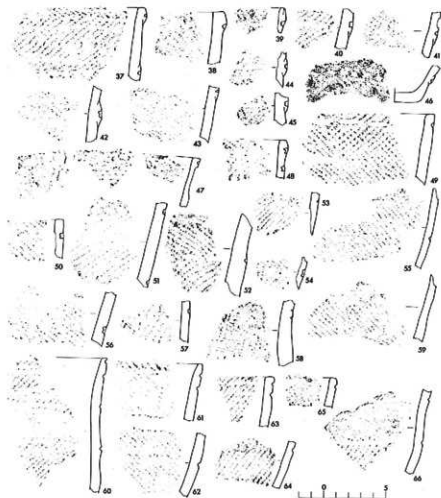


図2 K E12壺穴出土土器の拓本図 すべて床面から10cm以上の高さ位置した埴土中土器破片。

をもつ土器の口縁破片かと思われ、外面には、ベニガラが施されている。83は、丸みのある立ち上がりを示すもので、やはり小形壺状の器形のものであろう。84は、上端を打ち欠きによって調整し、二次的な口縁をつくりだしている。底径 3.8cm、口径6.5cmを計る。85～102は、いずれも縄文のみのものである。86は、縄文が横に走り、口径が丸く作り出されており、Ⅲ 2 a 群土器の中では異質な印象を与えるものだが、胎土・調整に関してはⅢ 2 a 群土器と大差ない。87は、口縁が直立気味に立ち上がるもの

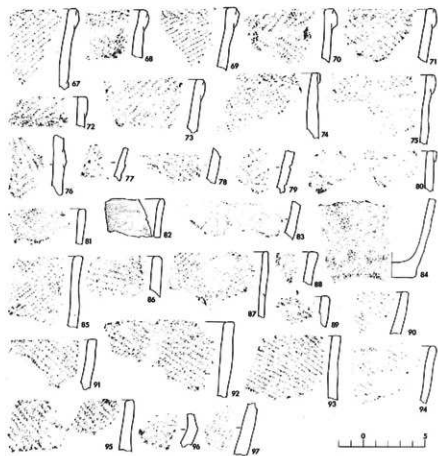


図83 K E 12型穴出土土器の断片群 81等のぞくすべてが、表面から10cm以上の高さに位置した埋土中土器破片。82は、彩色土器のための、これをスケッチで示した。84は、P 32の埋土中より出土した無文土器。1685-3に裏面図をのせた。

で、粘土帯接合面をナデ清していない外面、浅く不揃いな縄文、指頭圧痕を残す内面、砂粒の多い胎土から、Ⅲ 2 b群に含められる。94は、小形土器の破片で、復元口径は8 cmを計る。96は、「く」の字状に屈曲する断面をもつもので、くびれの上方は無文帯となっている。小形の壺形土器破片かもしれない。98-102は、底部破片で、いずれも底部端が施文後ナデられている。底面は、どれもていねいなナデあるいはミカキが行なわれている。103は、円盤形土製品で、周縁は一部磨滅している。中央には、外面からの未貫通の穿孔痕（あるいは使用痕）が認められる。以上埋土中の土器のうち、

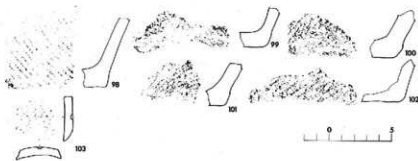


図84 K E 12 掘穴出土石器の拓本図 すべて床面から10cm以上の高さに位置した埋土中石器破片。98-102は、基部破片、103は石器片を加工した凹型状土製品。

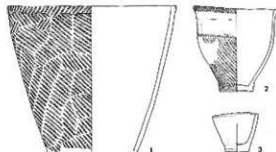


図85 K E 12 掘穴出土石器の複製図 1・2は床面面上の石器で、拓本図81-19・20に示した破片から複製された。3は、拓本図83-84に示した無文石器で、P32の埋土中より出土した。縮尺1/6。

39・67・69・70・71・77-79・86・90・92はL・R縦位の、42・75・76・85はR・L縦位の縄文が施されている。

床面から埋土中出土の遺物について、特に説明がない限り、拓本中右下がりの縄文はR・L横位、左下がりの縄文はL・R横位である。

床面出土石器（図86-1～5） 1・2は、いずれも基部の作り出しがある石錐である。1は、基部と錐身の一部が欠いており、逆刺が強く張り出すものである。3・4は、基部をもつ槍先で、基部と錐身が対称形に近い。5は、スクレイパーで、縁面に細面加工が行なわれている。

床面直上出土石器（図86-6） 小形の定角式磨製石斧の基部付近破片である。大きさからして、手斧であろうか。

埋土出土石器（図86-7～21） 7～11は、石錐である。いずれも基部をもち、逆刺が強く張り出す。9・10は、逆刺の一方が強く張り出している。12は、槍先の基部片

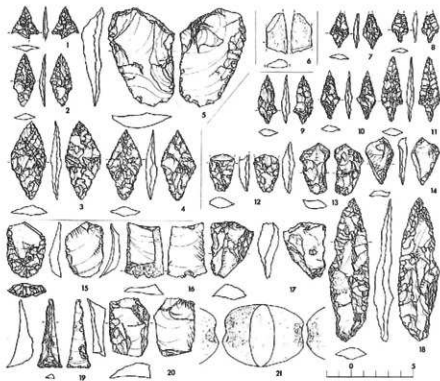


図86 K E 12 壑火出土の石器実測図 1～5は床頭、6は床面からの高さ10cm以下の覆土中、7～21は床面からの高さ10cm以上の覆土中からそれぞれ出土した。

であろう。13～16・18～20は、スクレイパーである。13は、両面加工で、a面左側縁に刃部を作り出している。14は、縦長削片の両側縁に、それぞれ片面からの調整によって急角度の刃部を作り出している。15は、厚みのある縦長削片を用い、上端を除く周縁に急角度の刃部を設けている。16・20は、いずれもa面に原右面を残し、左側縁に調整を加えている。17は、両面加工石器であるが、明瞭な刃部の作り出しが認められない。あるいは石核かもしれない。18は、両面加工で、a面右側縁に刃部をもつ。a面左側縁のはほぼ中央に固い石質の部分があり、階段状の剥離を加えているが、結局切り立った平坦面を残している。19は、正面に高い段をもつ縦長削片を素材に、正面左側縁と下縁に調整を加えて刃部を作り出している。21は、石錘で、長軸の両端に両面から剥離を加えて抉り設けている。

炉の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竈穴を居住遺構と判断する。石囲い炉は第2炉から第1炉に作りかえが行なわれており、周溝が部分的にはあるが3重に巡っていることから、本竈穴は少なくとも3回以上の建て替え・建て増しが行なわれた可能性が高い。その場合、竈穴先端の浅い掘り込みの後方に位置し、上面に貼り床が行なわれていたP10は、拡張以前の竈穴の先端部に設けられた浅い掘り込みであったかもしれない。また、炉の前方に、床との間に間層をはさんで広がっていた貼り床も、竈穴の建て替え・建て増しに関連するものであろう。竈穴床面からは、Ⅲ2 a 群土器およびⅢ2 a 群土器の破片を二次加工した土製品が出土しており、Ⅲ2 a 群土器を床面から出土した他の竈穴の平面形・炉形態との共通性から、本竈穴をⅢ2 a 群期の所産と考える。

第12節 R Z 25竈穴

竈穴の構造

K-9区、10区をローム面まで掘り下げた段階で、大形の黒色土の落ち込みを確認した。隣接するL-9区、10区についてもこれを掘り下げたところ、この落ち込みは、S P 38やK E 12といった大形の竈穴に並ぶ規模のものと同様と判明した。覆土中の遺物についても多量の出土を予想したが、前記2竈穴に比べて少量であった。

結果として、本竈穴は、L-9、10区、K-9・10区の4区にまたがり、卵形の平面形をもつものであった。長軸は、やや離れて並ぶS P 38竈穴と同様、南東-北西に向いており、長さ8.8m、幅6.2mを計る。竈穴基部は、個縁から連続する弧を描く。

床は、ロームを掘り込んで作り出しており、全体に平坦であった。竈穴基部部分は、幅35cm前後で掘り残し、床からの高さ10cmのベンチを作り出している。床は、壁およびベンチ下端から0.6~1.2m内側の線内が固くしまっており、また、炉の後方には、さらに固く表面がウロコ状をなす床が広がっていた。

ビット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	
深さ (cm)	14	10	29	40	18	21	18	5	18	30	7	30	5	45	15	43	19	12	
ビット番号	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P35	P36	P39
深さ (cm)	3	27	18	23	23	15	32	16	9	10	46	16	13	10	32	35	15	56	
ビット番号	P37	P38	P39	P40	P41														
深さ (cm)	23	7	34	15	8														

柱穴状の掘り込みは、この固い床の周縁に、基部付近ではベンチ下端に分布している。個々の掘り込みの覆土等については、記載洩れのため不明である。

壁は、竈穴先端付近を除いて、全体に垂直に近い立ち上がりを示し、著しい崩落は

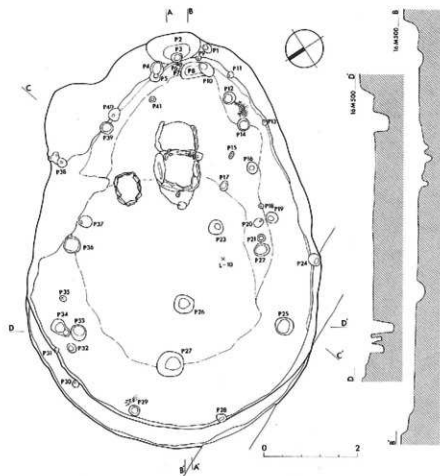


図87 RZ25竪穴の平面図と断面図 床面の状態を破線で示した。——は床と壁の区分の不明瞭な部分を示し。---で掘んだ範囲は固く踏みしまった床を示す。---で掘んだ範囲は、固い床のなかでも特に深い床を示している。P24の東西にあるのは壁下の尾溝で、深さは50cm前後。P14とP12の間およびP29のそばに図示したのは、床面直上から出土した炭化材である。

なかった。竪穴先端付近は、壁の上方がわずかに崩落し、また、左側縁は、木の根による攪乱を受けて平面がたわみをみせ、底面がやわらかく凹凸をなしていた。

周溝は、竪穴右側縁の中央壁際を巡っていた。他の部分についても精査を心がけたが、検出できなかった。

炉は、竪穴長軸の先端寄りに、互いに切りあう3基と、長軸からややずれて位置す

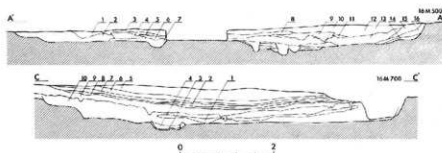


図08 RZ25鑿穴の断面図 断面図の測点(A-A', C-C')は、図07の平面図中にある。A-A': 1枯炭のある黒色土, 2ロームブロック・炭化物を含む茶褐色土, 3・4・5・8・14黒色土, 6ローム粒を含む茶褐色土, クロムアロックスを含む黄褐色土, 10ローム粒・灰土を含む黒色土, 11ロームブロック, 12ローム粒・炭化物を含む茶褐色土, 13細かいローム粒を含む黄褐色土, 15ローム粒を含む黒褐色土, 16ローム粒を含む黄褐色土。C-C': 1 Kローム火山灰, 2ローム粒を含む黒色土, 3・4伊弉諾洞参照, 5灰土, 6 Uローム火山灰, 7 1層, 8 日〇層, 9 日〇層, 10ローム粒を含む黒褐色土。

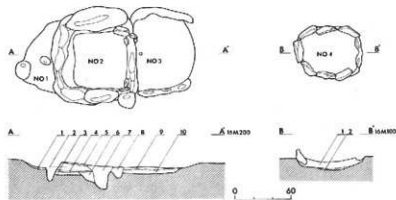


図09 RZ25鑿穴の平面図と断面図 参照するNo.1-3伊弉の積層順序は、No.2伊が最も新しく、No.1とNo.3の先後関係は不明。断面図A-A': 1No.1伊弉底面の赤化したローム, 2No.2伊弉の地土, 3No.2伊弉底面の赤化したローム, 4木炭まじりの黒色土, 5砂, 6伊弉を切ったピットの埋土で、茶褐色土。ただしプランは確認できなかった。クロムアロックスまじりの黒色土で、6同様伊弉を切ったピットの埋土であるが、プランは不明。8黒色土, 9地土, 10No.3伊弉底面の赤化したローム B-B': 1地土, 2底面の赤化したローム, 記載のないものは伊石を蓋わす。

る1基の、計4基を確認した。長軸上の3基は、基部寄りのものから順に第1伊、第2伊、第3伊と名付けた。第1伊、第3伊を切って構築された、3基のなかで最も新しい伊である第2伊は、95×90cmの略方形の浅い掘り込みをもつもので、周縁には石圍いの抜きとりあとと思われる凹凸と、隅を数個検出した。第3伊は、第2伊に堅穴

基部寄りの側辺を切られているもので、長辺90cm、短辺は推定で65cmを計る長方形の掘り込みを行なっている。周縁には、石圍いの礎の抜きとりあとと思われる凹凸を検出した。なお、先端寄りの側辺には、抜き取り跡と思われる凹凸を検出できなかった。第1炉は、竪穴基部寄りに舌状の浅い掘り込みを行なうものである。竪穴先端寄りの部分は第2炉に切られて形状が不明だが、第2炉中の焼土の下方に、黒色土をはさんで第1炉のものと思われる赤化したロームが広がっていた。第1炉と第3炉の前後関係は不明である。第4炉は、長さ70cm、幅50cmの隅丸方形に近い平面形をもつ石圍炉である。礎は、竪穴先端寄りの部分が抜きとられており、抜きとりあとの凹凸が深っていた。

柱穴と考えられるもの以外の掘り込みとしては、まずP2がある。先端部に設けられた浅い掘り込みである。P8は、上面にロームの貼り床が行なわれており、先端部に設けられたP2同様、浅い皿状の掘り込みであった。P27は、底面が赤化しており焼土のかき出された地床であったかもしれない。

なお、床面直上の覆土中に、炭化した茅材の分布を2ヶ所確認したので、図87中に示した。

出土遺物

床面出土土製品（図90-1） 第3炉址の焼土中から検出した径3.4cmの土玉である。胎土には砂粒をほとんど含んでいない。

床面直上出土遺物（図90-21） 口縁が、わずかに内反気味の深鉢の胴部破片である。器内外面に、指頭圧痕や粘土帯合わせ目の凹凸が残り、仕上げの調整が粗雑である。また、胎土に砂粒を多く含むことから、Ⅲ2b群に含まれるものであろう。外面には、L・R縦位の縄文が、4cm幅で縦に走っている。口径は25cm前後であろう。

埋土出土土器（図90-2-20・22-25） 2・3は、I1群土器である。2は、貝殻条痕文を横位に施したのち、口縁端部に刻みを加えている。3も、貝殻条痕文を施したのち、貝殻腹縁の圧痕文を加え、口唇に刻みを施している。4は、口縁部に、貼付帯をもたずに短刻線文が施されるものである。5-7は、貼付帯のみをもつもの、8-13は、縄文のみのものである。10は、L・R縦位、11は、R・Lを縦位と横位に使い分けて羽状に縄文を施している。14-20は、いずれも同一個体に属するものであるが、接合しない。この一連の土器は、胎土が特徴的で、砂粒をほとんど含まず、焼成が真好で固くしまっている。口縁は不揃いで、一片一片器厚や施文の差じがわずかつづ異なる。とは言い、一破片のなかでも、部分によって帯状の肥厚帯が認められたり、認められなかったりするので、もともとかなり粗雑に成形・施文されたことがわかる。このうち、14・15は、口縁端部が肥厚し、口唇に縄文が施されるものである。14-16とも、施文後器面の一部を強くナデ消しているが、意図的に無文帯を作り出そうとしたものとは思えない。口唇が内切するのは、全破片に共通する特徴であった。以上の

特徴から、14~20は、Ⅲ2b群に属するものと考え。22~24は、小形土器の破片と思われる無文の土器である。24は、復元口径5.5cmを計る。25は、底部破片で、右下がりの縄文が認められるが、摺りは不明である。

以上、縄文について特に記載が無い場合、拓本中右下がりの縄文はRL横位、左下がりの縄文はLR横位である。

床面出土土器（図92-1） スクレイパーである。正面は、全面を覆う深い調整が加えられているが、背面は、一次剝離面を残し縁辺に浅い調整が施されている。長軸断

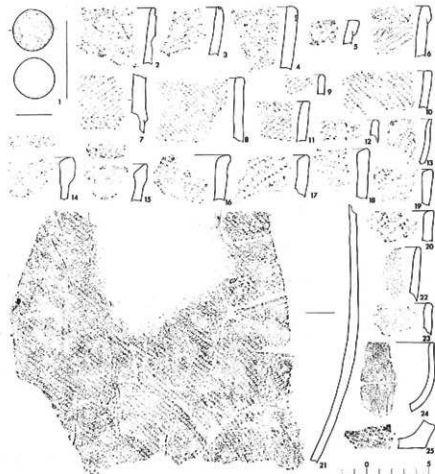


図90 RZ252出土土器の拓本図と土製品の実測図 1はNo2伊佐の地中から出土したボール状の土製品、2~25は覆土中出土の土器。21・24については、復元実測図を図91に準じた。

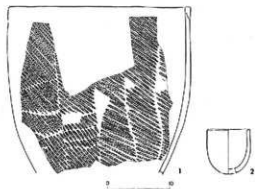


図91 R Z 25号穴出土石器の実測図 1・2とも掘り出し出土石器で、それぞれ拓本図90-21・24に示した破片を復元実測した。2は無文石器。縮尺1/6。

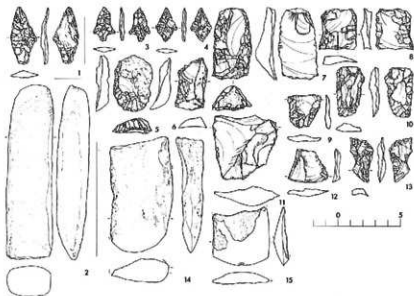


図92 R Z 25号穴出土の石器実測図 1は床面、2は床面からの高さ10cm以内の覆土中、3-15は床面からの高さ10cm以上の覆土中からそれぞれ出土した。

面は湾曲を見せ、短軸断面は緩やかな山形をなしている。
 床面直上出土石礫(図92-2) 石礫未製品である。側面が幅広の柱状の斧身をもつもので、簡単な剥離整形後、丹念に敲打を行なっている。左側面と、刃部・基部の一部に研磨を行なっているが、右側面は、原材から一時に剥離されたままの面で、研磨

は加えられていない。刃部は、完成していないが、弱凸強凸気味である。埋土出土石器（図92-3-15） 3・4は石旗で、いずれも茎部の作り出しが行われている。1は、逆刺が強く張り出すもので、鎌身の形状は五角形に近い。7-13は、スクレイパーである。5-7は、いずれも正面に原石面を残す厚手の縦長剥片を用い、上端を除く周縁に急角度の刃部を作り出している。8・12はa面右側縁に、11は左側縁に、それぞれ刃部を設けている。9は、上端を除く周縁に刃部をもつ。10・13は、両面加工が行なわれており、10は上端を除く周縁に、13はa面右側縁に、それぞれ刃部をもつ。14・15は、石斧の欠損品である。14は、全面を覆う剥離によって、器厚を平均化したのち、側縁に浅い階段状の剥離を加えて形を整えている。研磨は刃部のみに施されており、側縁・斧身には及ばない。刃部は両凸で、刃縁は直線をなす。15は、刃部の破片で、研磨がよく行き届いている。刃部は両凸と思われ、刃縁は緩やかな「へ」の字状を呈する。

小括

炉の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。石囲炉は4基検出され、第1炉・第3炉のあとに第2炉の構築が行なわれたことが判明した。第1炉と第3炉の前後関係は不明である。第4炉はこれら炉址と離れて位置しているため、前後関係は確認できなかった。ただ、石囲いの礎の残りがよいことから、第3炉のあとに設けられた炉である可能性が高い。竪穴と直接関係する遺物は、第3炉の焼土中から検出した土玉だけであるが、床面からⅢ2a群土器を出土した他の竪穴の平面形・炉形態との共通性から、本竪穴はⅢ2a群の時代に構築・利用されたものと考えられる。

第13節 S P 38竪穴

竪穴の構造

M-8、N-8区をローム面まで掘り下げた段階で、黒褐色土の落ち込みを確認した。このため、隣接する各区についてもローム面まで掘り下げ、竪穴全体の確認を急いだ。竪穴は大きな規模をもつもので、覆土中にはほぼ完形の土器を含む大量の遺物が混入していた。これらを図化した。覆土を掘り進める一方、竪穴先端にかかる落ち込みについても、これをP011と名付け、平行して調査を行なった。

結果として、本竪穴は、M-8・9区、N-8・9区の四区にまたがって所在する大形の竪穴で、やや長細い卵形の平面形をもつことがわかった。先端は南東を向いており、近接するR Z 25、W I 65、M B 05と同方向の長軸をもつ。長さ8.9m、幅5.7m

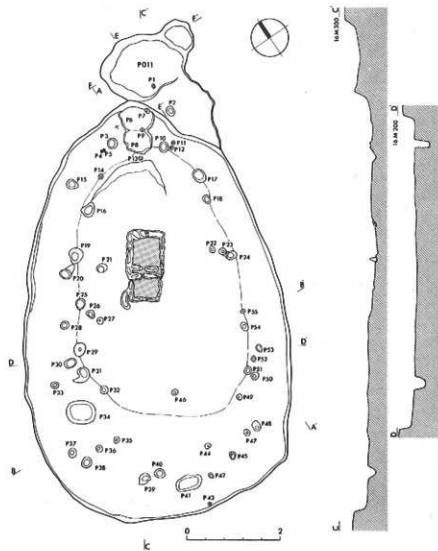


図30 S P 38整穴およびP 011整穴の平面図 一で囲んだ範囲は、固く踏みしまった床面を示す。P13・14の南側に図示したのは、床面の亀裂。床面上のビットの深さは、本文中に表で示した。

を計る。

床は、ロームを掘り込んで作り出しており、全体に平坦である。整穴先端部から1.4 m前後内側に、落差7 cmほどの段が巡っており、その下場から石両伊の周縁にかけて

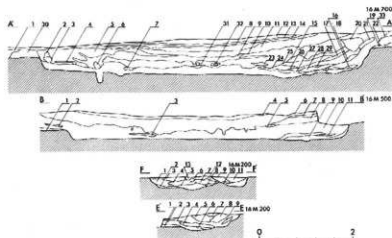


図94 S P36、P 011壁穴の平面図と断面図 A-A': 1面層, 2・6・7・16・17・18・21・23・24・28・31・32ロームブロック, 3・20黒色土, 4 幾上, 5 わずかにローム含む黒褐色土, 8 Kord火山灰, 9 ローム粒を含む褐色土, 10 多量のローム粒を含む褐色土, 11 H層, 12 U層, 13 I層, 14 H層, 15 大きなローム粒を含む褐色土, 19 N層, 22・27黒褐色土, 25・29 わずかにローム粒を含む褐色土, 29 明るい褐色土, 30 W層, 33 褐色土 B-B': 1・2 ローム粒をわずかに含む黒色土, 3・5・11 ロームブロック, 4 Kord火山灰, 6 H層, 11 H層, 7・8 黒褐色土, 9 ロームブロックを含む褐色土, 10 ロームブロックを含む黄褐色土 P011壁穴断面図 F-F': 1・4 ロームブロック, 2・5 褐色土, 3 幾上粒を含む褐色土, 6・8 黒色土, 7 褐色土, 9 黒褐色土 F-F': 1・7 黒褐色土, 2・10・11・13 黒色土, 3 褐色土, 4・8 ロームブロック, 5 ローム粒を含む褐色土, 6 黄褐色土, 9 ローム粒をわずかに含む褐色土, 12 ローム粒を多量に含む褐色土。以上、断面図の拠点は、1693の平面図中にある。

の部分は、床が固くしまつて表面がウロコ状をなしていた。

ピット番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18	
深さ (cm)	10	12	14	29	32	7	5	5	6	18	18	19	6	9	12	10	32	5	
ピット番号	P 19	P 20	P 21	P 22	P 23	P 24	P 25	P 26	P 27	P 28	P 29	P 30	P 31	P 32	P 33	P 34	P 35	P 36	
深さ (cm)	18	30	7	9	4	14	11	11	12	4	12	25	17	8	10	14	6	6	
ピット番号	P 37	P 38	P 39	P 40	P 41	P 42	P 43	P 44	P 45	P 46	P 47	P 48	P 49	P 50	P 51	P 52	P 53	P 54	P 55
深さ (cm)	5	8	18	15	11	7	4	6	8	10	9	31	4	29	12	7	29	7	10

柱状の掘り屑は、壁から80-120cmほど内側の線上に集中して分布していた。このうち、覆土がやわらかい黒色土で、底が平坦な面をなすものは、P 3・10・16・20・21・24・27・30・32・36・48・53であった。P 16、P 21については、掘り込みの壁、底面が固くしまつていた。

周溝は、壁穴左側壁に沿って部分的に巡っていた。深さ5cmと浅い。本来は壁際に沿って長く巡っていたのかもしれない。

炉は、壁穴長軸上のやや先端寄りで見出された。最初に、石囲いの礎をわずかに残す

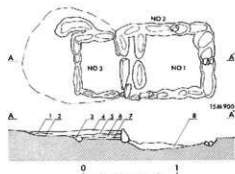


図96 SP38竪穴炉址の平面図と断面図 平面図中、三点破線は掘り出しの範囲を示す。断面図：1・2・4ロームの貼り床、3ロームを含む黒色土、5・7・8黄土、6炭を含む褐色土

第2炉を確認した。第2炉は、100×80cmの長方形の掘り込みを行なうものである。周縁には石囲いの礎の抜きとりあとと考えられる凹凸が巡っており、礎が数個遺存していた。この第2炉の焼土を取り除くと、第2炉の竪穴基部寄りの側辺から20cmほど先端部寄りに、その側辺と平行する浅い溝状の落ち込みを検出した。この落ち込みは、石囲いの礎の抜き取り跡と思われたので、これを第2炉とは別個な炉の掘り込みとして第1炉と名付けた。最初に確認した第2炉は、おそらくこの第1炉の3辺をそのまま利用して拡張を行なったものであろうと考えたが、その場合、この第1炉は、もともとは80×80cmの方形の平面形をもつ石囲炉と推定できた。この2基の炉の調査が済んだ段階で、第2炉後方にロームの貼り床が広がっているのを確認したため、これを削いでいったところ、貼り床下の旧床面に「コ」の字形をなす黒色土の詰まった溝を検出した。溝の内側には焼土が広がっており、また、溝の底面が凹凸をなして礎の抜きとり跡と考えられたので、これを石囲炉と判断して第3炉と名付けた。第3炉は、先端部寄りの部分が第2炉によって切られており、竪穴基部寄りの側辺は70cmを計る。この第3炉の焼土上にはまず褐色土が、次いで焼土が重なり、さらにその上に、竪穴基部寄りの部分では二枚に分層可能なロームの貼り床が行なわれていた。この貼り床は、第2炉の周辺に広がっており、第2炉構築前あるいは構築とほぼ同時に貼られたことが推定できたので、第3炉の焼土と、第2炉構築に先立つローム貼り床の間に介在する焼土については、第1炉の焼土が掻き出されて堆積したものと考えた。それゆえ、炉の改築順序は、第3炉から第1炉、続いて第2炉へとたどれるものである。

柱穴と思われる掘り肩以外の掘り込みとしては、先端部に設けられたP6、P8がある。P6、P8は一続きになっており、前後関係は不明である。いずれも5cmから7cmの浅い皿状を呈する。

なお、覆土中には、3箇所焼土の分布が認められた(F001, F002, F003)。

P011小竪穴について

P011小竪穴は、S P38竪穴の先端に近く掘り込まれており、浅い木の根の擾乱がかかっているため平面形は不明瞭だが、不整な楕円形を呈するものと推定する。底面はしまりがなく、壁の立ちあがりは緩やかであった。S P38竪穴との前後関係は不明である。なお、底面からは、完形土器1個と、土器破片数点を検出した。

出土遺物

床面出土土器（図97-1） 器高29.5cm、復元口径・底径それぞれ27.5cm、6.5cmを計る深鉢である。編文は条がよく通り、深く施されており、Ⅲ2 a 群土器として分類できる。口唇は平坦な面をなす。

床面直上出土土器（図97-98-2~13） 2は、頸部がわずかにくびれて口縁がゆる

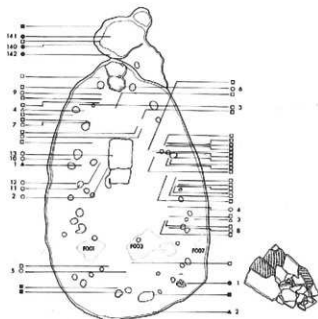


図96 S P38竪穴出土遺物と覆土中の検土の位置 遺物については、床面遺物と床面より10cm以内の覆土（床面直上）の遺物位置を示した。土器と石器（破片を除く）は、図97-105, 107, 108の番号と一致する。（●床面土器、○床面直上の土器、▲床面石器、△床面直上の石器、■床面の破片・割片、□床面直上の破片・割片） 覆土中検土の床面からの高さは、F 001が10cm、F 002が20cm、F 003が18cm。



図97 SP38整穴出土土器の拓本図 1は横面、2・3は断面直上から出土した。1の出土状況については、図99に示した。ほぼ復元できる深鉢形土器であったが、胴部が一部が焼失し、全体の1/3しか残っていない。胴部には、頸部の一部を口縁から底部まで帯状に示した。図106-3に復元実測図を示した。2は、大形破片の一部を、1と同様に帯状に示した。復元実測図は、図109-1にある。

やかに外背する深鉢である。復元口径は26cmを計る。肩部から上半と下半にかけて、縄文を羽状に施している。口唇は平坦な面をもつ。3は、口縁端部に帯を巡らすもので、9cmの間隔をおいてボタン状の粘土の貼り付けを行なっている。頸部を境に羽状に縄文を施したのち、帯上に短刻線文を、ボタン状貼り付けに円形刺突文をそれぞれ施している。4・5・6は、貼付帯上に短刻線文をもつものである。5の隆帯については、粘土帯合わせ目の肥厚を利用したものかもしれない。6は、貼付帯上方の器面をナデて無文帯としている。8は、貼付帯のみのものである。器面にR.L.横位の縄文を施した後、帯上にR.L.横位の縄文を施している。7・10・13は、器面上に直接縄線文

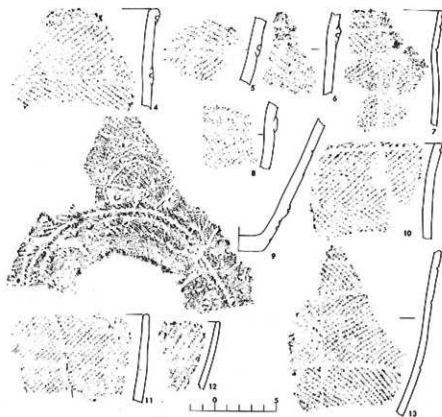


図98 SP38窟出土土器の標本図 すべて床面より10cm以内の埋土中より出土した。9は沈線文・短刻線文と縄線文のある土器で、実測図を図106-5に示した。

の施されるものである。7は、上から順にLR、LR、RL原体による縄線文を施すもので、最下段の縄線文と2段目の縄線文を境に羽状に縄文を施している。10は、頭部を境に羽状に縄文を施し、口縁端にRL原体の縄線文を施している。13は、上から順にRL、LR、RL原体による縄線文を施し、2段・3段目の縄線文を境に羽状に縄文を施している。9は、沈線文をもつものである。底部付近に粘土帯を貼り付け、RL原体による縄線文を施したのち、帯上方の器面に沈線と短刻線文、帯下方の器面に短刻線文を施している。沈線は、半篋竹管の内・外両面を用いて施文しており、部分的に不規則な重弧文状のモチーフが認められる。底径は4cmを計る。11・12は、縄文のみの破片である。12は、小形土器の破片で、口径は8cm前後と思われる。埋土出土土器(図99・100・101・102・103・104-14-139) 14-27は、I1群土器であ

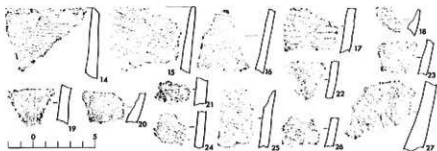


図99 SP30壺火出土土器の碎断面 いずれも、断面から10cm以上の覆土中に位置した土層、すべて早期の貝殻文土層である。

る。14は口縁破片で、外面には貝殻条状が横位に走る。口唇は外切する。17、27とも、貝殻条状文をそれぞれ横位・縦位に施すものである。23は、内面に貝殻条状が走る。16は、貝殻腹縁の圧痕文が縦に施されている。他のものは、いずれもナデ、粗いナデによる調整が行われている。28-56・127は、短刻線文をもつ破片である。28は、口縁端に帯を巡らしたのち、R.L.原体を横位と縦位に使い分けて縦に羽状になる縄文を施し、帯上に短刻線文を加えている。29は、口縁端を巡る隆帯を一条と、そこから垂下する隆帯を一条貼り付け、帯上に短刻線文を施している。帯が交差する部分は高く隆起している。31は、貼付帯とそれに平行して器面上に直接短刻線文を施すものである。32は、器面の施文が、粘土帯貼り付け前に行なわれたと思われる珍しい例である。33は、口縁端部が薄く成形されたため、帯が貼り付けられても器面との比高が変わらないものである。34は、口縁端に一条と、そこから斜め右下に垂れる一条の粘土帯を貼り付け、それぞれの帯上に短刻線文を施している。35は、2条の貼付帯を巡らし、短刻線文を加えているが、下段の隆帯は粘土帯合わせ目の肥厚を利用しているかもしれない。36は、やや小形の土器で、口径は14cm前後であろう。37は、胴の張る深鉢で、口縁端、肩部および頸部に横位に貼付帯を巡らし、さらに肩部の帯から「し」の字状に垂れる貼り付けを施しており、それぞれの帯上には短刻線文を巡らせている。44は、底部で、底部端に粘土ひもを巡らせて形を整えている。45は、口縁がゆるやかに外背する深鉢である。胴中央から底部にかけて、5条の横位の短刻線文を施している。46は、口縁端に帯をもち、その下方の器面に短刻線文を施すものである。短刻線文は、横位に一条と、そこから垂下する一条のモチーフを見せる。帯は折り返しによるものであろう。50は、半戴竹管内面による短刻線文が施されている。52・54・56は、貼付帯か粘土帯合わせ目の隆起が愕然としない器面の凸部に、短刻線文を巡らすものである。55は、縦に一条とそこから斜め下方に走る半戴竹管内面の短刻線文を施している。以上述べてきた短刻線文をもつ28-56のうち、不明としたもの以外、28-44が帯上に短刻線文を施すもの、45-56が器面上に直接短刻線文を施すものである。57-

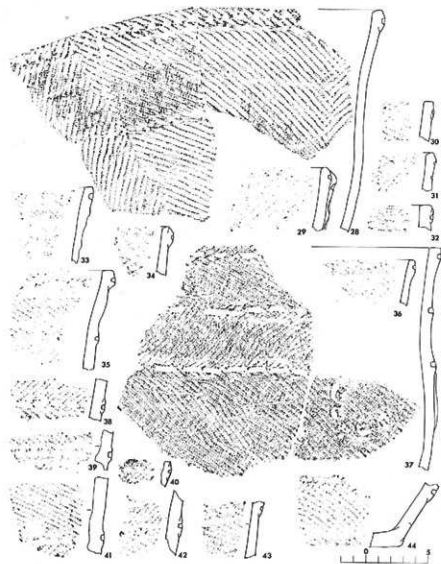


図100 SP30掘穴出土器の拓本図 すべて、床面から10cm以上の覆土中に位置した土器。37は、胴部に短斜線による曲線文様のみられるもので、覆光実測図を、図106-4に示した。



図101 S 1738型穴山土器の部本圖 すべて崖面から10cm以上の覆土中に位置した土器。45は、ほぼ完全な土器で（1/3を欠損）、部本には器面の一部を口縁から奥部まで巻取に示した。図106-2に実測図を付した。



図102 S P38懸穴出土土器の標本図 すべて表面から10cm以上の覆土中に位置した土器。

79は、いずれも縦織文の施されるものである。縦織文の原体は、57・58・62・64・65・66・67・69・70・71・72・75・76・77・79がR L、63・73・74・78がL R、59は上から順にL R、R L、L R、60はR L、L R、61はL R、R L、68はL R、R Lである。80~94は、貼り付け、あるいは折り返しによる帯をもつものである。80は、意図的な貼付帯というより、口縁の不揃いな部分に粘土を足したあとのように思える。85は、帯が口縁端からやや下方に貼り付けられている。86は、帯が2度にわたる貼り付けによって成形されており、器面と強い段差をもつ。胎土・成形の状況から、III 2 b



図103 SP38壺穴出土土器の標本図 すべて灰面より10cm以上の覆土中に位置した土器。113については、図示した口縁部の破片以外に、胴部・底部の破片が10数点あるが、適合しない。

群に属するものである。90は、底部付近の破片である。94の帯は、貼り付けられたものでなく、粘土帯合わせ目の隆起を利用したものかもしれない。なお、81・89・92は、器面にR L縦位、帯上にR L横位、84・86は、器面にL R縦位、帯上にL R横位の縄文が施されている。95～112は、縄文のみのものである。101は、L R Lの復節縄文が施されており、III 2 b群に属する。103は、調整や成形が、一般的なIII 2 a群土器にくら

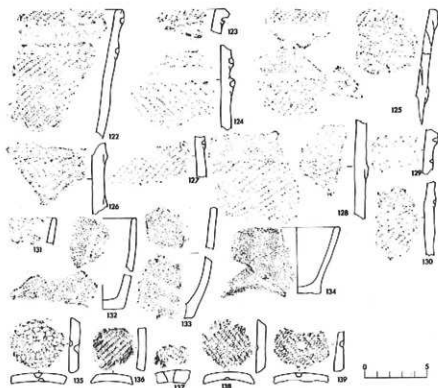


図104 SP38燬火出土土器の破本図 すべて床面より10cm以上の覆土中に位置した。135-139は、土器片を造した凹型土製品。134は、無文の小形土器で、図106-6に実測図を示した。

べて粗い。105は、口径10cm前後の小形土器破片である。107は、破片中央をさきかに左半分にL R横位、右半分にL R縦位の縄文を施している。110は、小形土器の破片で、R L縦位の縄文が施されている。111も、口径10cm前後の小形土器である。113・114・116・119・121は、それぞれⅢ 2も群土器である。113は、やや小形の深鉢で、口縁が若干内ぞり気味に立ち上がる。胎土は砂粒が多く、器内外面には凹凸が目立つ。縄文は、口縁付近にL R横位、それより下方にL R縦位が施されており、口唇にも及んでいる。114も、口縁がわずかに内反気味に立ち上がる器形をもつ深鉢である。胎土は砂粒が多く、器内面には成形時の凹凸が残る。補修孔が1ヶ所認められる。縄文はR L横位で、口唇にも及んでいる。116は、薄手の器壁をもつコップ形の小形土器で、器面は凹凸が著しく、胎土には砂粒を含む。縄文はR L縦位であろうか。器上縁の割れ口近くに2ヶ所の焼成前のO Iの剥突があり、一方は貫通している。底部は、粘土円盤を粗く貼り付けて成形しているものと思われ、指頭圧痕が多く残る。119・121は底部で、どち

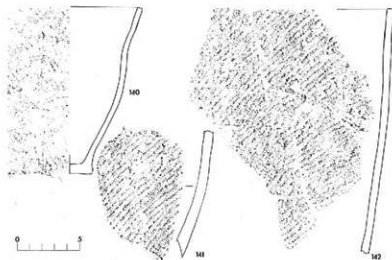


図105 P011 壺穴出土土器の标本図 3点とも庫面からの出土。140は、111に完全に近い浮鉢で、図106-7に裏面図を示した。

らも立ち上がりの角度が弱い点が特徴的である。119は、胎土に砂粒を多く含み、L R Lの復輪縄文が施されている。120も、胎土に砂粒を多く含むもので、底面は、Ⅲ2 a群土器では一般にいていねいなナデが施され平滑な面を見せるが、本例では、成形時そのままの凹凸のある粗い素面である。底部端を強くナデ、さらに指頭による成形を行っているため、底部端にはくびれがつく。縄文はL R横位かと思うが、器面が歪れているので判然としない。115・117・118・120は、Ⅲ2 a群の底部である。いずれも底面が、ナデあるいはミガキによって平滑化され、にぶい光沢を見せる。115は、底部端が施文後ナデられている。Ⅲ2 a群土器では、底部端を施文後ナデるのは多くの例に認めるところで、底部端にケズリ、指頭成形を行なうⅢ2 b群土器の底部と区別される。122・126・128・130は、いずれも貼付帯によって区画される無文帯をもつ例である。このうち、122・123・124・129・130は、貼付帯上に短刻線文をもつものである。124は、およそ2cmの間隔をおいて2条の帯を巡らし、縄文を施文したのち、両帯間をつよくナデて無文帯としている。短刻線文が一番最後に施される。125の口縁端の帯は、折り返しによるものであろう。126は、破片の器面の左半分はL R縦位、右半分はR L縦位の縄文を施して羽状とし、2条巡る帯のうち上方の帯にR L縦位の縄文を施文している。129は、横位に帯を1条巡らして縄文を施文したのち、帯下方の器面を1cm幅でナデ消し、その無文帯をはさんで帯上と器面上に短刻線文を施している。以上の無文帯をもつものはいずれも、縄文施文後にナデを行なって無文帯を形成し、短刻線文をそのあとに施文している。131-134は、いずれも小形土器である。132は、器壁が直立気味に

立ち上がるもので、復元口径・底径・器高はそれぞれ、5.5cm、3.5cm、7.7cmを計る。133は、コップ形の土器で、外面にはL R横位の縄文が砥跡程度に残る。134は、杯形の土器で、口径・底径・器高はそれぞれ、7.0cm、3.6cm、5.3cmを計る。小形土器は、133以外は全て無文である。135～139は、円盤形土製品である。135は、L R縦位・横位の施文によって羽状縄文をなす胴部片を加工し、中央には両面からの穿孔を施すが、貫通していない。136は、中央に穿孔は行なわれていないが、周縁の調整から土製品と考えられるものである。周縁の一部に磨滅痕が見える。137は、欠損品で、外面一方からの穿孔が行なわれている。138は、裏面から穿孔されているが、貫通していない。周縁には、磨滅して黒光りする部分が見える。139は、外面から穿孔が行なわれているが、貫通していない。周縁には磨滅して平坦な面を見せる部分がある。

P011床面出土土器(図105-140-142) P011の床面に密着し、まとまって出土した土器群である。140は、やや小形の深鉢で、強くすはまる底部と、緩やかに外背する口縁をもつ。底部は、端部が若干張り出す。口径・底径・器高はそれぞれ、11.4cm、3.5

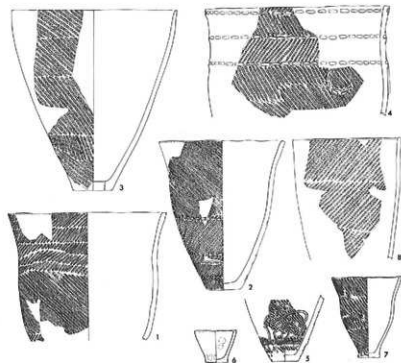


図106 S P36・P011型穴出土土器の実例図 1-6がS P36型穴で、3が床面、1・5が床面直上、2・4・6が覆土からの出土。7・8はP011型穴の床面出土土器。縮尺1/6。

cm, 13.3cmを計る。141は、羽状に縄文が施されている。142は、器壁が直線的に立ち上がり、全体に筒形に近い。復元口径は18cmを計る。

以上、文章中に特に記載がないものは、拓本中右下がりの縄文はR.L横位、左下がりの縄文はL.R横位である。

床面出土石器(図108—1・2) 1・2は、スクレイパーである。1は、縦長剥片の上下縁(図では左右の側縁)に、連続する調整を施し、急角度の刃部を設けている。

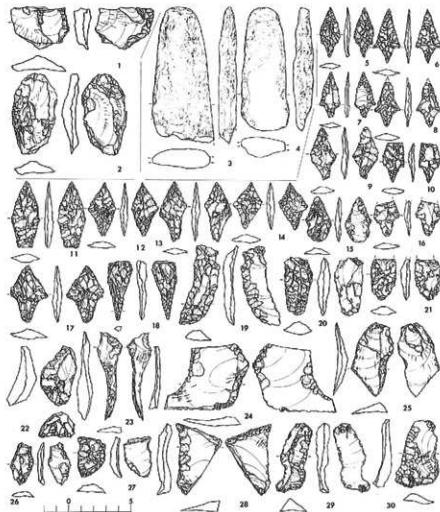


図107 S P38層出土の石器実測図 1・2は床面、3・4は床面からの高さ10cm以内の覆土中、5-30は床面からの高さ10cm以上の覆土中から出土した。

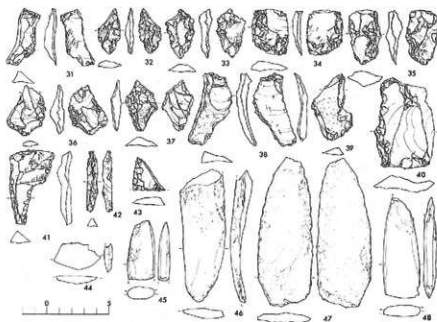


図108 SP20壁穴出土の石器実物図 いずれも片面からの高さ10cm以上の覆土中から出土した。

2は、両面加工のものである。もともとかなり厚みのある切片を利用しており、b面左側縁に深い刻溝を行なって厚みを整えたのち、側縁に細面加工を施している。両面に原石面が残る。

床面直上出土石器（図108—3・4） 3は、定角式の磨製石斧破片で、刃部が欠いている。階段状の剥離整形後、敲打を経ずに研磨を行なっている。主面は石の目に沿った凹凸が著しいため、研磨は、基端付近の石の目の凸部と側面に及んでいるだけである。4は、やはり定角式の磨製石斧で、完形品である。側面から加えられた剥離が深く広がっており、残りの凸面を中心に研磨を行なっている。刃部は弱凸強凸で、刃縁は「へ」の字状をなしている。

埋土出土石器（図108・109—5—48） 5—16は、石錐、あるいは石鏃かと思われるものである。11・15を除いて、基部の作り出しが明瞭である。6—8は、逆刺が強く張り出すもので、このうち6は、縦長切片の一次剥離面が両面に残っている。9は、横長(?)の切片を用いているものと思われ、調整が粗く、石鏃でない両面加工石器の可能性もある。12は、逆刺の一方を欠くものである。13・14は、鏃身の刃部を形成する二つの側縁の長さが、互いに異なるものである。11は、深い押圧剥離が両面を覆う作りのていねいなもので、刃縁も直線に揃っている。15は、縦長切片の正面および背面

の右側縁に調整を行なうもので、先端部を鋭角に整形する調整が認められず、スクレイパーの類であるかもしれない。17は、槍先で、逆刺が強く張り出し、茎部、銀身がともにかなりの厚みをもつ。なお、11～14についても、槍先としての可能性が考えられるかもしれない。18は、石鎚で、先端の刺突部は摩耗して光沢を見せている。19は、つまみ付ナイフで、背の高い根長剥片の正面および背面左側縁に調整が加えられており、つまみ部の挟り込みは、両面から数度におたる剥離を加えて作り出している。20～43は、スクレイパーである。20・21は、いずれも両面加工のものである。上端を除く周縁に刃部をもつ。22は、厚手の剥片の周縁に急角度の刃部を作り出している。23・42は、断面三角形の棒状の剥片を用い、23では三角形の各稜に、42では正面の稜に、それぞれ調整を加えている。24は、a面左側縁と、右側縁の上半に、両面からの調整によって作り出された刃部をもつ。25は、上端を除く周縁に調整を加えている。26～31は、いずれも、片面からの調整によって作り出された刃部をもつ。26はa面右側縁に、28・30はa面左側縁に、29・31は両側縁に、27は上端を除く周縁に、それぞれ刃部をもつ。32～37は、両面に加工が及ぶものである。32はa面右側縁に、33はa面左側縁に、34はa面の右側縁と下縁に、35はa面左側縁と下縁に、36はa面右側縁上半に、37はa面右側縁下半に、それぞれ刃部をもつ。38～41・43は、片面からの調整によって作り出された刃部をもつ。38・40・41は両側縁に、39・43はa面左側縁に、それぞれ刃部をもつ。44～48は、石斧の欠損品あるいは未製品である。44は、刃部破片である。断面は弱凸強凸を呈する。45は、小形の定角式の基部破片である。46は、やはり定角式の石斧の斧身破片である。47は、周縁に階段状の剥離整形を行なったのち、基端付近に研磨を施しており、仕上げ途中で放棄されたものとする。ただし、斧身が異常に薄いものであることから、欠損・剥離した斧身を、二次的に再加工しているのかもしれない。48は、完形の小型定角式石斧で、刃部は弱凸強凸、刃縁は緩やかな「へ」の字状を呈する。

小括

炉の存在、固く踏みめられた床面の状況から、本堅穴を居住遺構と判断する。周溝の重複はないが、石四炉は第3炉から第1炉、さらに第2炉へと2度の作りかえが行なわれており、堅穴の建て替え・建て増しを示唆する。床面からはⅢ2 a群土器が出土しており、Ⅲ2 a群土器を床面から出土した他の堅穴の平面形・炉形態との共通性から、本堅穴はⅢ2 a群の時期に構築・利用されたものとする。堅穴先端部付近で検出したP011小堅穴については、底面にしまりがなく、凹凸をなし、炉も検出できなかったことから、居住遺構とは考えにくく、その性格は不明である。また、SP38堅穴との前後関係も明らかにできなかった。

第14節 NO31竖穴

竖穴の構造

発掘予定範囲の調査終了後、重機によって範囲外の部分をローム面まで下げてみたところ、G-21区に小形の浅い落ち込みを確認した。覆土は浅く、遺物はわずかであった。

調査の結果、本竖穴は、先端が尖り、胴の脹みの強い卵形の平面形をもち、長さ3.5m、幅2.9mの小形の竖穴であることが判明した。

床は、ロームを掘り込んで作り出しており、平坦である。竖穴先端部に近く設けられた炉を中心に、1.7×1.3mの範囲に囲い床が広がっていた。表面がワロコ状をなす状況は観察できなかった。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6
深さ (cm)	13	12	5	3	3	2

竖穴内の掘り屑のうち、P1・2・3・6以外のものについては、木の根による擾乱であった。

壁は、わずか数cmの高さしか残っていなかったため、崩落の有無については不明である。しかし、壁が攪乱を受けた跡はなかった。

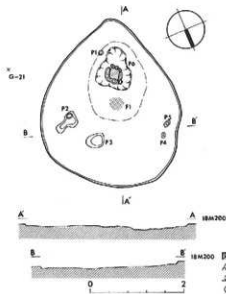


図109 NO31竖穴の平面図と断面図 図中、一線で囲んだ範囲は、掘り跡が残った床を表わす。トーンでつぶしたF1は、焼土灶。フランジ縁部から床面までは浅く、土層図は作成していない。

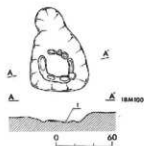


図110 N 031竪穴炉址の平面図と断面図
断面図中の1は、非化したローム。焼土の
地層はない。

炉は、竪穴長軸に沿って先端部寄りに1基、そのすぐ後方に1基検出した。炉の周囲は、まわりの床にくらべてやや低くなっており、圍い床はこの一段低いくぼみの固縁で止まっていた。炉は、40cm四方を浅く掘りくぼめている。その固縁には石圍いの礎の抜きとり跡と思われる凹凸が巡っており、礎が1個遺存していた。この石圍炉の後方に位置する炉は、固縁に礎の抜き取り跡と考えられる凹凸がなく、地床炉と判断した。焼土の厚さは記載浅れのため不明である。

出土遺物

床面直上出土土器(図112-1) 胴部破片で、羽状の交点にR L原体による縦線文を1条巡らしている。条の通る縄文、ていねいな内面のナデから、Ⅲ2 a群に属する資料と考える。

埋土出土土器(図112-2~5) 2~5は、接合しないがいずれも同一個体に属する。2は、R L原体による縦線文が一条横位に巡っている。

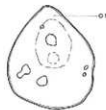


図111 N 031竪穴出土遺物の位置 床
面より10cm以内の覆土中出土遺物を示し
た。床面より出土した遺物はない。

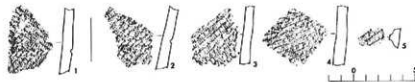


図112 N 031竪穴出土土器の拓本図 1は床面より10cm以内の覆土中から出
土。他は10cm以上の覆土中より出土した。

なお、拓本中、右下がりの縄文はRL横位、左下がりの縄文はLR横位である。

小括

炉の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。床面から出土した遺物はないが、卵形を呈する竪穴平面形、石囲炉は、本遺跡のⅢ2 a 群期の竪穴に共通する要素であり、本竪穴もⅢ2 a 群期に構築・利用されたものであろう。

第15節 D C 12竪穴

竪穴の構造

D・E-13区をローム面まで下げた段階で黒色土の落ち込みを確認した。覆土は浅く、遺物はほとんど含まれていなかった。

結果として、本竪穴は、先端が張り出し気味の丸みの強い卵形をもつことがわかった。先端は西を向いており、長さ3 m、幅2.4 mを計る。

床はロームを掘り込んで作り出しており、平坦である。壁から50 cm前後内側の竪穴平面形に沿って巡る線の内側に、固い床が分布していた。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
深さ (cm)	8	46	6	25	2	2	12	12	10	9

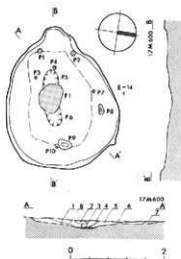


図113 D C 12竪穴の平面図と断面図 平面図中、---で囲んだ範囲は、固く踏みしめられた床面を示す。断面図 A-A' : 1 覆土、2 ロームブロック、3 地土、4 黒褐色土、5・7・8 黒色土、6 ロームブロックを含む褐色土、F 1 は、地柱炉の焼土範囲を示す。

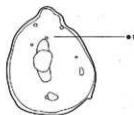


図114 DC12竪穴出土遺物の位置
床面から出土した土器を●で示した。



図115 DC12竪穴出土土器の断面図 床面出土の底部
破片。

竪穴内に分布する小穴群について、個々の覆土や掘り込みの状況は、記載浅れのため不明である。

壁は立ち上がりが急で著しい崩落はなかった。

如は、竪穴長軸からややずれた竪穴中央部付近で検出した。炉の前後は、床が皿状にくぼんでいた。周縁に、礎の抜き取り跡と思われる凹凸は検出できなかった。焼土はほとんど掻き出されていた。

遺物

床面出土土器(図115) 底部片である。粘土帯合わせ目から剝離している。川皿状の粘土板を底にし、周縁に粘土帯を巡らして成形を行なっている。縄文は、筒れ口近くで羽状になっており、下方の縄文はR L横位、上半はL R横位である。底面は平坦で、乾燥の進んだ段階でナデが加えられている。Ⅲ2 a群に属する資料である。

小括

如の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。床面からは、羽状の縄文が撫され、底面に乾燥の進んだ段階でナデを行なうⅢ2 a群としての特徴をもつ土器底部が出土しており、床面からⅢ2 a群土器を出土した他の竪穴の平面形との共通性から、本竪穴はⅢ2 a群期に構築・利用されたものと考えられる。

第16節 Z R40竪穴

竪穴の構造

D-16区をローム面まで掘り下げた段階で、黒色土の落ち込みを確認した。そのため、調査区をC-16区に拡張して、竪穴全体の確認を行なった。竪穴内部には、木炭、焼土を含む褐色土がつまっており、焼失家屋であろうと判断した。覆土中には遺物はほとんど含まれていなかった。

結果として本竪穴は、C・D-16二区にまたがる長さ2.4m、幅2mの小形の竪穴で、やや不整な卵形の平面形を呈することがわかった。

ロームを掘り込んで床を作り出しているが、固い床とやわらかな床の違いが観察できた。固い床は、壁から40-50cm内側の竪穴平面形に沿って巡る線の内側に分布しており、やわらかい床はその外側に広がっていた。固い床には、顕著なウロコ状の状況は観察できなかった。

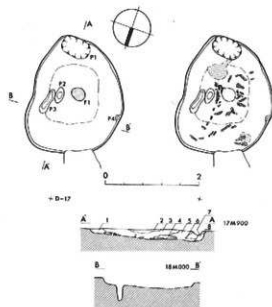


図116 Z R40竪穴の平面図と炭化材の出土状況 平面図中、——で囲んだ範囲は、深く踏みしまった床面を表わす。トーンでつぶしたF1は、池床砂。炭化材の出土状況図中、トーンでつぶした部分は、焼土塊を表わす。ブロック状にみられたのは図示した2ヶ所だが、その他数ヶ所に、小さなブロックを認めた。断面図A-B：1 炭を含む黒褐色土、2・6・8 黒色土、3 褐色土、4 焼土、5 黄褐色土。クローズアップブロック、番号番号のないものは、炭化材を示す。



図117 7 R 40竪穴出土土器の原本図
床面・床面直上からの出土はなく、壁
土中より、倒平した土器1点が出土し
た。表面は割壊している。

ピット番号	P1	P2	P3	P4
深さ (cm)	4	14	20	9

柱状の掘り込みは確認できなかった。

壁は急な立ち上がりをもせ著しい崩落はなかった。

卵を1基、竪穴中央部で検出した。焼土は厚さ3cmを計る。周縁に、曜の抜き取り跡と思われる凹凸は検出できなかった。

先端部には、深さ4cm前後の浅い皿状の掘り込みを検出した。竪穴基部には一部攪乱かかかると見られる。

炭化材は、竪穴中央に集中して分布していた。いずれも床面に密着するものである。焼土は、炭化材の出土位置のやや上方に分布していた。

遺物

埋土出土土器(図117) 器外面が全面剥落しており、施文・調整は不明である。胎土に砂粒が多く混入している。ていねいな内面のナデ調整から、Ⅲ2 a群に属するものと考えられる。

小括

卵の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。覆土中から、床面にかけて分布していた焼土・炭化材の出土状況は、本竪穴が焼失したことを示すものであろう。床面からの出土遺物はないが、Ⅲ2 a群土器を床面から出土した他の竪穴の平面形との共通性から、本竪穴はⅢ2 a群の時期に構築・使用されたものと考えられる。

第17節 E R 34竪穴

竪穴の構造

S P 38竪穴基部後方のN-9区をローム面まで下げた段階で、不整な平面形を見せる落ち込みを確認した。清掃を行なってみたところ、竪穴基部に、不安定な構成を示す覆土が内部に詰まる木の根の攪乱が1基と、黒色土が内部につまる掘り込み(P 8)

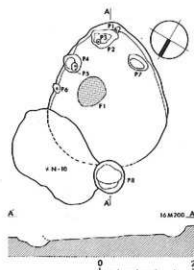


図118 E R 34竪穴の平面図 床面粘土の厚さは3cm。南側のプランは、攪乱のため不明。

が1基、竪穴を切っているのを確認した。

結果として本竪穴は、先端をほぼ南に向けた丸みの強い卵形の平面形をもつことがわかった。長さは推定で3.1m、幅2.5mを計る。

床は、ロームを掘り込んで作り出しているが、全体にしまりがなく、先端から基部に向かってゆるく傾斜していた。

ピット番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
深さ (cm)	7	11	6	10	25	13	11	16

竪穴内の掘り込みは、いずれも底面が丸みを帯び、掘り肩も不整形を呈するものであった。

壁は、攪乱のかかる基部以外、著しい崩落はない。

炬は、竪穴中央に、竪穴長軸線上からやや左にずれた位置で検出した。焼土の厚さは3cmを計る。石圓いの礫や、その抜き取り跡と考えられる凹凸は検出できなかった。

遺物

埋土出土土器(図119-1~9) 1は、I 1群土器である。貝殻助条の条痕文が斜めに走る。2~4は、貼付帯をもつものである。3は、逆「ハ」の字状に帯を巡らし、その後施文を行なっている。4は、本竪穴を切るP 8の埋土中から出土した。復元口径は28.5cmを計る。5は、口縁にR L原体による縦線文をもつものである。6は、壺状の器形をもつ土器の口縁であろう。断面が「く」の字状に外背しており、外面は無

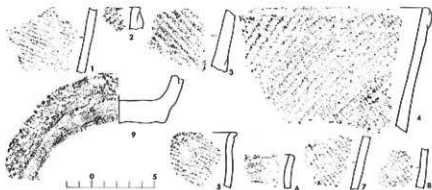


図119 ⅢR34竪穴出土土器の断本図 すべて、東向き10cm以上の覆土中に位置した土器。

文でミガキが行なわれている。復元口径は、10cm前後である。7・8は、いずれも縄文のみのもので、器面の湾曲から、やや小形の深鉢の破片であろうと考える。9は、底部である。縄文施文後、底部端から1.5cm幅で時計回りにケズリを行なっている。縄文は、粗く、器面が風化しているせいもあって原体はよくわからないが、複節であろう。底面は成形時の凹凸を見せ、全体についても作りが粗い。Ⅱ2b群に含まれる。

以上、特に記載がない場合、拓本中右下がりの縄文はR L横位、左下がりの縄文はL R横位である。

小括

底面にしまりはないが、埴の存在と平坦に掘り込まれた竪穴底面から、本竪穴を居住遺構と判断する。床面からの出土遺物はないが、Ⅲ2a群土器を出土した他の竪穴の平面形、特に、それらの竪穴のほとんどに共通する先端部の浅い掘り込み(P2)が本竪穴にも存在することから、本竪穴はⅢ2a群の時期に構築・利用された可能性が高い。

第18節 EL12竪穴

竪穴の構造

Q-4区をローム面まで掘り下げた段階で、南壁から広がる黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの覆土はやや黄色が強く、早期の土器片も混じっていたため、当

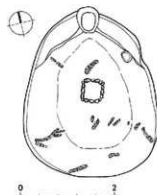


図120 E.L.1は竪穴の平面図。図中一点破線は深い床の輪郭を示す。柱穴の掘り込みは一切検出できなかった。床面には炭化材が分布しており、焼土層の可能性が考えられる。竪穴先端部の両側壁にベンチ状の構造が検出されている。土層断面図、伊原遺物図、遺物分布図については遺失によって喪失したためでない。

初は該期の竪穴と判断した。隣りあうQ-3区もローム面まで掘り下げて竪穴全体の確認を行ない、これを掘り進めたところ、覆土はQ-4区側ではわずか数cmの厚さで、炭化材が含まれていた。

調査の結果、本竪穴は、Q-3・4区の2区にまたがって所在するもので、先端を北北東に向け、卵形の平面形をもつことがわかった。長さ3.6m、幅2.9mを計る。

床は、ロームを掘り込んで作り出しており、全体に平坦である。壁から40~80cm内側の竪穴平面形に沿って巡る線の内側には、固くしまった床面が広がっていた。なお、先端部には、床面との落差15cmほどの段を持つベンチ状の掘り残しが、幅30cmで巡っていた。このベンチは、基部に寄るにしたがって細く低くなり、端の部分では床との境がなくなっていた。

竪穴内には、先端部の掘り込みを除いては、一切掘り込みは検出できなかった。

壁は、竪穴基部寄りの部分では掘り込みが浅いため、特に右隅では平面形をとらえるのが難しかったが、炭化材の分布を手掛りとして平面形を確認した。他の部分では、壁の立ち上がりも明瞭で、著しい崩落は認めなかった。

厨溝は、十分に精査を行なったが検出できなかった。

炉は、竪穴長軸上の中央に石囲炉を一基検出した。50×50cmの方形の掘り込みの周縁に礎を配するもので、礎は抜き取られることなく全て遺存していた。伊の切り合い・重畳はなかった。

炭化材は、全て床面に接して分布していた。伊に向かって放射状に分布する傾向を確認した。

先端部には、楕円形の平面をもち、床からの深さ5cmを計る浅い掘り込みを検出した。

床面からの出土遺物は、比較的豊富であった。竪穴左側壁基部寄りには、長さおよそ10cmの石斧が2本、長さおよそ12cmの作り出しの基部をもつ黒曜石製の石槍が1本、高さ12cmほどの小形の深鉢が1個、固まって出土した。深鉢は、R.L横位の斜礎文が

縮され、口唇下にはR L原体の圧痕文が1条横位に巡らされていた。また、竪穴先端部の浅い掘り込みの手前には、円形掘器1個、長さおよそ5cmの作り出しによる某部を持つ石槍1本、明瞭な基部をもつ石鏃が4本、固まって出土した。石質はいずれも黒曜石であった。以上の遺物は、調査中に過失により全て粉失したが、その一部については写真で示した。

小括

炉の存在、固く踏みしめられた床面の状況から、本竪穴を居住遺構と判断する。床面に分布していた炭化材の状況は、本竪穴が焼失したことを示すものであろう。粉失してしまったが、床面からはⅢ2 a 群のやや小形の深鉢が出土しており、床面からⅢ2 a 群土器を出土した他の竪穴の平面形・炉形迹との共通性から、本竪穴はⅢ2 a 群の時期に構築・利用されたものと考えられる。

第19節 K L 25竪穴

竪穴の構造

J-15区をローム面まで下げた段階で、西壁にかかって落ち込みの一部を確認した。このため、調査区をK-15区に拡張し、竪穴の全体を確認した。竪穴は、南西-北東

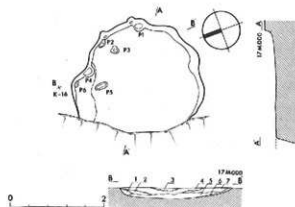


図121 K L 25竪穴の平面図と断面図 平面図中、---はその北側のプランク不明瞭であったことを示す。西側は、断面によってこわれている。断面図B-B: 1・6ロームブロックを含む褐色土。2・7ロームブロックを含む褐色土。3ローム粒を含む褐色土。4黒褐色土。5黒色土



図122 K L25期穴出土遺物の位置 床面遺物と床面より10cm以内の土中(床面直上)の遺物の位置を示した。土器については、図123の番号と一致する。(●床面土器、○床面直上の土器、□床面直上の土と別名)

に台地縁を走る断層によって、1/2以上が破壊されていた。

調査の結果、本竈穴は、J・K-15の2区にまたがって所在し、遺存している部分に限れば、ほぼ円形に近い平面形をもつことがわかった。長さは2.8mを計る。

床はロームを掘り込んで作り出しており、壁から内へ向かって傾斜していた。凹凸は認められないが、しまりのない床であった。図121中、一点破線で囲った部分は、床が凹凸を見せ、壁も立ち上がりか明瞭でなく、木の根による擾乱が及んだものと考えた。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6
深さ (m)	5	7	10	14	2	3

竈穴床面の掘り込みは、いずれも不整な掘り崩を示し、擾乱の可能性が強いものであった。

壁は、床から急角度に立ち上がらず、丸みを帯びて立ち上がっていた。炉は検出できなかった。

遺物

床面出土土器(図123-1~6) 1~4および6は、短刻線文をもつものである。いずれも胴部破片で、1は貼付帯をもたず、器面に直接2条の短刻線文を巡らすもの、6は、ごく弱い貼付帯の上に短刻線文を施すものである。2・3・4は、同一個体であろう。4では、貼付帯を2条横位に巡らし、短刻線文を施したのち、上方に向かって間く縦走する短刻線文を2条、器面に直接施している。縄文は、太さの異なる2本の同燃の原体を使い分けている。5は、底部破片で、底部端には部分的に粘土の貼り付けが認められる。全周する貼付帯とは異なる。底面には細密条痕を残すナデが施されている。

床面直上出土土器(図123-7) 7は、やや小形の深鉢の底部破片である。器面はかなり風化している。

埋土出土土器(図123-8~10) 8は、口縁に巡らした貼付帯上に短刻線文を施すものである。9は、胴部破片であるが、同じく貼付帯上に短刻線文を施している。10は、器面に直接R L原体による縦線文を1条巡らせている。

以上、縄文について特に記述がない場合、拓本中右下がりの縄文はR L横位、左下がりの縄文はL R横位である。

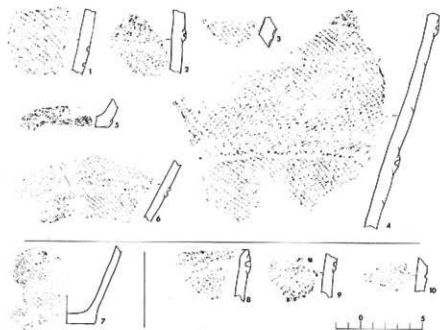


図123 K.L.25窟出土石器の拓本図 1～6は床面、7は床面直上、8～10は覆土中より出土。

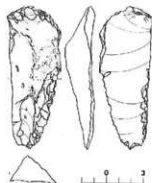


図124 K.L.25窟出土の石製尖頭器 断面からの高さ10cm以上の覆土中から出土した。

埋土出土石器(図124) スクレイパーである。角張った原石の稜の部分に打割して取り出した断面三角形の大形の薄片を素材とし、正面右側縁に粗い調整を加えて急角度の刃部を作り出している。

小括

灰が検出できず、底面が丸みを帯びて掘り込まれていることから、居住遺構とは考えにくい。竖穴の性格は不明である。床面、覆土中からはⅢ2a群土器が出土しており、Ⅲ2a群、あるいはそれに近い時期に構築されたものであろう。

第20節 A B 12 竖穴

竖穴の構造

C-12・13、D-12・13の4区をルーム面まで下げた段階で、不整な平面形を呈する落ち込みを確認した。当初、その不整な平面形から木の根による攪乱を考えたが、覆土が比較的安定した構成を示しており、遺構の可能性も想定できた。これを掘り通

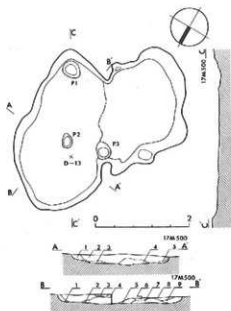


図125 A B 12 竖穴の平面・断面図 A-A'：1 ローム粒を含む褐色土、2 目り層、3 ローム粒を含む黒色土、4 ロームと黒色土のブロックを含む黄褐色土、5 ロームブロックを含む褐色土 H-H'：1 ロームブロックを含む褐色土、2・5・9 黒褐色土、3・7 ロームブロック、4・8 黒色土、6 粘土

めたところ、竪穴西半の落ち込みは、底面にしまりがなく凹凸を見せており、木の根による攪乱であろうと判断した。落ち込みの東半については、底面が平坦で、安定した覆土の堆積状況を示しており、遺構であると考えられた。覆土中には、小形の竪穴であるにもかかわらずかなり遺物が含まれていた。

結果として本竪穴は、南東—北西の長軸をもち、両端が尖り気味のタテに長細い平面形をもつことがわかった。長さ3.4m、幅1.9mを計る。

床はローンを掘り込んで作り出しており、平坦であるが、しまりが無い。

ピット番号	P1	P2	P3
深さ (cm)	6	7	15

竪穴床面には3個の掘り込みが確認された。壁は、急な立ち上がりを見せ、竪穴西半をのぞいて著しい崩落はなかった。埴は検出できなかった。

遺物

埋土出土土器・土製品 (図126—1~20) 1は、無文の土器片で、胎土に比較的砂粒

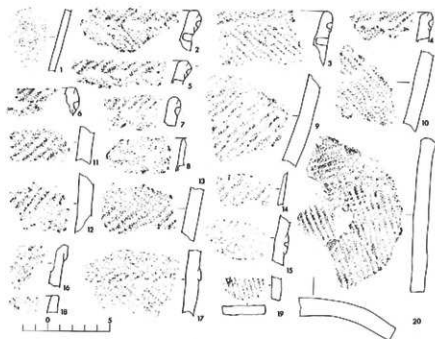


図126 A B12竪穴出土土器の拡大図 床面および床面直上からの出土はなく、すべて覆土中の土器。19・20は、土器片を加工した同様状土製品で、1/2を欠損している。



図127 A B12整穴出土の石器実測図
床面からの高さ10cm以上の覆土中か
ら出土した。

が少なく、直線的な器形から、I群に分類されるものと思われる。2～14は、いずれも接合しないが同一個体に属するものと考えられる。2～8は、口縁の破片で、口縁に貼付帯を巡らしたのち短刻線文を施し、さらに帯下方の器面には、深く入る円形刺突文を施している。この円形刺突文は、III 2 a群には例外的な文様要素であるが、調整・成形の手法は、III 2 a群のものである。15は、貼付帯上に短刻線文をもつものである。16・17は、貼付帯を持つものである。16の帯は、器面の縄文を覆っているが、器面の施文後帯が貼られたのか、あるいは帯上の縄文施文の際に帯が押し出されて器面の縄文にかぶったものか、明らかでない。17は、細い貼付帯をめぐらすもので、これをまたいで器面と一連の縄文(L R縦位)を施したのち、帯上にL R横位の縄文を施している。18は、縄文のみの口縁部破片で、器面が荒れて明瞭でないが、R L横位の縄文が施されている。19・20は、円盤形の土製品である。両者とも土器破片の間隙を打ち欠いて円く整形しているが、およそ半身を欠損している。19の中央部に穿孔は認められない。

以上、特に記載がない場合、拓本中右下がりの縄文はR L横位、左下がりの縄文はL R横位である。

埋土出土石器(図127) 扁平な石核と思われる。上面の平坦面を主な打面として矩形の剥片を作り出しているが、左下方の胴縁からも小さい剥片を取り出している。右側面の一部と裏面には原石面が残る。

小括

炉は検出できなかったが、平坦に掘り込まれた底面の状況から、居住遺構の可能性も考えられる。床面からの出土遺物はなく、整穴の平面形も不整であるため、構築の時期は明らかにできない。ただし、覆土中にはIII 2 a群土器が多く入っており、III 2 a群の時期以降に構築された可能性が高い。

第21節 B M75 竖穴

竖穴の構造

遺跡の所在する台地は、丘陵に続く部分が既に削られていたが、その断面を観察中に、ロームに浅く落ち込みがあるのを確認した。そのため、発掘区をA-13・14・15区に拡張して、この落ち込みの確認に努めたところ、A-14区に、既にその大半が破壊された落ち込みの一部を検出した。ロームの掘り込みはわずか数cmで、黒色土が浅く詰まっていた。

結果として、本竖穴は、A-14区に所在し、竖穴西側に角のある平面形をもつものであった。掘り込みが浅く、竖穴北側の壁はとらえることができなかった。

床は平坦であるが、しまりがない。一部に段がついていた。

掘り込み番号	P1	P2	P3	P4
深さ (cm)	32	7	44	11

P3は竖穴を切って掘り込まれており、内部には黒色土が詰まっていた。

壁は掘り込みが浅いため、崩落の状況は不明であるが、特に擾乱を受けたと判断された部分はなかった。

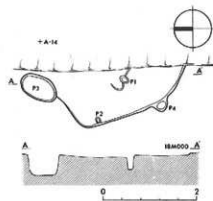


図128 B M75 竖穴の平面図と断面図 断面は削平されている。P3は、本竖穴に付属しない。図示していないが、床面に少量の炭化材を確認した。

出土遺物

床面直上出土石器 (図129) 断面が厚みのある三角形を示す両面加工の石器である。a面の一部には、一次剝離面が残る。先端が丸みのある断面を示しており、石錐と考えられる。しかし、先端部に磨減痕は観察できない。



図129 B M75堅穴出土の石器実測図
床面からの高さ15cm以内の覆土中から出土した。出土位置記載のため遺物分布図はのせていない。

小括

が、固い床面は確認できなかったが、平坦に掘り込まれた底面の状況から、居住遺構である可能性が高い。床面・覆土中からは、石器1点を除いて遺物の出土がなく、また、堅穴の全体の平面形も不明であることから、構築・利用された時期はわからない。

第22節 F U 69堅穴

堅穴の構造

J-13区をローム面まで掘り下げた段階で褐色土の落ち込みを確認した。断面観察用の土手を残しつつこれを掘り進んだが、J-13区西壁寄りの部分は層が乱れ、不整な平面と凹凸のある底面を見せていたため、木の根による擾乱と判断した。堅穴覆土中には、その規模に比して遺物が多く混じり、また、焼土をいくつか確認したため、これを図化しながら掘り進んだ。

調査の結果、本堅穴は、J-13区のほぼ中央に位置し、隅の丸い三角の平面形をもつことがわかった。三角の頂部は南東に向いていた。頂部から基部までは3.4m、基部の長さも3.4mを計る。

床は、ロームを掘り込んで作り出しており、平坦だが、全体にしまりがなく、床の特に固い部分は見られなかった。

ピット番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
深さ (m)	33	4	23	8	22	6	11	10	12	8	15	12	31	12

柱穴状の掘り屑は、堅穴の壁近くに分布していた。

壁は、擾乱されている基部を除いて著しい崩落はなく、やや丸みのある立ち上がりを見せていた。

周溝は、十分に精査を行なったが検出できなかった。

炉は、堅穴長軸上の頂部寄りに1基検出した。50×40cmの浅い皿状に掘り込みを行ない、周縁に土器破片を配している。土器は、本来周縁に全周していたものとなれば、半数以上は抜き取られている。全て外面を下にしていた。

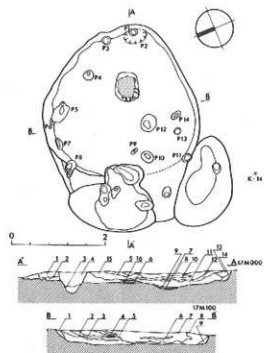


図130 FU69竈穴の平面図と断面図 A-A'：1・4ローム粒含む黒褐色土、2・5ロームブロック、3・11ローム粒含む黄褐色土、6床面地土F1、7・13褐色土、8・9砂粒断面同形塊、10・12黒色土、14ロームブロック含む褐色土、15黒褐色土、16赤化したローム B-B'：1・5ローム粒含む褐色土、3・8ロームブロック、4黒褐色土、7褐色土、8黄褐色土。竈穴の西側は、擾乱を受け、プランが一部不明瞭。

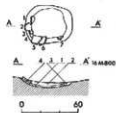


図131 FU69竈穴伊址の平面図と断面図 本竈穴の伊址は土器圖いをもつものであった。それぞれの土器片に付した番号は図135の拓本図の番号と対応する。断面図：1赤化ローム、2黄土、3・4灰を含む黒褐色土。

覆土中には、焼土を4個所確認した(F001-2・3・4)。また、炭片、黒曜石剥片、チップが、先端部付近の覆土中からまとまって出土した。

柱穴と思われるもの以外の掘り込みとして、先端部に掘り込まれたP2がある。深さ4cmの浅い皿状の掘り込みであるが、あるいはP1の掘り肩の一部としてとらえられるものかもしれない。

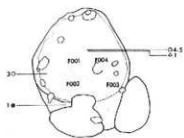


図132 FU69竪穴出土遺物と覆土中の
 礎土の位置 遺物については、床面遺物
 と床面より10cm以内の覆土中（床面直上）
 の遺物の位置を示した。土器と石器は、
 図33・34・37の番号に一致する（●床
 面土器、○床面直上の土器、△床面直上
 の石器、覆土中礎土の床面からの高さは、
 F001が10cm、F002が6cm、F003が10
 cm、F004が10cm。

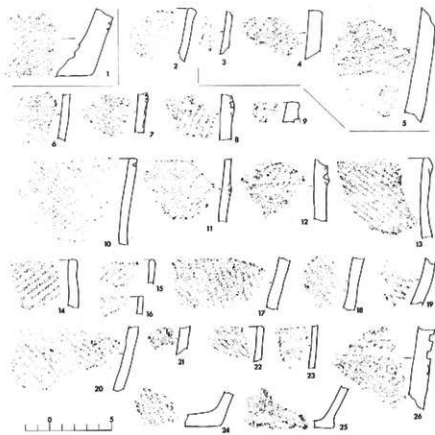


図133 FU69竪穴出土土器の採断面 1は床面、3～5は床面直上、2・6
 -26は床面から10cm以上の覆土中より出土した。

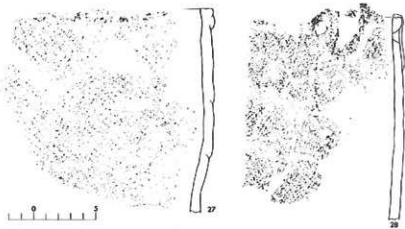


図134 F U69型式出土土器の拓本図 2点とも断面から10cm以上の覆土中より出土。28は、111F完全な深鉢形土器で、拓本には器面の一部を省略して示してある。図136に実測図を示した。

出土遺物

床面出土土器(図133-1) 底部破片で、底から4cm上方に半截竹管内面による短刻線文が横位に走る。短刻線文の施された器面は、わずかに高まっているが、貼付帯によるものか、粘土帯の接合によるものか明らかでない。

床面直上出土土器(図133-3~5) 3は、小形土器の胴部破片と思われる。4・5は、厚手の器壁、粗い砂粒を含む粘土、不揃いで浅く施された縄文、内面に残る成形時の凸凹といった特徴から、Ⅲ2c群に属するものであろう。

埋土出土土器(図133-134-2・6-28) 6はI1群土器で、外面には横位の貝殻条痕文の下方に貝殻助条による刺突文が巡っている。7~12は、短刻線文をもつものである。7は、横位に一条貼付帯を巡らすもので、帯上とそれに直交して器面上に半截竹管内面による短刻線文を施している。11は、帯上に、へら状工具による幅のせまい短刻線文をもつ。10は、貼付帯をもたず、器面上に直接短刻線文を施すものである。13は、貼付帯のみのもので、帯の中央を境に羽状縄文を施している。14~21は、縄文のみのものである。15・16は小形土器の口縁破片で、15の口径は6cm前後と考えられる。17~21は、いずれも同一個体に属するものであろう。砂粒が多くザラついた粘土、乱れて糸の揃わない縄文、指頭による整形痕をそのまま残す内面といった特徴から、Ⅲ2b群に含まれるものである。2および22、23は、無文あるいは無文帯をもつものである。22は、口径下1cmまで縄文が施されており、その上方は無文帯として残されている。24、25は、いずれも底部破片である。24は、右下がりの縄文が施されているが、器面が荒れているため熱りについては不明である。25は、無文の小形土器の底部

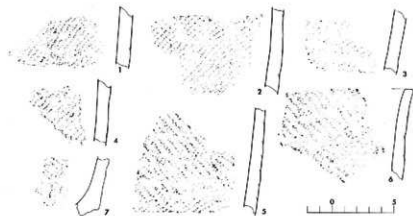


図135 FUIの窯穴の土器用い跡地に使用された破片 残存していた7点を拡大で示した。出土位置は、図131中に、括弧番号で示した。



図136 FUIの窯穴出土土器の実例 III 2cの層土中より出土した土器の断面図（縮尺1/6）で、拓本を図134-28に示した。

である。26は、III 2 c 群土器で、横位に二条、断面が方形に近い棒状工具による押し文を施し、その下方には、5 cm程の間隔をおいて円形刺突文を施している。27は、口縁が直立気味に立ち上がる器形をもつ深鉢形土器である。器面は全体に凹凸が激しく、不揃いな粘土帯の合わせ目が明瞭に残る。縄文は、腹面のRLRが施されているが、浅く柔も揃わない。口唇は平坦面をつくり出しているが、凹凸が強い。以上の特徴から、III 2 b 群に属するものである。28も、III 2 b 群に属する深鉢である。口縁がほぼ直立する器形をもつ。口縁端部には貼付帯が巡らされており、「V」字状、「1」字状の粘土帯がそれぞれ一対ずつ、口縁の相対する位置に貼り付けられている。外面は、帯上を含めて全面縄文が施されているが、浅く、粗密があり、柔が揃わない。口唇は平坦で、縄文が施されている。内面は、指頭による整形痕が目立つ。胎土は砂粗が多く、器面はざらついており、剥落も著しい。補修孔が多い点はその特徴で、遺存する部分だけでも、口縁の帯下方に7箇所が認められる。用いられた土器（図135-1-7） いずれも、接合はしないが同一個体の可能性

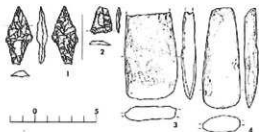


図137 FU69竪穴出土の石器実測図 1は床面からの高さ10cm以内の覆土中から、2-4は床面からの高さ10cm以上の覆土中から出土した。

が高いものである。口縁部(6)から底部付近(7)の破片まで用いている。器形は、口縁の緩やかに外背するもので、外面の縄文は剥状をなす。口唇は平坦で、内面はていねいなナデが施されている。明瞭に残る接合痕から、粘土帯でなく粘土ひもによる成形(Coiling)が行なわれたものと考えられる。

以上、特に説明がないものは、拓本中右下がりの縄文はR.L横位、左下がりの縄文はL.R横位を示す。

床面直上出土石器(図137-1) 楯先である。基部が作り出され、身はかなり厚みをもつ。

埋土出土石器(図137-2~4) 2は、スクレイパーで、加工痕のある剥片で、正面右側縁にやや深い調整が、下縁に刃こぼれ(?)が認められる。3・4は、それぞれ石斧である。3は、やや凹凸がある板状の素材の縁辺に階段状の剥離を行なって形を整え、刃部を中心に研磨を施している。左右側縁とも研磨は及んでいるが、右側縁は明瞭な側面をなしていない。刃部は両凸で、刃縁は直線をなす。4は、完形で、周縁に階段状の剥離を行なって形を整えたのち、ほぼ全面に及ぶ研磨を行なっている。刃部は弱凸強凸で、刃縁は「へ」の字状に研磨されている。

小括

固く踏みしめられた床面は確認できなかったが、埴の存在から、本竪穴を居住遺構と判断する。土器掘いがは、本遺跡で検出した竪穴中、FU69竪穴にのみ確認されたものである。土器掘いに用いられた土器はⅢ2a群のもので、本竪穴はⅢ2a群の時期に構築・利用されたのであろう。

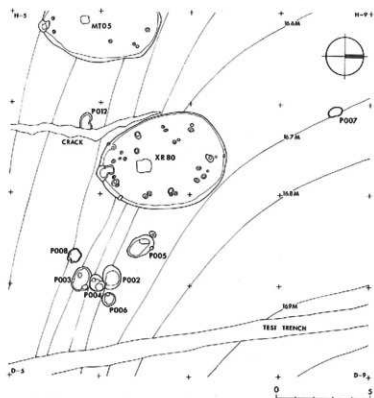


図138 小堅穴の位置 小堅穴のうち、P002～8およびP012の位置を示した。图中、CRACKとあるのは地震等の原因によって生じた地割れで、P012は、一部がこれによってこわされている。TEST TRENCHは通気管の試験溝、+は調査区の見出しクイを示す。

第23節 P002小堅穴

堅穴の構造

E-5区、E-6区をローム面まで掘り下げた段階で、切りあう3個の掘り込みを確認した。3個の掘り込みは、いずれも楕円形を呈する小形の堅穴であった。これら小堅穴のうち、最も北寄りに位置するのが本堅穴で、調査の結果、東西に長軸をもつ楕円形の平面を呈し、長さ140cm、幅96cmを計る堅穴と判明した。南東隅をP004に切られている。断面観察によればII b層下面が掘り込み面で、この掘り込み面からの深さはおよそ40cmである。底面は平坦で、明瞭なかどをもって立ち上がる。南東壁際の

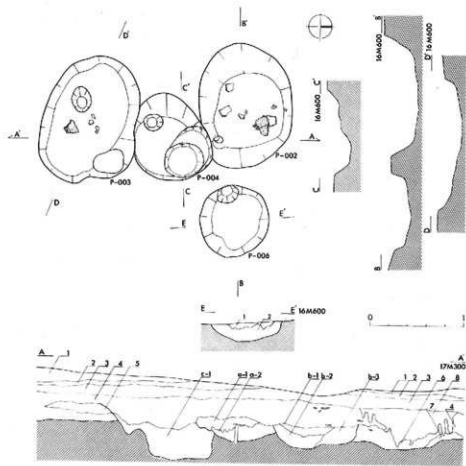


図139 P002-4および6小竈火の平面図と断面図 断面図A-A'：1 U s
 1 火山灰，2 1層，3 目a層，4 目b層，5 ロームブロックまじりの褐色土，
 6 褐色土，7 ポツポツのローム，8 木の根による擾乱。a-1 ロームまじりの
 褐色土，a-2 黒褐色土，b-1 黒色土，b-2 黒褐色土，b-3 黄褐色土，
 c-1 ローム粒まじりの褐色土 E-E'：1 黒色土，2 ロームまじりの褐色土。

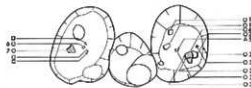


図140 P002・P003小竈火出土遺物の位置 断面直上出土遺物の位置を示した。○は土器を、△は石器をあらわす。P002出土土器の1・2・4は同一個体。



図141 P022小竪穴出土土器の拓本図 いずれも断面直上の竪土中出土の破片で、1・2・4は同一個体、接合しないが、復元実測図を図142に示した。

底面には、深さ10cmほどの斜めに入る落ち込みがあり、内部にはやわらかな黒色土が詰まっていた。土層の感じから、この落ち込みは木の根による攪乱であると考えた。断面の観察からは、この落ち込みの上方に続く土層の変化が確認できなかったので、本竪穴構築以前の攪乱と判断した。埋土中からは、竪穴のほぼ中央に石鉄が1点と、異なる2個体の土器の破片を検出した。遺物は、いずれも底面から5～15cmの間で出

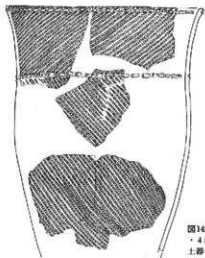


図142 P02小型穴出土器の実測図 标本図141-1・2・4に示した破片から復元実測した。塚南東上の覆土中出土器である。絶尺1/6。



図143 P02小型穴出土の石器実測図 覆土中からの出土である。

土した。覆土は、細かいローム粒を含む褐色土1層であった。

出土遺物

土器(図141-1~4) 1・2・4は、接合しないが、同一個体に属するものである。復元口径32.5cmを計る大形の深鉢で、器高は50cm前後になると思われる。弱く張った胴から、ややくびれて外背する口縁をもつもので、肩と口縁端に2条、貼付帯を巡らしている。帯の貼付後、肩部の帯を境に、下方にL R縦位、上方にL R横位の縄文を施し、さらに、両帯上に短刻縄文を施している。内面は、乾燥の進んだ段階で縦方向のナデを行っており、器面は光沢がある。3は、口縁部に平行する2条の貼付帯を巡らし、下方の帯を境に、下方にL R縦位、上方にL R横位の縄文を施し、さらに両帯上に短刻縄文を施している。内面は、乾燥の進んだ段階でナデを行っており、器面は光沢がある。

両土器は明らかに異個体で、器面の色調も異なるが、いずれも器形が口縁の緩やかに外背する深鉢であること、口縁端に肩に2条貼付帯を巡らし、帯上に短刻縄文を施

すこと、LR織文を、肩部の帯を境に縦位と横位に使いわけて羽状織文を施していることなど、全てにわたって共通する要素が多い。

石器(図143) 逆刺の強く張り出す石錐である。基部は基端を欠いているが、錐身と基部がほぼ対称形に近く、菱形を呈するものと思われる。

小括

竪穴覆土がローム上面に堆積する基本層と区別されること、また、断面観察によれば覆土がレンズ状の堆積を示さず、その上面が掘り込み面と一連の面をなすことから、本竪穴は埋め戻されたものと考え、墳内のはほぼ同レベルの覆土中に、裏面、あるいは表面を下にして分布していた土器の出土状況は、自然に混入・流入したものと考えにくく、意図的に配置した可能性が高い。以上のことから、本竪穴は、墓塚とするのが最も妥当と思われる。構築時期は、出土した土器がⅢ2a群であることから、その時期に求めてよいであろう。上層断面の観察から、P002→004→003の構築順序が確認できた。

第24節 P003小竪穴

竪穴の構造

D-5・6区の2区にまたがって所在する楕円形の小竪穴で、長さ138cm、幅96cmを計る。断面観察によれば、本竪穴はIIb層下面から掘り込んでおり、底面から掘り込み面までの高さは25cm前後である。北側の側面がP004小竪穴を切っている。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。底面中央から西寄りの部分と北東寄りの部分に、浅い凹みを確認した。覆土中からは、土器破片2点と円礫2点、礫割片1点を検出した。いずれも底面から10-20cmの高さに位置した。覆土は、黒色土、細かいローム粒を含む黒褐色土、ロームブロックの3層であった。

遺物

土器(図144-1・2) 1は、口縁部に平行する二条の貼付帯を巡らし、下方の帯を境に下方にLR横位、上方にRL横位の織文を施している。2は、深鉢胴下半の破片で、底部寄りに1条貼付帯を巡らしている。帯中央を境に、下方にLR横位、上方にRL横位の織文を施したのち、帯上と、破片上端の割れ口に近い器面に短刺織文を施している。

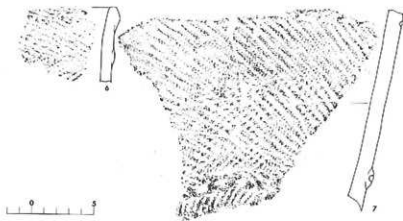


図144 P003小竪穴出土土器の拓本図 いずれも床面直上の覆土中出土。

小括

竪穴覆土はローム面上に堆積する基本層と区別されるもので、また、それがレンズ状の堆積を示さないことから、埋め戻しが行なわれたと考える。遺物・礫は、覆土中のほぼ同じレベルに位置しており、裏あるいは表を下にして出土した土器の状況から、これらの遺物が自然に混入したものと考えにくく、意図的に配置された可能性が高い。以上の2つのことから、本竪穴は、塞填の可能性もあると考える。構築の時期は、出土した土器からⅢ2 a群に求められよう。土層断面の観察からP002→004→003の構築順序を確認した。

第25節 P004小竪穴

竪穴の構造

E・D-5、E・D-6区の4区にまたがって所在するやや不整な円形を呈する竪穴で、長さ90cm、幅85cmを計る。底面は皿状をなし、浅い凹みを2つ確認した。北側がP002を切っており、南側がP003に切られている。断面観察によれば、Ⅱb層下面が張り込み面で、底面まで26cmを計る。覆土は、ロームを多く含む褐色土と黒褐色土の2層であった。

小括

竪穴覆土は、ローム面上に堆積する基本層と区別された。断面観察によれば、レンズ状の堆積を見せず、自然流入・堆積したものとは認められないので、埋め戻しが行なわれたと考える。Ⅲ 2 a 群の時期の墓塚と推定される P002 を切り、P003 に切られているので、本竪穴もⅢ 2 a 群の時期の墓塚である可能性が高い。土層面の観察から、P002→004→003 の構築順序を確認した。

第26節 P006小竪穴

竪穴の構造

D-6区に所在する径75cmの円形の小形竪穴である。P002の東側に20cmほど離れて位置する。ローム面からの深さは20cmで、底面は丸みを帯びた皿状をなす。底面西端には、黒色土のつまる小さな落ち込みを確認したが、これは覆土の状態から木の根による攪乱と判断した。覆土は、ロームブロックを含む褐色土で、その上面は木の根によって攪乱を受けて凹凸を見せていた。遺物の出土はない。

小括

竪穴の覆土は、ローム面上に堆積する基本層と区別されるものであることから、埋め戻された可能性が考えられる。形状、底面の状況は、P004小竪穴と良く似るが、性格は不明である。構築の時期は、近接するP002・003小竪穴の構築時期と推定されるⅢ 2 a 群と同じか、それに近いものであろう。

第27節 P005小竪穴

竪穴の構造

E-6区のローム上面で小形の浅い掘り込みを確認した。掘り進めたところ、壁の崩落はなく、遺存は良好であったが、長軸南東寄りの部分は掘り込みが浅く、木の根の攪乱を受けたためか底面が凹凸をなし、立ち上がりの確認が難しかった。

結果として、本竪穴は、E-6区に所在し、北西-南東に長軸のある長楕円の平面形をもつことがわかった。長さ1.6m、幅1.0m、ローム面からの深さ24cmを計る。底面は、北西寄りにわずかな凹みを検出した以外は、全体に平坦であったが、北西から

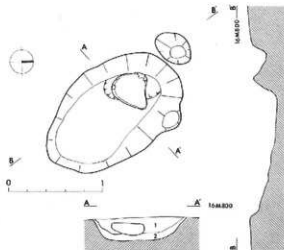


図145 P005小竪穴の平面図と断面図 断面図A-A：1粒質のある黒褐色土。2ローム粒を多量に含む褐色土。記載のないものは覆土中の礫を示す。



図146 P005小竪穴出土土器の断面図 埋土より出土した。貝殻文土器の口縁破片。

南東に緩やかに上傾していた。竪穴の底面近く、覆土である褐色土の上面から、平板な大形円礫を検出し、ほかに、この円礫直下から、貝殻文土器の口縁破片を1点検出した。

なお、竪穴外の北西方向に小形の握り込みを検出したが、内部にはローム粒を多く混じえた黄褐色土が詰まり、固くしまっていた。その性格、あるいは本竪穴との関係は不明である。

出土遺物

土器(図146) 口唇から口唇下方の器面に、3条の連続する刻みをもつものである。口唇断面は、やや尖り気味の形状を呈する。内外ともナデを施しており、外面は、火熱によるものか、表面がもろくなっていた。I1群に分類できる。

小括

竪穴覆土は、ローム面上に堆積する遺跡の基本層とは区別されるもので、埋め戻しされた可能性が考えられる。覆土中からはⅠ1群土器が出土しており、本竪穴はⅠ1群の時期以降に構築されたものであろう。ただし、近接して掘り込まれている同様な小竪穴のいくつかはⅢ2a群の所産と判断されるので、本竪穴もそれらの小竪穴の時期に平行するものかもしれない。

第28節 P007小竪穴

竪穴の構造

F-8区をローム面まで下げる過程で、多孔質の円礫が黒色土中に3個並んだ状態で出土した。礫の周辺について試掘を行なったところ、礫の下方にロームに達する掘り肩を確認したため、これらの礫を残しつつ、区全体をローム面まで掘り込んだ。

結果として本竪穴は、F-8区に所在し、楕円形の平面形を呈する長さ80cm、幅50cmの小形の掘り込みであることが判明した。ローム面からの深さは8cmを計る。底面は平坦で、壁は垂直に近い立ち上がりを見せる。覆土は黒色土であった。3個の円礫は、竪穴底面から20cm上方に並んでいた。

小括

本竪穴の上方に並ぶ礫が、本竪穴と関連するものとした場合、竪穴は埋め戻しされた可能性が高い。その場合には、墓塚の可能性も考えられる。竪穴からやや離れてⅢ2a群土器を出土した小竪穴が分布しており、本竪穴も推定される掘り込み面の高さを考えあわせれば、Ⅲ2a群があるいはそれに近い時期の所産であらう。

第29節 P008小竪穴

竪穴の構造

E-5区をローム面まで掘り下げた段階で、P008小竪穴の西方に小形の落ち込みを検出した。

調査の結果、本竪穴は、E-5区に所在し、70×70cmの不整の円形を呈する深さ8cmの浅い掘り込みであると判明した。底面は平坦であるが、南東半はやや凹凸を見せ

ていた。覆土は褐色土1層であった。底面の南寄りの壁際に、やわらかな黒色土の詰まる小形の落ち込みを検出したが、断面観察から、この落ち込みは堅穴の覆土を切っていることがわかった。もうい壁の状況や、内部に詰まるやわらかな土層から、この堅穴内の落ち込みは、木の根による攪乱であると判断した。

小括

堅穴内の覆土は、ローム上に堆積する基本層とは区別されるもので、埋め戻しの可能性も考えられよう。しかし、堅穴の性格については、明らかにしがたい。近接して同様な小堅穴が分布しており、そのいくつかはⅢ2 a 群の所産と判断されるので、本堅穴も、Ⅲ2 a 群かそれに近い時期に構築されたものかもしれない。

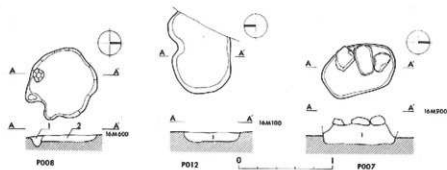


図147 P008・P012・P007小堅穴の平面図と断面図
P008の断面図A-A：1探土、2褐色土。P012の埋土は、褐色土。P007の埋土は褐色土、記載のないものは覆土上面の経石。

第30節 P012小堅穴

堅穴の構造

X R80堅穴の側壁付近から南に伸びる地割れの平面形を確認するため、ローム面の清掃を行なったところ、この地割れに切られた落ち込みを確認した。

調査の結果、本堅穴は、F-5区に所在し、遺存する部分の長さ86cm、幅60cmを計る。本来は長楕円形を呈するものであろう。ローム面からの掘り込みの深さは10cmと浅い。底面は平坦で、壁は垂直に近い立ち上がりを見せる。覆土は褐色土1層である。

小括

覆土は、ローム面上に堆積する基本土層とは区別されるもので、埋め戻しされた可能性も考えられる。竪穴の性格については不明である。近接して分布する同様な小竪穴群のうち、Ⅲ 2 a 群の時期の所産と推定されるものがいくつかあるので、本竪穴も、Ⅲ 2 a 群あるいはそれに近い時期に構築されたものであろう。

第31節 P 009小竪穴

竪穴の構造

J-5区をローム面まで掘り下げた段階で、長楕円形の黒色土の落ち込みを確認した。長・短軸の2つの断面観察用の壁を設定したが、過失によってこれを失い、採掘できなかった。

調査の結果、本竪穴は、J-5・K-5の2区にまたがって所在し、やや不整な長楕円形の平面をもつ小形の竪穴であることがわかった。長さ2.45m、幅1.30mを計り、ローム確認面からの深さは最大で25cm前後と浅い。底面はしまりがなく、また、北半分が低く段差をもって掘り込まれていた。壁は緩やかな立ち上がりを見せるが、著しい崩落はなかった。覆土は、まじりのない黒色土であった。遺物は出土しなかったが、

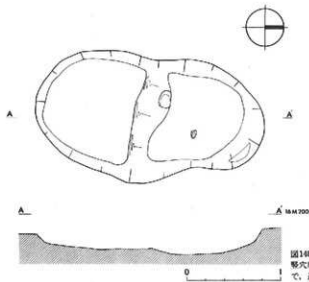


図148 P009小竪穴の平面図と断面図
竪穴断面から、円壁が二点出土しただけで、遺物は検出できなかった。

底面に円礫が2個出土している。

小括

本竪穴は、炉址あるいは焼土が認められず、底面にしまりがなく中央に段差をもつことから、居住遺構とは考えにくい。また、覆土がまざりのない黒色土で、基本層であるⅡa・Ⅱb層の流入・堆積であった可能性が高く、埋め戻しが行なわれたとは考えにくい。性格・構築の時期については不明である。

第32節 P001・P010小竪穴

竪穴の構造

P001は、K-8区に、P010は、K-11に所在する。ともに細長い溝状の掘り込みである。開口部での長さ、幅は、それぞれ両者とも1.35m、0.22mを計る。P001は、

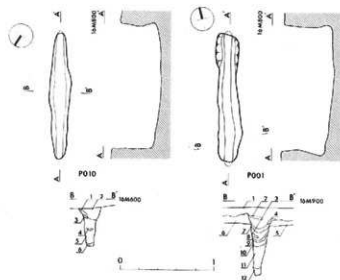


図149 P010・P001小竪穴の平面図と断面図 P010断面図 : 1・5ロームブロック, 2・4・6黒色土, 3ローム粒まじりの黒褐色土, P001断面図B-B: 1Ⅱb層, 2・4・11ロームブロック, 3ロームブロックまじりの褐色土, 5Ⅲ-W層, 7・9黒褐色土, 8黒色土, 10黄褐色土, 12ローム粒を含有黒色土。

等高線に直交して掘り込まれており、南寄りの壁が、底面近くで崩落し、袋状の広がりを見せていた。P010は、等高線に平行して掘り込まれており、坡口の北側および南北の底面近くの壁に崩落を認めた。縦断面は袋状を呈する。覆土は、両者とも、黒色土とローム壁の崩落土が互層をなすものであった。

小括

溝状に細長く、深い掘り込みをもち、覆土がロームと黒色土の互層をなす点から、両壁ともTピットと判断する。P001については、掘り込み面をとらえることができ、それがⅢ2a群の壁掘り込み面とはほぼ同じ面であることから、Ⅲ2a群を前後する時期の構築であろうと考える。P010も、P001と規模・形状の点で良く似ており、同じ時期の所産と考える。

第33節 F004屋外炉址

炉址の構造

I—6区の包含層を掘り下げる過程で、規則的な配列を見せる円礫群を黒色土中に確認した。円礫はほぼ半円状に連なっており、その内部に焼土が認められたので、これを石罫炉と判断した。炉は、その半分を過失によって失ってしまったが、本来は円

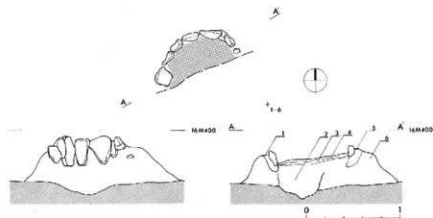


図150 F004炉址の実測図 包含層中に発見した石罫い炉址。左側は南方向から見た平面図、右側のA-A'は断面図で、1・5粘質のない黒色土、2焼土、3焼土、4黒色土、6Ⅲ・Ⅳ層、記載のないものは炉石、縮尺1/20。

形に巡っていたもので、遺存する礫が形成する弧の最大径は、45cmを計る。径30cm前後の円形の浅い掘り込みを行ない、周縁に礫を配しており、礫は長円形のを縦に差し込んでいた。

炉の一部を検出した時点で、付近や炉の下方を精査したが、これに関連するような掘り屑、固さの違いや色の違いによって区別される面は確認できなかった。

小括

炉の周囲に、これと関連するような掘り屑を確認できなかったので、本炉が竪穴に伴うものとは考えにくい。ただし、この炉に関連して、例えば掘って立ての上屋・施設が存在した可能性は、黒色土中で柱穴の確認が困難であることからすれば、充分に考えられるに違いない。構築された時期は、その出土レベルから考えて、Ⅲ 2 a 群に前後するものであろう。

第34節 F001・002・003・005屋外焼土

焼土の位置と状態

F001・002・003・005はそれぞれ、包含層の調査中に黒色土中から検出した焼土である。F001・002・003は、E-10・F-11の2区にかけて、北西-南東に連なるように分布していた。F001は、80×40cmの広がりを持ち、ローム面から25cm上方に位置していた。F002は、70×70cmの広がりを持ち、ローム面から15cm上方に位置していた。F003は、50×50cmの広がりをもつが、その分布レベルは不明である。それぞれの焼土の厚さは、記載がなく不明である。F005は、K-5区で検出した。100×60cmの広がりを持ち、ローム面から10cm上方に位置していた。焼土の厚さは、記載のため不明である。このF005の1mほど東に、P009小竪穴が位置する。以上の焼土の周辺やその下方に、何らかの施設や掘り込み・遺物は検出できなかった。それぞれの位置関係や形状については、図8を参照されたい。

小括

発掘中の所見によれば、これらの焼土は、その場で火が焚かれ、土層が赤化したものであり、屋外炉址と考える。

第35節 P—8区礫群

礫群の位置と出土状態

0—7区のローム面に近い黒色土中で検出した。70×70cmの範囲内に、円礫・角礫がまとまって出土している。断面三角形の擦り石が1点混じっており、取り上げたが、過失により資料は紛失してしまった。焼土・炭化物は出土していない。礫群の付近や下方を精査したが、これに関連するような掘り屑や遺物は一切検出できなかった。

小括

礫群は、ロームから数cm上方のⅢ・Ⅳ層中から出土しており、その出土位置は、遺跡の包含層中におけるⅠ1群土器の出土位置と大差ない。このことから、礫群は、Ⅰ1群に近い時期の所産であろうと考える。礫群の性格については不明である。

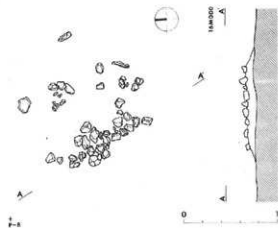


図151 P—8礫群の平面図と断面図 礫群にともなう掘り込み等は確認できなかった。縮尺1/40。

表1 千歳6遺跡における遺物出土数

	土 器		土 質 品		割片石器		礫 石 器		計				
	床面	床面直上	覆土	床面	床面直上	覆土	床面	床面直上		覆土			
S R 25	2	1	662	-	-	2	1	-	11	-	6	685	
X L 25	2	18	184	-	-	-	2	8	-	1	4	219	
R G 05	4	5	195	-	-	-	4	1	6	-	2	3	220
T L 12	4	1	158	-	-	-	4	-	2	-	2	2	173
C B 75	10	4	159	-	-	-	1	1	4	-	2	1	182
M T 05	2	6	273	-	-	-	-	-	4	1	-	3	289
X R 80	4	-	176	-	-	-	-	-	2	-	-	2	184
W I 65	-	-	114	1	-	1	-	-	2	-	-	2	120
M B 05	3	1	64	-	-	-	1	2	-	-	1	2	74
X J 40	7	10	97	-	1	1	-	-	4	-	-	-	120
K E 12	15	23	579	1	-	1	5	-	14	-	1	1	640
R Z 25	-	2	248	1	-	-	1	-	11	-	1	2	266
S P 38	4	27	1,088	-	-	5	2	-	39	-	2	6	1,173
N O 31	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
D C 12	4	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
Z R 40	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
E R 34	-	1	22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	23
E L 12	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
K L 25	8	1	37	-	-	-	-	-	-	-	-	-	46
A B 12	-	-	158	-	-	2	-	-	1	-	-	-	161
B M 75	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2
F U 69	8	3	156	-	-	-	-	1	1	-	-	2	171
P 001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
P 002	-	10	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	11
P 003	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
P 004	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
P 005	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
P 006	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
P 007	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
P 008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
P 009	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
P 010	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
P 011	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
P 012	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F 001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F 002	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F 003	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F 004	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F 005	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
礫 器	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
計	82	118	4,378	3	1	12	18	8	111	2	12	36	4,781

遺構より出土した遺物の床面・床面直上・覆土中ことの出土数を、名遺構別に示した。

第3章 包含層出土の遺物

はじめに

千歳6遺跡では、5×5mの調査区を159カ所設定し調査した。各調査区とも遺構確認面まで掘り下げ、これから検出した遺物を包含層出土遺物としてとりあげ、遺構内出土遺物と区分した。すべての調査区から遺物が出土した。遺物の内容は、土器、石器、土製品、に区分でき、その出土総数は11,131点である。個々の出土数を、表2に示した。

表2 千歳6遺跡包含層出土遺物点数

種 別	出 土 数
土 器	10,709
石 器	380
土 製 品	21

本章では、これら出土遺物に若干の分類を設け、記載を行なう。

第1節 土器

土器の出土数は、完形土器、接合・復元土器もそれぞれ1点として集計すると、10,709点である。すべて縄文土器である。時期別には、早期、前期、中期、後期に大別できる。中期終末から後期初頭に位置する土器が最も多く出土し、早期、前期の土器は全出土数の0.05%にすぎない。特に、前期の土器については、円筒下層B式に属する口縁部2点と、胴・底部破片が20点（1個体分）出土したのみである。全資料中、口縁から底部まで遺存し、接合・復元できたものも含め、完形土器として取り扱えたものは3個体である。

出土状況

土器は、すべてが破片の状態出土した。いわゆる一括出土の状態を示すものはないが、一部欠損部位のある復元可能な土器が3点出土した。いずれも小形の深鉢形土器である。その出土状況についての、特別な所見はない。破片の出土状況については、大・小壺穴の周辺に集中する傾向がある。特に、台地の縁辺部に顕著であった。壺穴

调查区	县 益 文		其 阳 固 阳 内 黄 晋 天 神 山	北 麓	组 2 a 群			金 市	沈 县	无 文 士 县 品
	口 数	别			口 数	别 A	别 B			
H-7	-	-	-	-	2	1	24	-	-	-
8	-	8	-	-	1	-	22	-	-	1
9	-	1	-	-	1	2	25	-	-	-
10	1	10	-	-	-	1	23	-	-	-
11	-	2	-	-	1	-	4	1	-	-
12	-	-	-	-	5	2	24	1	-	1
13	-	-	-	-	1	4	46	-	1	-
14	-	1	-	-	2	3	30	-	-	-
15	-	1	-	-	1	2	14	1	-	1
16	4	13	2	-	12	4	110	1	-	-
17	-	17	-	-	22	15	367	9	-	1
1-3	-	-	-	-	8	13	182	8	-	-
5	-	2	-	-	4	4	90	2	-	1
6	4	39	-	-	3	1	53	-	-	-
7	2	13	-	-	7	-	33	3	-	-
8	-	3	-	-	3	2	76	1	-	2
9	-	1	-	-	-	-	7	1	-	-
10	-	2	-	-	6	-	39	-	-	-
11	2	4	-	-	-	-	18	1	-	-
12	-	-	-	2	2	2	14	-	-	-
13	-	1	-	-	4	1	90	1	-	-
14	-	-	-	-	1	-	24	1	-	-
15	1	4	-	-	2	1	18	1	-	-
16	2	2	-	-	5	-	46	3	-	1
17	-	8	-	-	8	3	42	-	-	-
J-5	-	1	-	-	13	10	100	2	2	-
6	-	1	-	-	2	-	72	2	-	1
7	1	5	-	-	20	4	185	13	-	1
8	7	10	-	-	4	14	41	3	-	-
9	1	-	-	-	-	1	19	-	-	-
10	-	2	-	-	3	-	15	-	-	-
11	-	4	-	-	2	3	13	-	-	-
12	-	1	-	-	2	1	13	-	-	-
13	-	-	-	-	7	8	40	2	-	1
14	-	-	-	-	1	-	18	1	-	-
15	-	-	-	-	2	1	29	2	-	3
16	-	-	-	-	29	16	263	9	-	-
17	-	7	-	-	5	5	31	1	1	-
K-5	-	1	-	-	6	7	51	1	-	-
6	-	4	-	-	8	3	34	2	1	-
7	-	10	-	-	1	-	14	-	-	-
8	-	5	-	-	3	5	72	1	-	-
9	-	5	-	-	1	1	24	-	2	-

調査区	具 體 文		東	西	下	天	北	Ⅲ		Ⅱ		余	比	無文土器品
	口	形						口	形	形A	形B			
K-10	-	1	-	-	-	-	-	2	3	60	1	-	-	-
11	-	-	-	-	-	-	-	1	1	11	-	-	-	-
12	-	1	-	-	-	-	-	-	-	49	1	1	-	-
13	-	1	-	-	-	-	1	3	14	20	1	-	-	-
14	3	6	-	-	-	-	-	5	2	77	3	-	-	-
15	1	2	-	-	-	-	1	34	12	384	10	-	-	2
16	-	3	9	-	-	-	-	32	22	306	10	-	-	-
L-4	1	3	-	-	-	-	-	23	11	378	6	-	-	-
5	-	-	-	-	-	-	-	11	9	90	4	1	-	-
6	-	-	-	-	-	-	-	2	-	14	-	-	-	-
7	-	1	-	-	-	-	-	-	2	24	-	-	-	-
8	-	-	-	-	-	-	-	5	-	22	-	-	-	-
9	1	3	-	-	-	-	-	-	1	10	-	-	-	-
10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12	-	2	-	-	-	-	-	2	1	16	-	1	-	-
13	-	-	-	-	-	-	-	2	1	16	1	-	-	-
14	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1
M-5	-	5	-	-	-	-	-	7	7	94	6	2	-	-
6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11	2	-	-	-
7	-	2	-	-	-	-	1	10	3	82	1	-	2	-
8	-	-	-	-	-	-	-	3	12	58	2	-	-	-
9	-	8	-	-	-	-	-	3	1	64	1	-	-	-
10	-	10	-	-	-	-	-	2	1	20	-	-	-	-
11	-	1	-	-	-	-	-	5	2	39	-	-	-	-
N-5*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-
6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	-	-	-	-
7	-	-	-	-	-	-	-	5	-	13	2	1	-	-
8	1	1	-	-	-	-	-	-	-	9	-	-	-	-
9	-	2	-	-	-	-	-	7	1	45	4	2	-	1
O-3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6	-	-	-	-	-	-	-	2	-	24	1	-	-	-
7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8	-	-	-	-	-	-	-	1	-	4	-	3	-	-
P-3*	-	-	-	-	-	-	-	3	4	27	2	-	-	-
Q-3	1	4	-	-	-	-	-	-	-	8	-	-	-	-
4	-	7	-	-	-	-	-	1	-	6	-	-	-	-
計	63	450	26	22	7	22	756	455	8,565	266	20	16	41	21
総計	10,730													

は、台地の縁辺部に位置しており、堅穴のない台地中央部での土器の分布は薄い。これは、石器および礫の分布傾向とも一致する。

これら、調査区別、時期別の土器片の出土数を表3に示した。

分類

出土した土器には、早期、前期、中期、後期の大別がある。前章で、これに従来の型式区分に基づいた7群別を設けた。

早期の土器には、貝殻文と東鋼路系の土器があり、これをⅠ1群、Ⅰ2群とした。前期の円筒土器はⅡ群とした。中期の土器は、後案に位置するものをⅢ1群とした。出土土器の主体を占める終末期の土器については、これに近接する後期初頭の土器との区分の不明瞭なものが含まれることから、これを時期的に一括してⅢ2群とし、さらにこれを型的に3群に分けた。つまり、西股遺跡出土土器に類似の連続短刻線文を主体とする土器の一群と、トコロ6類など、北筒式に属する土器の一群および入江田類などの余市式土器の一群である。これを、それぞれⅢ2 a群、Ⅲ2 c群、Ⅲ2 b群土器とした。

Ⅲ2 a群土器については、西股遺跡のノグッパⅡ式の他、煉瓦台式、静狩式などの型式内容とも近接するが、資料数の制約もありまだ十分に整理できていない型式であることから、ここでは、これら諸型式の最も特徴的な文様要素を指標として、これに、便宜的な「短刻線文土器群」の名称を与えた。Ⅲ2 b、Ⅲ2 c群土器については、従来より用いられている北筒式土器、余市式土器の名称を使用した。本項では、以上の群別にさらに若干の類別を設け、各土器群の内容を説明してゆく。

類の設定にあたっては、各破片を部位別に分け、各部位における文様要素の異同に従って分類を行なった。この場合、各破片内の縄文を除く文様要素が、単一であるものを抽出し分類を決定したため、文様要素が同一破片内に複数存在している場合には、便宜的に、複合する二者あるいは三者の類（文様要素）のいづれかの「重類」として記載を行なった。

短刻線文土器群（Ⅲ2 a群）

ノグッパⅡ式、煉瓦台式、静狩式の型式内容に類似する土器を一括した。文様要素の観察の結果、これに7類を認めた。a類：連続短刻線文のある土器、b類：縄線文のある土器、c類：無文帯のある土器、d類：縄文のある貼付帯の土器、e類：縄文のみで構成した土器、f類：沈線文のある土器、g類：無文土器である。また、各期間の複合には、2重類（a'、b'類）を認めた。

連続短刻線文のある土器（a類） 棒状工具あるいは縄の押し引きによって施す連続短刻線文のあるものを本類とした。これには、短刻線文が貼付帯上にあるものと、貼付帯を欠くもの、さらにその両者が共存するものの3種がある。



図152 包含層出土器標本図 田2・群土器の連続彫刻線文のある土器（a
 皿）のうち、胎土層上に連続彫刻線文のあるもの（1種）を採集した。すべて片
 破断破片である。縮尺1/3。

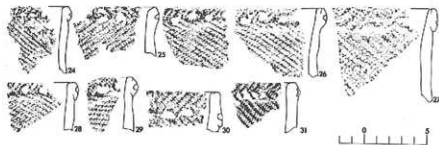


図123 包含層出土器片等 図2・群土器の連続短刻線文のある土器（a類）のうち、貼付帯上に連続短刻線文のあるもの（1種）を採出した。26～29の縄文は、口唇側が横位、胴部側を縦位回転でおこなっている。すべて口縁部破片。図尺1/3。

イ種）貼付帯上に連続短刻線文のあるもの（図152～160-1～195）

口縁部破片 1～5は、連続短刻線文が横位だけでなく、斜位、縦位方向にも垂下する。1にはボタン状の貼り付けがある。4の斜位方向の貼付帯は、地文の施文後に貼り付けを行ない、さらに貼付帯上に地文と同一の縄文を施文したものである。また、口唇上にも縄文がある。3は、横位の貼付帯を境に羽状縄文を構成するが、貼付帯下はLR原体の縦位回転による。

6～61は、横位方向の短刻線文で文様を構成する。口唇部の形状は、すべて平坦でわずかに内傾する。貼付帯は全例口縁端に位置する。30は、多少下位にめぐる。貼付帯の縄文には2種があり、6～31・41は貼付帯上の縄文が羽状をなし、短刻線文をこの羽状縄文の交叉部に施文したものである。羽状縄文の原体は、6～25・30・31が異原体の横位回転で行なっているのに対し、26～29・37は、口唇側を横位回転で行ない、胴部側を縦位回転で行なっている。31の短刻線文は、先端が二枝に分かれた原体を用い、刺突文的な施文を行なっている。32～36・38～43・45～61は、貼付帯上の縄文が斜行する。貼付帯の位置は、前者と同様で、51・52が多少下位にある。縄文は、すべて原体の横位回転による。ただし、54はRLの横位回転と縦位回転で縦の羽状縄文を構成する。54～61の短刻線文は、先端が二枝に分かれた原体による。

62～63は、縄文原体による短刻線文の土器で、口唇の形状や貼付帯の位置は、前者と異なるところがない。短刻線文は、甲筋原体に設けた結節部分を用いて、これを押引くように施したと考えられる。62については、同一個体の胴部破片（b・f～n）も示した。63の貼付帯は、口縁下にめぐる。

胴部破片 64～74は、貼付帯をとともう短刻線文が横位だけでなく、斜位・縦位にもあるもの。64は、横位にめぐる胴部の短刻線文を中心に、頭部と胴部に斜位・縦位の短刻線文を施している。交点には、ボタン状の貼り付けがある。66は、縦の羽状縄文（LR縦とLR横位回転）の境に短刻線文がある。

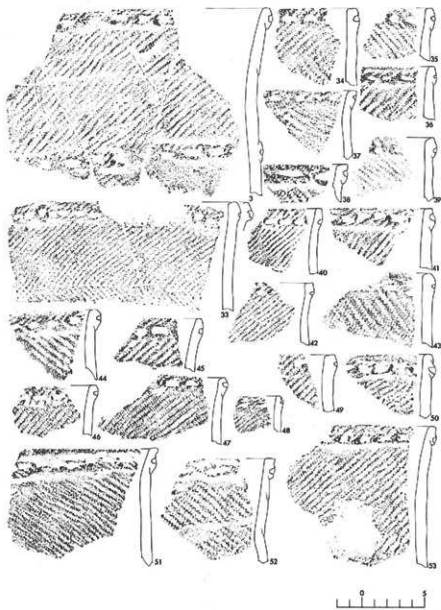


図154 包含層出土器標本 田2a群上部の連続斜線文のある土器（a類）のうち、胎体上に連続斜線文のあるもの（1枚）を明示した。すべて口縁部破片で、縮尺は1/3。

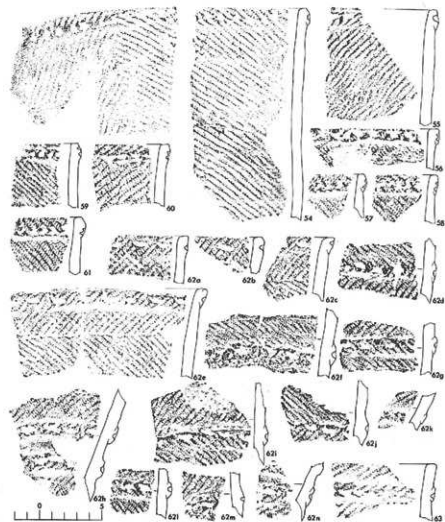


図155 包含層出土土器断片 田2a群土器の連続斜刻線文のある土器（a類）のうち、粘付帯上に連続斜刻線文のあるもの（1種）を図示した。62・63の断面図は、縦の圧痕による。縮尺1/3。

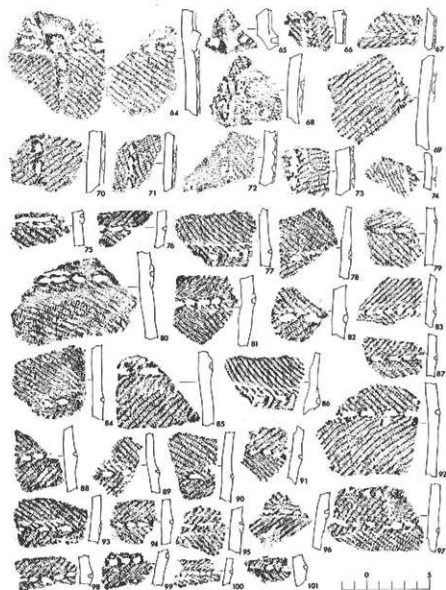


図156 包含層出土器残片 Ⅱ2・群土器の連続形刺線文のある土器(4類)のうち、貼付帯上に連続形刺線文のあるもの(1種)を図示した。いずれも別部で、64-74は、横位だけでなく縦位・斜位にも貼付帯が施される。縮尺1/3。

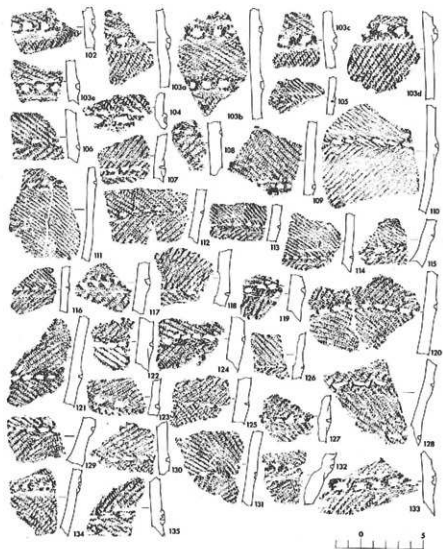


図157 包含層出土器碎片 Ⅱ群土器の連続形所縁文のある土器（*印）
 のうち、粘付帯に規則的な文のあるもの（+印）を同示した。すべて側面視で、
 粘付帯は横位にのける。図尺1/3。



図158 包含層出土器拓本 Ⅱ2・群土器の油紋彫刻施文のある土器（a類）のうち、粘付面に彫刻施文のあるもの（1種）を図示した。すべて断面図片。
縮尺1/3。

75～135・137は、貼付帯上で羽状をなす織文の境に、横位の短刻線文がめぐるもの。短刻線文の個々の刻みは、概して短かいものが多く、刺突文的である。特に、111～118は幅のせまい棒状工具によっている。131・133～135は、先端が二枝に分かれた工具を用いたものである。羽状織文の構成は、103を除くすべてが捻りの異なる原体。横位回転で行なわれている。103a～eは同一個体で、LRの横位回転と縦位回転で羽状をつくる。

136・138～182は、地文と貼付帯上の織文が同一方向の斜行織文であるもの。貼付帯を境に、上下の織文が異なった原体を用いて行なうものと、同一原体を用いたものの二者がある。後者が一般的である。前者に属するものには、148と166がある。166は、口縁側がRI縦位回転で、胴側がLRの横位とRLの横位で一部羽状をつくる。捻りの種類は、単節のみが確認できた。LRとRLの割合は、ほぼ等しいようである。短刻線文の刻みは、刺突文的なものが多い。169～182は、先端の二枝に分かれた原体を用いた例である。

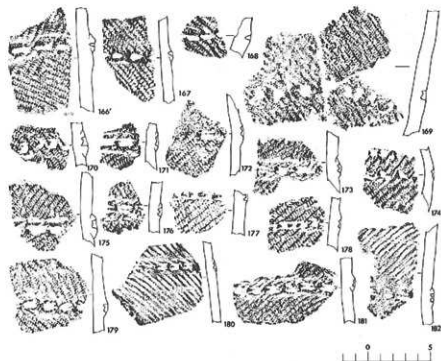


図159 包含層出土土器断片 Ⅱ2a群土器の逆反短刻線文のある土器(a項)のうち、貼付帯上に短刻線文のあるもの(1種)を図示した。すべて断片断片。縮尺1/3。

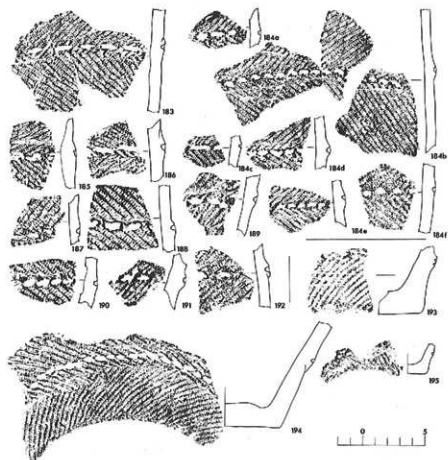


図160 包含層出土土器拓本 Ⅲア群a類I種の刻線と底部破片。

183～192は、結節原体(単節)を用いた短刻線文のある土器で、これにも短刻線文を境に縄文が羽状をなすものと、斜行のものとの二者がある。184 a～hは同一個体で、羽状縄文をつくる例。188～192は斜行縄文で、貼付帯の上下とも同一原体による。短刻線は概して長いものが多い。これは、単に原体を圧痕するだけでなく、圧痕と同時にこれを押し引くことにより棒状工具によると同様の効果を得たものであろう。特に、183・186は長い。

底部破片 193～195に示す3例のみである。底面部分を欠くものには、129・132がある。193は、LR横位縄文が底面近くまである。貼付帯上の短刻線文は、先端の二枝に分かれた工具による。194は、大形土器の底部で、貼付帯を境に縄文が羽状をなす。この破

片では、底部より胴部に向けて縄文の施文の行なわれていることがわかる。縄文は、LRとRLの横位回転による。195は、小形土器の底部である。

器形・文様構成のわかる例 6は、口縁から胴下半部まで遺存する破片で、口縁と胴部にそれぞれ1条の貼付帯がある。縄文は、貼付帯上の短刻縄文を境に羽状をなす。頸部のわずかにくびれた器形。この他、SP38竪穴覆土土器(拓本図100-28・37)がある。28は、口縁から胴部にかけての大形破片で、頸部にくびれがあり、胴部はわずかにふくらむ。短刻縄文は、口縁に横位に1条めぐり、37も同様の器形で、口縁、頸部に横位の短刻線文が平行にめぐり、胴部には、「し」の字状の短刻線文がみられる。胴下半部にまで短刻縄文のあるものには、図101-52などがある。

ii種) 貼付帯のない連続短刻線文の土器(図161-196-224, 図162-225-269)

口縁部破片 196-201は、横位の他斜位、縦位の構成をとる。短刻線文、201は、斜位方向にのみ短刻線文がある。縄文は、全例横位回転のLRとRLで、短刻線文を境に縄文が羽状をなすものはない。比較的小形の土器が多い。

202-223は、口縁端に横位の短刻線文のあるもの。これも、薄手で小形の土器が多い。口唇のつくりは平坦で多少内傾する。202-206は、短刻線文を境に縄文が羽状をなす。ただし、204・206は多少下位に位置する。縄文は、摺りの異なる原体による。

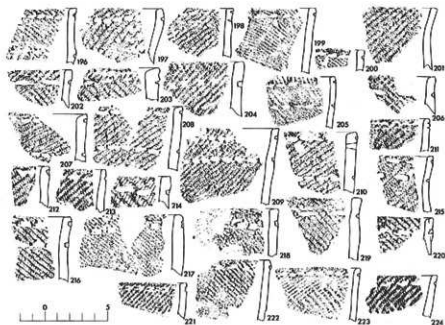


図161 壺倉層出土土器拓本 Ⅲ2a群ii種口縁部破片。

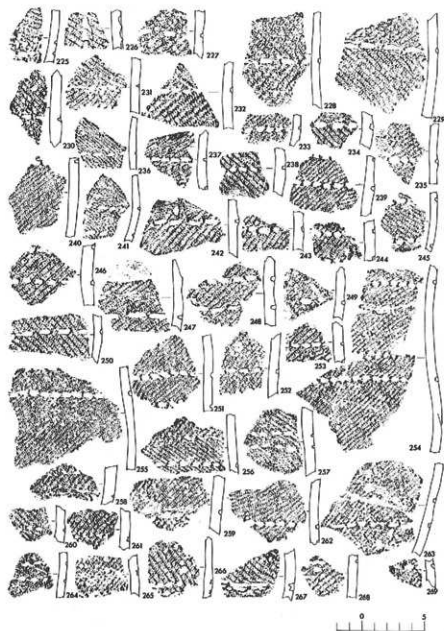


図162 包含管状土器拓本 Ⅱ2・群A 堀山様の銅鏡破片。

205・207～210・215・216には、2条の短刻線文がある。縄文は、全例横位回転によるLR・RLの斜縄文で、頸部で羽状をなすものが数例ある。本種は、貼付帯をもたないのを特徴とするが、断面が短刻線文の施文によって多少膨隆するため、図ではこれが貼付帯のようにみえる。220については、粘土の剥離が観察できたが、器面が平坦なため、これを貼付帯とはしなかった。

224に示したのは、縄の結節原体を用いた短刻線文のある土器で、この1例にのみ認めた。

胴部破片 225・226は、斜位・縦位の短刻線文のあるもの。図示したのは2例であるが、この他に11点を認めた。

227～269は、横位の短刻線文のみがある破片で、短刻線文を境に縄文が羽状をなすものと、斜行をなすものの二者がある。前者の場合、同一原体を縦位、横位に回転するものではなく、全例異原体の横位回転による。短刻線文が、複数段めぐるものも少なくない。256は、頸部、胴部、胴下中部にそれぞれ短刻線文がめぐる。253・257のように、かなり近接したものもある。261・265～267は、先端の二枝に分かれた原体を用いたものである。

器形・文様構成のわかる例 SP38竪穴覆土出土土器(拓本図101-45,実測図106-2)は、器形、文様構成の全体がわかる。器形は、頸部がわずかにくびれ、胴部のふくらむ鉢形である。短刻線文は、胴以下に5条めぐる。地文の縄文は、胴部で羽状を構成し、この境目に短刻線文を付けるが、他の短刻線文については斜行縄文地に挿出している。各短刻線文は平行にめぐり整然としている。

iii種) 貼付帯をとまなう短刻線文と、それを欠く短刻線文のある土器(図163-270～292)

口縁部破片 270～278の9例がある。いずれも口縁端に横位の貼付帯がめぐり、頸部に貼付帯のない短刻線文がめぐる。273・274には、胴部にも貼付帯がある。274a～cは、同一原体(LR)の横位。縦位回転によって多段の羽状縄文をつくる。貼付帯を欠く短刻線文は、角押文的である。口唇の形状は、これまでの本類土器と変わらない。

胴部破片 279～292に示した。貼付帯のある短刻線文が横位にめぐるのに対し、貼付帯のない短刻線文が斜位、縦位に垂下するものがほとんどである。横位の貼付帯を境に縄文が羽状をなす例が多い。279は、底部近くの破片で、最下段の短刻線文が貼付帯を欠く。288は接合しないが、同一個体である。

器形・文様構成のわかる例 273は、頸部のすばまる筒手の器形で、口縁端と胴部に貼付帯のある短刻線文が横位にめぐり、頸部と胴部の貼付帯下に貼付帯のない短刻線文がめぐる。また、単位は不明だが、口縁から胴部にかけて縦位に短刻線文のある貼付帯が垂下する。

TL12竪穴埋土出土土器(拓本図35-13)は、ほぼ前例と同様の器形と文様構成をとる。ただし、縦位と斜位の短刻線文には、貼付帯をとまなわない。

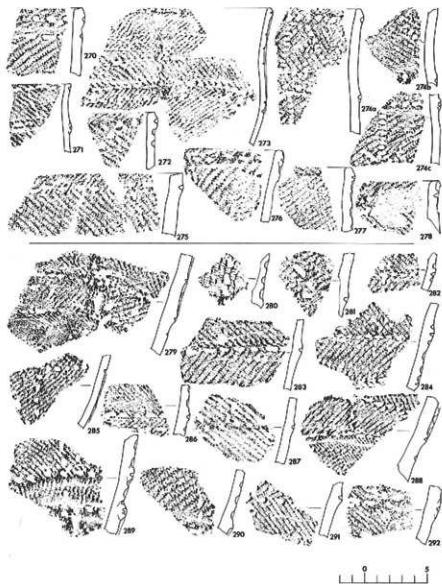


図163 包含層出土器拓本 群a群b 埴田様土器の口縁部と腹部破片。
縮尺1/3。

他の文様要素と複合する連続短刻線文の土器 (a'類) 貼付帯の有無にかかわらず、連続短刻線文が他の文様要素と複合しているもので、これには5種を認めた。

i種 縄線文 (b類土器) と複合するもの (図164-293)

293に示す1例のみに認めた。口縁端に貼付帯のある連続短刻線文が1条めぐり、その下に縄線文が横位に1条ある。短刻線文は、細い棒状の工具による。地文の縄文は、短刻線文を境に斜状をなす。

ii種 縄文のある貼付帯 (c類土器) と複合するもの (図164-294)

294に示す1例のみに認めた。連続短刻線文は、口唇下に貼付帯をともなって横位に



図164 包含型外土器拓本 Ⅱ 2 a類 c類 i種(293)、ii種(164-294)、
iii種(295-296)、iv種(297-303)、v種(304-315)

1条めぐる。頸部のくびれる部分に、短刻線文のない縄文のみの貼付帯が横位に1条めぐる。貼付帯上の縄文はRLで、上下の地文の斜行縄文と連続し、貼付帯の貼り付け後に施したものである。

iii種) 沈線文 (f類土器) および無文帯 (c類土器) と複合するもの (図164-295・296)

295・296の2例に認めた。295は、頸部から胴部にかけての小形土器の一部。連続短刻線文は、貼付帯を欠き横位にめぐる。沈線文は、破片の上端にわずかに観察できた。296は、屈曲の強い小形土器の胴部破片で、下半部に刺突的な短刻線文(短刻線文とは区別されるものかもしれない)があり、その上部に弧状の沈線を認める。沈線の上下は無文帯になっている。断面形で見ると、中央で屈曲していることから、沈線文を含む無文帯は、頸部の可能性が高い。

iv種) 突コブ文 (III 2 c群土器) と複合するもの (図164-297~303)

297~303に示したもので、すべて同一個体である。III 2 c群土器の特徴である突コブ文とIII 2 a群土器に特徴的な連続短刻線文が同一個体中に共存するもので、AB12堅穴埋土出土土器(拓本図126-2~3)も、これと同一個体である。

口管部の貼付帯は、断面が三角形に整形され、この上に棒状工具による連続短刻線文を境に、上下の縄文が羽状をなす。上はLR、下はRLの横位回転である。突コブ文は、器外面から内面に向けて、ほぼ水平に刺突しており、貼付帯下に横位にめぐる。刺突の間隔は2~3cmで、内面への突降は弱い。粘土・色調はIII 2 a群土器のそれと変わるところがない。

v種) 無文帯 (c類土器) と複合するもの (図164-304~315)

304・305は、頸部に無文帯をもつもので、他は胴部あるいは胴下半部の無文帯である。307は、縄文および短刻線文の施文後に磨削しがおこなわれた例で、短刻線文は、縄原体による。306も同様の例である。311~313は、同一個体である。

縄線文のある土器 (b類) 本類土器は、縄文原体を器面に押控し、直線的な文様を構成するもので、短刻線文同様、貼付帯をとまなうものと、欠くもの二者がある。両者が一個体中に共存するものは、包含層中にはないが、遺構出土資料中に1例認められた。

縄線文の原体は、全例が単節原体によっており、LR、RL両方の撚りを認めた。地文の縄文が横位回転の場合には、同一原体が縄線文の原体としても用いられるように観察できた。

i種) 貼付帯のない縄線文の土器 (図165-316~353)

口縁部破片 317~333に認めた。堅穴埋土出土量に比べると少ない。

縄線文と地文の縄文との撚りの関係は、321・324・318・321・326~330・332が同

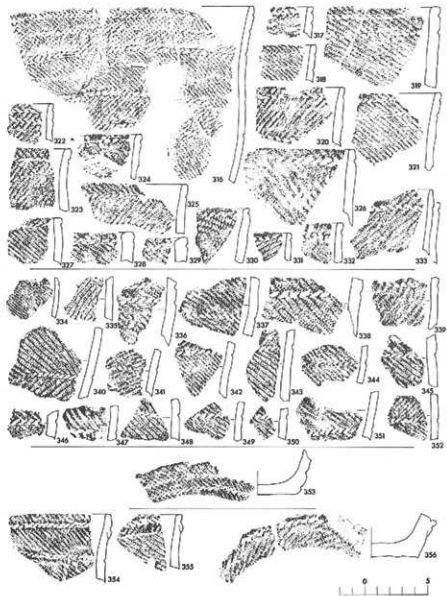


圖165 包安出土土器拓本 Ⅲ 2 a 群 Ⅲ 類 (316—353)
 Ⅱ 種 (355—356), Ⅲ 種 (354)

一摺りのRL原体を用い、319・323・325を除く他のすべてがLR原体を用いている。319は地文がRLで縄線文がLRである。323・325は同一個体で、RLの横位回転と縦位回転による羽状縄文の境にRL原体による縄線文がある。333は、釜状口縁を呈するが、本群土器のなかでの出現は稀である。

胴部破片 334～352を図示した。334・335の2例に縦位方向の縄線文を認めた。334・薄手の小形土器破片で、上部に2条のRL原体による縄線文があり、これから垂下する「ハ」の字状の縄線文がある。原体は同じで、地文もRLである。355は、縦位の羽状縄文の境に押捺したLR原体による縄線文である。

336～352は、横位方向の縄線文のある例で、縄線文の原体はRLが多く、LRを使用したものは、337・334の2例のみである。

底部破片 353の1例にのみ認めた。地文はRLで、縄線文もRLによる。押捺には多少回転をともっており、短かい羽状をなす。

器形・文様構成のわかる例 316は、頸部のすばまる薄手の深鉢形。口縁から胴下半にかけて、横方向に多段の羽状縄文が施され、交叉部に横位の縄線文が5条めぐる。縄線文の原体は5条ともRL。各条とも平行しており、整然とした地文が行なわれている。圧痕も深い。

ii種) 縄線文が貼付帯にあるもの(図165-355・356)

口縁部破片1例と底部破片1例に認めた。胴部破片中には、該当するものがなかった。355は口縁で、口縁端に横位の貼付帯がめぐり、この上に縄線文の押捺がある。縄線文はLR原体を用い、貼付帯上の縄文原体と同一である。貼付帯下の縄文は、同一原体の縦位回転によって、貼付帯上とは羽状をなす。356は底部で、LRの地文に対しRLの縄線文が押捺されている。b類土器は、他類に比し器厚が薄い。本土器は厚い。底面は割離している。

iii種) 貼付帯のある縄線文とそれを欠く縄線文が複合するもの(図165-354)

354に示した口縁部破片1例にのみ認めた。口縁端とその直下にめぐる貼付帯上の他、下位の貼付帯から垂下する貼付帯をもたない2条の縄線文がある。縄線文の原体は、すべてRLを使用している。

他の文様素と複合する縄線文の土器(b'類) 貼付帯の有無にかかわらず、縄線文が他の文様要素と複合しているもので、これには3種を認めた。

i種) 無文帯(c類土器)と複合するもの(図166-357～360)

357～360に認めた。357は、口縁下に無文帯を残し、上下を縄文末端の結節回転によって区切る。無文帯には、縦位のRL縄線文がある。358・359は、口縁部に無文帯を残し、縄文帯との境を縄線文で区切る。358はLRを2条、359はRLの原体を使用。360も同様の文様構成をとる口縁近くの破片と考えられる。

器形・文様構成のわかる例 MT05竪穴床面土器(拓本図47-3、実測図49-2)で

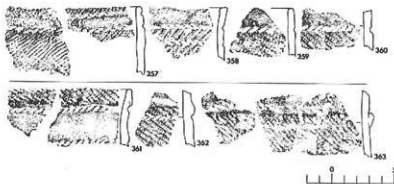


図166 包含層出土土器断本 III 2 a 群 Ⅱ 類 1 種(357-360)、
Ⅱ 類(361-362)、Ⅲ 類(363)

みると、器形は頸部がすぼまり、口縁の外反する深鉢形で、口頸部に無文帯を残す。縄文帯との境にRL縄線文が2条めぐる。地文の縄文は、RLの横位回転による。無文部の器厚は胴部に比べ薄く、口唇部は特に薄い。

ii 種 縄文のある貼付帯(d 類土器)と無文帯(c 類土器)の両者が複合するもの(図166-361・362)

361-362がある。361は口縁部に貼付帯があり、その下部の無文帯との境にRL縄線文がめぐる。破片下端にも同様の縄線文がある。362は胴部破片で、無文帯を区切る貼付帯の下端に、RL縄線文が1条めぐる。地文および貼付帯とも、RLの横位回転による。

器形・文様構成のわかる例 KE12堅穴埋土出土土器(拓本図81-20、実測図85-2)は、器内面の調整と貼付帯の状態からⅢ 2 b 群に分類したが、本種土器の器形は、361ではこれと同様の器形が考えられる。KE12堅穴の土器については、調整面からⅢ 2 b 群に含めたが文様構成では本群土器との間に大きな差がない。器形も頸部の屈曲がⅢ 2 a 群に近い。さらに検討する必要がある土器である。

iii 種 縄文のある貼付帯と無文帯および沈線文(f 類土器)の複合するもの(図166-363)

363 a・bに認めた。頸部の破片で、貼付帯が無文帯と縄文帯を区切る。縄線文は、貼付帯の上端に横位にめぐる。原体はLR。沈線は、先端の鋭利な半截竹管様の工具で、地文と無文帯上に部分的に不規則な施文が行なわれている。

無文帯のある土器(c 類) 本類土器は、器面の一部を帯状に無文帯として残したもので、無文帯の上下は、貼付帯で区切る。貼付帯を欠く例はない。無文帯は、当初より残したもので、縄文施文後に磨消したのではない。ただし、貼付帯と器面の調

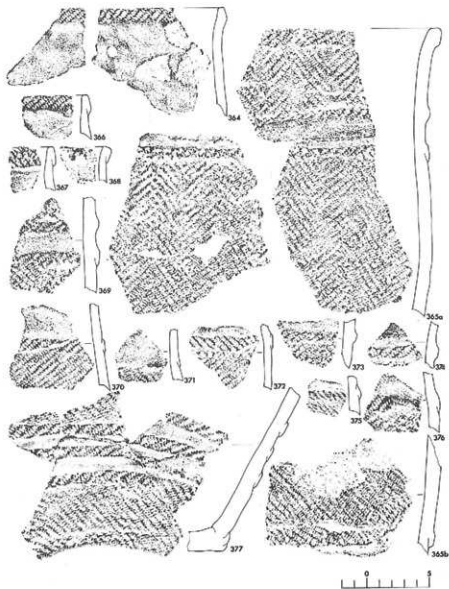


图167 包金层出土土器标本 附2 a 群+ 铜土器

整のためナデつけを行なったものが数例ある。本類は、出土数も少なく、文様の変化もとばしいため、特に種別を設けない。一括して記載する。

口縁部破片 図167-364-368がある。364は、貼付帯との境が縄文施文後にナデつけられている。366-368は、いずれも口縁端に貼付帯があり、頸部に無文帯を残す。貼付帯上の縄文は、366・368がLR横位、367がRL横位回転による。口唇の形状は、a～b類と変わるところがない。

胴部・底部破片 369-377に示した。369は、365と同一個体の可能性のある破片で、貼付帯間が指頭でナデつけられている。縄文は、地文がLR縦位回転、貼付帯上がLRの横位回転による。370・373-375では、貼付帯と地文が同一原体の縄文で構成され、372・376では羽状をなす。371の貼付帯は低く、無文帯は口縁に近に位置する。

377は、底部破片で、この1例にのみ認めた。3条の貼付帯にはさまれた2条の無文帯が、底面近くにもぐる。地文はLR原体の縦位回転で、貼付帯上には、これが横位回転になって羽状をなす。

器形・文様構成のわかる例 365は、口縁から胴下半部にかけての大型破片で、これで見ると、器形は、頸部がくびれ、胴部がわずかに膨らむ深鉢形で、a・b類土器に一般的な器形である。頸部のくびれた部分に、巾1.5cmの無文帯があり、上下は貼付帯で区切られている。貼付帯は、口縁端にもめぐる。地文の縄文は、頸部、胴部ともLR・RL原体による縦位回転で、縦位の羽状を構成する。貼付帯については、LRの横位回転である。

縄文のある貼付帯の土器（d類土器） 本類土器は、主要な文様要素が横位にもぐる貼付帯の土器で、これには、型式的に異なる2種を認めた。ここで扱うのは、地文の縄文の施文前に貼付帯をつくるもので、本群土器に用いられる貼付帯のすべてがこの手法による。これに対し、縄文の施文後に貼付帯を施すものは、III 2 b群土器として区分した。両者の差異については、別項で瀬川が詳述する。

本類土器の細別にあたっては、貼付帯上の縄文が羽状を呈するものと斜行するものとの二者に分け、これを施文部位別に記載する。

口縁部破片 図168-171-378-530に示した破片は、前述した二者に分けることができる。

378-448・530は、貼付帯上の縄文が地文と羽状をなすもので、これには、羽状をつくる縄文の原体が横位回転のみによって行なわれるものと、縦位回転のみによって行なわれるものと、縦位回転と横位回転とによって行なわれる場合がある。量的には前者が多い。後者に属するものは、380・385・389・397・398・402・408・417・418・422・423・432・437・439・440・422がある。いずれも貼付帯上の口縁部が横位の回転で、頸部側が縦位の回転で羽状を構成している。前者の例も含め、この場合貼付帯の

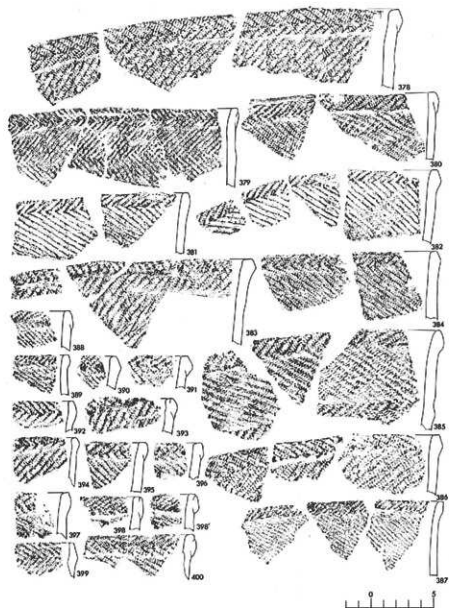


図168 包含層出土器标本 図2 a 群4類土器の口縁部破片。

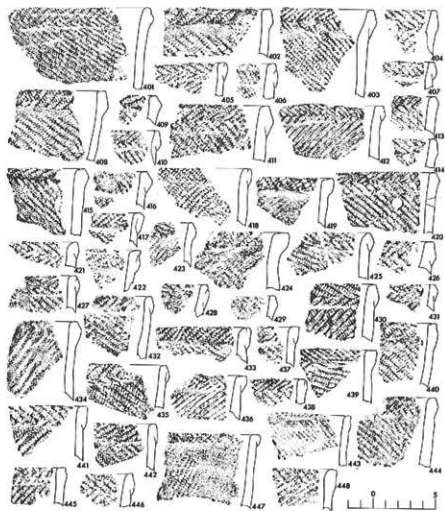


図169 包含帯出土器断本 図2×断4出土器の口縁部。

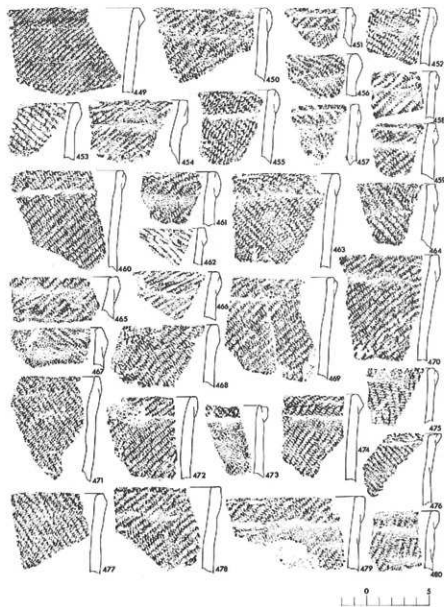


図170 包衣層出土器片本 Ⅱ2・群4類土器の口縁部。



図171 包谷樹出土土器断片 Ⅱ 2・群d類土器の口縁部。

中央で羽状をなすものは少なく、貼付帯と地文の縄文との間で羽状をつくる場合の方が多し。縦位回転が、貼付帯上で行なわれるものはない。縦位回転は、地文に限られる。貼付帯の位置は、口唇端にめぐるのが多く、379・400・406のように口唇下に付くものは少ない。

449～530は、貼付帯と地文が同一原体による斜行縄文で構成されるものである。縄文はすべて原体の横位回転（475・501は、斜位回転に近い）によるもので、縦位の回転は認めない。貼付帯の形状は、断面三角形を呈するものから、縄文の地文により扁平化したものまでである。その位置は、多くは口唇端にめぐるが、口唇下に付くものもある。

胴部破片 図172-531～578がある。胴部破片についても口縁部破片同様、貼付帯上の縄文が羽状のものと斜行するものとに分けた。

531～555・578は、貼付帯上に、あるいはその上下端において縄文が羽状をなすもので、531～551については、貼付帯のほぼ中央で羽状を構成する。この場合、貼付帯の縄文は地文から続くものである。552～555は同一個体で、貼付帯上の縄文だけが上下の地文と斜行する方向の異なるもので、地文にはLRの縦位回転があり、貼付帯上は同一原体の横位回転による。

556～571・573は、貼付帯とその上下の地文の縄文が同一方向に斜行するものである。貼付帯と地文の境の明瞭なものが多い。縄文は、すべて単節原体の横位回転で、縦位の回転はない。570については、横位、縦位の回転によって不規則な羽状をつくるが、一応これに加えた。

器形・文様構成のわかる例 器形では、胴頭部の屈曲が少なく、底部から直線的に開くものと、頸部がくびれ胴部の膨らむ二者がある。496、505などは後者に属する器形が想像できる。前者に属するものには、SR25整穴出土土器（拓本図14-36、実測図16-1）などをはじめとして、本類土器の大半が該当する。文様構成では、口縁部に貼付帯の1条あるものが多い。

縄文のみで構成した口縁部破片（e類土器） 本類土器は、縄文以外の文様要素をもたないもののうち口縁部破片を一括した。これには、横位回転による斜行縄文の土器、縦位回転による斜行あるいは羽状縄文の土器、縦位回転による斜行あるいは羽状縄文の土器、横位、縦位の複合したもの、口縁部に無文帯を残すものの種別を認めた。

i 種） 原体の横位回転で斜行縄文を構成するもの（図174-177-579-685）

579～638・671に示すのは、LR原体の横位回転による斜行縄文の土器である。582・591・601・594・619等の口縁では、貼付帯様の不明瞭な痕跡もあるが、これは、口縁の整形痕と判断し、本類に含めた。口唇の形状は、平坦で、わずかに内傾する。縄文は、0段多条のものが多く、節間角が狭い。破片で観察するかぎりでは、斜行する条は、直線的で整っている。条の傾斜角は、45°前後が多い。

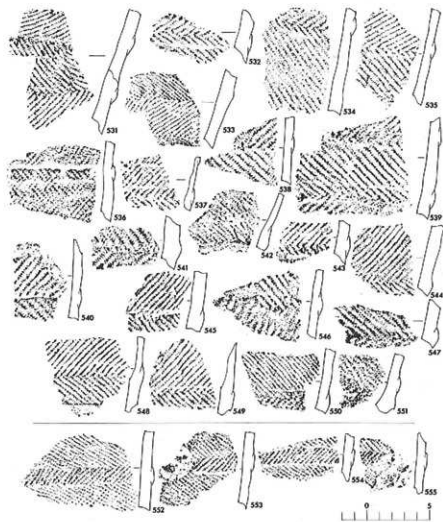


圖172 池谷雙溝土器標本 圖2 a 群4 類土器の別部破片。

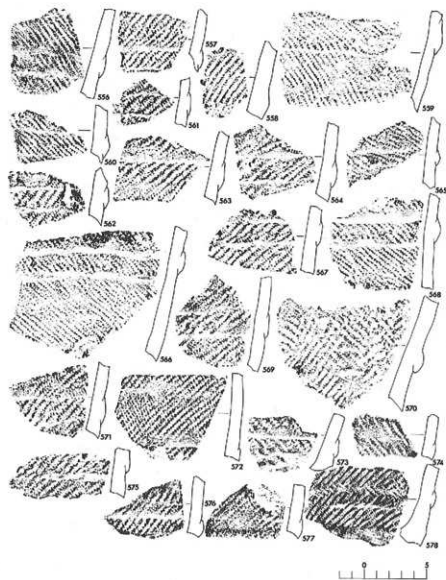


図173 包含層出土土器断片 Ⅱ 2 × 4 類十種の刷部断片。

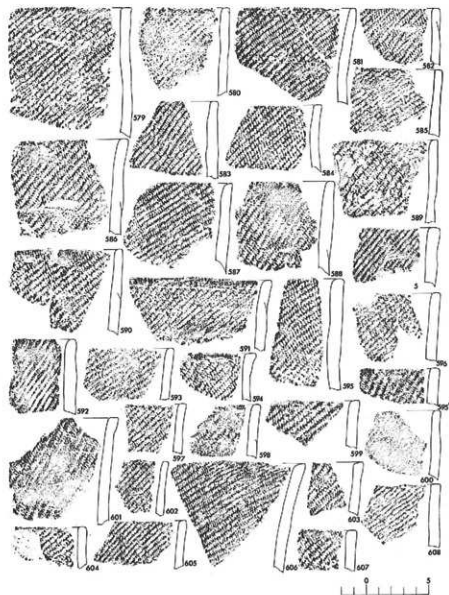


图174 包含陶片上土器标本 Ⅱ 2 a 群 ① 组土器。

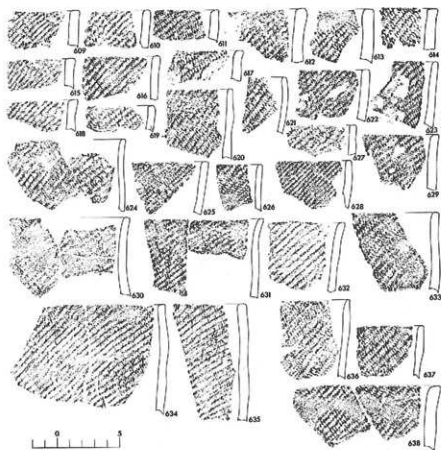


図175 包含解出土器断片 Ⅲ2a群①類土器

639・642～670・672～685は、RL原体を用いた単節の斜行織文のある土器で、口唇形状等はLR原体を用いたものと同様である。

器形・文様構成のわかる例 642は、RL原体を用いた資料で、器形は、胴部に多少ふくらみをもつ、頸部の傾曲のない深鉢である。器壁は平坦。これと同様な器形・文様構成をもつものに、SP38竪穴床面土器（実測図106-3）、P011小竪穴床面土器（実測図106-8）、MH05竪穴埋土土器（実測図67-2）、MT05竪穴床面土器（実測図49-1）がある。

639・640等では、頸部が多少くびれ、胴部の影らむ器形がうかがわれるが、これは、P011小竪穴床面土器（実測図106-7）の器形に近い。

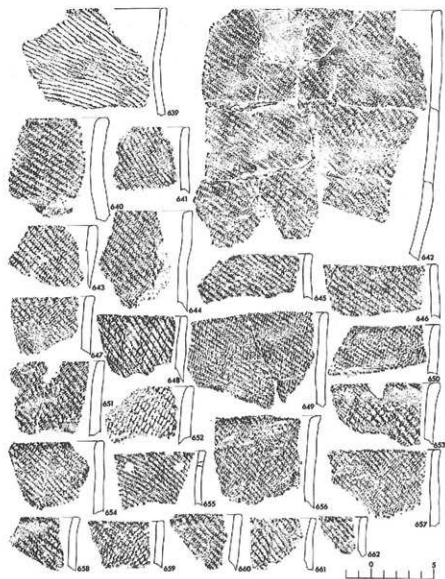


图176 包余村出土陶器标本 Ⅱ2a群n1黑土器

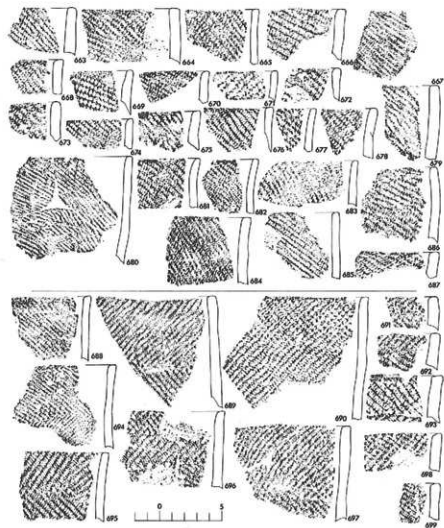


图177 包余出土土器拓本 组2·群e1组上器

ii種) 横位回転で羽状縄文を構成するもの(図177-688-699)

羽状縄文を構成するものうち、LRとRL原体を交互に横位回転したものをまとめた。688は、口唇端にLR縄文がある。693は、節の回転時の押捺が深い。699は、縦方向に羽状を構成する。

器形・文様構成のわかる例 SP38竪穴埋土出土土器(実測図106-1)でみると、器形は頸部に多少くびれがあり、胴部が膨らむ。地の縄文は、胴下半と頸部との間で羽状を構成する。

iii種) 横位回転と縦位回転で羽状縄文を構成するもの(図178-700-704)

700は、LR横位回転の縄文の上に同一原体の縦位回転が重複し、羽状を構成する。701は、口唇直下に巾の狭いRLの横位回転があり、下位に同一原体の縦位回転がある例で、縦位回転時の原体未端の圧痕が象をなす。702-704も同様の構成をとる。器形・文様構成のわかる例はない。

iv種) 縦位回転で斜行縄文を構成するもの(図176-640・641、図177-687、図178-705-710)

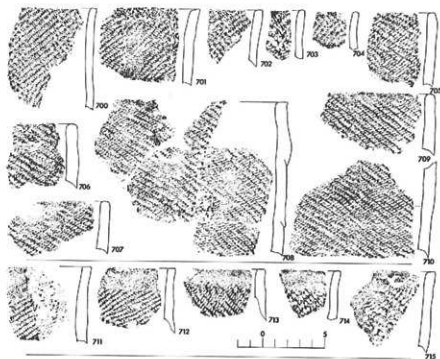


図178 包含層出土土器断片 Ⅱ2a群+1層上部

6点を認めた。710は、709と同一個体の胴部破片である。すべて、LR原体の縦位回転による。706・707・709の口縁形状は、断面が弧状を呈す。708は粘土帯の積み重ねが明瞭である。器形・文様構成のわかるものはないが、破片の形状でみるかぎり、頸部から口縁にかけて直立するものと、多少外反するものがある。

v種) 口縁部に無文帯を残す斜行縄文の上器(図178-711~715)

縄文の施文後に、口縁部の伏い巾を擦り消したもので、小破片5点に認めた。縄文はいずれも横位回転によるRL・LRの単節斜行縄文である。

縄文のみで構成した胴部破片(e₂類土器) 本類土器は、器面全体に縄文のみが施文された胴部破片で、これと同様の分類内容をもつe₁類土器をはじめ、本群土器のす

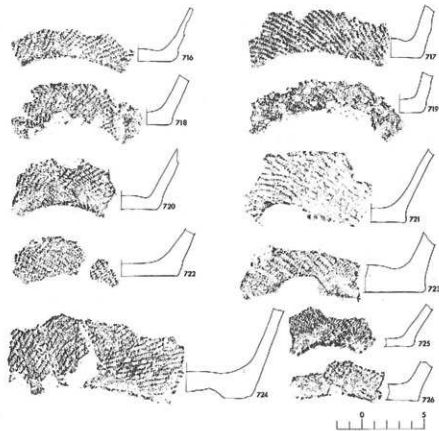


図179 包倉出土土器断片 Ⅱ2-a群 e₂類土器

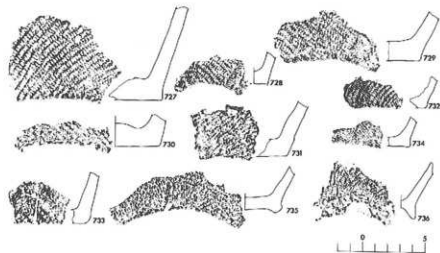


図180 総合型出土土器拓本 Ⅲ2・群e3類土器

べての胴部あるいは頸部を構成する可能性をもつが、個別性はもちろん、類別を特定することのできないものを一括した。主として、縄文のみの特徴にもとずいて分類したため、一部、他群土器の胴部破片を含んでいる危険性がある。ただし、量的には少ない。

該当する破片数は8,565点で、全体の84.9%を占める。紙数の都合で図示したものはない。

縄文のみで構成した底部破片(e₃類土器) e₃類土器同様、本類は器面全体に縄文のみが施された底部破片で、出土総数は266点である。このうち21点を図示した(図179・180-716-736)。e₂類土器同様、本群土器のすべての類と同一個体の可能性をもつが、それを特定できない。

沈線のある土器(f類土器) 器面調整、口唇部の形状、地文の縄文などからみて、本群土器の一部を構成する土器と判断した。

口唇部形状のわかるものは1例だが、平坦につくれ、また内面調整についても指頭による調整状がないなど、本群土器に共通した要素が多い。出土総数は16点で、15点について図示した(図181-737-751)。本類土器には、特に種別を認めない。

737は口縁部で、RL単節縄文の横位回転による地文の上を、先端がハケ状の細い工具で沈線を描き、沈線より胴部側を磨り滑している。沈線は、口縁から胴に向う斜線が観察できるが、文様構成は不明である。738は、上端の無文部分が口縁部につながる

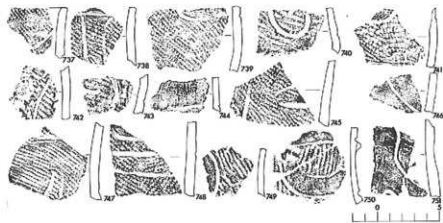


図181 包含層出土器拓本 III 2・群I類上器四

ると考えられる頸部破片で、沈線文は縦方向に2条ある。いずれも縄文の施文後に描かれている。地文の縄文は、無節のLを用いた縦位の回転である。739は、胴部破片で、破片の左右に連弧状の沈線文があり、弧の内側は磨り消しが行なわれている。沈線文の原体は、737に類似する。地文の縄文は、RLの横位原体で、沈線文はこれの施文後行なわれている。740は、頸部から胴部にかけての屈曲のある破片で、頸部がくびれながら口縁に向けて外反し、胴部のふくらむ器形が推定できる。沈線文は頸部にあり、LR縦位回転による縄文施文後に描かれた「し」の字状の文様である。胴部の屈曲部分は、巾1cmで横位に磨り消している。縄文は、LRの横位回転による。743も同一個体と考えられる。742は、沈線文と刺突文のある破片で、器形・文様構成は不明だが、SP38竪穴埋土出土土器（実測図106-5）に類似するものと考えられる。地文の縄文は、RLの横位回転で、沈線文と刺突文は、同一原体を用いている。745・747・731は、同一個体の頸部破片で、破片の湾曲、器厚から大形土器の一部であることがわかる。地文の縄文は、745・746ではLRの縦位回転により、748ではこれと同一原体による横位回転が加わり、一部羽状をなす。749-750は同一個体で、残存する文様から図190-877に示す構成を類推した。地文の縄文は、RLの縦位回転による。744・746・751は、無文地に沈線文のある例。文様構成は不明である。

無文土器（g類上器） 器面の平滑な調整のみで、文様の施文の行なわれない素文の土器片を抽出した。出土総数は40点で、このうち口縁部破片が21点である。口縁部のすべてを図示した（図182-752-772）。多少くびれる頸部から口縁に向けて外反する薄手のものが大半を占める。調整はどれもいねいで、本群土器の調整と共通する。

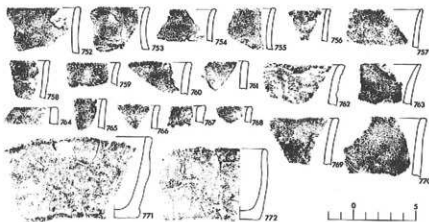


図182 包倉跡出土土器断片 III 2 a 群 g 類土器

758には、彩色がある。771・772は手づくねの小形土器で、実測図を図190～879・890に示した。

余市式土器群（III 2 b 群土器）

本群は、余市式土器を一括した(図183・184)。これには大谷地貝塚の土器、入江貝塚の土器などの型式内容に類似するものを抽出した。余市式の最も古い型式である伊達山式に特徴的な、突コブ文のある土器の出土はない。大谷地貝塚の土器については、特に岩崎報告の第9図2～6・9に類似性を認めた。また、入江貝塚については、名取・峰山報告のII層およびIII層出土土器のうち貼付帯と無文帯が口縁部に集中する、IV層中に出現しない土器が該当する。

文様の観察の結果、本群土器には3類を認めた。a類：貼付帯のある土器、b類：縄文のみで構成した土器、c類：刺突文のある土器である。文様については、III 2 a 群土器と共通した要素をもつが、成形・調整・地文の縄文に著しい差がある。これについては、瀬川が別項で詳述する。ここでは、文様を中心に記載をおこなう。

貼付帯のある土器（a類土器） 地文の縄文施文後に貼付帯を施すもので、前群のそれとは貼付方法が異なる。1例にのみ認めた。遺構より良好な資料の出土がある。

773 a～kに示した土器は、接合しないが同一個体で、口縁から底部まで遺存する。aは口縁部破片で、口唇下とこれより5 cm下位に横位の、また両者間を斜位に結ぶ貼付帯がある。いずれも、地文の縄文上に貼付を行ない、さらに貼付帯上にも同一原形で縄文を施文している。地文の縄文は、RLの斜位回転で、g・hにみるように、割

部破片中には、縦位回転がある。貼付帯とは、同一原体の横位回転。口唇上にも横位回転がある。kは底部で、W I 65壺穴埋土出土土器（拓本図60-24）と同一個体をなす。

器形・文様構成のわかる例 遺構埋土出土資料中に、好例がある。

F J 69壺穴埋土出土土器（拓本図134-28、実測図136）は、口縁が直立する深鉢形で、口縁端に横位の貼付帯がめぐり、これから「V」「I」字状の貼り付けが垂下する。口唇上にも縄文がある。

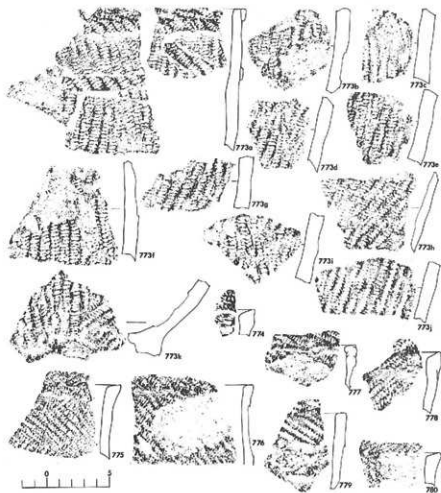


図183 包含層出土土器拓本 Ⅱ2b 群土器

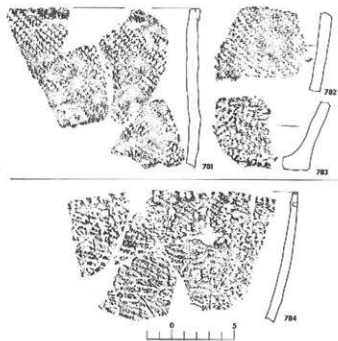


図184 包含層出土土器拓本 III 2 ト唇土器

縄文のみで構成した土器（b類土器） 前群のe類土器を抽出する過程で、特に内面調整の異なるものを区分した。前群土器の一部に出現した口唇上の縄文が、本類の特徴である。本類には、口唇上に縄文の施文のあるものと、欠くものの二種を認めた。

i 種) 口唇上に縄文のあるもの(図183-774-780)

胎土に砂粒を含み、器面のザラつきが著しい。小片のため、器形の復元はむずかしいが、口縁の外反するもの(776・775)と、直立するもの(777-780)の二者がある。いずれも口唇上に縄文が施文されており、このため口唇上面は前群に比べ巾が広い。器面の縄文は、775を除くすべてが斜行縄文で、775にはR.L.の縦位と横位の回転による羽状縄文がみられる。780は斜位回転に近い。口唇の縄文は、器面と同一方向の撚りを用いたものと異なる原体を用いたものがある。778の口縁は、貼付帯による隆起ではなく、粘土の積み上げ痕である。器形のおかるものはないが、口縁の直立するものが多いようである。口唇の形状(断面)は、水平なものと同内そぎのもの二者がある。

ii 種) 口唇上の縄文を欠くもの(図184-781-783)

この種に特定できたものは、図示した3点である。781・782は同一個体である。本

群に特徴的な、ザラついた器面と指頭痕の残る内面調整が観察できるものが他にもあるが、いずれも小片のため、前群のe類土器との区分がむづかしく、特定可能な大形破片を除いては、すべて前群土器中に一括した。ただし、量的には少ない。

781は、R1Rの複節縄文が横位回転されている。口縁端の一部に粘土の積り上げ痕が残る。

刺突文のある土器（c類） a・b類以外の文様要素を784に認めた。器形は、ほぼ直線的に胴下半部から口縁に向けて広く小形の深鉢形である。文様は、列点文風の刺突列と突コブ文で構成する。刺突列は、半截竹管様の工具を用いて、まず口縁から縦方向に加え、これを1~1.5cm間隔に配列する。さらに、この縦位の刺突列の下端を区切って、同様の手法による刺突を、横位に1条施している。突コブ文は、残存する破片中に5ヶ所観察できるが、拓本の右端以外は焼成前に貫通しており、内面にコブをつくるものは、1ヶ所である。

口唇上には、器面と同様の刺突列がある。地文は、無節Rの横位回転で、頸・胴・胴下位に崖体末端の結節原痕が観察できる。

北筒式土器群（Ⅲ2c群土器）

本群は、口縁下にめぐる円形の刺突文（内面の突コブ文）を特徴とする北筒式の一群を一括した図185~785~796。

石狩低地帯に出現する北筒式土器は、トコロ6類に近似の型式内容をもつもので、トコロ5類の出土例は知られていない。本道跡の資料も、トコロ6類に類似の型式で、図示した12点も含め、22点が包含層より出土した。本群には、口縁に隆帯を設け、これに刺突列を加えるものと、これら欠くもの二者がある。

口縁に刺突列のある肥厚帯を設けないもの（a類） 785・786・788の3点を認めた。785は、胴下半まで残存する大形破片で、口縁がわずかに外反する筒形の深鉢。地文は、結節をとまなうRL単節の横位回転による。これは、口唇上面と内面にも行なわれている。内面は斜位回転による。突コブ文は、口縁下2cmの位置から直径7mm前後の工具を用いて、回転を加えながら刺突したもので、刺突痕は円錐形を呈し、器表面での大きさは直径1.2cm前後である。これが、横位に5ヶ所観察できるが、内面での突隆は弱く、2mm前後でしかない。胎土には5mm前後の砂礫を多く含み、内面の調整は、指頭痕を著しく残す。786は、口唇上および内面の縄文を示していないが、785の同一個体である。788は、表面にのみ縄文のある小破片で、突コブ文は、口縁下1cmの位置に2ヶ所みられる。工具は、8mmの竹管状のものを用いており、器面に水平に刺突し、回転せずに竹管内部の粘土の抜き取りを行なっている。内面のコブは、3mm程度突出するが、指頭で貫通を防いだ痕跡を認める。

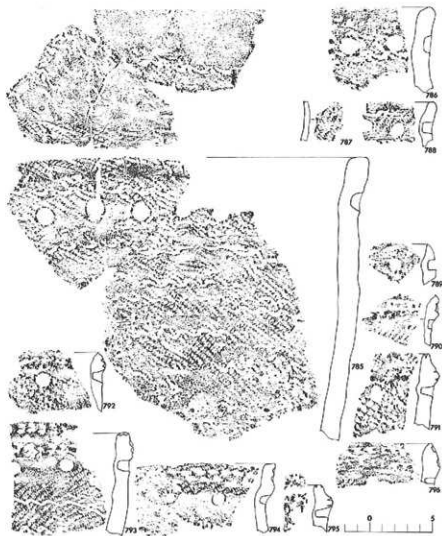


図186 包金層出土土器断片 Ⅱ2・群上部

口縁に刺突列のある肥厚帯を施したもの（b類） 790～796に認めた。790は、口縁の一部を欠く。肥厚帯上に結節状の刺突列があり、この肥厚帯下に突コブ文がある。地文はL Rの横位回転による斜行織文が観察できる。791・792・795は、同一体の可能性が高い。両者とも、口縁に断面三角形の肥厚帯をもち、(791は一部欠損している

が) これに半載竹管状工具による刺突列が加わる。肥厚帯下の突コブ文は、6mm前後のもので回転をとまう。内面の突出は、3mm。地文は、RLR複節の横位回転による。793は、口縁下に粘土の貼付による肥厚帯を設け、これに半載竹管状工具による刺突列がある。口唇上面にも同一工具による刺突列がある。肥厚帯の上下端は、ナテによる調整が行なわれており、下端の調整面に、器面に水平な突コブ文がある。回転をとまなった中空の円形文で、内面の突出は弱く2mm。地文は、結節をとまうL R横位回転による。内面には指頭痕が著しく、胎土には2~6mmの砂礫を多量に含む。794は、外反した口縁部に低い肥厚帯を設けたもので、肥厚帯下端が内湾し、これに突コブ文を施している。肥厚帯上端と口唇の間に2条の刺突列がある。内面には指頭痕が著しい。地文は、0段が多条のL R原体による横位回転。796は、口縁に幅広い肥厚帯を設け、これに半載竹管で2条の刺突列を加えている。肥厚帯下に、中空の工具を用いた突コブ文があり、内部の粘土が一部残存する。地文は、L R横位回転による。

中期後半の土器群 (Ⅲ1群土器)

中期後半に位置する型式には、二者がある。平岸天神山式の型式内容に近似するものと、柏木川式の特徴をもつものである。いずれも検出個体は少なく、器形、文様構成のわかる例はない。また、柏木川式の特徴をもった個体に突コブ文の加わるものを、1例小片に確認した。

天神山式 貼付帯と半載竹管文のある土器で、口縁部破片5点、胴部破片5点を認めた(図186)。すべて、同一個体であるが、接合しない。797は、突起のある波状の口縁部分で、突起の端部は欠損している。拓本断面石は、突起部分の貼り付けを示す。貼付帯は、突起部分に垂下するものと、これから斜位に貼り付けるものが観察できるが、文様構成は不明である。貼付帯上には、半載竹管による押し引き文が加えられ、これは、貼付帯のない口縁部および胴部破片中にも、横位、斜位に施されている。地文の縄文は、L R横位回転による斜行縄文が行なわれている。798~801には、内面の縄文があるが図示していない。内面の縄文は、L Rの斜位回転による。

柏木川式 貼付帯と棒状工具による連続刺突文のある土器で、6点に認めた(図186)。807は、口縁部破片で、器面はL R横位回転の縄文を地文した口縁下に、竹管様の工具による斜位方向からの連続刺突列を2条横位に加えている。口唇上面には、円形竹管状の工具による垂直方向からの連続刺突列がある。

809~812は、貼付帯のある胴部破片で、すべて同一個体である。地文の縄文(L R横位)依に、貼付帯上の縄文を欠く。貼付帯上には、半載竹管様の工具による斜位方向からの連続刺突がみられる。

808は、波状口縁の小形の深鉢で、波状部はゆるく外反する。縄文は、L R横位回転

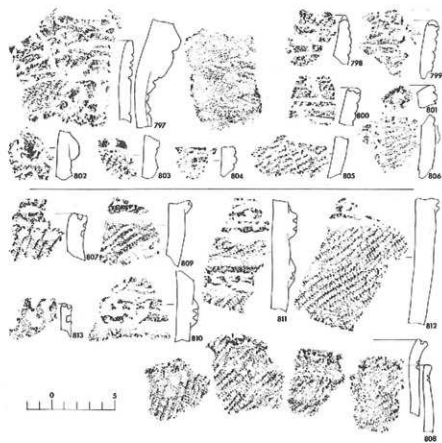


図186 包衣層出土器断片 図1 唇上唇

の斜行縄文で、口唇上にも同様の地文がある。波状の頂部には、棒状工具による刺突がある。口縁下に1条、半截竹管様工具による連続刺突文がめぐる。

突コブ文のある柏木川式 図186-813に示したのは、口唇上と口唇下に、棒状工具による連続刺突文のめぐる柏木川式の特徴をもった土器であるが、本資料には、さらに突コブ文が加わる。突コブ文は、連続刺突文の下端に接する位置に水平方向からの円形刺突があり、内面にコブを形成する。地文の縄文は、LR横位回転による。内面には、指頭痕を認める。

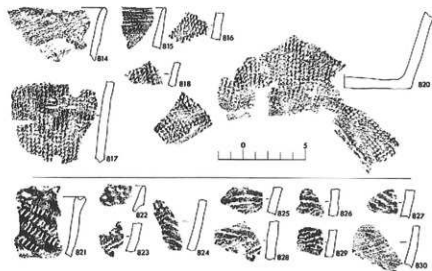


図187 包含層出土土器拓本 II群土器(814~820)、I 2群土器

円筒土器下層式 (II群土器)

本群は、前期に属する円筒土器の一群で、下層b式のみを認めた。出土総数は、2個体、22点である(図187~814~820)。

814は、わずかに外反する口縁部破片。内面の調整は風化が著しく不明。胎土中に多量の繊維状がある。全面に粗い節のある斜行縄文が左傾するが、原体の詳細は不明。圧痕は浅い。

815~820は、同一個体の口縁部(815)、胴部(816~818)、底部(819・820)である。口縁部は、横位に無節II原体を用いた摺糸列が5条めぐり、これ以下に、単節原体による摺糸文が縦位に施文される。胴・底部の摺糸文も同一原体による。底面および内面は、磨削によって調整が行なわれている。

東銅路系土器群 (I 2群土器)

本群は、早期に属する土器群のうち、その終末期に位置する東銅路系の土器を一括した(図187)。これには、東銅路田式に類似のものと、東銅路IV式に類似の型式がある。821は、前者に属する。口縁部に、幅の広い原体による絡条体圧痕文が右傾する。破片左下側に、横位の斜行縄文と思われる節がある。口唇上には、縄の刺突列がめぐらる。822~830は、東銅路IV式に類似するもので、口縁部1点、胴部24点を認めた。

822は、口縁部破片で、繩端による圧痕列がある。823～830は、いずれも胴部破片で、撫糸文がみられる。823・824には、繩端の圧痕がある。

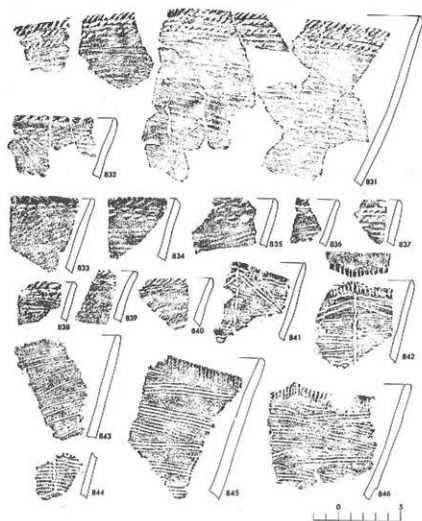


図108 瓦倉遺出土土器断片 11群土器

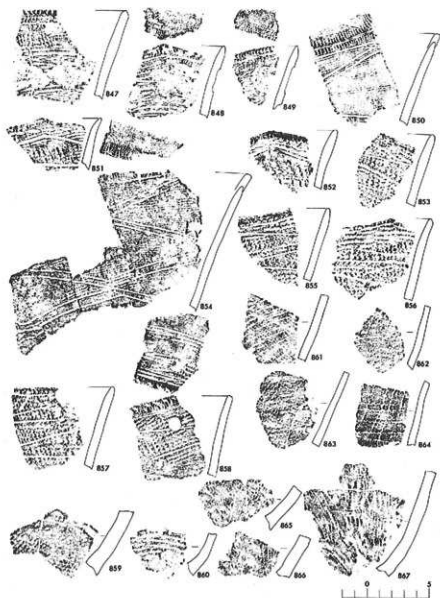


图189 包含解出上上器拓本 11群上器

貝殻文土器群（I 1群土器）

本群は、早期の土器のうち、貝殻文を特徴とする土器を一括した。これには、型式的異なる二者を認めた。住吉町式に類似の尖底土器の一群と、虎杖浜式に近似した型式内容の平底土器の一群である。出土点数は、513点(口縁部63点、胴・底部450点)である。このうち、口縁部を中心に46点について図示した(図188~190・831~876)。

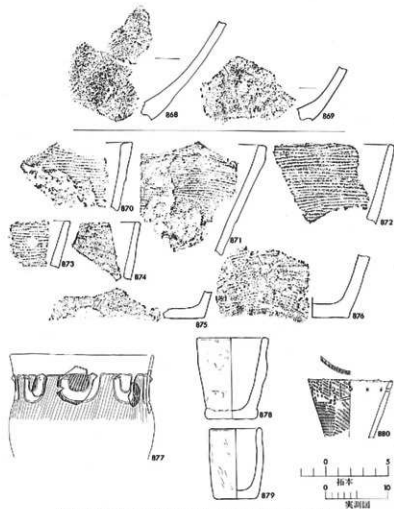


図190 包含層出土土器拓本図・実測図 I 1群土器(868~876)とⅡ2a群(類(877), g類(878・879), Ⅱ2b群(880)), 拓本図の縮尺は1/3, 実測図は1/6, ただし878・879は1/3。

831～840は、強く外傾する口唇部の絡糸体圧痕文と、口縁部にめぐる爪形文風の刺突文を特徴とする。体部は、浅い貝殻条痕文が横方向に施される。839・840では、さらに貝殻腹縁文が斜位に行なわれている。

841～858は、体部に沈線文あるいは刺突文のあるもので、口唇上および体部の地文にいくつかの種別がある。841～844では、体部の地文に貝殻条痕文がつかわれ、この上に沈線による幾何学文が描かれている。波状口縁のものが多く、841・842では、波頂部から縦方向に刺突文・沈線文が垂下する。口唇の断面形状は、水平なものと同傾するもの二者がある。845・846は、条痕地に横方向の貝殻文を重ねている。847・849～851・854・859・860の条痕文は、貝殻腹縁による押しきり文である。847は、口縁部にのみ押しきり文があり、体部は条痕文である。859・860は、尖底部破片である。852・853・855～858の地文は、貝殻腹縁文による。すべて、横方向に連続して押しきっている。861～864も貝殻腹縁による押しきり文が行なわれているが、間隔が広い。865～867は、底部破片でいづれも尖底部の破片である。867の貝殻腹縁文は連続波状を呈する。

868・869は、無文の尖底部破片である。868には、黏土中に繊維の混入がみられる。870～876は、平底の型態をとる条痕文の土器である。870・871は、波状口縁、872～874は平縁で、いづれも口唇の整形が平坦で、外傾するものはない。

小 括

出土土器の概要 包含層出土の土器は、総数10,709点である。これを、7群に分類して記載した。

I群土器は縄文早期に属する土器群で、貝殻文のあるものと燃糸文および絡糸体圧痕文のあるものをそれぞれI 2群に分類した。前者は貝殻文土器群で、これに住吉町式に類似の尖底土器の一群と、虎杖浜式に類似の絡糸体圧痕文をもつ平底土器の一群の二者を認めた。II群土器は前期円筒土器に属するもので、b式のみを認めた。III群土器は、中期後葉と終末期から後期初頭にかけて位置する土器群で、前者には、平岸天神山式や柏木川式の型式内容に近似のものがある。また、後者には型式的異なる三者を認め、これをIII 2 a・b・c群土器とした。b・c群土器が、それぞれ余市式土器、北筒式土器に相当する。III 2 a群土器は、連続短刻線文を特徴とする一群の土器で、これを短刻線文土器群とした。これは、従来からノダッII式、糠瓦台式、静狩式などの型式名で呼ばれているもので、近年、特に出土例の増えている型式ではあるが、その型式内容や編年位置については、まだ十分に整理されていない型式である。千歳6遺跡では、該当する資料を比較的材料として得ることができたことから、これを整理し、主として文様要素の異間にもとづくa～g類の7分類を行なった。a～g類の区分は、破片内に単独である文様要素を基準に設定したものであるが、一方、文様要素が同一破片内に複数ある場合もあり、これを重類として抽出した。各分類別にみた出土点数を表4に示した。

表4 相模原出土器群(Ⅲ-2-a群)の分類別出土点数

分類	報告資料				未報告資料					
	小計	口縁	胴A	胴B	底部	小計	口縁	胴A	胴B	底部
a	101	189	—	4	59	173	—	—	—	—
a'	21	2	—	—	—	2	—	—	—	—
b	19	20	—	2	4	—	—	—	—	—
b'	6	1	—	—	—	—	—	—	—	—
c	5	8	—	1	—	1	—	—	—	—
d	153	49	—	—	75	—	—	—	—	—
e ₁	140	—	—	—	173	—	—	—	—	—
e ₂	—	—	—	—	—	—	—	8,565	—	—
e ₃	—	—	—	20	—	—	—	—	—	239
f	2	14	—	—	—	—	—	—	—	—
g	21	—	—	—	—	20	—	—	—	—
合計	468	283	0	27	311	196	8,565	239	—	—

※相模原千歳6遺跡のⅢ-2-a群土器について、分類別に出土点数を集計した。「胴A」は、文様のある胴部断片、「胴B」は縄文のみで構成する胴部断片を示す。

Ⅲ2a群土器について Ⅲ2a群土器は、道央～道西南部に分布し、これまでに30遺跡ほどの出土地が報告されている²⁷⁾。特に半島部に集中している。

千歳6遺跡のⅢ2a群土器は、前述したようにノグツップⅡ式、静符式、煉瓦台式に類似する型式内容の土器である。ノグツップⅡ式は、森田・中田等によって型式内容の詳細が述べられているが、これと比較すると、千歳6遺跡のⅢ2a群土器は、a類とした連続短刻線文のある土器の他類に対する口縁部出現率(単純比率)が高く(表4)ノグツップⅡ式の縦線文の出現率の高さと著しく異なる。大沼、高橋、松岡は、ノグツップⅡ式の型式内容について検討し、本遺跡のⅢ2a群土器に類似するものは、煉瓦台式、レンガ台式、ノグツップⅡ式として型式設定することを提議したが、これら諸型式は、名称は異なるがいずれも同様の型式内容を有しているようである。従って、本遺跡のⅢ2a群土器は、大沼の煉瓦台式、高橋のレンガ台式、松岡のノグツップⅡ式と同一型式内容をもち、森田のノグツップⅡ式、松岡の大安在式とは異なるものとする²⁸⁾ことができる。

Ⅲ2a群土器の分布について、特にa類土器については、これまで半島部を中心に出土し、道央部では千歳市ウサクマイ遺跡²⁹⁾と千歳市美々4遺跡³⁰⁾で数点が出土したにすぎない。この分布傾向は、大沼の指摘するように、道央部における北麓式土器との分布関係が予測されるからであり、今後、両者の分布圏境が、この千歳6遺跡周辺において設定されてゆく可能性が高い。本遺跡は、現在のところ噴火湾以北における最大規模のⅢ2a群土器の遺跡である。

Ⅲ2a群土器の編年位置は、大沼によればノグツップⅡ式→煉瓦台式→余市式(天祐寺式)の序列が考えられるとされ、高橋によれば、レンガ台式はノグツップⅡ式よ

り古く福年されるという。本遺跡では、層位的な出土例がなく、遺構の重複もないことから、判断材料を欠く。

Ⅲ 2 b 群土器について Ⅲ 2 b 群土器は、余市式土器として区分したが、これは、松岡が指摘するように、Ⅲ 2 a 群土器が、模林式をはじめ大木系土器を母体に製作が開始されたと判断できる要素が多いのに対し、余市式土器は、器形・文様において大木系土器の変遷過程の中では捉えにくい要素が多いことから、その出自を他に求める意味で、両者の区分を行なったものである。

余市式土器の器形は、口縁部から底部まで屈曲の少ない直線的な形状が一般的で、Ⅲ 2 a 群土器が屈曲の多い器形を主体とするのとは対称的である。文様では、Ⅲ 2 a 群が貼付帯の貼り付けが体部の縄文施文前に行なわれるのに対し、余市式では縄文施文後に行なうようである³⁴⁾。最も著しい差として器内外面の調整がある。Ⅲ 2 a 群器の平滑な器面に対し、余市式では指頭痕を残す粗雑な調整が一般的である。この余市式土器の製作過程（特に器形と調整）と最も良く近似するものは、北筒式土器である。

道央部においては、半島部でⅢ 2 a 群土器が盛行する時期に、すでに北筒式土器が出現しており、本遺跡でもⅢ 2 a 群土器の一部に突コブ文のあるものが存在することから、特に噴火湾東部においては、北筒式土器と大木系土器の接触していた可能性が強い。このことは、前述した器形と調整方法および突コブ文といった要素の類似性も含め、余市式土器が北筒式土器を母体とし、これに大木系土器の貼付帯を受け入れながら、噴火湾の東部において発生した可能性のあることを意味しているといえる。

大沼は、余市式土器は道南部において煉瓦台式（本遺跡のⅢ 2 a 群土器）から発生したとしたが、大沼が用いた湯の里 1 遺跡Ⅱ群土器や天祐寺貝塚の資料では、体部縄文の施文後に貼付帯を施す土器は少なく、多くはⅢ 2 a 群土器にみられる体部縄文施文前に貼付帯を施した土器である。湯の里Ⅱ群も含め天祐寺式については、沈線文・刺突文の土器の比率が高いことやボタン状貼付をもつ土器の存在から、これを煉瓦台式の次段階の型式として位置づけることに異論はないが、これら土器群の中に少量出現する余市式土器が、半島部において前型式より発生したとするには、発生後の分布と出土量に関する説明に具体性を欠くように思える。半島部における余市式土器（体部縄文施文後の貼付帯）の分布はきわめてとぼしく、これまでに元和遺跡・湯の里 1 遺跡等で数点が確認されているにすぎない。

これは、噴火湾東部において発生した余市式土器が、半島部へもわずかに分布していった状況を示すものと理解され、半島部での発生を示す現象とは考えにくい。余市式土器の発生時、半島部ではⅢ 2 a 群の連続短屈線文が貼付帯を欠いたものに変化するが、その出現率は低く、文様の中心は大木 10 式系土器類似の沈線文・刺突文や断面三角形の隆線文に変わる。大沼の天祐寺式はこれに相当し、元和（類）湯の里Ⅱ群もこの時期の資料として位置づけることができる。結局、中期末葉から後期初頭における道央部以南の土器は、半島部では大木系土器を、道央部では北筒式土器をそれぞれ

出現母体とする二系統の土器として変遷したものと判断される。

- 註1) 森田知志・中田幹雄・山田悟郎「4, 第Ⅱ文化層 (2)遺物」『西段』所収 北海道第四紀研究会, 1974年
- 2) 新井和愛編「朝日トコロ貝塚」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 上巻』東京大学文学部, 1963年
- 3) 名取武光・峰山巖「入江貝塚」北方文化研究報告 13, 1958年
- 4) 大場利夫「北海道深丘台遺跡」日本考古学年報 3, 1950年
- 5) 大場利夫・蛭子千代志「函館郊外練瓦台遺跡」北方文化研究報告 20, 1965年
- 6) 大場利夫・田川賢哉「静狩遺跡」長万部町教育委員会, 1955年
- 7) 五十嵐鉄「大谷地貝塚の層位的研究」1934年
- 8) 註11)
- 9) 野村崇「当別町伊達山の調査について」釧路市立郷土博物館々報 137, 1963年
- 10) 岩崎隆人・三室俊昭・室田彰則「石狩郡当別町伊達山遺跡(第1地点)の資料」北海道青年人類科学研究会会誌 2, 1963年
- 11) 岩崎隆人・三室俊昭・室田彰則「伊達山遺跡」当別町教育委員会, 1970年
- 12) 菊池俊彦「札幌市平岸天神山出土の土器について」北海道考古学 3, 1967年
- 13) 高橋正勝「柏木川」北海道文化財保護協会, 1971年
- 14) 上野秀一「石狩海岸砂丘地帯の遺跡群について」北海道考古学 14, 1978年
- 15) 河野広道・沢四郎「東釧路」釧路市教育委員会, 1962年
- 16) 児玉作左衛門・大場利夫「南館市住吉町遺跡の発掘について」北方文化研究報告 8, 1953年
- 17) 大場利夫「白老町虎杖浜遺跡の発掘について」北方文化研究報告 17, 1962年
- 18) 峰山巖・大島直行・吉原敏弘「知内川中流域の縄文時代遺跡」知内町教育委員会, 1979年
- 19) 高橋正勝「北海道七飯町峠下遺跡の発掘調査」七飯町教育委員会, 1979年
- 20) 加藤邦雄・上野秀一・羽賀康二・田部洋「小砂子遺跡」上ノ国町教育委員会, 1979年
- 21) 小笠原忠久・松岡達郎・藤田登「白尾日遺跡」南茅部町教育委員会, 1980年
- 22) 北海道埋蔵文化財センター編「虎杖浜遺跡」「千歳4遺跡」「富津遺跡」「北海道埋蔵自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告」所収, 北海道埋蔵文化財センター, 1981年
- 23) 宮 実明「ノダップ貝土器の再検討」考古学研究29巻3号, 1982年
- 24) 註1)
- 25) 大沼忠春「北海道中央部における縄文時代中期から後期初期の編年について」考古学雑誌66巻4号, 1982年
- 26) 高橋正勝「北海道南部の土器」『縄文文化の研究 4(縄文土器目録)』所収, 1982年
- 27) 松岡達郎・小笠原忠久「本直の遺跡」南茅部町教育委員会, 1981年
- 28) 西澤守健・田村俊之「ウツクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査」千歳市教育委員会, 1979年
- 29) 北海道埋蔵文化財センター編「美々々4遺跡」「美沢川流域の遺跡群W」所収, 北海道埋蔵文化財センター, 1980年
- 30) 註25)

- 31) 註25)
 32) 註26)
 33) 註27)
 34) 註1)
 35) 松岡によれば(註27)、木直C遺跡では、堅穴埋土の層位的な出現順度からノグツツII式の前期式として大塚在式が設定できるという。
 36) 註22)、註25)
 37) 註25)
 38) 註18)
 39) 天祐寺貝塚では、報告書の記載図版でみるかぎり、貼付帯は縄文の埴文前に付けられたもののように判断される。石川政治「高橋市天祐寺貝塚」『石器時代』6、1963年
 40) 註25)
 41) 大沼忠春・佐藤隆広・松田猛・大沼あさ子「元都」乙部町教育委員会、1976年

第2節 土製品

土製品には、土器破片を加工した円盤状の製品がある。これには、有孔のものと孔を欠くものの2種がある。出土点数は21点で、他に表採品が2点ある。有孔のものは18点で、これには穿孔途中のものも含めた。なお、孔を欠くものには特に大型のものがある。包含層より出土した1点の他に、遺構埋土より3点の出土がある(S R 25、X J 40、A B 12堅穴)。

表採品も含め23点のすべてを図示した(図191-1-23)。

1-18は、有孔あるいは穿孔途中のものである。19は、大型の円盤状土製品で、小形のもの同様、土器片の周辺に打ち欠きを加え、円形に整えている。19-23には孔がない。

これら土製品は、すべてⅢ2 a 群土器片を用いている。

小括

土器片を加工した製品は、円盤状土製品・有孔土製円盤などと呼ばれ、縄文時代には一般的である。特に、東日本の晩期に多く出現する。北海道では早期の東銅路系土器の時期に多く、晩期がこれに次ぎ後期にはほとんど出現しない。中期の出土数も少なく、20遺跡程度が知られるが、10点を越す遺跡は少ない。本遺跡では、遺構出土のものも含め39点が出土したが、このうち4点は大型の製品であった。これら大型のものも含め、その用途は不明な点が多く、本遺跡でも、これら製品の性格を示唆する出土

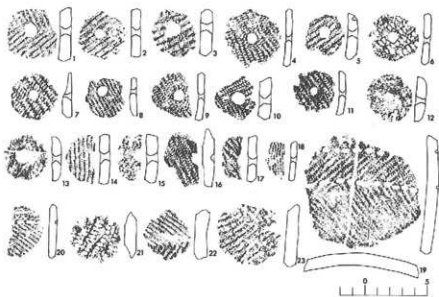


図191 包含層出土円盤状土製品 各資料の出土区は、1: D-10区、
2: N-9, 3・10・14・15・22; C-12, 4: J-7, 5・12; K-
15, 6: D-14, 7: H-12, 8: H-7, 9: J-15, 11: H-15,
12: J-5, 16: D-16, 17: L-14, 18: C-10, 20: G-13, 21:
C-13, 19・22: 調査区内の掘土中。

状況や分析結果は得られなかった。

註1) これについては、前期の出現数の多い点が精選されている。(時山巖「第一編 先史時代」
『新編伊達町史』上巻 1972年)

第3節 石器

包含層出土の石器の総点数は380点である。石器はいずれも、II～IV層に細分を行なった黒色土中から出土した。集積や、埋納を思わせる出土状況を示す例はなく、1点1点が散発的に出土している。その分布は、発掘区のはほぼ全体に及ぶが、整穴覆土を中心として、南北2群の整穴群近辺に集中する傾向が指摘できる(図192)。整穴群に囲

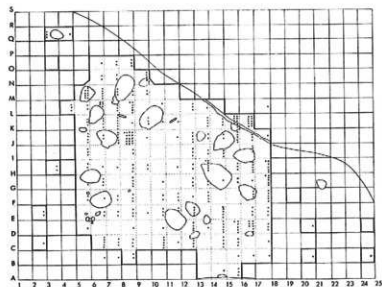


図192 包含層出土石器の分布 包含層出土石器の出土位置を、各発掘区ごとに1点1ドットで示した。壱次出土分はこれに含まない。分布は、発掘区のはほぼ全体に北山が、南北2群の各群穴群周辺に集中する傾向がある。壱次群に取り囲まれるように存在する遺蹟空白部は、石器の分布が稀薄である。

またその中央部は、分布が稀薄である。

本節では、これら包含層出土の石器のうち、石斧の細剥片を除いた全点について説明する。その場合、石器を、剥片石器と礫石器に分け、前者から後者の順に記載を行なう。

剥片石器

一点を除いていずれも縄文時代に属するものと思われる。また、それらの大半は、遺物の出土状況および各群別ごとの土器出土数と考えあわせ、Ⅲ2 a 群土器に伴う可能性が高い。なお、剥片石器にはおよそ以下に上げる種類を認めた。

- I. 先土器時代に属すると考えられるナイフ形石器。
- II. 石錐 a: 錐身と茎の境が、全体の中央より下半にくるもの。b: 錐身と茎の境が、中央あるいは中央より上半にくるもの。
- III. 石楯
- IV. 石鏃 a: 棒状に成形が行なわれたもの。b: 不定形の剥片を用いてその一部に刺突部をつくりだすもの。

V. 刃器類 a：つまみ付のもの。b1：両面からの加工による刃部をもち、調整が両面のはば全体を覆うもの。b2：両面からの加工による刃部をもち、調整が側縁付近に限られるもの。c1：片面からの連続する深い調整によって急角度の刃部を作りだすもので、形状が円形を呈するもの。c2：片面からの連続する深い調整によって急角度の刃部を作りだすもので、形状が楕円、あるいは不整形を呈するもの。d：c1、c2以外の、片面からの調整によって側縁に刃部を作りだすもの。調整が両面に及んでいても、刃部の作り出しが、主に片面からの細かい調整によって行なわれているものは、これに含める。

VI. 石杖

Ⅶ. その他（刃部の作り出しが明瞭でない両面加工石器など）。

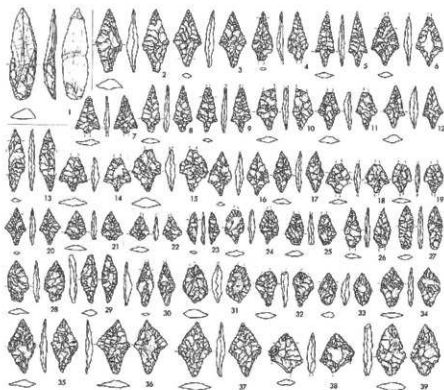


図109 包含層出土石器 1は、先土器時代に属すると考えられるナイフ形石器である。側縁によって鉋の石種と区分した。2-39は、半連続の分類における日野石種。形状の違いから、a類（2-31・39）とb類（32-38）に区分される。

I. ナイフ形石器(図193—1) 先土器時代に属すると思われる基部調整のナイフ形石器である(林謙作・横山美介・畑宏明三氏の御教示による)。基部および正面右側縁に、背面からと、基部から先端にゆるい調整が施されている。これに類する調整・石質を見せる資料は、本遺跡出土資料中には認められなかった。

II. 石鏃(a類:図198—2~31・39, b類:図193—32~38) 石鏃は、長さは最小が2.2cm, 最大が5.0cmを計り、他の諸例の長さの数値は、その最大・最小の数値間に間断なく分布する。いずれも茎を持つもので、平基あるいは凹基は認められない。なお、鏃身が肉厚でそのほとんどが粗い調整が行なわれている一群(11・12・15・16・29・30・31・33)を認めた。これらには、黒曜石を素材とするものが少ない。以下、注意すべき個別事例について述べる。4・6・11・16・36は、それぞれb面の一部に一次調整面を残すものである。31・36は、それぞれb面に自然面を残す。27は、側縁が鋸歯状をなすものである。基部と鏃身の境が不明瞭で、他の諸例と形態が異なることから、石鏃以外のものに分類される可能性もある。

III. 石槍(図194—40~46) 長さ7cm以上のものについて、石鏃と区別して石槍とした。石鏃と分類した諸例との間に、その長さにおいて2cmの開きがあり、この間に長さの数値が分布するものは認められない。40~42とも、明瞭な茎部の作り出しが認められる。43~46は、石槍の基部破片と判断したが、特に45については、實として分類したものに含まれる可能性がある。

VI. 石錐(a類:図194—47~50, b類:図194—51~53) 47~50は、棒状に成形が行われたものであるが、その断面は、47は平たく薄手、48は三角形、49・50は丸味をもった菱形とそれぞれ異なる。52・53は、それぞれ上端に平坦な自然面を残すもので、いずれも縦長割片に粗い調整を加えて刺突部を作り出したものである。47・48・50の刺突部先端に磨減痕が認められた。

V. 刃器類—a類(図194—54~61) 従来つまみ付ナイフと呼ばれているものを便宜的に一括した。基本的には、その大半は、ここでV-e2類としたものに含まれる。いずれも縦長割片を素材としており、背の高い断面三角形の刃部をもつ。54は、a面の上半に自然面を残す。a面左側縁には、連続する深い調整を行なっており、b面には上半および左側縁に粗い調整を加えて平坦面の作り出しを行なっている。55は、a面左側縁に急角度の刃部が作り出されている。b面は、上端と左側縁の一部に粗い調整が行なわれるが、ほぼ一次調整面を残す。柄の挟りは、b面側から2~3度調整を行なって作り出している。56は、ほぼ素材形状をそのまま生かし、両側縁に浅い調整を施したものである。57は、a面の左右側縁およびb面左側縁に粗い調整を施すもので、b面は、一次調整面の凸部を打削して平坦面を作り出している。58は、a面左右側縁に調整を行なうもので、柄部としての判別が難かしいところであるが、b面左側縁に、a面側から2度に及ぶ調整によって挟りつけられている。59は、a面左右側縁に調整が行なわれるもので、右側縁は深めの調整である。b面上端の左右側縁に、a面側から加えられた調整が見られることから、柄の作り出しを意図したものと判断



図194 包赤磐出土石器 40-46は、本遺跡の発掘における旧石器部。47-53は厚板石器で、形態の違いから、a類(47-50)とb類(51-53)に区分される。54-61は、Y類a厚板類。62

されるが、執りは明瞭でない。60は、a面の先端を除く全周、b面の柄付近を中心として調整が加えられている。a面の左側縁および下端には、連続する深い調整によって急角度の刃部が作り出されている。柄の挟り込みは、主にa面側から行なわれている。41は、a面左側縁に粗い階段状調整を、右側縁の下端・先端付近に浅い調整を、b面左側縁に連続する調整を行なうもので、刃はa面右側縁に作り出されている。断面は三角形をなさない。柄の挟り込みは両面から行なわれている。

b類(図195-62-77、図196-78-96・100) 両面加工の刃器類である。大半は、刃部断面が両凸をなすものであるが、なかには強凸弱凸気味で、刃部形態自体から言え

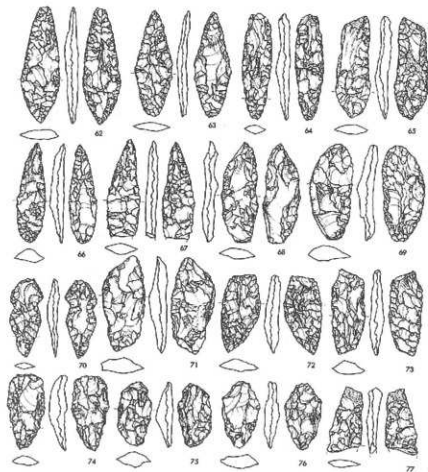


図159 包衣層出土石器 62-77は、半造跡の分類におけるV型b1類石鏢。

ば、c類としたものに近い例も認められる(66・74・85)。62は、先端の実る石楯状の形態をもつものである。深い調整が両面の全体を覆い、両縁にはほぼ連続する細かい調整が見られる。上端・下端は、それぞれ上方・下方から調整が加えられており、先端部に刺突の機能が付与されていないことは明らかである。両側縁に刃部の作り出しが認められる。63は、a面の全面とb面の両縁に調整が施されたもので、b面には一次剝離面が大きく残る。上端の先端部は鋭いが、断面に反りが見られることから、刺突具とは考えにくい。両側縁に刃部の作り出しが認められる。64は、深い調整が両面を覆うものである。a面右側縁に細面調整が顕著である。両側縁に刃部の作り出しが

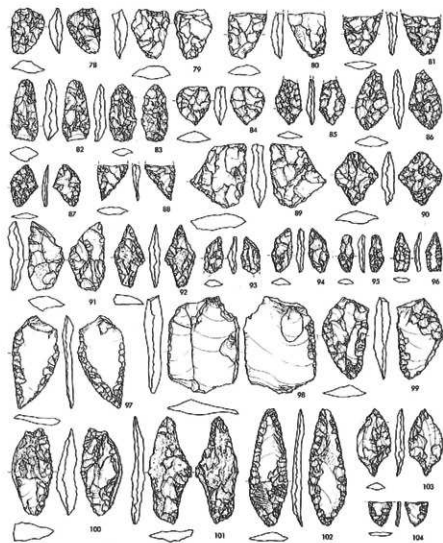


図196 包合層面上の石器 78-96-100は、本遺跡の分類に於けるV群b1類石器。97-99-101-104は、V群b2類石器。

認められる。65は、転石でない原石面を上端および両面の一部に残すものである。a面左側縁には原石面を残しており、それを除いた側縁に調整が加えられている。b面左側縁には、ウロコ状の連続する深い調整によって急角度の刃部が形成されている。66は、a面全面とb面周縁に調整が加えられ、b面には一次剝離面が大きく残る。断面は、上端に行くほど厚みのある菱形に近づき、下端に近づくほど薄いへう状を呈する。下端を中心に刃部の作り出しが認められる。67は、両面を調整が覆うものである。下端を欠損している。上端は尖るが、肉厚で、刺突の機能は考えにくい。両側縁に刃部の作り出しが認められる。68は、a面の全面、b面の周縁に調整が加えられており、b面には一次剝離面を残す。a面右側縁、b面右側縁には、階段状の調整が加えられている。a面左側縁に刃部の作り出しが認められる。69は、両面の全体を調整が覆うものであるが、b面左側縁に細かい連続する調整が施され、刃部が作り出されている。70は、全体の中央よりやや上位に抉りの認められるものである。その抉りの位置によって、a類とは区別される。下端は尖り気味であるが、刺突具とは考えにくい。両側縁に刃部が作り出されている。71は、両面を調整が覆うものである。a面右側縁に刃部が作り出されている。72は、両面を調整が覆う。肉厚であること、形状が左右対称でないことから、刺突具とは考えにくい。両側縁に刃部をもつ。73は、両面を調整が覆うものであるが、a面には階段状の剝離が顕著である。両側縁に刃部をもつ。74は、両面を調整が覆う。背の高い剥片を用いており、a面左側縁に刃部をもつ。75・76は、いずれも形状の点で74と似る。それぞれa面左側縁、a面右側縁に刃部をもつ。77は、両面を調整が覆うもので、両側縁に刃部をもつ。78は、背の高い剥片を用い、その両面に調整を施すもので、全局に刃部をもつ。79は、a面左側縁に刃部をもつ。80は、左右の側縁に刃部をもつ。あるいは、石槽の基部破片かもしれない。82は、下端の両面に一次剝離面を残し、その構成する面を生かして刃部としている。83は、a面左側縁に刃部をもつ。84は、下端に尖りをもつもので、あるいは石錐かもしれない。85は、石錐状の形態をもつが、b面の下端に下方からの調整が加えられていること、先端部の調整が粗いことから、刺突具の機能は考えにくい。両側縁に刃部をもつ。86も先端部をもつものであるが、多分に丸みをもって整形されており、刺突具とは考えにくい。両側縁に刃部をもつ。87は、b面に一次剝離面を大きく残す。石錐状の形態を見せるが、断面が反り、また先端部にも調整が加えられており、鋭い刺突部の作り出しを意図したものではない。88は、b面に一次剝離面をわずかに残すものである。先端部はごく薄手で、また、先端部に向かって急に幅が狭まるその形態から、刺突具の類とは考えにくい。両側縁に刃部をもつ。89は、不整な形状を呈するもので、4辺から粗い調整を加えている。a面右側縁と下端に刃部をもつ。下端の刃部は、b面一方からの調整によって作り出されたもので、片凸の刃部断面をもつ。90は、不整な菱形を呈するもので、上半の左右側縁に刃部をもつ。91は、上・下端およびa面右側縁に切り立った剝離面をもつもので、刃部はa面左側縁である。92は、a面左側縁が、打割に構

成を想定した場合、a面の左側縁の割口部がかなり厚手であるため、完品の石鏃・石槍の側縁が打割されたものとは考えにくい。石鏃・石槍の未成品であるかもしれないが、不明として本類に含めておく。93は、a面右側縁に刃部をもつ。断面は反りをみせる。94も、a面右側縁に刃部をもつものである。上端に自然面を、下端に打割による切り立った面をみせる。95は、上半の両側縁に、両面からの調整によって作り出された挟り状の凹部がみられる。刃部は、その凹部から下方の全周に認められる。96は、a面の全面、b面の肩縁に調整が加えられている。刃部を両側縁にもつ。断面は反りをみせる。100は、a面左側縁に切り立った原石面を残すもので、その右側縁にa・b両面からの微細な調整によって作り出された刃部をもつ。

b2類(図196-97-99・101-104) 両面からの調整によって作り出された刃部をもち、調整が側縁付近に限られるものである。素材である剥片自体が薄手のものであったために深い調整によって加工を行なう必要がなかったもので、刃部の作り出しの状況から言えば、基本的にはb1類と同じ範疇に含まれるものである。97は、縦長剥片の両側縁に刃部の作り出しを行なうもので、両方の刃部断面は片凸気味である。98は、幅広い縦長剥片を用い、正面左側縁に両面からの調整を行なって刃部を作り出すものである。99は、やはり縦長剥片の正面右側縁に刃部を作り出している。正面は、一部に一次調整面を残すものの、ほぼ全体に調整が及んでいる。背面右側縁には、正面側からの調整によって急角度の面が作り出されており、これが作業部であるかどうかかわからない。101は、転石でない原石をほぼそのまま利用して刃部の作り出しを行なっている。刃部はa面左側縁にあるが、両面からの調整が加えられる部分と、片面からの部分とがある。102は、縦長剥片を用い、両面からの調整によって上端を除く全周に刃部を作り出すものである。103は、横長剥片を用い、つまみ状の基部を作り出したもので、a面右側縁に刃部がみられる。104は、a面左側縁を中心に、ほぼ全周に刃部をもつ。

c1類(図197-105・106) 片面からの連続する調整によって急角度の刃部を作り出すものうち、形状が円形を呈するものをこれに含めた。105は、やや薄手の剥片を用いて成形を行なっており、その下端を中心に刃部をもつ。中央よりやや上半の両側縁に、背面からの調整による凹部が認められるが、これは柄の作り出しを意図したもののかもしれない。106は、背の高い剥片の肩縁に、平行する深い調整を加えて刃部を作り出している。背面は大きく内弯する。

c2類(図197-107-117) 片面からの連続する調整によって急角度の刃部を作り出すものうち、c1類以外の形状を見せるものである。107は、上端を除く全周に刃部を設けている。背面は内弯する。108は、上端およびa面右側縁の一部を除いた側縁に刃部をもつ。b面は、右側縁に粗い調整を行なって平坦面の作り出しを行なっている。109は、上端を除く両側縁に刃部をもつ。背面は内弯する。110は、a面右側縁に刃部をもつ。b面は、粗い調整によって平坦面の作り出しを行なっている。刃部側面は大きく反っている。111は、両側縁に刃部をもつ。背面は内弯する。112は、背の高い縦長剥片の両側縁に刃部をもつ。113も、背の高い縦長剥片を用い、両側縁に刃部を作り出し

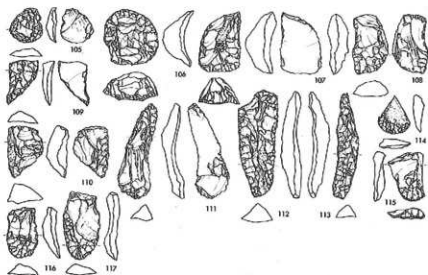


図197 包含層出土石器 105-106は、平造時の分類におけるV部c1類石器。
107-117はV部c2類石器。

ている。背面は大きく内湾する。114は、下端に刃部をもつ。115は、下端を中心に刃部の作り出しが行なわれている。116は、上端を除く周縁に刃部をもつ。背面は内湾する。117は、上端および正面右側縁を除く周縁に刃部をもつ。背面は内湾する。

d類(図198-118-146、図199-147-165、図200-166-186、図201-187-192)

c1・c2類以外の、片面からの調整によって側縁に刃部を作りだすもので、両面加工のものについても、刃部の作り出しが主に片面からの細かい調整によって行なわれているものはこれに含めた。118は、右側縁に刃部をもつ。119は、左側縁にやや急角度の刃部をもつ。120は、a面左側縁に切り立った自然面を残しており、この面の両端に若干の調整を加え刃部としている。a面右側縁先端部付近にも両面から調整が加えられ、刃部の作り出しが行なわれている。121は、右側縁に刃部を作り出している。122は、a面左側縁に刃部をもつ。123は、正面は自然面を残し、両側縁に刃部をもつ。124も、両側縁に刃部をもつものである。125は、a面左側縁に刃部をもつ。126は、a面右側縁に刃部の作り出しを行なっている。127は、左側縁に刃部をもつ。128は、正面に自然面を残し、右側縁に刃部を作り出している。129は、a面右側縁を中心に、下端および左側縁のそれぞれ一部に刃部をもつ。130は、両側縁に刃部をもち、背面は内湾する。131は、a面左側縁に刃部をもつ。132は、両側縁に刃部をもつ。133は、右側縁に刃部をもつ。134は、a面右側縁および左側縁上半に刃部をもつ。135は、a面右側縁に刃部をもつ。b面右側縁に調整が見られるが、側面観は波状をなしており、刃部として

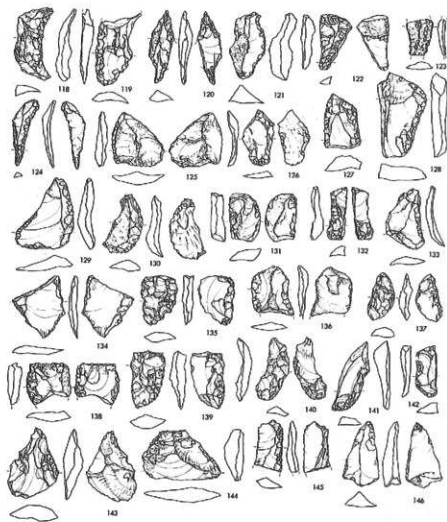


図198 包舍野出土石器 118-146は、本調査の分類におけるY群A類石器。

用いたものか否か不明。136は、左右側縁に刃部。137は、a面右側縁下半に刃部。138は、左右側縁に刃部をもつ。139は、両面加工であるが、a面右側縁にある刃部の作り出しが、片面からの細かい調整によって行なわれている。140は、a面左側縁が刃部で、背面は内湾する。141は、右側縁に、142は左側縁に刃部をもつ。143-145は、右側縁に、146は、両側縁に刃部をもつ。147は、a面左側縁に、148はa面右側縁に、149は、両側

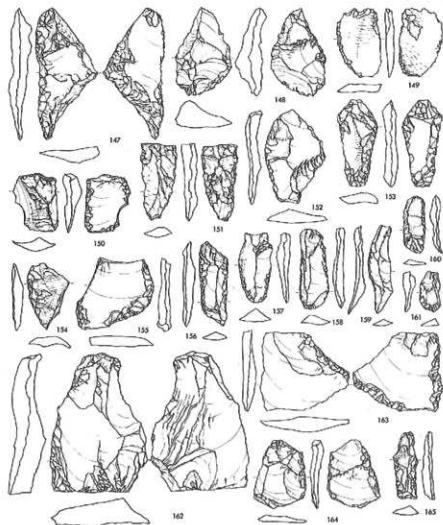


図159 包含層出土石器 147～165は、本遺跡の分類におけるⅡ群d類石器。

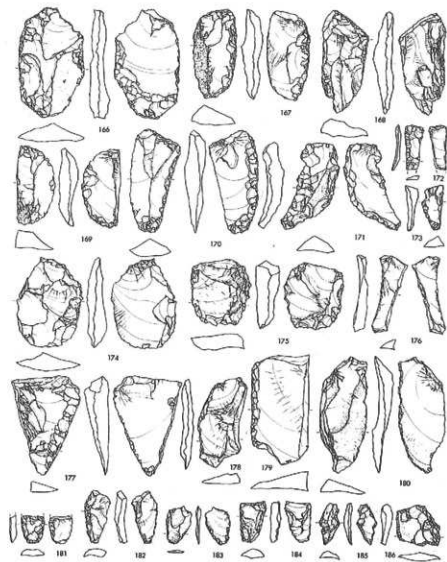


図200 包含層出土石器 166~186は、本遺跡の分類におけるV群と推定される。

縁に刃部。150は、下縁およびa面右側縁に刃部。151は、両面の全体に調整が及ぶが、a面左側縁にある刃部は、片面からの細かい調整によって作り出されている。右側縁は、波状を呈するが、刃部としたものかもしれない。152は、左側縁および右側縁下半に刃部。153は、左右両側縁に刃部。154は、a面左側縁にやや急角度の刃部。155は、右側縁にやや急角度の刃部。156-159は、両側縁に刃部。160は、右側縁および下縁に、161は、左側縁および下縁に刃部をもつ。162は、a面左側縁下半に刃部。163は、上縁を除く周縁に刃部をもつ。164は、両側縁に、165は、両側縁と下縁に刃部をもつ。166は、両側縁に刃部。167は、a面右側縁に刃部をもち、b面右側縁には、平坦面の作り出しを意図した調整が加えられている。168は、a面右側縁に刃部。上縁は切り立った面をなしており、ここにも細かい調整を加えて厚みをととのえている。169は、a面右側縁に刃部をもつ。反対の側縁は、切り立った面を見せる。170は、両側縁に刃部をもつ。171は、a面左側縁に刃部をもつ。反対の側縁にも両面から調整を加え、厚みをととのえている。172は、a面左側縁に調整が行なわれているが、反対の側縁にも、刃こぼれが認められる。173は、両側縁に刃部をもつ。174は、a面右側縁に刃部。175は、両側縁にやや急角度の刃部をもつ。176は、a面左側縁に刃部をもつ。反対の側縁は切り立った面を見せる。断面は、やや反り気味である。177-180は、いずれも一側縁が切り立った面を見せるもので、177・180は、a面右側縁に、178・179は、a面左側縁に刃部をもつ。181-186は、いずれも小形の剥片を用いたもので、181・184は、a面左側縁に、182・183・186は、両側縁に、185は、両側縁の下半にそれぞれ刃部を作り出している。189は、a面左側縁に刃部をもつ。188は、両側縁に粗く調整を施し、刃部を作り出している。189は、上半は両面からの調整によって、形および厚みを整えており、下半の両側縁にある刃部は、片面からの調整によって作り出されたものである。190は、両側縁に、191は、上縁を除く周縁に、それぞれ刃部をもつ。192は、両側縁に刃部をもつが、a面左側縁は、やや急角度の刃部断面をみせる。

VI. 石核(図201-193・194) 193は、主に上端から打撃を加えて、b面側から剥片を取り出している。a面の一部に自然面を残す。194は、底面を除いて、両側面および上面に自然面を残す。a・b両面から、不整な幅広の剥片を取り出している。

VII. その他——刃部の作り出しが明瞭でない両面加工石器など(図201-195-200) 195は、両面の整形後、特にa面右側縁を中心に細かい調整を行なっているが、意図的な刃部の作り出しは認められない。また、その調整の状況から、石核とも考えにくい。196は、一次調整面に手を加えず、そのまま刃部として利用しているものである。b面左側縁に刃こぼれが認められる。197は、両側縁とも、側面観が不整な波状を呈し、意図的な刃部の作り出しが認められない。石核基部にしては、造りが薄手に過ぎると思われる。198は、両面の整形後、上縁を除く周縁に、両面からの細かい階段状剥離によってつぶしを行なっている。199は、両面に調整が及ぶものであるが、意図的な刃部の作り出しが認められない。a面左側縁は、階段状の剥離が行なわれ、丸味をもつ。200は、両面に調整が及び、ことに下半にはa・b両面から細かい調整が加えられている。



図201 包含層出土石器 187～192は、本遺跡の分類におけるV群Ⅲ類石器。
193～194はⅡ群石器、195～200はⅢ群石器。

が、明らかな刃部の作り出しが認められないものである。

礫石器

いずれも散発的に出土しており、集積の状況を示すものはなかった。ただし、石鍾は、発掘区の北東に集中的に分布している（図215）。例えば、C～H—15～18の18区に、総点数の70%強が分布する。貝殻文土器は、大きく見て、SR25竪穴とTL12竪穴を中心とした範囲に分布しており、石鍾の集中区が、このTL12竪穴を中心とした貝殻文土器の分布と重なることから、石鍾の帰属時期を早期とすることができるかもしれない。なお、礫石器には、以下の種類が認められた。

Ⅷ. 石片

Ⅸ. 石製品 a: 飾り玉 b: 石棒

X. 石鍾

- Ⅺ. 振り石
- Ⅻ. 凹み石
- Ⅼ. 砥石
- Ⅽ. 叩き石

Ⅷ. 石斧 (図202-201~215, 図203-216~232, 図204-233~256, 図205-257~272, 図206-273~279) 201~212は、いずれも定形品である。201は、定角式で、粗削り後、部分的に敲打を行ない、刃部を中心に研磨を行なっている。刃部断面は弱凸強凸。刃縁の一部を欠く。202は、定角式で、粗削り後、刃部を中心に研磨を行なっている。刃部断面は、両凸。203は、明瞭な側面の砥ぎ出しを認めない。刃部断面は両凸。204は、側面の砥ぎ出しを認めない。刃部断面は両凸。205も、側面の砥ぎ出しを認めない。刃縁を欠き、断面形状は不明。206は、刃部を中心に研磨を行なっている。側面の砥ぎ出しは認めない。刃部断面は両凸。207は、定角式で、研磨が全体に行き届いている。刃縁を欠くが、弱凸強凸の断面をもっと思われる。208は、定角式で、刃部断面は両凸。209は、定角式で、刃部断面は両凸。210は、斧身全体に敲打を行なっている。刃部断面は両凸。側面の砥ぎ出しは、刃部付近に明瞭である。211は、定角式で、刃縁の一部を欠くが、刃部断面は弱凸強凸を呈する。212は、定角式で、刃部断面は両凸。213~239は、刃部を残す破損品である。213は、打ち欠きによって刃部の作り出しを行なっているが、その後の敲打・研磨の作業過程を認めない。斧身には、刃部の打ち欠き以前の研磨が見えるので、破損品を二次的に加工したものと考える。214は、縦方向に破損した定形品の破片の刃縁に、打ち欠きを行なっている。二次的な加工による再利用を意図したものであろう。215は、刃部破片である。定角式で、刃部断面は弱凸強凸。216は、定角式のやや大形の石斧の破片に、二次的な加工を行なっている。刃縁と左側縁はそのまま利用し、基部と右側縁に粗削りを加えている。刃部断面は両凸。217は、定角式で、刃部断面は両凸。218は、定角式で、刃部断面は両凸。219は、側面の砥ぎ出しを認めない。刃部断面は弱凸強凸。220も、側面の砥ぎ出しがないものである。刃部断面は両凸。221は、刃部破片で、研磨がよく行き届いている。定角式で、刃部断面は両凸。222~227は、いずれも定角式で、刃部断面は、224・225が弱凸強凸、その他は両凸である。228は、刃縁および斧身と基部を欠く。定角式で、刃部断面は弱凸強凸。229は、定角式で、刃部断面は弱凸強凸。230は、定角式で、刃部断面は両凸、刃縁は「へ」の字状を呈する。231は、定角式で、刃部断面は弱凸強凸、刃縁は「へ」の字状を呈する。232は、定角式で、刃部断面は両凸、刃縁は「へ」の字状を呈する。233~238は、いずれも定角式で、刃部断面は弱凸強凸を呈する。239は、丸ノミ状刃部形態をもつものである。刃部は、横断面では、片面が大きく内弯し、いわば半截竹管の断面に似る。このような刃部の作り出しをもつものは、本遺跡の石斧中一例のみである¹⁾。240~246は、刃部・基部ともに欠くものである。241・246を除いて、定角式である。245は、斧身断面が背の高い台形を呈する。247~274は、いずれも基部破片である。247は、粗削

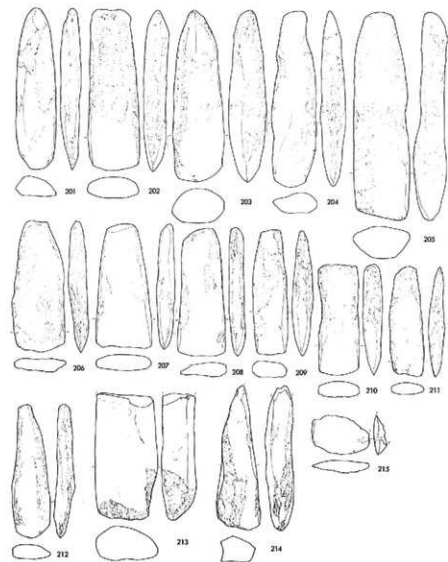


図202 荻倉層出土石器 201-215は、本遺跡の分類における種別石器。定形
 品を中心に示した。

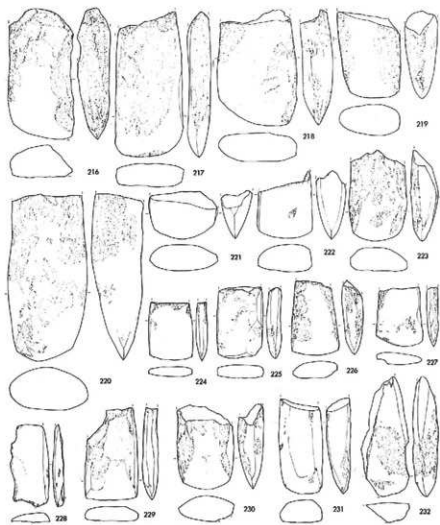


図203 包含層出土石器 216-232は、本遺跡の分類における類群石器、刃部破片を中心に示した。

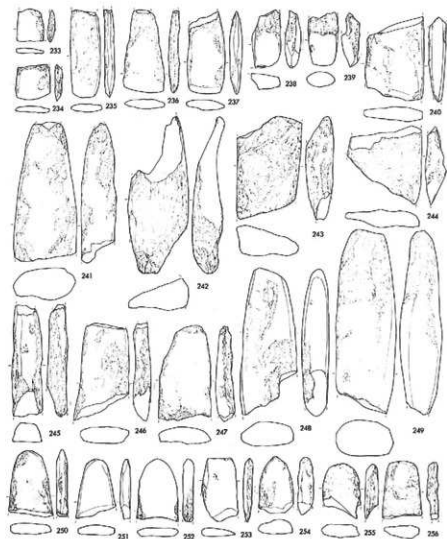


図204 包舎層出土石器 233-256は、本遺跡の分類における燧石器。断面を欠くものを中心に示した。

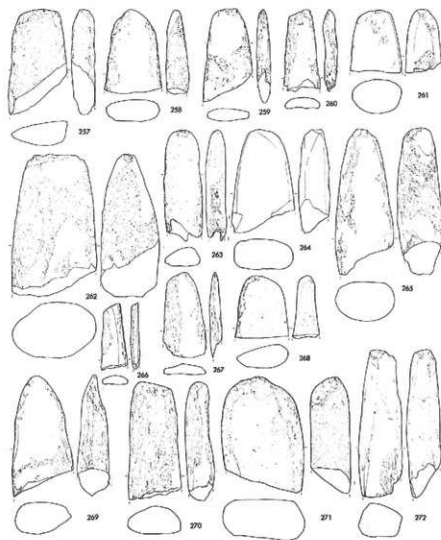


図205 埼玉県出土石器 257～272は、本資料の分類における燧石石器。基部
破片を中心に示した。

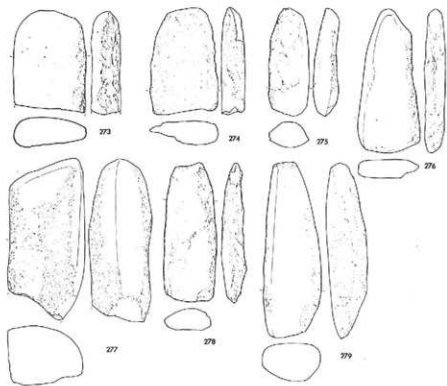


図206 包含層出土石器 273～279は、本遺跡の分類における標準石器。未製品を中心に示した。

り後、一部に敲打を行なっているが、研磨は加えられていない。248・251・253・254・256・259・261・264・266・267・270は、いずれも定角式である。252・255・257・258・262・263・265・268・269・271～274は、いずれも研磨の行なわれていないものである。275～279は、未製品である。275は、両側縁を粗割り後、背面の厚身に研磨を行なっているが、正面には研磨が行なわれず、刃縁の作り出しが完成していない。276は、素材の1側縁を粗割り・整形しているが、研磨は行なわれていない。277は、その長さのわりにはかなり厚手の素材に、粗割り・敲打を加えている。刃部・基部を意図した整形痕が認められないこと、さらに、その素材形状自体から、石斧素材の原石を用いているが、石斧の製作を意図したものかどうかわからない。278は、粗割り後、正面一面にのみ研磨を行なっている。279は、粗割・敲打後、正面一面にのみ研磨を行なうものである。

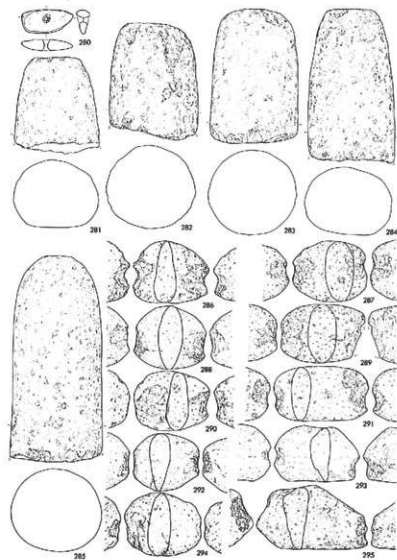


図207 包合層出土石器 280, 281—285はそれぞれ、本遺跡の分類における
 Ⅱ群a類、b類石器。286—295はⅡ群石器。

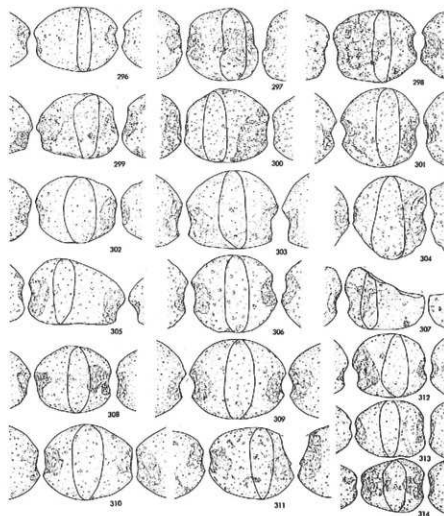


図208 包含層出上石器 296-314は、本遺跡の分類におけるX群石器。

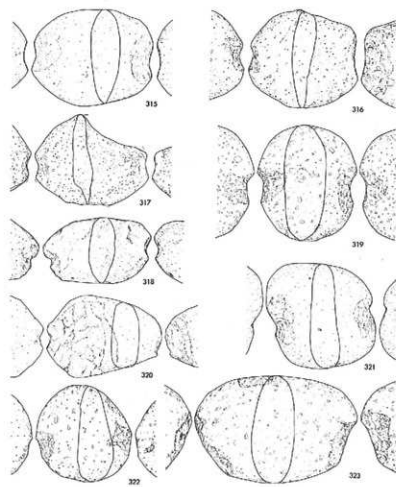


図200 包含輝石上石筴 315～323は、本産地の分類におけるX群石筴。

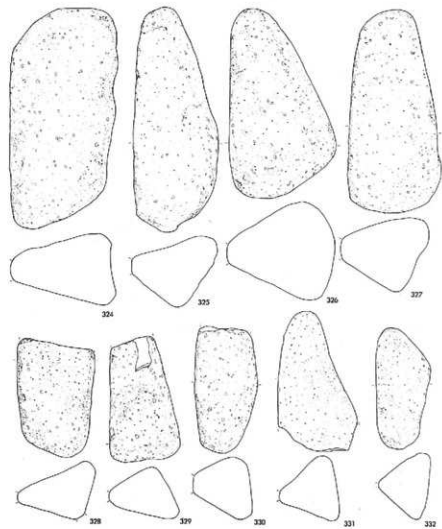


図210 包合層出土石器 324-332は、半遺跡の分類における真鍮石器。

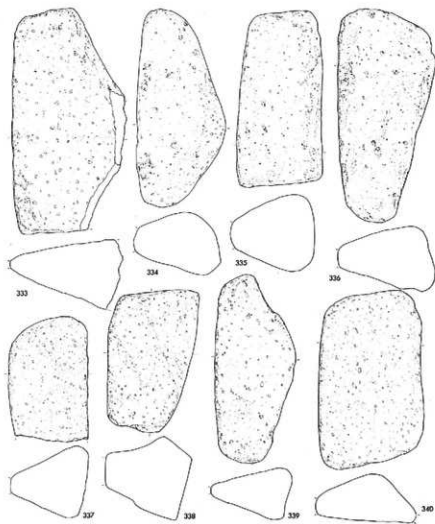


圖211 包含層出土石器 333~340L1. 本遺跡の分類における群群石器。

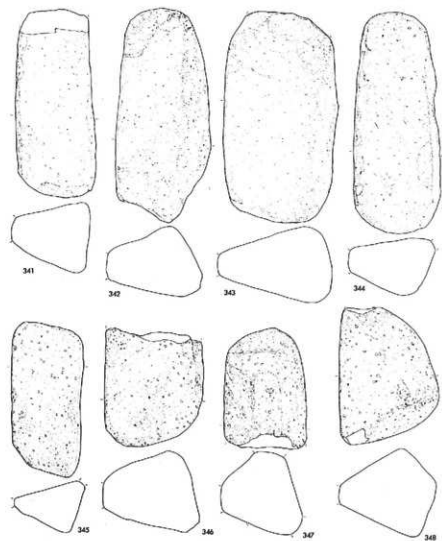


図212 包含層出土石器 341～348は、本遺跡の分類におけるⅢ群石器。

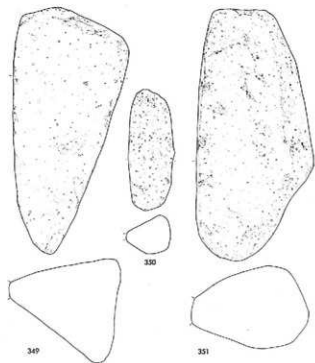


図213 包含器出土石器 349～351は、本遺跡の分類における重群石器。

IX. 石製品 a類 (図207～280) 飾り玉である。中央に、両面からの穿孔が行なわれている。全面に研磨が加えられ、にぶい光沢を見せる。

b類 (図207～281～285) 石棒である。281は、体部および頂部に研磨が行なわれている。下半は欠損したものであろうか。282は、敲打による調整が行なわれており、研磨痕は認めない。頂部は平坦である。底面の周縁は丸みをもち、完成後の欠損面でないことを示している。283は、敲打調整が行なわれている。研磨痕は認めない。頂部は平坦である。底面は、体部下端に調整痕を見ることが、完成後の欠損面とは考えられない。284は、全体に研磨が及ぶ。頂部も平坦に砥ぎ出されている。下半は、欠損したものであろうか。285も、頂部を含む体部全体に研磨が及ぶ。下半は、欠損したものであろうか。

X. 石鎌 (図207～286～295, 図208～296～314, 図209～315～323) 石鎌は、ほとんどが、円環長軸の両端に、両面あるいは片面から剝離を加え、袂りを作り出すものである。短軸の両端に袂りを設けたのは、319・322の2つであった。長さは、6cm前後

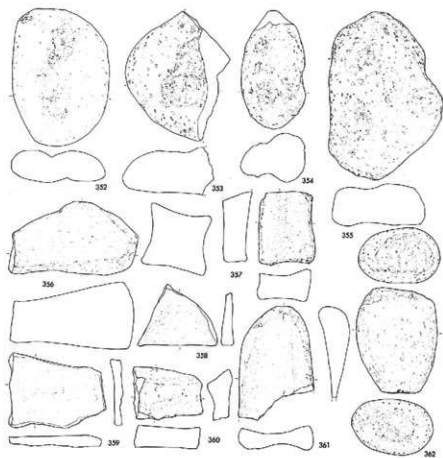


図214 包含層出土石器 352～356は、本遺跡の分類における重磨石器、356～361, 362はそれぞれ、錐形、卵形石器。

の例が多く、5～9 cm間に集中する。

XI. 搥り石(図210～324～332, 図211～333～340, 図212～341～348, 図213～349～351) 搥り石は、いずれも、断面三角形、あるいは、正しくは断面三角形ではないが、それに含めてよいものである。従来、早期に特徴的な石器とされてきたが、出土層位、出土量からみて、III 2 a群に伴うものが多いことは確かである。III 2 a群土器に近い土器群を出した兩館市西段遺跡²⁾では、伴出遺物として、短冊形・半月形の搥り石が上げられているが、本遺跡では、これに該当する搥り石は一例も認められない。このような短冊形・半月形の搥り石の欠落を埋める意味でも、本遺跡においては、断面三

角形の擦り石の多くが、Ⅲ2 a 群土器に伴うものと考えべきであろう。断面三角形の擦り石は、1つの稜を擦り面として用いるものが多数で、2つの稜を用いる例もいくつかある。3つの稜を用いた例は、347の1例のみである。大半は、原石である円環の形状を生かして利用しているが、長軸両端を打ち欠いて大きさを整えるものや、擦り面とする面を、打ち欠きによって平坦化しているものもある。

Ⅻ. 凹み石（図214—352—355） 352は、正背両面に、回転あるいは前後の運動による、丸あるいは溝状の凹みがある。353は、正面に凹部をもつが、凹部内面は細かな凹凸があり、叩いた痕のように見える。354は、正背面に、353と同様、内面に細かい凹凸を見せる凹部がある。355は、側面を含めた全面に、回転運動が加えられたかのようにつややかな内面を見せる凹部がある。

Ⅻ. 砥石（図214—356—361） 356は、左右側面を除く4面が使用面である。357は、上下二面を除く4面が使用面で、上半は、使用後に欠損している。358は、表裏両面および下面が使用面である。359は、表裏両面および4側面の全てを砥面としている。360は、左右両側面を除く4面が使用面である。361は、表裏両面の中央に主要な砥面があり、周縁が高く残る。周縁もまた、砥面として用いられている。下半は、使用後の欠損である。

Ⅻ. 叩き石（図214—362） やや平偏ではあるが、丸みのある断面をもつ。上下両面に、打撃による凹凸を残す。

小括

本遺跡で得られた石器は、以上述べたように、ナイフ形石器・石錘・石槍・石鏃・刃器類・石斧・石棒・飾り玉・石鏃・擦り石・凹み石・砥石・叩き石であった。このうち、ナイフ形石器は、その調整手法から先土器時代に分類され、石鏃は、その分布から早期貝殻文土器群に共伴する可能性が考えられた。それ以外の石器については、遺跡の状況から、大半がⅢ2 a 群土器に共伴するものと考えられる。これらの石器について、本遺跡のⅢ2 a 群とはやや異質な土器を含むが、大きくは同じ短刻線文土器群として分類される一括資料を出土した西股遺跡の石器群と、簡単に対比・検討を行ない、本遺跡出土石器の小括をしたい。西股遺跡における石器組成として、報告書は次のものを上げている。有茎錘、縦長の特徴的なナイフ、幾種類かのスクレイパー、すり切りによらないハマグリ刃の磨製石斧、いわゆる青竜刀形石器、円柱状の石棒、すり石。以上の西股遺跡における石器組成と、本遺跡の石器組成には、いくつか相異なる点が指摘できる。1つには、つまみ付ナイフの伴出の問題が上げられる。西股遺跡では、つまみ付ナイフが伴出しない点を強調している。本遺跡では、数量自体多くはないものの、つまみ付ナイフが出土しており、遺構に関連して、SP38堅穴覆土およびRG05堅穴床面に検出されていることから、短刻線文土器群に共伴する遺物である可能性は充分に考えられる。また、本文中に述べたように、擦り石のタイプが両遺跡で互い

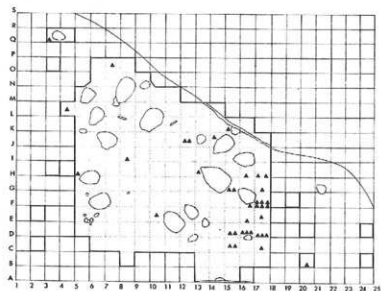
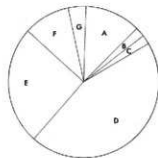


図215 弥生層出土石器の分布 石器1点を1マークで示した。集落区の北東部に集中することがわかる。ちなみに、C-H-15-16の16号地区中に総点数の70%が分布する。



例216 弥生層出土石器の器種別構成比 千歳6遺跡の弥生層出土石器についてナイフ形石斧、石槌・不明石器、早期に属すると考えられる石器それぞれを除いた金点の、器種ごとの構成比を示した。A-Dは割目石器、E-Gは端石器で、A：石槌 B：石槌 C：石槌 D：刃部幅 E：石斧 F：地り石 G：E・Fを除くその他の端石器を示す。石器金点数における石斧点数の占める割合が高い。

に異なる点も、際立った特徴である。さらに、西股遺跡出土の石斧は、ハマグリ刃とされているが、本遺跡出土の石斧には、弱凸強凸の刃部断面を示すものが多く、片刃に近いものも幾つか認められた。すり切りによる成形は、西股同様1例も認めない。西股遺跡で出土しておらず、本遺跡に特徴的な石器は、剥片石器V—h1類と分類したもののうち、62・63・102などを典型とする両面加工の刃器である。長さは7—9cmと一定し、長軸の一方が強く尖り、一方が丸みを帯びる浮きに似た形状を呈するものである。

なお、西股遺跡で、石楯以外に唯一「定形化の傾向が見られる」とされた、両側辺が平行な縦長のナイフは、本遺跡でも多量に認められた。剥片石器V—d類としたものの多くは、西股遺跡の分類での縦長ナイフに該当する。「礫表面の残されたものがかなりの高率で存在する」点も、同様である。

図216に、包含層出土石器の各器種別出土率を示した。石斧の石器総数に占める割合の高い点が、本遺跡における石器組成の一つの特徴と言えよう。

註1) 丸ノミ形石斧については、次の文献に詳しい。加藤晋平「丸のみ形石斧について—北海道出土例を中心として—」『考古学雑誌』48巻4号、1962

註2) 森田知恵・中田幹雄・山田信郎ほか『西股』北海道第四紀研究会、1974

第4章 考察

第1節 千歳6遺跡における竪穴の構造と集落の変遷

瀬川 拓郎

I. はじめに

千歳6遺跡の調査により、我々は、縄文時代中期終末に位置づけられるであろう竪穴住居址の一括資料を得た。本論は、これら竪穴を構成する諸要素について分析と考察を加え、当遺跡における竪穴群の構造を体系的に明らかにするとともに、そこから得られた事実によって、「集落」の動態を示唆する遺跡内の竪穴の変遷と、竪穴群の占地の移動について述べる。ここで扱う資料は、「竪穴」としたもののうち、遺構の性格が不明なBM75、AB12、KL25の3竪穴を除いた全ての竪穴である。

II. 竪穴の構造

1. 竪穴の形態と大きさ

本遺跡で検出した竪穴はいずれも、卵形の均一な平面形をもつものであった。ただし、大形の竪穴の平面形は扁平な長卵形を、小形の竪穴は丸みの強い卵形を呈する傾向が認められた。ここでは、竪穴の大きさについて分析を行ない、大形・中形・小形の区分を明らかにするとともに、竪穴の形態と大きさとの相関性について検討する。

竪穴の大きさ 竪穴は、最大のKE12竪穴で長さ11.1m、最小のZR40竪穴で長さ2.4mを計る。表1に竪穴各部の計測値を示した。この竪穴の長さについてグラフ化したのが図217である。このグラフから大きく4つの、竪穴の長さのまとまりを抽出できる。すなわち、長さが4mを下回る小形の竪穴、長さが4～6mの間にある中形でもやや小さめの竪穴、長さが6～8mの間にある中形でもやや大きめの竪穴、長さが8mを越える大形の竪穴の以上である（それぞれ順に、L1型、MI-b型、MI-a型、LA型と呼ぶ）。これらの各型の竪穴の分布をみると（図218）、同一型の竪穴が隣接し、その長軸方向もほぼ同じであるという傾向が指摘できる。しかし、このことがそのまま、隣接する同型竪穴間の同時性を意味するかどうかは、現時点ではわからない。小形の竪穴であるL1型は、MI・LA型の分布域を離れて散在する傾向が認められる。これらL1型竪穴の居住面積は、最小のZR40竪穴を例にあげれば、竪穴先端部の浅い掘り込みの面積を引いた竪穴面積は、わずか3.8㎡に過ぎない。これは、

整穴名	SR25	XL25	RG05	TL12	CB75	MT05	XR80	WI65	MB05
長さ: x	7.1	7.9	6.9	6.4	7.7	6.8	7.3	5.7	5.3
幅1: y	4.2	4.2	4.0	3.7	5.0	4.0	4.6	3.4	3.5
幅2: z	4.8	5.3	4.8	4.6	5.7	4.5	5.2	4.2	4.3
$\frac{3}{2}x$	1.8	1.6	1.6	1.8	2.0	1.8	1.9	1.8	1.9
$\frac{3}{2}y$	2.0	2.0	1.9	2.1	2.2	1.9	2.1	2.3	2.4
KE12	RZ25	SP38	NO31	DC12	ZR40	ER34	EL12	FU69	XJ40
11.1	8.8	8.9	3.5	3.0	2.4	3.1	3.6	3.3	5.5
5.4	5.2	4.8	2.4	1.9	1.8	2.1	2.4	2.6	2.6
7.0	6.2	5.7	2.9	2.4	2.0	2.5	2.9	3.3	4.0
1.5	1.8	1.6	2.0	1.9	2.1	2.2	2.0	2.4	1.9
1.9	2.1	1.9	2.4	2.4	2.4	2.6	2.4	3.1	2.4

表5 整穴の長さ・幅・構成比 長3は、整穴先端から基部までの長さ、幅は長さを3等分した点で計った2つの幅のうち、基部寄りの幅を y 、先端寄り幅の幅を z とする。いずれも単位はメートル。 $\frac{3}{2}x$ および $\frac{3}{2}y$ は、それぞれ長さに対する幅の関係を示すもので、 $\frac{3}{2}x$ は先端寄りでの幅 y を長さの3等分の数値 $\frac{3}{2}x$ で割ったもの、 $\frac{3}{2}y$ は基部寄りでの幅 z を同じく $\frac{3}{2}x$ で割ったものである。この2つの数値は、後で述べる整穴の形態分析に関係する。なお、MB05整穴の各数値は、テラス状の張り出し部を除いた場合の計算値である。

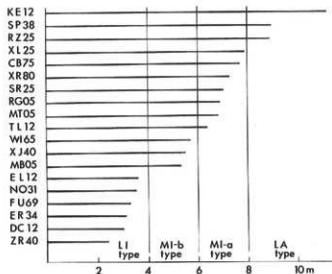


図217 整穴の長さとそのグループコード 横軸は整穴の長さ(単位メートル)を示す。そのまよりから、小形の整穴(LI型)、中形でもやや小ぶりの整穴(MI-b型)、中形でもやや大ぶりの整穴(MI-a型)、大形の整穴(LA型)の4つのグループが設定できる。LI型: SR031, ZR40, DC12, 宇109, ER34, EL12, MI-b型: WI65, MB05, XJ40, MI-a型: XL25, RG05, TL12, CB75, MT05, XR80, SR25, LA型: SP38, RZ25, KE12

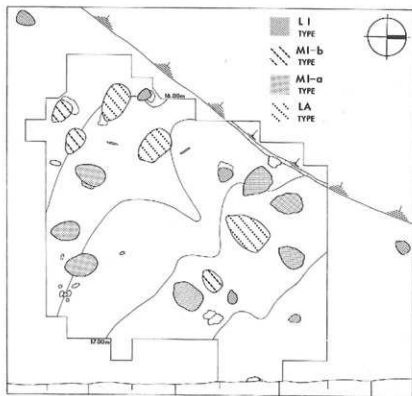


図218 大きさのグループによる各型式別堅穴分布 図217をもとに、各型式別の堅穴の分布を示した。同一型の堅穴が隣接し、長軸方向を \pm にする傾向が認められる。

開野が想定した1人当りの起臥面積である 3 m^2 を若干上回る程度の数値である。このことから、L I型堅穴は、全てをそうだとするわけではないが、単数の人間による居住の可能性の強い例を含むことは確かである。そして、このような単数、あるいは複数としてもおそらくせいぜい2~3人によって居住されたであろう堅穴が、集落のいわば“はずれ”に分布することは、その居住者の性格を考慮するうえで興味深い事実であるに違いない。

堅穴の形態と大きさとの相関性 堅穴の形態の異同をグラフ化したものが図219である。y軸数値およびx軸数値の大きいものは丸みの強い卵形で、逆のものは偏平な長卵形であることを示す。この表から、まず丸みの強い堅穴の一群(L I型、MI-b型)と、偏平な長卵形の一部(MI-a型、LA型)に大きく二分することができる。そして、それぞれの群が、より丸みの強い一群(L I型)と丸みの強い一群(L

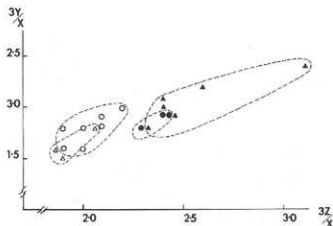


図219 竪穴形態の異同 表1に示した $3Y/X$ 、 $3Z/X$ 数値を用い、竪穴形態の異同をグラフ化した。△はLA型の竪穴、○はMI-a型の竪穴、●はMI-b型の竪穴、▲はLI型の竪穴をそれぞれ表わしている。おおよそ、y軸数値およびx軸数値の大きいものは丸みの強い卵形、他のものは偏平な長卵形のプランをもつ。この間から、長さの分類によって設定した竪穴各型に対応して、そのプランも微妙に異なることがわかる。

MI-b型)より偏平な長卵形の一群(LA型)と長卵形の一群(MI-a型)におおよそ二分されることも読みとれる。このことから、大形の竪穴であるほど偏平な長卵形に近づき、小形の竪穴であるほど丸みの強い卵形に近づくことがわかる。FU69竪穴は、かけ離れた数値を示しているが、これはこの竪穴の平面形が他の竪穴と異なり、隅丸の三角形を呈するためである。FU69竪穴は、本遺跡中唯一の土器圈いけをもち、覆土中にIII 2 b・III 2 c群を多く含むことなど、注意すべき点が多い。

図220は、表1の竪穴構成比数値($3Y/X$ ・ $3Z/X$)を平均し、その数値から作製した平均的な竪穴形態のモデルである。整った卵形をなすことがわかる。このモデルによって各竪穴についてみていくと、いくつか印象の異なる形態の竪穴を抽出することができる。KE12、RG05、XL25、CB75の各竪穴がそれで、基部が直線状をなし、側縁移行部が弱く角をもつ。これらの竪穴は、不整な環状をなす竪穴群の北半に限定的に分布する(図221)。

2. 上屋構造の復元

最初に主柱穴の配列を分析し、それを踏まえうえて、焼失竪穴の炭化材出土状況から上屋構造について考察を行なう。

主柱穴の配列 ほとんどの竪穴では、壁から0.5~1m内側の線上に柱状の掘り肩

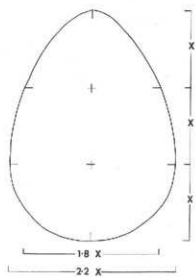


図220 平均的な壱穴形跡のモデル。去1の壱穴傾成比数値(37%・35%)を平均し、その数値から作成した壱穴形跡のモデルを示した。整った形状をなすことがわかる。

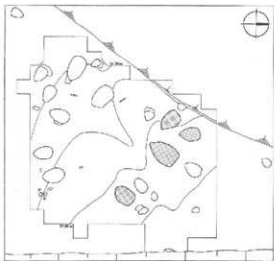


図221 壱穴基部が直線状をなす壱穴の分布。基部が直線状をなし、田線斜行部が鋭く角をもつ壱穴の分布を示した。不整な楕円を呈する壱穴群の北中に概率的に分布していることがわかる。

が巡っていた。このうち、他の掘り肩に較べて一段と深く、左右対称に對になるものを主柱穴と判断した。図222に、推定される主柱穴の分布を示した。主柱穴は8個あるいは10個で、長軸で分割した場合左右対称になるように2個1対で配列されている。主柱穴が6個と推定されるW I 65竪穴、12個と推定されるK E 12竪穴は、いずれも例外的である。L I型として分類した竪穴には主柱穴と思われる掘り肩が認められない。この点でも、L I型の竪穴は他の竪穴と区別されるであろう。

上屋構造の復元 焼失竪穴と判断したのは、S R 25、W I 65、Z R 40、E L 12の4竪穴であった。このうち、炭化材の遺存がよいS R 25、W I 65の2基の竪穴をあけて、上屋構造について述べる。まず、両者に共通する出土状況を抽出してみよう。

1. 壁に沿って並ぶ材と、これに直交して重なる材の組合わせが認められる。S R 25竪穴では、壁に沿って並ぶ材は径7~8cm、これに直交する材は径3~4cmと、太さがそれぞれ揃っていた。この組合わせは、いずれの竪穴でも、壁から竪穴中央に向かって下傾して出土した。直交する材は、竪穴中央に向かって求心状を呈する。2. 竪穴中央部では炭化材の分布がやや稀薄だが、壁際の炭化材に較べて太めの材が出土する。S R 25竪穴では、竪穴中央部で出土した材はいずれも径10cm前後であった。竪穴中央部付近の材は、ほとんどが床面に密着して出土した。3. 茅材は、壁際の床面および炭化材にまじって床面のやや上方から出土した。また、両竪穴で、壁に貼り付いて立ち並ぶ茅材を検出した。4. 焼土と炭化材の分布が重なるところでは、炭化材の上に焼土が被っていた。

1での材の組合わせについて検討してみよう。まず、これが上屋構造であるのか、あるいは壁の土留め施設であるのか問題となる。出土状況をみると、壁に密着していた例がなく、壁から竪穴内に傾斜する炭片を含む三角堆積をはさんで出土していることから、壁に密着していたものがそのままの構造を保って倒れたものとは考えられない。であるならば、上屋施設がその構造を保ったまま崩落したとすべきであろう。材の入り方から、この上屋は、径3~4cmの材を垂木として求心状に配し、これに径7~8cmの材を横木としてかませた構造のものと考えられる。2の、竪穴中央部に分布する材は、その径の大きさと分布位置から、横木や主柱が倒れ、崩落したものと考えられる。3の茅材は、壁に貼り付いて立ち並んでいたものについては土留めの可能性が高い。炭化材にまじって床面上方から出土したものの、壁際の床面に密着して分布していたものについては、それぞれ上屋の葺き上げ、床面に敷いたものとする。4の焼土と炭化材の被覆の関係はどう理解すべきであろうか。まず、焼土が生じる原因について考えてみよう。焼土は、W I 65、S R 25いずれの竪穴においても、ロームが焼けて赤化したものであった。このことと、焼土が炭化材の上に被るように出土する事実から、焼土が生じる原因・状況には、以下の3つの場合が想定できる。

1. 壁周縁として積み上げたロームが崩れ、あるいは崩されて炭化材を覆った。²³⁾ 2. 上屋崩落後、ロームを投げ込んだ。3. 上屋上をロームが覆っており、上屋とともに崩落した。

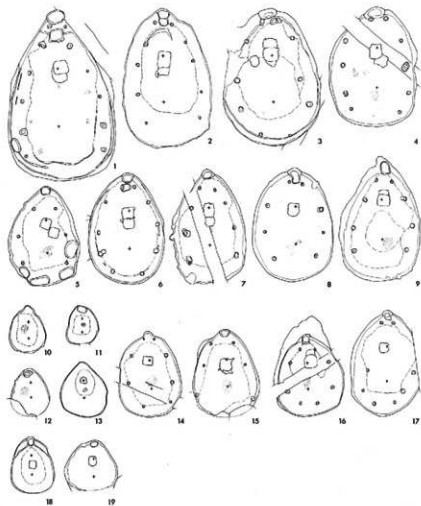


図22 各居室における主柱穴の分布 各居室における確定される主柱穴の分布を示した。十字マークは、炬火取縁の3等分点を示しており、これと最終的な石圍伊の位置とが対応することわかる。1: KE12, 2: SP28, 3: RZ25, 4: CB75, 5: TL12, 6: SR25, 7: RG05, 8: XR09, 9: XL25, 10: DC12, 11: ZR40, 12: ER34, 13: NO31, 14: XJ40, 15: WI65, 16: MH05, 17: MT05, 18: EL12, 19: FU09

1については、焼土が堅穴中央を含めたそのほぼ全面に分布していることから考えにくい。2については、SR25堅穴先端部で検出した焼土のように、1.4×1mの範囲に厚さ20cmで堆積する分量のロームを一度に投げ込んだとは思われない。出土状況からして、3の場合が最も考え易いであろう。このとき、TL12堅穴で検出したまじりのない大量のロームの堆積（第2章図33参照）も、上屋を覆っていたロームが一時に崩落したと考えるのが最も妥当であるかもしれない。以上から、焼土と炭化材の被覆の関係は、上屋に被せた掘り上げ土のロームが、火災時の火熱によって焼土化し、上屋とともに崩落した状況を示すものと理解したい。

以上の分析から、上屋構造についてまとめを行なう。堅穴を掘り込んだのち、まず、その長軸で分割した場合左右対称になるように、左右1対で1組みの柱を、4組あるいは5組はほぼ等間隔に立てる。このとき、いくつかの堅穴で検出した主柱穴間を埋めるように分布していた小形の柱穴は、間仕切りの柱を立てたものかもしれない。柱の上には、桁や樫木を渡し、屋根組みを行なう。これに径3～4cmの椀木を平行あるいは扇状に配し、径7～8cmの材を横木としてかませる。この骨組を茅で葺き上げたのち、掘り上げたロームを、その粘質性を生かして上屋上に被せていく。堅穴内では、壁に茅材を貼り付けて土留めとする。茅材の押さえがどのように行なわれたかは不明である。壁際の床面にも茅が敷かれたであろう。

3. 堅穴内の区画

ほとんどの堅穴の床面は、圓い床とやわらかい床に明瞭に二分でき、圓い床を中心としてその外側にやわらかい床が広がっていた。この床面の固さにおける二重性を中心に、堅穴内の区画について考察を行なう。

固く踏みしまり、時に表面がウロコ状を呈する床面は、LI型の堅穴の一部を除く全ての堅穴に認められた。この圓い床面の広がりや、ほとんどの堅穴では、主柱穴を結ぶ線の内側に対応していた。この外側には、内側の床に較べてしまりのないやわらかい床が広がっており、堅穴基部付近の幅は、平均して60～80cmを計る。LI型のZR40堅穴では幅40cm前後であるが、この数値は、MI型のSR25、WI65堅穴と同じで、小型の堅穴におけるやわらかい床の幅が極端にせまいということはない。むしろ、MI型と較べて大きな差は認められない。KE12堅穴のように大形の堅穴では、幅は80～120cmと若干広い。堅穴基部にベンチをもつ堅穴の場合、圓い床の分布は、KE12堅穴ではベンチ下端まで広がっており、RZ25堅穴ではベンチ下端から60～120cm内側に広がっていた。WI65、MB05、SP38の3堅穴では、圓い床は桁を中心とした範囲に広がっていた。

床面が固く踏みしめられているという事実は、当然のこととして、その空間の頻繁な利用を物語るものであろう。ただし、頻繁に、あるいは日常的に利用することに変わりはないとしても、人が立って歩き回る空間と、起臥に利用する空間とでは、その

床の固さに違いが生ずるであろう。それゆえ問題となるのは、固く踏みしまった床は、人が立って歩き回り日常的に利用した結果生じたものであるとしても、その外に広がるやわらかい床面の空間が、日常的に利用されることがなかったのか、あるいは利用するにしても固い床面の空間と利用の仕方が違っていたのか、という点であるに違いない。

W165およびSR25竪穴で、茅材が壁際を中心に敷かれていたと考えられることは、既に述べたところである。このような茅材が敷かれていた空間は、おそらく起臥の空間として考えるのが妥当なように思われる。すなわち、やわらかい床面の空間は、起臥の空間として日常的に利用されていたものと考えたい。その場合、固い床面の空間は、土間として居住者共用の作業空間にあてられていたものと想定する。だが、このとき、KE12およびTL12竪穴で検出した小竪穴の存在が問題となるであろう。この小竪穴は、いずれも長さ100cm、幅60cm、深さ40cm前後の隅丸方形を呈するもので、竪穴の壁際に掘り込まれている。TL12竪穴の例については、底面に黒色土が薄く堆積し、その後竪穴とともに一気に埋没していることから、竪穴と併行して存在し、なおかつしばらく開口状態にあったものと考えられる。KE12竪穴の小竪穴についても、形態・規模・位置がTL12竪穴のものと類似するため、同様の性格をもつと考える。TL12竪穴では、竪穴基部の壁に沿って4基の小竪穴が分布しており、これが全て開口していたとすれば、そこに起臥の空間を想定するのは困難である。しかし、この小竪穴に、その形状・大きさ・位置からみて仮に貯蔵穴としての用途を想定するならば、壙口部には蓋がされるであろうから、起臥にさしたる支障はなかったに違いない。貯蔵穴でないとしても、これらの小竪穴が口を開けたままで居住が行なわれたとは考えにくい。

床面から完形の遺物（土器・石器）を出土したSP38、MT05、EL12竪穴では、EL12竪穴先端部寄りの床面から出土した一部の遺物をのぞいて、いずれも竪穴基部の壁際に遺物が位置していた。これは、壁際の空間が道具をおく場としても利用されたことを物語るのかもしれない。R225、KE12竪穴の基部、EL12竪穴の先端部に巡っていたベンチ状の構造は、以上の推定から、起臥の場あるいは道具をおく場として利用されたことも考えられる。

4. 「先端部ピット」

竪穴の先端部には、長さ・幅50cm、深さ5cm前後の隅丸方形あるいは不整な円形を呈する浅い皿状の掘り屑が、ほとんどの例に認められた。NO31、XJ40、DC12竪穴ではこれを検出できなかったが、後者2つの竪穴に関しては、凸状にとびだした先端部の状況から、この掘り屑に類するものがあつたと推定される。MB05竪穴では、この掘り屑の底面周縁に深さ10cm前後の掘り込みが巡っていたが、他にこのような施設をもつ例は認められない。SR25、MT05、X125竪穴では、この掘り屑の底面が

固く踏みまわっているのが観察された。入口部としての性格を示すものであろうか。また、XJ40竪穴では、その関係は明らかでないが、先端部ビット覆土中に立石状のものが見られた。祭壇としての利用を示すものかもしれない⁶⁾。本遺跡の竪穴とはほぼ同時期に位置づけられる函館市西結梗E2遺跡の竪穴の先端部ビットについて、加藤は、「柱穴としての用をなしていたものではなく、この内部に石及び土器の存在することから、貯蔵穴である⁷⁾」と想定している。しかし、貯蔵穴として認定するには、その論拠にも、あるいは浅い皿状を呈するビットの形態からいっても、多分に無理があるように思われる。本遺跡の竪穴では、この先端部ビットが貯蔵穴であるという積極的な証左は認められない。いずれにしろこの先端部の掘り肩が、本遺跡の竪穴に共通する施設であることはまちがいない。そこで、この掘り肩に「先端部ビット」の名称を与え、他の掘り肩と区別したいと考える。

5. 炉の構造とその改築の意味

炉の構造 L1型をのぞいた各型の竪穴にはいずれも、石囲炉あるいは石囲炉と推定される炉が伴う。L1型では、N031、E112両竪穴が石囲炉をもつもの、FU69竪穴では土器囲いが、その他では地床炉と一定しない。石囲炉は、方形あるいは長方形に浅い掘り込みを行ない、その周縁をさらに掘りくぼめて円環を配するもので、平均して1辺60～80cmを計る。L1型の竪穴であるE112、N031竪穴の石囲炉は、1辺40～50cm、LA型のKE12、SP38竪穴では1辺90～100cmで、竪穴の大きさに略々比例して炉の大きさも変化することがわかる。石囲炉は、円環の長軸を連ねて形成している⁸⁾。包含層中の石囲炉であるF004は、円環の短軸を連ねて石囲いを形成しており、その円形を呈する石囲いの形状からも、竪穴の石囲炉と区別される。SR25竪穴の第1炉、W165竪穴の第1・2炉のように、炉の隅に礎を放射状（ウイング状）に配するものも認められた。大半の竪穴で、石囲炉の改築が行なわれているのも特徴的である。なお、ZR40、ER34、DC12、SP38、FU69、SR25、RZ25の各竪穴をのぞく余の竪穴には、石囲炉後方に地床炉が存在した。

炉の位置 石囲炉（複数の石囲炉が検出されている場合には、その最も新しい石囲炉）は、いずれも竪穴長軸上の先端部寄りに位置し、これに大きくずれることはない。図222に、竪穴長軸の3等分点と炉位置の関係を示したが、これによっても、炉がかなり規則的に配置されていること、そして、長軸の3等分点が炉位置と対応することがわかる。地床炉の位置については、石囲炉ほど規則的ではないが、石囲炉より先端部寄りには位置しないこと、長軸の3等分点の基部寄りの点付近に位置する例が多いことを指摘できる。最終的に構築されたと推定される石囲炉の側面は、竪穴長軸と平行あるいは直交しており、長軸に対して大きく斜めにずれて配置されている例はない（RZ25竪穴の第4炉は、竪穴長軸に大きくずれるが、これが最終的な炉であるかどうかはわからない）。以上から、石囲炉に関しては、竪穴長軸の先端寄りの3等分点

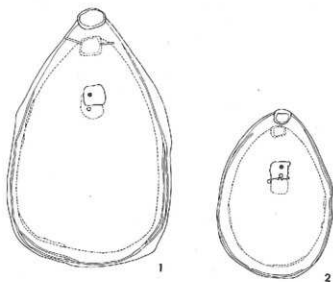


図223 竪穴の改築と石罫の改築の関係 KE12竪穴①、SR25竪穴②それぞれにおける竪穴改築と石罫改築の状況を示した。実際によって異なる竪穴の平面形およびその附着地盤(石罫、先端部ビット、周溝)を表わし、破線によって周溝の在り方から推定される改築以前の竪穴の平面形と、検出・確認されたその附着地盤を表わす。また、図中の●は最終的な竪穴の、○は改築前の竪穴の長さの3等分点(先端部寄りの点)を示す。この図から、改築された罫の位置が、竪穴の改築に伴うその長さの3等分点の移動には対応していることがわかる。

付近に位置し、長軸方向に沿って設けられているという規則性を確認しておきたい。
改築の意味 以上述べた石罫の位置の規則性からすれば、CB75、TL12竪穴における長軸から大きくずれ、これに斜交して位置する最終的な石罫以前の“旧罫”の在り方は、どのように説明されるであろうか。石罫の改築は、SR25、KE12竪穴で周溝が重複して巡っていた事実から、竪穴の改築(建て替え・建て増し)に伴うものである可能性が高い。問題は、竪穴の改築によって、石罫の軸が竪穴の長軸と大きくずれることである。まず、周溝の存在によって改築以前の竪穴の形態が推定できるSR25、KE12竪穴を例にあげ、竪穴の改築と石罫の改築の関係を検討してみよう(図223参照)。

SR25竪穴では、壁際と、竪穴基部を中心に壁から40~50cm内側に二重に周溝が巡っている。P2は、上面に貼り床が行なわれていた浅い掘り肩であるが、これはその形状・深さから、後述する「先端部ビット」である可能性が高く、旧竪穴のそれが改築に伴って埋め戻しと貼り床が行なわれたものと考えられる。これを先端部ビットとし、内側に巡る周溝の在り方とあわせ考えると、改築前の竪穴は、最終的な竪穴をそのま

ま全体に縮めた形状の長さ5.9m、幅4.8mの竪穴と推定される。図中、黒丸は最終的な竪穴の、白丸は改築前の竪穴のそれぞれ長さの3等分点（先端部寄りの点）を表わしている。この図から、改築された炉の位置が、竪穴の改築に伴うその長さの3等分点の移動には対応することがわかる。K E 12竪穴では、周溝が二重、部分的に三重に巡っており、様相が複雑だが、それぞれの部分で最も内側を巡る周溝が、最も古い竪穴の形状を示すものと仮定しよう。P 10は、上面に貼り床が行なわれていた浅い掘り肩で、S R 25竪穴のP 6と同様、改築前の竪穴の先端部ピットと考えられる。周溝とこの先端部ピットの在り方から、改築前の竪穴は、最終的な竪穴をそのまま全体に縮めた形状の長さ9.0m、幅6.0mの竪穴と推定される。ここでもS R 25竪穴と同様、竪穴の改築による長さの3等分点（先端部寄りの方の点）の移動に伴って、石囲炉の位置が移っている。

以上の分析から、竪穴の改築が元の竪穴の形状を生かし、その長軸を同じくして行なわれる場合、石囲炉の改築は竪穴長軸に沿って行なわれ、竪穴の長さの3等分点（先端部寄りの方の点）にその位置が対応することがわかった。とするならば、C B 75、T L 12両竪穴での改築前後の石囲炉の竪穴長軸とのずれは、竪穴の改築が元の竪穴と長軸方向をずらして行なわれたことを示すものであろう。図224に、推定される竪

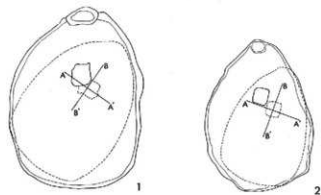


図224 石囲炉の改築状況から推定される建て直前の竪穴 C B 75竪穴(T L 12竪穴)はそれぞれの推定される改築前の竪穴を破線で示した。推定の理由は次の通りである。両竪穴とも、その改築前の竪穴は、図中の大きさから考えればL 1型であった可能性は小さい。即ち、L 1型より大きめ(長さ4 m以上)の竪穴であったと考えられる。また、当該地の竪穴はE L 12竪穴を除いて全て先端部が南東一両西に向いており、改築前の竪穴の先端部方向がこれに大きくずれるとは考えにくい。とすれば、改築前の竪穴の長軸方向はA-A'あるいはB-B'で、その先端部はAあるいはBの延長線上にあったはずである。しかし、T L 12、C B 75両竪穴とも、長軸をA-A'とした場合、竪穴長4 m以上で先端部をAの延長線上にもち、炉が竪穴長の3等分点に納まる改築前の竪穴を想定するのは困難である。それゆえ、改築前の竪穴は、長軸をB-B'に、先端部をBの延長線上にもち、竪穴の長さが4 m以上の、およそ底端で示したプランをもつものと推定される。

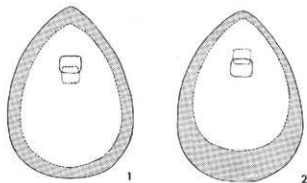


図225 右圓伊の改築方法2種とそこから推定される壺穴改築の2つのタイプ1・2は、C 875・T 1.12壺穴以外の壺穴における右圓伊の改築方法と、そこから推定される壺穴改築の仕方と、2つのモデルに取約したものである。右圓伊の改築方法には、新伊を旧伊より突端部寄りに設ける場合と、基部寄りに設ける場合の2通りが認められる。そのとき、それぞれの壺穴改築の在り方は、図221に示したK E 12・S R 25両壺穴の改築方法、および、右圓伊の位置が壺穴の長さの3等分点(突端部寄りの点)に対応する事実を参考に、次のように説明することができる。即ち、1の新伊が旧伊より突端寄りに設けられる場合、壺穴の改築は、K E 12・S R 25両壺穴と同様、全体に均等な幅で拡張を行なったものであろう。2の新伊が旧伊より基部寄りに設けられる場合、壺穴の長さの3等分点と旧壺穴の両端から、壺穴の改築は、主に基部方向に拡張を行なったものと考ええる。スクリーン・トゥーン部は、改築(拡張)した範囲を示す。

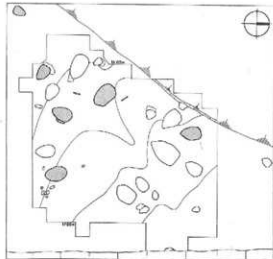


図226 右圓伊の遺存する伊の分布 右圓伊の残が50%以上遺存する壺穴を、スクリーン・トゥーンで示した。壺穴群を大きく南北2群に分けた場合、右圓伊を残す壺穴の分布は南群に集中する。しかし、伊が完全に遺存していたのは、突失壺穴のE L 12・S R 25の2壺穴のみであるため、南群に最終的な居住が行なわれたかを確かめる、この資料から往べることはできない。

穴改築の在り方を示した。CB75、TL12竪穴以外の竪穴の石囲炉位置の移動と、そこから推定される竪穴改築の状況は、図225の2つのモデルに収約できる。石囲炉は、改築にもなって若干大形化するが、あるいは旧炉とはほぼ同規模に構築されており、旧炉より小形化する例は認められない。

石囲いの遺存する炉の分布 図226に、石囲炉の端がおよそ50%以上遺存している竪穴の分布を示した。竪穴群を、そのまともり方から大きく南北2群に分けた場合、石囲いを残す竪穴の分布は、南群に集中する傾向が認められる。ただし南群の5基の竪穴のうち、3基は焼失竪穴と推定されるものである。

6. 竪穴の遺物出土量

図227は、床面・覆土を含めた竪穴の遺物出土量を、100点以下、101～200点、201～300点、301～700点、701点以上の5つの階層に区分し、それぞれの階層ごとの竪穴の分布を示したものである。これによれば、L1型の竪穴の大半は100点以下、M1ーb型は101～200点、M1ーa型は101～200、200～300点が半々、LA型は301点以上の出土量を示しており、竪穴が大形のものほど出土量が多いことがわかる。出土量ごとの竪穴の分布を見た場合、斜面寄りに出土量の多い竪穴が位置し、台地奥に入るほど出土量の少ない竪穴が分布している。もちろんこれは、斜面寄りに大形の竪穴が集中することと無関係ではない。竪穴群をそのまともり方から南北の2群に分けて見た場合、各群ごとの出土量に差はほとんどない。結果として、分布する竪穴の大きさに関連するものであろうが、台地奥の竪穴ほど遺物出土量が少ないことを指摘しておく。

III. 竪穴の構造からみた集落の変遷

先に、本遺跡の竪穴群に、形状が互いに異なる2つの竪穴のタイプが存在することを指摘した。即ち、竪穴の基部形状が直線的なものと、丸みをもつものである。このうち基部が直線状をなすものは、竪穴群をその分布上のまともり方から大きく2群に分けた場合、北群に限定的に分布していた。

細分の可能性を否定するわけではないが、現時点では1時期としてくることに躊躇ない本遺跡出土の短剣状土器群の様相から、竪穴群がほぼ1時期に形成されたことはまちがいないところだとしても、その形状にこうした2つのタイプが存在することについては、およそ2通りの説明が可能である。

1つには、例えば集団内いわゆる「双分原理」による2つの対抗集団が存在し、南北2群に分かれて居住を行ない、それに付随して竪穴のタイプが区別されていたことが考えられる。また1つには、土器の様相の上では区分できないものの、両竪穴タイプ間に時間的な差があり、一方のタイプから他方のタイプへと継起していったことが考えられる。

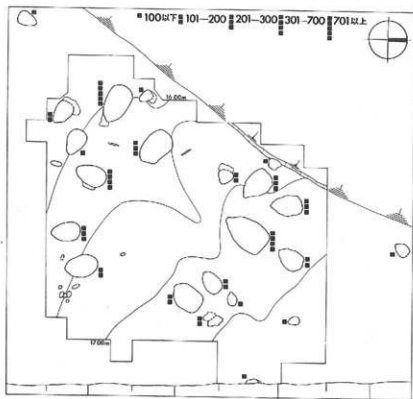


図227 竈穴の遺物出土量 床面・覆土を含めた竈穴の遺物出土量を示した。大形の竈穴ほど出土量が多く、小形の竈穴ほど出土量が少ない。特異な出土量の傾向を示す竈穴は認められない。

前者の、大きく2分割される竈穴群の在り方を、双分原理とそれに基づくところの双分割(制度)によって説明する仕方は、水野正好によって提唱されて以来、広く受け入れられるところとなっている。しかし、本遺跡についてみる限り、竈穴群は現象的には2分割が可能であるものの、両群が同時併存し、それぞれに対抗集団の居住区として機能していたという積極的な証左は見出せない。むしろ、以下に述べる道南に分布する短刻線文土器群の時期の竈穴の在り方からすれば、後者の説明がより妥当と考えられる。

現在までに報告された短刻線文土器群の時期の竈穴は、いずれも卵形の平面形をもち、石田好および本論で提唱した“先端部ピット”を備えるという均一な構造を示すものである。しかし、これまで注意されなかったことであるが、本遺跡と同様これらの竈穴にも、竈穴基部が直線状をなすものと丸みをもつものの2つのタイプが存在す

る。そのうち、基部が直線状をなす例として、函館市西股遺跡3・4・9号住居址¹⁰¹、同西結棟E2遺跡1・2・3・4・6号住居址¹⁰²、南茅部町白尻B遺跡8号住居址¹⁰³、同HP34・41・42・71号住居址¹⁰⁴、同HP175号住居址¹⁰⁵などがある。このうち、西結棟F2遺跡は、検出された6基の竪穴のうち平面形が確認できた5基のいずれもが、基部が直線状をなすものであった。遺跡は広域に調査が行なわれており、近接して別に同期の竪穴群が存在する可能性は薄い。この例からすれば、千歳6遺跡で確認された竪穴の2つのタイプは、同時に平行して存在した竪穴タイプのヴァリエーションとは考えにくい。

このとき、南茅部町白尻B遺跡で検出されたHP190竪穴の様相は示唆的である。HP190竪穴は、基部が直線状をなす卵形の平面形を呈するもので、報告者は、先端部で検出された周溝の在り方から、隅丸方形の平面形から卵形の平面形への竪穴の転変を想定し、時間的にはそれぞれ榎林式、"ノダップII式"（短刻線文土器）をあてて、前者から後者への竪穴形状の変化を考えている。短刻線文土器群の時期の卵形の竪穴が、榎林式期の隅丸方形の竪穴から直接出自したとするならば、卵形の平面形をもつ竪穴のうちでも、竪穴基部が直線状をなす一群の竪穴は、やや古い様相を示すものと考えられまいか（図228）。

このように考えた場合、本遺跡においては、基部が直線状をなす北群の竪穴を占く、基部が丸みをもつ南群の竪穴を新しく位置づけることができるであろう（図229）。さらに、本遺跡における短刻線文土器群期の居住の在り方は、このような推定される竪穴の変遷から、次のように述べることができる。即ち、当初、やや高位の古地北半に竪穴の構築・居住が行なわれる。北半に遺存する竪穴が全て同時に利用されていたか否かは明らかにし得ないが、各竪穴は、推定される改築の事実から、一定期間単線的に居住が行なわれたと考えられる。もちろん、竪穴改築に至るプロセスとして、移動と竪穴の放棄、再掘と竪穴の再利用（改築）を想定することも可能である。次いで、

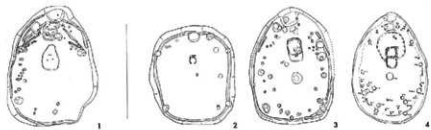


図228 竪穴形状の変遷 1は、本文中に述べた南茅部町白尻遺跡HP190竪穴。2・3・4は、榎林期から短刻線文土器群期にかけての竪穴例である。榎林期の隅丸方形の竪穴2から、短刻線文土器群期の基部が直線状をなす竪穴3、基部が丸みをもつ竪穴4への変遷を示す。縮尺は、1・2・3が $1/50$ 、4が $1/200$ 。出典は、1・2が註8文庫(1980年度分)のHP190・150竪穴、3が註8文庫(1979年度分)のHP34竪穴、4が本遺跡のS125竪穴である。



図229 竪穴群の変遷 千歳6遺跡における竪穴群は、北群をやや古く、南群を新しく位置づけることができる。しかし、この竪穴占地の移動は漸移的なものでなく、北群の居住の完結後、やや時間的な断絶をはさんで南群の居住が開始されたと考えられる。成層によって南群と北群の境を、矢印によってその前後関係を示した。

やや低位の古地南半に竪穴群が移動する。この北半から南半への古地の移動は、竪穴平面形の変化という事実から考える限り、漸移的なものとは考えにくい。むしろ、北半の居住の完結と、その後の南半への移動に至るまでの時間的断絶を示唆するものである。

IV. 要約

本論は、千歳6遺跡で検出した縄文時代中期終末の竪穴群について、その構造を分析・復元するとともに、その変遷について、一方のレベルでは改装による竪穴個々の様相を、また一方のレベルでは遺跡における竪穴群全体の様相を明らかにしようとしたものである。

竪穴の構造については、まず、竪穴の大きさと形態の分析から、大きさに各種があり、そのグルーピングが可能であること、そのグループ個々に対応して竪穴の形状におおむね違いがあることを指摘した。また、境央竪穴における炭化材出土状況および竪穴床面における固い床の分布状況から、それぞれ上層構造と竪穴内の利用状況一層内区画一について、復元を行なった。さらに、特徴的な構造として、竪穴先端部における浅い皿状の掘り込みを指摘し、機能については不明なものの、「先端部ピット」

と呼んで他の掘り込みとの区別を行なった。

竪穴の変遷については、まず、炉構造の分析を通じて竪穴個々の改築の状況について明らかにすることができた。また、道跡内における竪穴群の変遷については、認められる2つの竪穴タイプの在り方から、道南に分布する短刻線文土器群道跡の分析を行ない、その結果、本道跡においては台地北半から南半へと竪穴群の移動—居住区の変更—が行なわれたこと、その移動が漸移的でなく、間に一定の時間的断絶を想定し得ること、そして、これらが全て1つの斉一性をもつ土器の時間枠のなかで行なわれたことを、それぞれ指摘した。なお、竪穴個々の遺物出土量の比較・検討を行なったが、竪穴群の変遷を考える上に有為な傾向を認めることはできなかった。

- 註1) 関野克「埼玉黒岡村縄文前期住居址と竪穴住居の系統について」『人類学雑誌』第53巻第8号、1938年
- 2) 未婚の青年であるとか、「他所者」であるといった可能性も考えられよう。また、学識的に利用を行なった仮小屋かもしれない。
- 3) 都出は、「火災に遭遇した住居の床面において、炭化材の上に厚く堆積した灰土が周辺近くに多い場合には、その灰土を埋戻す土と考えることもできるのではないか」（傍点添川）と述べている。都出比呂志「竪穴式住居の構造と壁体」『考古学研究』第22巻第2号67頁、1975年
- 4) 加藤も、本道跡の竪穴群とはは同時と思われる函館市西楯楼道跡の竪穴の覆土の分析から、上屋上に地山掘り上げ土を覆い被せたものと考えている。加藤邦雄「E2遺跡における若干の調査点」『西楯楼』函館市開発事業団、1974年
- 5) 竪穴平面形が長楯のものは、「善棟もしくは入母屋造り」で、「又首構造・桁行で垂木平行配置・変間で垂木間配置」の小屋根組みが行なわれたという。橋本正「竪穴住居の分類と認識」『考古学研究』第23巻第3号40頁、1976年
- 6) 縄文中期の関東・中部地方を中心に、本道跡の竪穴における先端部ビット類似の張り出し・掘り込みを放け、そこに障壁・石枠を安置した竪穴が多く認められるが、これについて、祭壇あるいは祭祀施設とする意見がある。例えば、水野正好「理窟形式の復原」『信濃』第30巻第4号、1978年
- 7) 註4文献に同じ
- 8) 道南の中期終末期の竪穴に伴なう石圍甲は、大半が円形の長軸を連ねて囲いを形成している。しかし、わずかではあるが、短軸を連ねた例も認められる。例えば、函館市西楯楼E2遺跡1・2・4・6号住居址(註4文献)、南茅部町白尻B遺跡H157号住居址(『白尻B遺跡』南茅部町教委、1980年)、岡日P97・74号住居址(『白尻B遺跡発掘調査報告』同教委、1979年)など。
- 9) 水野正好「縄文式文化期における集落構造と宗教構造」『日本考古学協会第29回総合研究発表要旨』、1983年および、同「縄文時代集落発光への基礎的探作」『古代文化』第21巻第3・4号、1989年
- 10) 『西楯』北海道第四紀研究会、1974年
- 11) 註4文献に同じ
- 12) 『白尻B遺跡発掘調査要報』南茅部町教委、1978年
- 13) 註8文献の1979年度報告に同じ
- 14) 註8文献の1980年度報告に同じ
- 15) 小笠原忠久「第10論、小居」註8文献、1980年度報告104頁

第2節 「短刻線文土器群」と「余市式土器」の製作手法と器種構成

瀬川 拓郎

I. はじめに

今回の千歳6遺跡の調査により、中期終末から後期初頭に位置づけられる土器の一括資料を得た。即ち、短刻線文および貼付帯によって特徴づけられる土器(Ⅲ2a群土器)と、それに類似した文様構成をもつが、製作手法の点で区分される土器(Ⅲ2b群土器)、および、所謂トコロ6類近似の土器(Ⅲ2c群土器)の3種である。本論で扱う資料は、このうちのⅢ2a群土器とⅢ2b群土器の2種である。

第3章で大島が詳しく述べているところであるが、前者は、従来「ノグップⅡ式」(埴五古式)「静狩式」などと呼ばれてきたものの一部に相当する。しかし、上記の各型式の多くは、その内容が十分に吟味されているとは言えず、本遺跡出土土器をそのまま対比するのは困難である。そこで、このⅢ2a群土器に「短刻線文土器群」の名称を冠し、従前の型式群と区別した上で、それが「短刻線文土器群」として一括される所似について、製作手法・器種構成から述べる。また、後者は、従来「余市式」と大きく一括されてきた土器群の一部に対比可能である。しかし、この余市式土器と短刻線文土器群の区分は、両者の文様構成が類似していることもあって、明確にされているとは言えない。例えば大沼は、貼付帯上の短刻線文の有無を両土器群識別の指標にしているように思われるが、それが指標たりえないことは、短刻線文土器群の文様構成の観察からも明らかである。本遺跡出土土器をみる限り、両土器群のちがいは、その製作手法および器形において最も明瞭に理解される。そこで、本遺跡出土の余市式土器についても、その製作手法および器種構成の分析を行なう。さらに、この余市式土器の出土資料数の不足を補うために、実見の機会を得た他遺跡出土資料についても述べる。

以上の作業によって、両土器群の内容を明らかにするとともに、その相違点を指摘し、区分された両土器群がどのように位置づけられるのか、その系統を中心に述べてみたい。

なお、両土器群の文様構成については、第3章で分類を行なっているので、ここでは繰り返さない。

II. 短刻線文土器群の製作手法と器種構成

1. 製作手法

胎土 本土器群の胎土には、一般に砂粒が多く混入されている。このことは、器面の剥離した諸例の観察から明らかであるが、例えば、接合を行なっても手易く剥離してしまうことは、経験的にこれを裏付けるものであろう。しかし、後に述べる余市式土器に較べて、相対的には砂粒が少なく、胎土がより緻密であると言える。余市式土器は、一般に内外面に限らず風化した器面のように細かくザラついた感を与えながら、本土器群の器面は、調整の緻密さとも関連して、より平滑な面をなし、砂粒の浮きが少ない。なお、細角礫を多量に混入した例がいくつか認められた。石質については、肉眼観察のため明らかでない。土器の胎土および焼成温度とも関連する土器の色調については、明るいオレンジ系、黄白色系の色調を呈するものが多い。

成形 本土器群の成形は、観察できた事例については全て粘土帯の輪積み法によって行なわれている。(1例coilingによると思われるものもあった。第2章図135-5)。粘土帯はいずれも下端が凹面を、上端が凸面を見せるもので、これによって底部から口縁に向かって順次成形が行なわれたことがわかる。粘土帯は幅をそろえて成形されており、その割れ口は直線状をなす。粘土帯上端の凸面は全て内面側にせり上がり、逆に下端は外面側にせり出している²⁵。このため、往々にして、器外面に、あたかも貼付帯を巡らしたかのように微弱的隆起が生じることがある。このような粘土帯合わせ目の隆起に貼付帯風に意識して施文を行なっている例をいくつか確認したが、本土器群の貼付帯がごく微弱的なものであるために、隆起帯自身、粘土帯の接合によって生じたのか、あるいは貼付されたものであるのか判別しがたいものが多い。

底部は平底で、底面は凹凸を残さず平坦に成形が行なわれている。底部の成形は、まず最初に円盤状の粘土板を作り、この上に直接粘土帯をのせるものと、粘土円板の周縁を粘土帯で囲むものがある。底部の成形法を最も明瞭に示すものとして、SR25竈穴出土例がある(第2章図17参照)。これは、筒状の小形の芯を粘土帯でもって囲んで粘土円板を作り出し、さらにこの粘土円板の周縁を粘土帯で囲んで器壁を形成している。粘土円板の成形が2工程に及ぶことを示す例である。

口唇部は、意識して平坦面の作り出しが行なわれている。この面には凹凸やゆがみはあまり見られない。口唇の両側に明瞭な角をもち、なかには刃物で切り揃えたような平坦面と角をもつものがある。

本土器群の成形は、全体に丹念に行なわれている。幅と厚さを揃えた粘土帯を用いて成形を行なっているためか、同じ部位での器壁に不揃いな厚薄の差は認められず、指頭による成形痕もほとんど見られない。このことは、後に述べる余市式土器の成形と比較した場合、明らかな違いとして理解される。



写真1 短頸土器の内面 それぞれ口縁付近の内面の状況を示した。指頭圧痕を残さず、砂粒をよく隠蔽している。

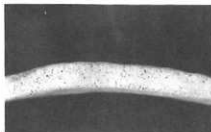
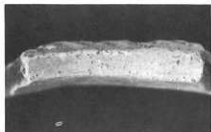


写真2 短頸土器の口唇 口唇はナデが行き届き、両端には角がつく。また、その幅もほぼ一定である。

調整 本土器群の調整は全体にいていぬである。内面は、ほとんどがナデによる調整が加えられており、わずかな成形時の指頭圧痕についてもこれの平坦化が行なわれている。また、粘土帯接合面は全てつぶされておき、器面にそのすきまを残さない。ナデは、内面の底は同心円状に、そこから口唇下数cmの部位まではタテ、あるいはやや斜めに行ない、その上については横方向に行なうものが多い。調整の順は、下半のタテ方向のナデを行なったのち、上半の横方向のナデを行なっているのが、特に後に述べる細密条紋の切りあいから理解できる。内面にミガキが行なわれているもの、あるいはあかもスリップが施されたかのように緻密な面を見せるものがあることも、特徴的と言えるであろう(写真1)。

口唇部にもいいなナデが施され、またここに細密条痕を見せる例がある。このナデによって、口唇部のわずかな凹凸やゆがみがおさえられている(写真2)。ナデは器面の縄文施文後に行なわれている。底部の底面は、ナデあるいはミガキが施されて平滑な面をなし、よく光沢をみせる(写真3)。また、この底面の調整に伴うものと思われるが、縄文施文後の底部端周縁に0.5~2.0cmの幅でナデを加えるのが、大半の例に認められた(写真3)。これは、土器を口縁を下にして置き、底面の調整を行なう際に、親指が調整具をはさんで底部端に押しつけられ、そのままの状況で土器を回転

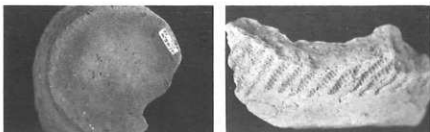


写真3 短刻線文土器群の底面(a)および底部端(b) 底面はナデあるいはミケが加えられ、平滑な面をなし、側への移行部は明瞭な角をもつ。刻線部の底部端に縦指触のナデを加えるのも、本土器群に特有な調整法である。



写真4 短刻線文土器群の内面に残る細密条痕 短刻線文土器群の内面にはしばしば、弱い凹内面をみせる細密条痕が観察される(a, b・c・dは、その拡大した状況を示す)。

させ、調整を行なったために生じたものであろう。ナデの幅0.5~2.0cmは、縦指の横幅の範囲内に納まるものである。この底面、底部端の調整によって、底面と器壁の移行部は、明瞭な角をもって仕上げられている。

尚、短刻線文土器群として一括したなかに、刷毛目状の細密条痕を残すものが多く認められた。この条痕は一般にごく微弱な凹凸断面をみせるが(写真4)、なかには刷毛目とごく似た印象を与えるものもある。しかし、いずれの例も、器面の凹部にま

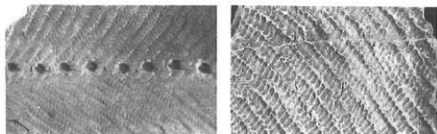


写真5 短刻線文土器群の縄文 短刻線文土器群の縄文は、糸がよく通り、面が深く印される。縦走・横走する例はなく、全て斜行の縄文である。

で条痕が及ぶ点から、木質の原体は想定しにくい。同じ短刻線文土器群を大量に出土した知内町湯の里遺跡の資料の一部について実見する機会を得たが、このような細密条痕をもつ例は確認できなかった。細密条痕を残す調整が、本遺跡における短刻線文土器群に固有なものかどうかは現時点では明らかにできないが、道南の各地で出土している短刻線文土器群について、その分布を追っていくことは、地域性あるいは「集団」の折出の問題とあいまって、興味深い課題である。

縄文 縄文は、全例単節の斜縄文である。斜縄文は、原体の横方向の回転によるものが大半を占め、縦方向の回転によるものは多くない。この点について湯の里遺跡の資料の観察を行なったが、ここでは縦方向の回転による斜縄文が多く認められた。短刻線文をもつ土器のうちから無作為に20点を抽出したところ、このうち17点が縦方向、あるいは縦方向と横方向に縄文の組み合わせをもつものであった。このことから、短刻線文土器群全体としては、原体の横方向、縦方向の回転の出現率について一定の傾向は認められないかもしれない。

本土器群の縄文は、糸が通り、節が器面に深く印されており、縄文の施文単位の判別が容易に行なえないほどである（写真5）。縄文の施文順序が例外なく斉一性を見せる点も、特徴的と言えるであろう。すなわち、縄文は、底部から上方へ順に施されており、特に羽状の交点や貼付帯部では、下方の縄文の上に上方の縄文がかぶっているのが明瞭に観察できる。

貼付帯は一般にごく低平・微弱なものである。一見しただけでは、貼付帯があるかどうか判別し難い場合もある。また既に述べたように、粘土帯合わせ目の隆起とも区別し難い例が多い。貼付帯は、土器の成形が終了した段階で、くびれのくる肩と口縁部部に巡らせており、この2本が対になるモチーフが大半を占める。貼付帯を覆下させるもの、「し」の字状に配するものも少数見られる。貼付帯の成形は、粘土ひもを巡らして器面に強く押しつけ、上・下端をナデで器面に密着させるものである。貼付帯が低平・微弱で、器面との境が判別し難いのは、このような成形上の特徴による。貼付帯の成形後、縄文の施文が行なわれる。縄文は、先に述べたように底部から順に

施文が行なわれるが、この貼付帯部における縄文施文は、かなり明瞭な規則性をみせる。すなわち、縄文は、貼付帯の中央あるいは下端を境にして分けて施文されるのである（写真6）。貼付帯上端を境にして施文を行ったり、貼付帯をまたいでその上下の器面に一連の施文を行なう例はみられない。この規則性は、貼付帯を境に羽状に縄文が施される場合はもちろん、そうでない場合にも一貫して認められる。貼付帯間を無文とする例については（写真7）、このような縄文の施文を終えたのちにナデ消しを行なっている。この無文帯作出の方法は、後に述べる余市式土器のそれと明らかに区別される。

短刻線文土器群の指標たる短刻線文は、貼付帯あるいは器面上に直線的に施された連続する刻み目である。短刻線文個々は、施文具のちがいでそれぞれ印象は異なるが、どれも横長の楕円形あるいは長方形を呈し、凹形のものほとんど認められない。短刻線文施文原体は、大きく分けて2つある。1つは、先端の丸い棒状のもの、へつ状のものおよび半蔵竹管であり、1つは、縄文の施文原体を2つに折るなどして

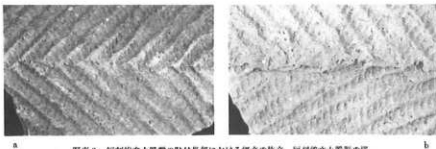


写真6 短刻線文土器群の貼付帯部における縄文の施文。短刻線文土器群の縄文は、底部から口縁に向かって順次施されている。このとき、貼付帯部の縄文は、必ずその中央（a）か下半（b）をきかに分けて施される。貼付帯をまたいで上下の器面と一連の縄文を施したり、あるいは貼付帯上に器面の縄文とは別に施文を行なう例はない。

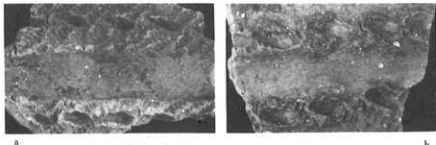


写真7 短刻線文土器群の無文帯の形成。短刻線文土器群の無文帯は、2本の貼付帯にはさまれた間を、器面および貼付帯の縄文施文後にナデ消して形成している。貼付帯上に短刻線文が施される場合、その施文は、ナデ消しによる無文帯の形成後に行なわれる。

その先端を用いるものである。前者について実験的に確認したところによれば、短刻線文の大半は、これらの原体の先端を器面に対して直角に当て、左に移動させつつ徐々に器面に押し込み、そのまま引き上げることによって施されている。この施文の際の押し込みの深さ、引き上げ角度の違いによって、少しずつ印象の異なるバラエティーが生ずるのである。短刻線文の左端に丸く粘土の残る例があるが、これは、半截竹管内面を左に向けて器面に直角に当て、左方に移動させつつ押し込み、そのまま垂直に引き抜いたため生じたものである。後者の縄文を原体とする例は、ごく少数である。なお、縄文およびへら状工具を除く短刻線文原体については、短刻線文の幅が3mmから6mmの間に納まるものであることから、工具に使用された原体が植物茎であると想定した場合、同一種のものに限定されていた可能性が考えられる。また、短刻線文の施文方向は、施文によって周囲に押し出された粘土のかぶりあいから確認できたいくつかの例によれば、いずれも反時計回りであり、このことから、土器を反時計回りに少しずつずらしながら施文を行なったものと考えられる。

2. 器種構成

本遺跡出土の短刻線文土器群のうち、器形および口径がおおよそ復元可能なもの（その一部を図230に示した）について、その口径をグラフ化したのが表1である。この表から、器形の違いも考えあわせて、5つの群が抽出できる。すなわち、口径が26~30cmの大形の深鉢の1群（A群）、口径が18cmを前後するやや大形の深鉢の1群（B群）、口径が12cmを前後するやや小形の深鉢の1群（C群）、口径が6~8cm前後の小形土器の1群（D群）、口径が14cm前後の壺形土器（E群）。これら各群の土器は、その器形から、さらにいくつかに分けられる。大形の深鉢であるA群の土器は、頸部が弱くくびれ口縁の外背する類（A1類）と、頸部にくびれない類（A2類）に、やや大形の深鉢であるB群の土器は、器形の上で上記のA1類・A2類に対応するB1類・B2類と、加えて一例のみであるか筒形の器形のもの（B3類）に、やや小形の深鉢であるC群の土器は、やはりA1類・A2類に対応する器形のC1類・C2類に、小形土器であるD群は、頸部にくびれないD1類、器形が逆台形のD2類、筒形のD3類、底が丸く作り出されたD4類に、それぞれ分けられることができる。これらA~E各群を“大別器種”、そのうちの細分された各群を“細別器種”と呼んでおこう。

以上の分類に従って各群土器の観察を行なった結果は次の通りである。まず、各群ごとの量的関係であるが、細破片が多く実数はとらえきれないものの、A・B・C各群が多数を占めることは確かである。小形土器であるD群も、かなりの量が出土している。遺構出土の例に限ってみても、大半の竈穴から1ないし2個体分のD群土器が検出されている。壺形土器であるE群は、数個体分を確認しているだけで、全体数に占める割合はわずかなものと推定される。小形土器D群中における各細別器種ごとの量的な関係は、D1類が多く、D2・D3類がこれに次ぎ、D4類は稀少である。各群

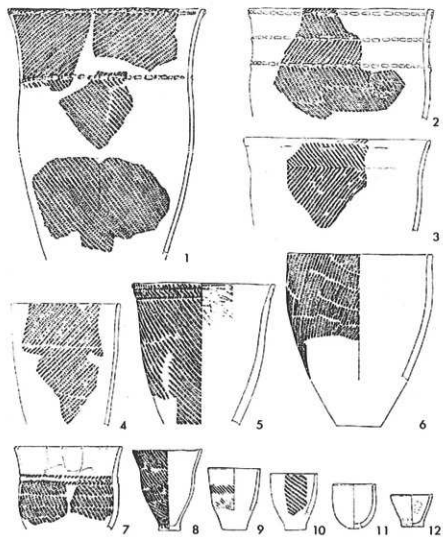


図230 千歳6遺跡出土の刻劃紋文土器群 復元実測を行なったものを図示した。表6の器種分類に従えば、1～3はA1類、4はB2類、5はB1類、6はB3類、7はC類、8はC1類、9～10はD1類、11はD4類、12はD2類にそれぞれ相当する。縮尺1/6。

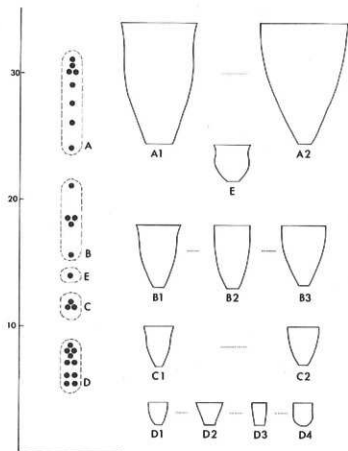


図231 千歳6遺跡出土短頸線文1器群の器種分類 上表は、器形および口径がおおよそ復元可能なものについて、その口径の大きさをドットで示したものである(単位cm)。この表から、器形の違いも考えあわせ、口径の大きさのまとまりによって5つの群が抽出できる。右に示したA～Dの番号がそれぞれ、このような口径のまとまりによって設定された各群は、さらにその器形の違いから、A1・A2、B1・B2……と細分される。

の文様構成は、まずA～Cの3群のうち、A1・B1・C1類とした頭部のくびれるものについては、短頸線文・貼付帯の施される例が多数を占め、A2・B2・C2類とした頭部がくびれないものについては、縄文以外の文様要素をもつものがほとんど認められない。また、前者のA1・B1・C1類には、器壁が薄く作りのていねいな例が多い。小形上器であるD群は、無文陶が多数を占めることが特徴的である。縄文が施されるものは、D群のうちD1類に限られる。土器内面の炭化物の付着は、A～

C各群の例には認められるものの、D群については、C群土器の底部を利用し、口縁を打ち欠きによって2次的に作り出したと考えられる例を除いて、その付着は認められない。

これら各群・各類の土器は、既に見てきた製作手法上の同一性から、時間的な差をもって生じたものとは考えにくい。むしろ、短期線文土器群における土器のセット関係を示すものと理解すべきであろう。そして、その場合各器種は、上記の各群類別の土器の観察から、次のように位置づけられる。A～Dの各群土器は、その出土量から、日常的に欠くことのできないセットであったと考える。このうち、A～C群土器は、炭化物が付着する例があること、およびその大きさから、煮沸・貯蔵の用途を想定し得る。A～C各群における細別器種については、文様構成から、頭部にくびれのあるA1・B1・C1類を精製土器として、頸部にくびれないA2・B2・B3・C2類を粗製土器として理解することができるかもしれない。小形土器であるD群については、炭化物の付着が認められないこと、およびその大きさから、供献の用途を考える。器種の分化が著しい事実は、H用のみならず祭儀にもわたる供献の機能を示唆するものと理解したい。

壺形土器のE群については、その出土数の僅少さから、日常的なセットの一部をなしていたとは考えにくい。集落単位で執行された祭儀に伴ったものであろうか。ペニガララの散布された例(第2章図83-82)が存在する事実は、ハレの器として祭儀の用をなしたとする想定を裏付けると考える。

III. 余市式土器の製作手法と器種構成

1. 製作手法

胎土 余市式土器の多くは、胎土に多量の砂粒を混入している。このため既に述べたように、ナデによる調整が行なわれているにもかかわらず、器面はザラついて、もったりとした印象を受ける。しかし一方では、胎土に全くといってよいほど砂粒あるいはその他の夾雑物を含まないものがある(第2章図90-14-20)。土器の胎土および焼成温度とも関連する土器の色調については、暗褐色を呈するものが多い。

成形 本群の土器についても、輪積みによる成形が行なわれているが、短期線文土器群に多く認められる粘土帯接合面からの剥離、そこに見られる窪口縁は、この群では一例も認められない。このことは、粘土帯個々の積み上げが、乾燥をまたず短時間のうちにこなされたことを示すものであろう。器面で観察し得た事例によれば、粘土帯の接合面は不整な波形を呈しており、積み上げの最終である口縁部では、粘土帯の四部に粘土を足して平らに成形を行なっているものもある。乾燥時間が短い成形上の特質によるものであろうが、器内面には指頭による成形痕が著しく残る(写真8)。

底部の成形法は断面観察からは明らかにできなかった。しかし、底部端にケズリや

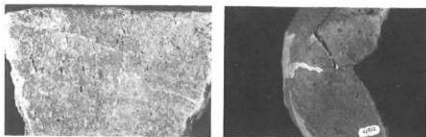


写真8 糸巾式土器の内面(a)と外面(b) 内面・外面とも、捺痕による成形痕や凹凸が残る。ナデも粗雑で、砂粒の浮きが目立つ。

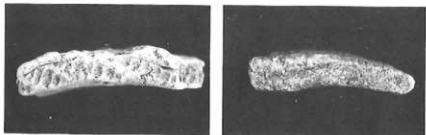


写真9 糸巾式土器の口唇 aは縄文の施された例、bは無文の例である。一般に幅が一定でなく、ナデも粗い。a・bとも、口縁部に貼り付けられた帯と器面のすまみがナデ消されずに残る。

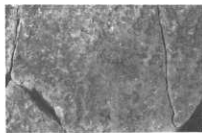
指頭の押圧を加える例があることから、粘土円板の上に粘土帯を積む方法がとられたものかもしれない。底面は、ほとんど成形時そのままの凹凸を残す(写真8)。底部には、平底のものと、やや上げ底気味のものがあり、底端部がわずかに張り出す点特徴的と言える。

口唇は、平坦に作り出されるが、幅が一定でないものや、ゆがみをもつものが多い。また、口縁端部に貼り付けた粘土帯と器面のすまみがナデ消されず、口唇面にそのまま残る例が多く見られた(写真9)。

調整 器内外面にはナデ調整が施される。ナデは一般に粗く、成形時の凹凸や粘土帯合わせ目のすまみ、貼付帯と器面とのすまみは、埋め残される場合が多い。

施文 縄文は、単節と複節が用いられている。特に複節の縄文は、短刻線土器群には認められない要素である。縄文は、単節・複節に関わらず縦方向の同位によって施文を行なうものが多い。縄文はどれも浅く印され、条が通らない。また施文単位間が縄文で埋められず、その間が空白となることが多い(写真10)。底部から口縁に向かう短刻線土器群の縄文施文順序の規則性は、ここでは認められない。

貼付帯は、上下端をナデす、器面との間に明瞭な段をもつのが特徴である。ただし、



a

b

写真10 余市式土器の縄文 余市式土器の縄文は、歪か通らず、プレスも弱い。また、施文単位間や器面の凹部は空白のまま残される。斜行縄文が一般的だが、縦走・横走する例も認められる。aに後部縄文の例を、bに準節縄文の例を示した。



a

b

写真11 余市式土器の貼付帯 余市式土器の貼付帯には、器面の縄文施文後に貼り付けを行なうものと、器面の縄文施文前に貼り付けを行なうもの2種がある。写真はいずれも前者の例である。貼付帯は、厚さ・幅が一定でないものが多い。貼付帯部の縄文は、斜向と連続することなく別個に施される。

口縁端部にのみ1条貼付帯を巡らせるモチーフの場合、その下端をナデつけて器面に密着させるものもある(第2章図134-28)。しかし、いずれの場合も、貼付帯の幅は一定でなく、厚薄の着が差しい(写真11)。貼付帯部での縄文は、短刻線土器群のように貼付帯下端あるいは中央を境に分けて施文されることがなく、帯上に器面とは別に施文を行なうか、縄文施文後の器面に帯を貼り付け、その後さらに帯上に施文を行なうものである。このような貼付帯によって無文帯を形成する場合、無文部は縄文施文前の器面をそのまま利用しており、その後器面や貼付帯に施文を行なった際、無文部にはみだした縄文は、ナデ消されずに現れるのが特徴的である。

縄文は、口縁端部、底部端あるいは胴部に「ハ」の字状に施されるが、一般に、短刻線土器群のそれに比較して、粗く、太目である。

口唇部に縄文が施された例が多いことも、短刻線土器群と区別される点である。短刻線土器群にも、数点口唇に縄文を施したものが認められたが、数量的に例外的な要素とすることができる。

2. 器種構成

本遺跡出土の余市式土器のうち（その一部を図231に示した）、器形および口径がおおよそ復元可能なものについて、その口径をグラフ化したのが表2である。この表から、短剣線文土器群のA-D各群には対応する4つのグループが抽出できる。すなわち、口径が24~29cmの大形の深鉢の1群（A群）、口径が16~18cmのやや大形の深鉢の1群（B群）、口径が13cm前後のやや小形の深鉢（C群）、口径が9cm前後の小形土器の1群（D群）。このうち、大形の深鉢であるA群の土器は、逆「ハ」の字状

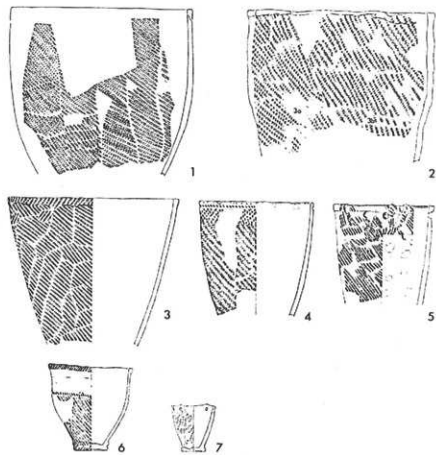


図232 千歳6遺跡出土の余市式土器 復元実測を行なったものを図示した。
表7の器種分類に従えば、1・2はA1類、3はA2類、4・5はB群、6は
C群、7はD群にそれぞれ相当する。縮尺1/6。

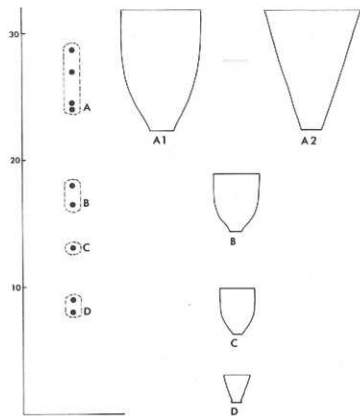


図233 千歳6遺跡出土赤土式土器の器種構成。上表は、器形および口径がおおよそ復元可能なものについて、その口径の大きさを「ット」で示したものである（単位mm）。この裏から、器形の近いも考えあわせ、口径の大ききまをとりによって4つの群が抽出できる。右に単したA-Dの各群が示れて、そのうちA群は、その器形の違いからA1・A2の2つの類に細分される。

の器形をもつA1類と、口径が直立し、胴下半が丸みをもってすばまるA2類に細分が可能である（ただし、A・B類については、図231の1と2、あるいは4と5を比較すればわかるように、口径が直立し、胴下半が丸みをもつ比較的作りのていねいな類と、口径が直立し、全体の器形が筒形に近い粗い作りの類にさらに細分できる可能性もある）。

これらの分類に従って各群の土器を検討したが、資料の僅少さもあって、各群あるいは各類ごとの量的関係は不明であり、文様構成についても、各群類ごとに異なるモチーフは抽出し得なかった。

A～D各群の土器は、製作手法の上で様々なヴァリエーションをみせるものの、全ての点にわたって粗雑であるという共通性をもっており、大きく1時期としてとらえることに問題はないと考える。しかし、本遺跡で出土した資料のみでは、それらが全て同時に利用されていた土器のセットを示すの可否が判断を下すのは難しい。仮に、1つのセットを示すものと考えたにしても、本土器群を伴う明確な居住遺構が検出されていない事実から、当期の遺跡の利用が野営程度とした場合、遺跡に持ち込まれ、遺棄された土器が、本来のセットの全ての器種を満たしていたかどうか疑問の残るところである。

3. 他遺跡出土資料の検討

先に指摘した本遺跡出土の余市式土器の過少さを補う意味で、発見し得た他遺跡資料について述べてみたい。

図232(写真12)に示した土器は、それぞれ図232-2(写真12-2)が長万部町野付貝塚表漆品、図231-1・3(写真12-1・3)が虻田町高砂貝塚出土品である。

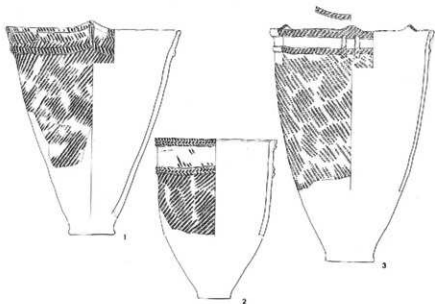


図234 他遺跡出土の余市式土器 1・3は、虻田町高砂貝塚出土品で、注7
文獻第3図掲載のものを復元実測。2は、長万部町野付貝塚表漆品の未発表資料
を復元実測した。1～3は、それぞれ写真12の1～3に対応する。縮尺は1/6。
復元実測は引用による。

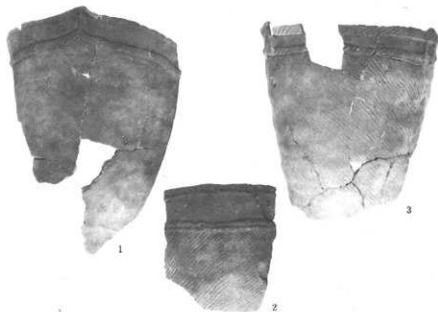


写真12 他遺跡出土の余市式土器 1・3は紀伊高砂貝塚出土品(注7参照)、
2は長万部町藤貝塚表出品(注6参照)いずれも札幌医科大学第2解剖学教室保存。

3例はいずれも、口縁部に貼付帯によって向された伏い無文帯をもつ深鉢形土器である。復元口径は順に、29cm、20cm、27cmを計り、本遺跡の器種分類に従えば、それぞれA群2類、B群、A群1類に対応する。器面の縄文は順に、R1、R1、L1Rが縦位回転で施されており、本遺跡出土の余市式土器に、縄文の縦位回転の出現率が高い事実と符合する。縄文のプレスは弱く、さらに施文単位間および器面の凹部に空白が残る。器面の縄文施文は、2・3では帯の貼り付け後、1では帯の貼り付け前に行なっている。成形・調整は、3例とも相対的に丹念に行なわれているが、胎土に砂粒を多く含むこともあって器面はもったりとし、成形時の細かい凹凸が内外の器面に残る。1・2の無文帯は、縄文施文前の器面を利用しており、器面および帯上に施文を行なったのちも、無文部にはみ出た縄文のナデ消しは行なわれない。

以上、他遺跡出土資料について観察を行なったが、その器形および製作手法は、細部にわたって本遺跡出土の余市式土器に類似するものである。このことから、本遺跡出土の余市式土器に関する製作手法・器種構成の分析結果は、一定の普遍性をもつと考える。

IV. 短刻線文土器群と余市式土器の区分

以上の短刻線文土器群・余市式土器それぞれの製作手法・器種構成のまとめとして、両者の相違点を明らかにしておく。

製作手法 両者の基本的な相違点として、まず胎土の違いを上げることができる。余市式土器の胎土は、一般に多量の細砂粒を含む。短刻線文土器群の胎土は、相対的に砂粒の混入量が少なく、より緻密である。焼成温度とも関連する土器の色調については、前者は暗褐色・暗黄褐色を呈するものが多く、後者はオレンジ系の明るい色調を呈するものが多い。

成形について、短刻線文土器群では、幅・厚さとも一定の粘土帯を用意し、乾燥を待ちながら順次積み上げを行なっている。その結果、器壁の厚さに不揃いがなく、破片割れ口には擬口縁が多く認められる。余市式土器では、同じ粘土帯積み上げ法をとるものの、乾燥を待たずに積み上げを行なうため、指頭による器面の押圧・粘土帯の引き伸ばしが多く行なわれる。その結果、器壁の厚さは不揃いで、指頭圧痕が多く残り、擬口縁は生じない。

調整は、短刻線文土器群では器内外面とも丹念に行なわれる。内面には、細密条痕や稀にミガキを見る。口唇・底面についても丹念にナデが行なわれ、平滑な面を見せる。また、底部端には、底面の調整に伴って、親指幅でナデの1周する例が多く見られる。余市式土器の調整は粗く、所々に粘土帯接合面のすきまを残す。ミガキや細密条痕は認められない。底面は著しい凹凸を残す。

施文については、まず短刻線文土器群の縄文は、余例単節の斜縄文で、横位回転による施文の出現率が高い。条がよく通り、節は深く印される。羽状縄文が多く認められる。余市式土器の縄文は、単節と複節があり、縦位回転による施文の出現率が高い。条が通らず、施文単位間には空白部を残し、縄文本体のプレスは弱い。貼付帯は、短刻線文土器群では、器面の縄文施文前に貼付し、その上下端は強くナデで器面に密着させる。縄文は、必ずその貼付帯の中央あるいは下端を境に、分けて施文を行なう。余市式土器では、貼付帯は、器面の縄文施文前あるいは施文後に貼付しており、齊一性がない。貼付帯の上下端はナデす。器面との間に明瞭な段をもつ。貼付帯の縄文は、器面と連続することなく別個に施される。貼付帯によって画される無文帯については、短刻線文土器群では、器面および貼付帯の縄文施文後に両常間をナデ消して形成している。余市式土器では、縄文施文前の器面をそのまま利用しており、器面および貼付帯の縄文の際に無文帯にはみ出した縄文は、ナデ消されずに残る。

器種構成 短刻線文土器群と余市式土器では、口径によって設定した大別器種の在り方に類似が認められるものの、器形自体は明確に区分される。また、短刻線文土器群における器種のバリエーション、特に壺形土器の存在や小形土器の多様さは、余市式土器に認められないものである。ただし、先に述べたように、本道跡出土の余市式

土器が、本来の器種のセットの全てを演ずるものかどうか疑問の存するところであり、今後の他遺跡の調査・検討によって、種々の器種がこれに加えられることも充分に考えられる。

以上の総括から、短刻線文土器群と余市式土器の関係について、以下の結論が導き出せる。

1. 短刻線文土器群と余市式土器は、その製作手法・器種構成の相違から、互いに独立する異なる土器群として定立し得る。

2. 出土状況および文様構成の類似から、両土器群が時間的に極めて近接するものだとしても、製作手法・器種構成の違いから、それぞれが一方から他方へ連続的に変化した様相を示すものとは考えにくい。むしろ、両土器群は異なる系統として把握するのが妥当であろう。

なお、このような両土器群の系統の相違を考えるための具体的資料として、本遺跡で出土した大木系土器と、遺史地方に分布するトコロ6類系土器が上げられる。即ち、短刻線文土器群における内面調整の精緻さ、砂粒をよく鎮静し、時にミガキが加えられる平滑な器面の状況は、大木系土器の内面調整に類するものである。また、このような事実を上げるまでもなく、SP38竪穴で出土した曲線文をもつ短刻線文土器（第2章図98-9）の例から、大木系土器が短刻線文土器群に少なからぬ影響を及ぼしていたことが考えられるのである。一方、余市式土器における成形・調整の粗雑さは、トコロ6類系土器のそれに通ずるものであり、筒形を呈する直線的な器形は、トコロ6類との類似関係を強く示すものに他ならない。この類縁・出自関係はまた、従来幾人かの論者によって示唆されてきたところである。

以上から、短刻線文土器群と余市式土器両者の系統の相違は、大島が第3章で述べたように、それぞれ大木系土器とトコロ6類系土器との類縁・影響関係によって理解されるべきであると考えられる。

V. 要約

千歳6遺跡で出土したⅢ2a群土器、Ⅲ2b群土器はそれぞれ、縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられる「短刻線文土器群」「余市式土器」として把握されるものであった。本論は、それぞれの製作手法・器種構成について分析・復元を行ない、従来その定義・区分が不明瞭であった両土器群の内容を明らかにしようとしたものである。

まず、胎土・成形・調整・施文および器形・器種の組み合わせの諸点について両土器群を検討した結果、両者の内容と互いの相違点を明らかにすることができた。さらに、この両土器群の相違については、従来の見解に反して、それぞれの系統の違いに基づくものと考え、大島が第3章で述べた通り、短刻線文土器群は大木系土器に、余市式土器はトコロ6類系土器に、それぞれ類縁・影響関係をもつものであると結論さ

れた。

- 註1) 大沼忠春「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』第60巻第4号、1981年
- 2) 瓶口絵とその形跡の観察については、次の文献を参考にした。佐原真「山城における弥生式文化の成立——畿内第一様式の細別と雲の宮遺跡出土土器の占める位置」『史林』第90巻第5号、1967年
- 3) この用語については、次の文献に従った。横山浩一「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」『九州文化研究所紀要』第2巻第14号、1979年
- 4) 資料実見にあたって大島の便宜を受けた。
- 5) 各種土器の機能の推定には、次の文献を参考にした。佐原真「土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ②』有実堂、1979年
- 6) 峰山銀氏表紙、札幌医科大学第2解剖学教室保管。
- 7) 三橋公平・峰山銀「入江遺跡発掘報告」『北海道の文化』12、1987年の掲載分、上記同教室保管。
- 8) 例えば、桑原義「余市式土器——その研究史と現状、円筒上層式土器の関連について——」『考古学雑誌』第54巻第1号、1968年

結 語

登別市千歳6遺跡の調査結果を三章に分けて記載した。さらに、調査結果に若干の考察を加え、これを第4章とした。近年、調査報告書の記載は段々カタログ化する傾向にあり、調査者の所見が述べられることも少なくなったが、本書の編集にあたっては可能なかぎり調査者の所見を盛り込むようにつとめた。しかし、何分調査面積に比し、少ない調査員と短い調査期間といった制約があり、整理を行なう過程で、調査上の不備が露呈し、これを反省することが多かった。特に、炭化材を出土した竪穴を4基検出したにもかかわらず、十分な取り上げ処理を行なうことができなかったし、炭化材の精査についても不十分であった点を反省している。一応、サンプルを採集しているので、今後、材質等の分析を行なう準備をしたい。また、本報告については、当初予定していた紙数を大巾に越えてしまい、一部データを割愛せざるを得なかった。特に、記載遺物の観察表は30ページに達しており、これを付載することができなかった。これについては、現在タイプ印刷による別巻を作成中である。

近年、大規模な調査が相次いで行なわれるようになり、半島部や石狩低地帯では、集落址の様相について次第に明らかになってきた。特に、縄文中期の資料は整備されてきたようである。噴火湾の東岸から登別地方にかけての地域においても、これまで、縄文時代にかぎらず集落址の調査例がなく、その状況については全く不明であったが、前年度に北海道理蔵文化財センターが行なった調査で、縄文中期終末の竪穴を検出し、その後の調査の手がかりを提供してくれることになった。そして今回、23軒の竪穴住居からなる集落址の様相が明らかになり、この地域の遺跡を考える上での良好な資料を得ることができたといえる。今後、この遺跡の資料が多くの研究者によって活用されてゆくことを望んで結びとしたい。

最後に、調査期間中も含めほぼ一年間にわたって、この調査事業に熱意をもってあたられてきた登別市教育委員会の皆様は心より御礼申し上げたい。

神岡目次

図1 千歳6遺跡の位置図……………	8	図36 T L12竪穴出土の石器実測図……	49
2 千歳6遺跡の地形確認調査概況図…	9	37 C B75竪穴の平面図と断面図……	51
3 遺跡の調査範囲と周辺遺跡…………	10	38 C B75竪穴跡の平面図と断面図……	52
4 周辺遺跡の表採遺物……………	11	39 C B75竪穴出土遺物の位置………	53
5 調査区と調査の概況図……………	12	40 C B75竪穴出土土器の拓本図……	54
6 遺跡の上層断面図……………	13	41 C B75竪穴出土土器の拓本図……	55
7 遺跡の土層断面図……………	14	42 C B75竪穴出土土器の実測図……	55
8 千歳6遺跡：遺構の分布状況図…	15	43 C B75竪穴出土の石器実測図……	56
9 S R25竪穴の平面図と断面図……	21	44 M T05竪穴の平面・断面図………	57
10 S R25竪穴跡の平面図と断面図……	22	45 M T05竪穴跡の平面図と断面図……	58
11 S R25竪穴の炭化材出土状況……	23	46 M T05竪穴出土遺物の位置………	59
12 S R25竪穴出土遺物の位置………	25	47 M T05竪穴出土土器の拓本図……	60
13 S R25竪穴出土土器の拓本図……	26	48 M T05竪穴出土土器の拓本図……	61
14 S R25竪穴出土土器の拓本図……	27	49 M T05竪穴出土土器の実測図……	61
15 S R25竪穴出土土器の拓本図……	28	50 M T05竪穴出土の石器実測図……	62
16 S R25竪穴出土土器の実測図……	29	51 X R80竪穴の平面図と断面図……	64
17 S R25竪穴出土の成形法のわかる 底部……………	29	52 X R80竪穴跡の平面図と断面図……	65
18 S R25竪穴出土の石器実測図……	30	53 X R80竪穴出土遺物の位置………	65
19 X L25竪穴の平面・断面図………	32	54 X R80竪穴出土土器の拓本図……	66
20 X L25竪穴の跡の平面図と断面図…	33	55 X R80竪穴出土の石器実測図……	67
21 X L25竪穴出土遺物と覆土中の焼 土の位置……………	34	56 W I65竪穴の平面・断面図………	69
22 X L25竪穴出土土器の拓本図……	35	57 W I65竪穴跡の平面図と断面図……	70
23 X L25竪穴出土土器の実測図……	36	58 W I65竪穴の炭化材出土状況……	71
24 R G05竪穴の平面図と断面図……	36	59 W I65竪穴出土遺物の位置………	72
25 R G05竪穴跡の平面図と断面図…	38	60 W I65竪穴出土土器の拓本図……	73
26 R G05竪穴出土土器の拓本図……	39	61 W I65竪穴出土土器の実測図……	74
27 R G05竪穴出土遺物の位置………	40	62 M B05竪穴の平面図と断面図……	74
28 R G05竪穴出土土器の拓本図……	41	63 M B05竪穴跡の平面図および断 面図……………	75
29 R G05竪穴出土土器の実測図……	42	64 M B05竪穴出土遺物と覆土中の焼 土位置……………	76
30 R G05竪穴出土の石器実測図……	43	65 M B05竪穴出土土器の拓本図……	77
31 T L12竪穴の平面・断面図………	44	66 M B05竪穴出土土器の拓本図……	78
32 T L12竪穴跡の平面図と断面図…	45	67 M B05竪穴出土土器の実測図……	79
33 T L12竪穴のローム分布・堆積状 況……………	46	68 M B05竪穴出土の石器実測図……	80
34 T L12竪穴出土遺物の位置………	47	69 X J40竪穴の平面図と断面図……	81
35 T L12竪穴出土土器の拓本図……	48	70 X J40竪穴跡の平面図と断面図……	82
		71 X J40竪穴出土遺物と覆土中の焼 土の位置……………	83
		72 X J40竪穴出土土器の拓本図……	84
		73 X J40竪穴出土土器の拓本図……	85

図74 X J 40整穴出土土器の実測図……	85	図112 N O 31整穴出土土器の拓本図…	123
75 X J 40整穴出土の石器実測図……	85	113 D C 12整穴の平面図と断面図…	124
76 K E 12整穴の平面図……	87	114 D C 12整穴出土遺物の位置……	125
77 K E 12整穴の断面図……	88	115 D C 12整穴出土土器の拓本図…	125
78 K E 12整穴伊止の平面図と断面図…	89	116 Z R 40整穴の平面図と炭化材の	
79 K E 12整穴出土遺物と覆土中の焼		出土状況……	126
土の位置……	91	117 Z R 40整穴出土土器の拓本図…	127
80 K E 12整穴出土土器の拓本図……	92	118 E R 34整穴の平面図……	128
81 K E 12整穴出土土器の拓本図……	93	119 E R 34整穴出土土器の拓本図…	129
82 K E 12整穴出土土器の拓本図……	94	120 E L 12整穴の平面図……	130
83 K E 12整穴出土土器の拓本図……	95	121 K L 25整穴の平面図と断面図…	131
84 K E 12整穴出土土器の拓本図……	96	122 K L 25整穴出土遺物の位置……	132
85 K E 12整穴出土土器の実測図……	96	123 K L 25整穴出土土器の拓本図…	133
86 K E 12整穴出土の石器実測図……	97	124 K L 25整穴出土の石器実測図…	133
87 R Z 25整穴の平面図と断面図……	99	125 A B 12整穴の平面・断面図……	134
88 R Z 25整穴の断面図……	100	126 A B 12整穴出土土器の拓本図…	135
89 R Z 25整穴伊止の平面図と断面図…	100	127 A B 12整穴出土の石器実測図…	136
90 R Z 25整穴出土土器の拓本図と土		128 B M 75整穴の平面図と断面図…	137
製品の実測図……	102	129 B M 75整穴出土の石器実測図…	138
91 R Z 25整穴出土土器の実測図……	103	130 F U 69整穴の平面図と断面図…	139
92 R Z 25整穴出土の石器実測図……	103	131 F U 69整穴伊止の平面図と断面	
93 S P 38, P 011整穴の平面図……	105	図……	139
94 S P 38, P 011整穴の断面図……	106	132 F U 69整穴出土遺物と覆土中の	
95 S P 38整穴伊止の平面図と断面図…	107	焼土の位置……	140
96 S P 38整穴出土遺物と覆土中の焼		133 F U 69整穴出土土器の拓本図…	140
土の位置……	108	134 F U 69整穴出土土器の拓本図…	141
97 S P 38整穴出土土器の拓本図……	109	135 F U 69整穴の土器割い伊止に使	
98 S P 38整穴出土土器の拓本図……	110	用された破片……	142
99 S P 38整穴出土土器の拓本図……	111	136 F U 69整穴出土土器の実測図…	142
100 S P 38整穴出土土器の拓本図……	112	137 F U 69整穴出土の石器実測図…	143
101 S P 38整穴出土土器の拓本図……	113	138 小整穴の位置……	144
102 S P 38整穴出土土器の拓本図……	114	139 P 002-4および小整穴の平面図	
103 S P 38整穴出土土器の拓本図……	115	と断面図……	145
104 S P 38整穴出土土器の拓本図……	116	140 P 002・P 003小整穴出土遺物の	
105 S P 38整穴出土土器の拓本図……	117	位置……	145
106 S P 38, P 011整穴出土土器実測図…	118	141 P 002小整穴出土土器の拓本図…	146
107 S P 38整穴出土の石器実測図……	119	142 P 002小整穴出土土器の実測図…	147
108 S P 38整穴出土の石器実測図……	120	143 P 002小整穴出土の石器実測図…	147
109 N O 31整穴の平面図と断面図……	122	144 P 003小整穴出土土器の拓本図…	149
110 N O 31整穴伊止の平面図と断面図…	123	145 P 005小整穴の平面図と断面図…	151
111 N O 31整穴出土遺物の位置……	123	146 P 005小整穴出土土器の拓本図…	151

図147 P008・P002・P007小竪穴の平面 図と断面図……………	153	図186 包含層出土土器拓本図……………	207
148 P009小竪穴の平面図と断面図…	154	187 包含層出土土器拓本図……………	208
149 P010・P001小竪穴の平面図と 断面図……………	155	188 包含層出土土器拓本図……………	209
150 P004伊庭の実測図……………	156	189 包含層出土土器拓本図……………	210
151 P-8区群の平面図と断面図…	158	190 包含層出土土器拓本図・実測図…	211
152 包含層出土土器拓本図……………	166	191 包含層出土円錐状土製品……………	217
153 包含層出土土器拓本図……………	167	192 包含層出土石器の分布……………	218
154 包含層出土土器拓本図……………	168	193 包含層出土石器……………	219
155 包含層出土土器拓本図……………	169	194 包含層出土石器……………	221
156 包含層出土土器拓本図……………	170	195 包含層出土石器……………	222
157 包含層出土土器拓本図……………	171	196 包含層出土石器……………	223
158 包含層出土土器拓本図……………	172	197 包含層出土石器……………	226
159 包含層出土土器拓本図……………	173	198 包含層出土石器……………	227
160 包含層出土土器拓本図……………	174	199 包含層出土石器……………	228
161 包含層出土土器拓本図……………	175	200 包含層出土石器……………	229
162 包含層出土土器拓本図……………	176	201 包含層出土石器……………	231
163 包含層出土土器拓本図……………	178	202 包含層出土石器……………	233
164 包含層出土土器拓本図……………	179	203 包含層出土石器……………	234
165 包含層出土土器拓本図……………	181	204 包含層出土石器……………	235
166 包含層出土土器拓本図……………	183	205 包含層出土石器……………	236
167 包含層出土土器拓本図……………	184	206 包含層出土石器……………	237
168 包含層出土土器拓本図……………	186	207 包含層出土石器……………	238
169 包含層出土土器拓本図……………	187	208 包含層出土石器……………	239
170 包含層出土土器拓本図……………	188	209 包含層出土石器……………	240
171 包含層出土土器拓本図……………	189	210 包含層出土石器……………	241
172 包含層出土土器拓本図……………	191	211 包含層出土石器……………	242
173 包含層出土土器拓本図……………	192	212 包含層出土石器……………	243
174 包含層出土土器拓本図……………	193	213 包含層出土石器……………	244
175 包含層出土土器拓本図……………	194	214 包含層出土石器……………	245
176 包含層出土土器拓本図……………	195	215 包含層出土石器類の分布……………	247
177 包含層出土土器拓本図……………	196	216 包含層出土石器類の器種別構成比…	247
178 包含層出土土器拓本図……………	197	217 竪穴の長さとそのグルーピング…	250
179 包含層出土土器拓本図……………	198	218 大きさのグルーピングによる各 型式別竪穴分布……………	251
180 包含層出土土器拓本図……………	199	219 竪穴形態の異同……………	252
181 包含層出土土器拓本図……………	200	220 平均的な竪穴形態のモデル……………	253
182 包含層出土土器拓本図……………	201	221 竪穴基部が直線状となす竪穴の 分布……………	253
183 包含層出土土器拓本図……………	202	222 各竪穴における主柱穴の分布…	255
184 包含層出土土器拓本図……………	203	223 竪穴の改築と石囲炉の改築の関 係……………	259
185 包含層出土土器拓本図……………	205		

図224	石圍炉の改築状況から推定される建て替え以前の竈穴……………	260
225	石圍炉の改築方法とそこから推定される竈穴改築の2つのタイプ……………	261
226	石圍いの遺存する炉の分布……………	261
227	竈穴の遺物出土量……………	263
228	竈穴形状の変遷……………	264
229	竈穴群の変遷……………	265
230	千歳6遺跡出土の短刻線文土器群……………	274
231	千歳6遺跡出土短刻線文土器群の器種分類……………	275
232	千歳6遺跡出土の余市式土器……………	279
233	千歳6遺跡出土余市式土器の器種構成……………	280
234	他遺跡出土の余市式土器……………	281
写真1	短刻線文土器群の内面……………	269
2	短刻線文土器群の口唇……………	269
3	短刻線文土器群の底面(a)および底縁部(b)……………	270
4	短刻線文土器群の内面に残る縞帯条痕……………	270
5	短刻線文土器群の縄文……………	271
6	短刻線文土器群の貼付帯部における縄文の縮文……………	272
7	短刻線文土器群の無文帯の形成……………	272
8	余市式土器の内面(a)と底面(b)……………	277
9	余市式土器の口唇……………	277
10	余市式土器の縄文……………	278
11	余市式土器の貼付帯……………	278
12	他遺跡出土の余市式土器……………	282

挿表目次

表1	千歳6遺跡における遺構別の遺物出土数……………	159
2	千歳6遺跡包含層出土遺物点数……………	160
3	千歳6遺跡出土土器の調査区別出土点数……………	161
4	短刻線文土器群(Ⅲ2a群)の分類別出土点数……………	213
5	竈穴の長さ・幅・構成比……………	250

写真图版

- 图版1 遺跡全景
 2 遺跡全景
 3 遺跡全景
 4 遺跡全景
 5 S R 25 整穴
 6 S R 25 整穴
 7 S R 25 整穴
 8 S R 25 整穴
 9 X L 25 整穴
 10 X L 25 整穴
 11 X L 25 整穴
 12 R G 05 整穴
 13 R G 05 整穴
 14 R G 05 整穴
 15 T L 12 整穴
 16 T L 12 整穴
 17 T L 12 整穴
 18 C B 75 整穴
 19 C B 75 整穴
 20 C B 75 整穴
 21 M T 05 整穴
 22 M T 05 整穴
 23 M T 05 整穴
 24 X R 80 整穴
 25 X R 80 整穴
 26 W I 65 整穴
 27 W I 65 整穴
 28 W I 65 整穴
 29 W I 65 整穴
 30 M B 05 整穴
 31 M B 05 整穴
 32 M B 05 整穴
 33 M B 05 整穴
 34 X J 40 整穴
 35 X J 40 整穴
 36 K E 12 整穴
 37 K E 12 整穴
 38 K E 12 整穴

图版39 KE12整穴

- 40 K E 12 整穴
 41 K E 12 整穴
 42 R Z 25 整穴
 43 R Z 25 整穴
 44 R Z 25 整穴
 45 S P 38 整穴
 46 S P 38 整穴
 47 S P 38 整穴
 48 S P 38 整穴
 49 S P 38 整穴
 50 S P 38 整穴
 51 S P 38 整穴
 52 S P 38 整穴
 53 S P 38 整穴
 54 S P 38 整穴
 55 S P 38 整穴
 56 N O 31 - D C 12 整穴
 57 Z R 40 整穴
 58 E R 34 整穴
 59 E L 12 整穴
 60 E L 12 整穴
 61 K L 25 整穴
 62 F U 69 整穴
 63 F U 69 整穴
 64 小整穴群
 65 P 002 小整穴
 66 P 002 小整穴
 67 P 003 小整穴, P 005 小整穴
 68 P 008 小整穴
 69 P 009 小整穴, P 001 小整穴
 70 F 004 屋外炉址
 71 P 011 小整穴
 72 P 011 小整穴
 73 P-8 区碳群, A B 12 整穴
 74 包含層出土土器
 75 包含層出土土器
 76 包含層出土土器
 77 包含層出土土器
 78 包含層出土土器
 79 包含層出土土器

- 图版80 包含器出土器
81 包含器出土器
82 包含器出土器
83 包含器出土器
84 包含器出土器
85 包含器出土器
86 包含器出土器
87 包含器出土器
88 包含器出土器
89 包含器出土器

写真凶版



図版1 遺跡全景



遺跡周辺の航空写真（国土地理院発行の1万分の1空中写真を複製した。○印は千歳6遺跡）

図版 2 遺跡全景



調査終了後の遺跡全景

図版3 遺跡全景



墓穴の分布状況

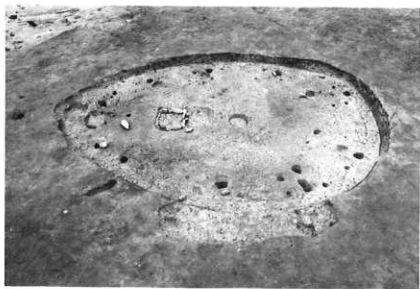
図版4 遺跡全景



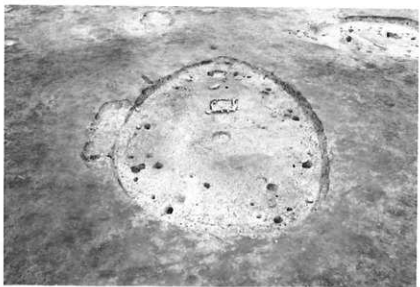
影穴の分布状況



調査状況



竖穴全景



竖穴全景

图版6 SR25竖穴

炭化木出土状況



葬具

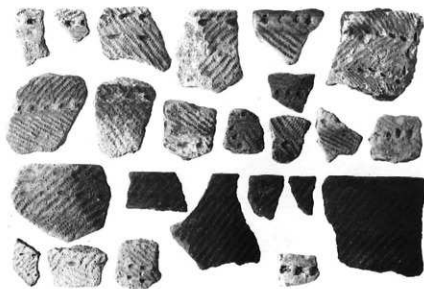


葬具





炭化材出土状況



覆土中出土のⅡ2a群土器

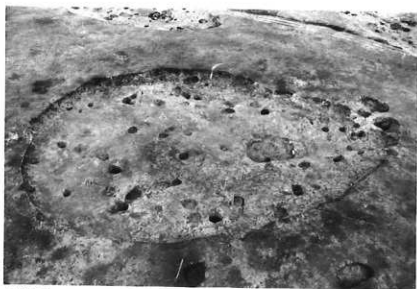
図版8 SR25竪穴



覆土中出土の円盤状土製品



床面および覆土中出土の石器

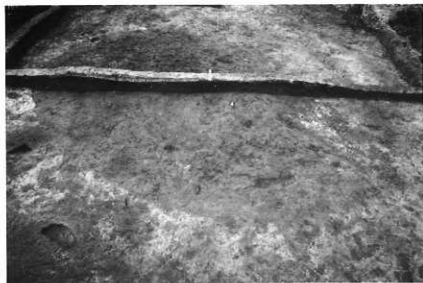


整穴全景



整穴全景

図版10 XL25竪穴



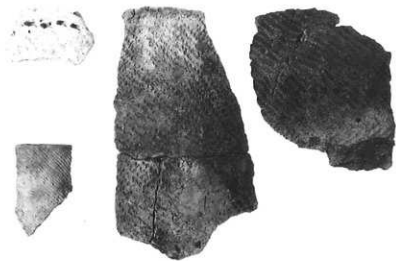
確認面の状況



か址



床面出土土器 (Ⅲ2 = 群土器)



床面および床面直上出土土器



床面および覆土中出土石器（擦り石は、上が裏面而下が擦り面を示す）

图版12 RG05整穴



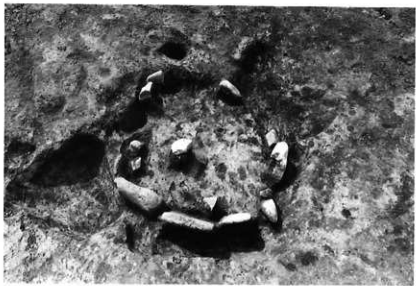
整穴全景



整穴全景



整穴全景



炉址

図版14 RG05整穴



床面および床面直上出土土器



床面、床面直上および覆土中出土石器



竪穴全景（竪穴内小竪穴は未調査）



竪穴基部の小竪穴

図版16 T.L.12竪穴



調査状況



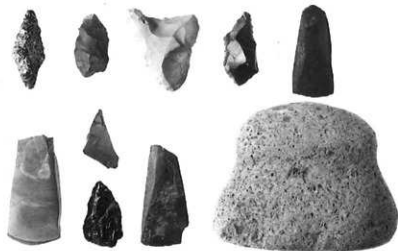
竪穴側壁に堆積したロームの状態



床面出土土器



覆土中出土のⅡ2 a群 a類土器



床面、床底、覆土中出土石器

図版18 CB75竪穴



竪穴全景



竪穴全景



石冠出土状况(覆土中)

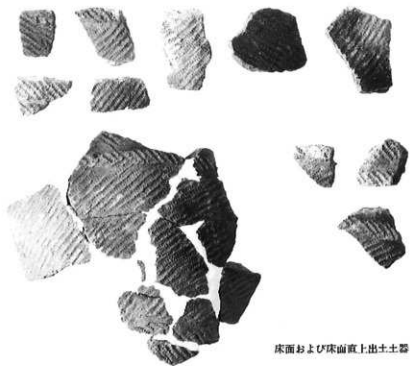


炉址



覆土中出土土器

図版20 CB75整穴



床面および床面直上出土土器



床面、床直、覆土中出土土器



整穴全景



整穴全景

図版22 MT05竪穴



石皿の出土状況（覆土上部）



床面および床面直上出土土器



石皿（左上：側面，右上：上面，下：底面）／床面および覆土中出土石器

图版24 XR80斝穴



斝穴全景



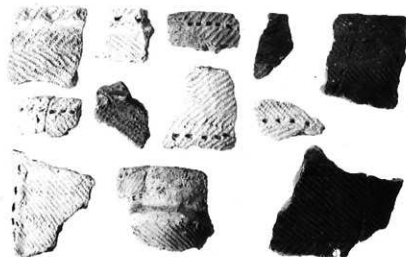
斝穴全景



炉址



床面出土の土器

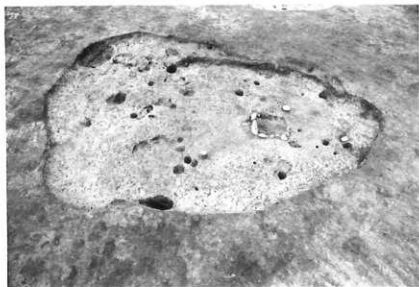


覆土中出土のⅢ 2 a 群土器



覆土中出土の石器

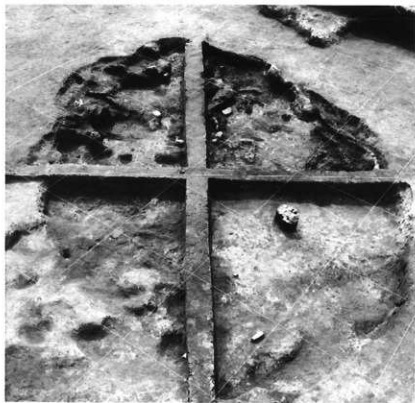
图版26 WI 65竖穴



竖穴全景



竖穴全景



炭化材出土状況



柱穴内の炭化材

図版28 W165竪穴



炭化材 (床面)



炭化材 (炉址)



炭化材（竪穴内）



炭化材（表）



床面出土の円盤状土製品／覆土中出土石器

図版30 MB05竪穴



竪穴全景



竪穴全景

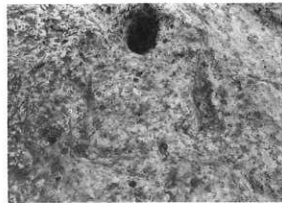


土器の出土状況（覆土中）

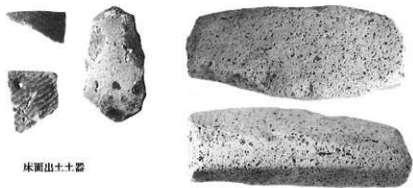


III 2 の群土器の出土状況

図版32 MB05竪穴



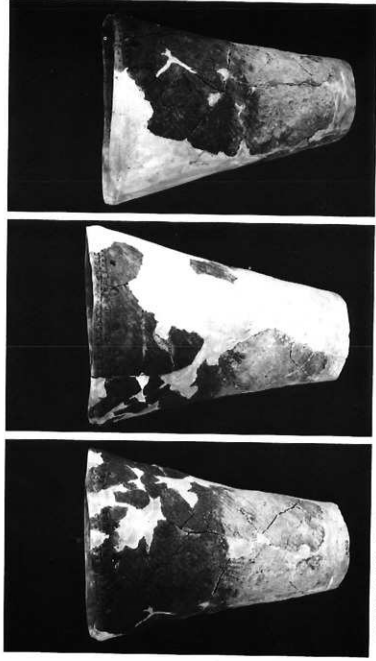
竪穴



床面出土石器

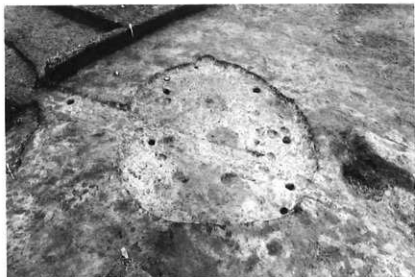


床面直上。覆土中出土石器（擦り石は上が側面，下が擦り面）

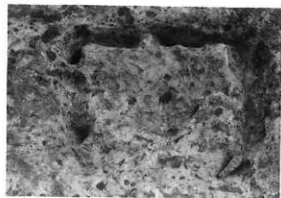


竪穴先端部の壁をより出した皿2と群土器(1/3)重つつ回転して撮影)

図版34 XJ40整穴



整穴全景



竪穴



床面および床面直上出土の土器と円盤状土製品

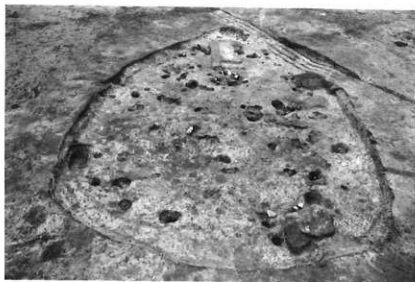


覆土中出土の石器

图版36 KE12竖穴

竖穴全形





竪穴全景



竪穴先端部



9+址



III 2 a 群上部の出土状況 (覆土中)



床面出土の上器と円盤状土製品



床面直上出土の上器

図版40 KE12竪穴



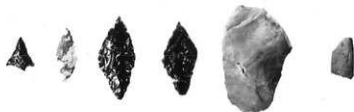
床面上および覆土中出土の土器



覆土中出土の乱線文土器と円盤状土製品



覆土中出土のⅢ1群土器

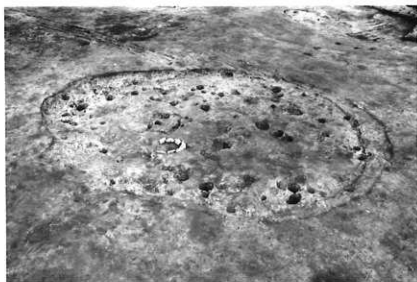


床面および床面直上出土の石器

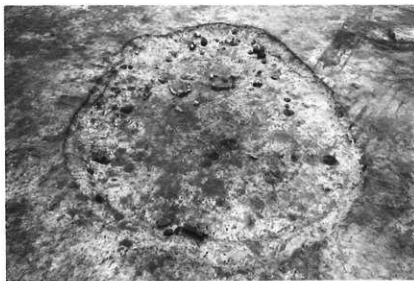


覆土中出土の石器

图版42 RZ25竖穴



竖穴全景



竖穴全景



炉址



炉址



炉址

図版44 RZ25竪穴



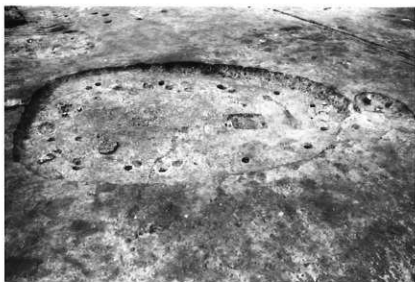
伊豆出土のボール状
土製品



覆土中出土の土器



床面、床面直上、覆土中出土の石器



竖穴全景



竖穴全景

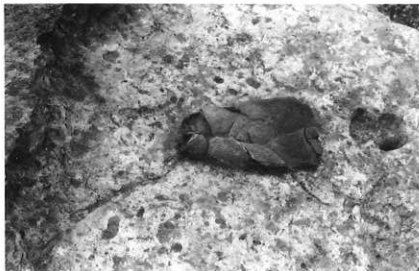
図版46 SP38竪穴



遺物出土状況（床面直上～覆土中）



遺物出土状況（床面直上）



土器の出土状況 (床面)



同上



床面の検出状況



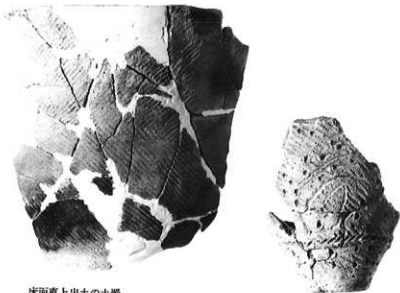
炉址



覆土中の遺物出土状況



複土中出土のⅡ 群土器（前面と側面）



床面直上出土の土器

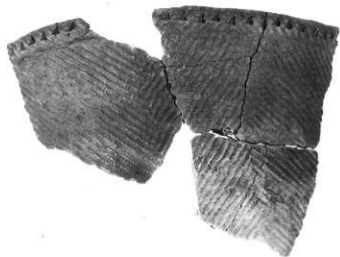
図版50 SP38竪穴



床面直上出土の土器



覆土中出土の円盤状土製品



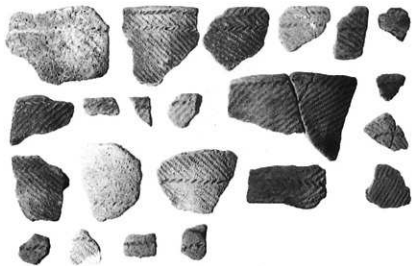
竪土中出土のⅡ2a群a類土器



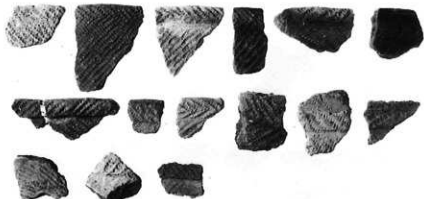
竪土中出土のⅡ2a群a類土器



覆土中出土のⅡ2 a群 a類土器



覆土中出土のⅡ2 a群 b類土器



覆土中出土のⅡ2 a 群 d 類土器



覆土中出土のⅡ2 a 群 c 類土器



覆土中出土のⅡ2 a 群 e1 類土器

図版54 SP38竪穴



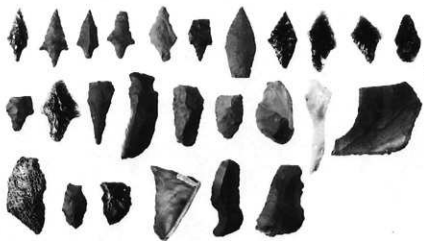
竪土中出土のⅢ2 a 群 e1 類土器 (縦位回転の織文)



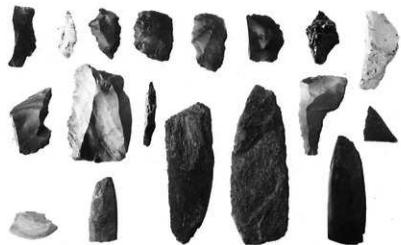
竪土中出土のⅢ2 b 群土器



床面および床面直上出土の石器



覆土中出土の石器

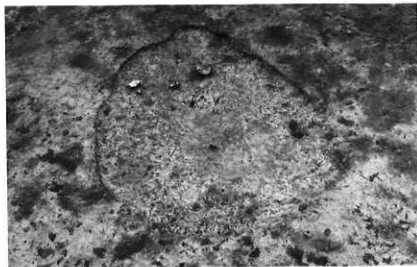


覆土中出土の石器

図版56 NO31・DC12竪穴



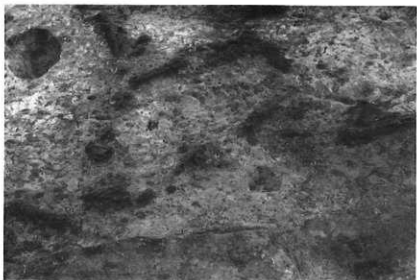
NO31竪穴全景と出土土師



DC12竪穴全景

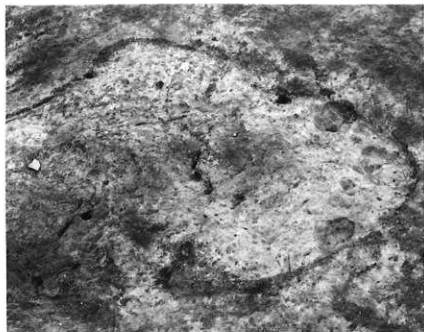


竪穴全景



炭化材出土状況

图版58 ER34竖穴



整穴全景



出土土器



竪穴全景



遺物出土状況

図版60 E L12竪穴



遺物出土状況



遺物出土状況



整穴全景



出土石器



出土土器

図版62 FU69竪穴

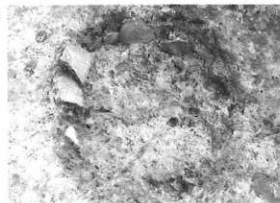


竪穴全景



土器の出土状況（覆土中）

炉址



出土石器



床面上部と炉址に使用された土器

圖版64 小豎穴群



全景



全景



遺物出土状況

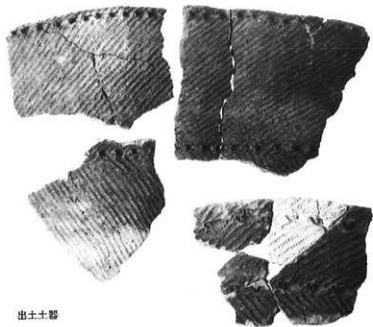


遺物出土状況

図版66 P002小壘穴



遺物出土状況



出土土器



P003小竖穴出土土器



P003小竖穴出土石器



P005小竖穴全景

圖版68 P008小豎穴

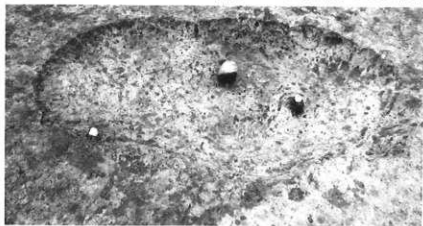


全景



全景

圖版69 P009小豎穴, P001小豎穴



P009小豎穴



P001小豎穴

图版70 F004屋外炉址



上面觀



側面觀

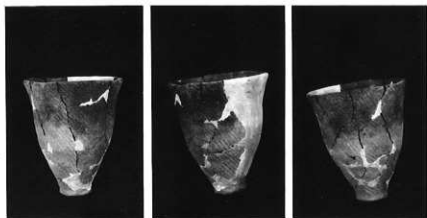


全景



遺物の出土状況

図版72 P011小壺穴



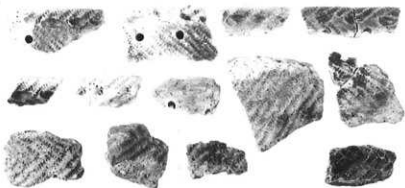
床面出土土器（ $\frac{1}{3}$ 面づつ回転して撮影）



床面出土土器



P-8区碑群



AB12竖穴出土土器

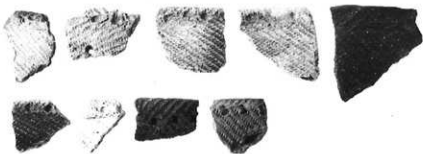
图版74 包含层出土土器



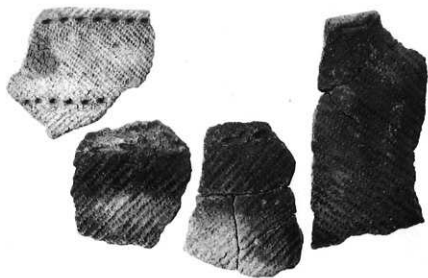
Ⅲ 2 a 群 a 類 (图152)



Ⅲ 2 a 群 a 類 (图152)



Ⅲ 2 a 群 a 類 (图153)

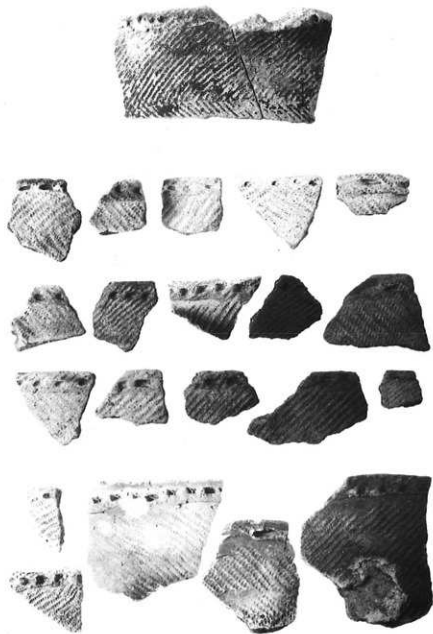


Ⅲ 2 a 群 a 類 (図152)



Ⅲ 2 a 群 a 類 (図154)

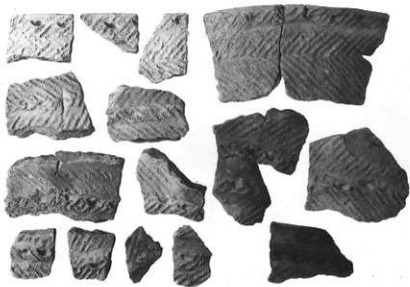
图版76 包含层出土器



III 2 群 A 類 (图154)

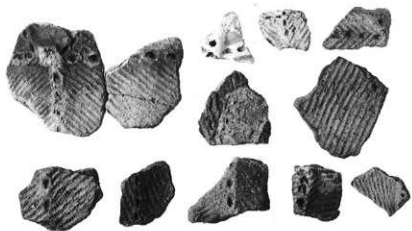


III 2 a 群 a 類 (图155)



III 2 a 群 a 類 (图155)

图版78 包含层出土器



Ⅲ 2 a 群 a 類 (图156)



Ⅲ 2 a 群 a 類 (图156)

图版79 包含层出土器



III 2 a 群a 類 (图157)

图版80 包含层出土土器





III 2 a 群 a 類 (图159)



III 2 a 群 a 類 (图160)

圖版82 包含層出土土器



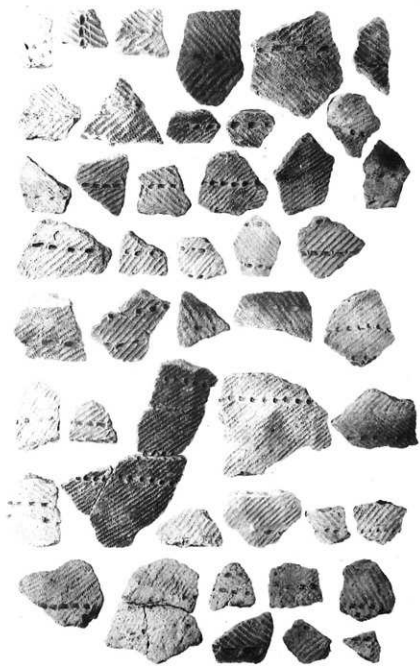
III 2 a 群 a 類 (圖160)



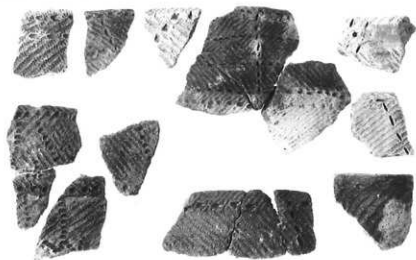
III 2 a 群 a 類 (圖161)



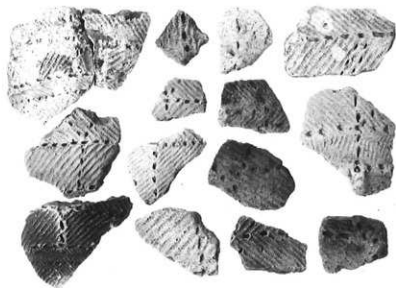
III 2 a 群 a 類 (圖161)



图版84 包含层出土器



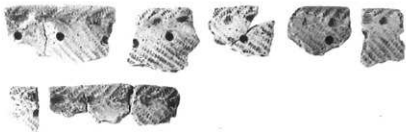
Ⅲ 2 a 群 a 類 (图163)



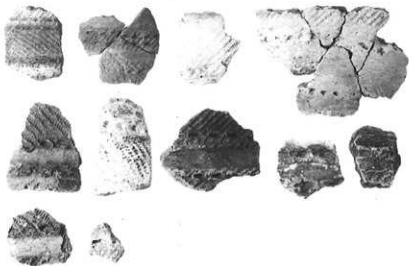
Ⅲ 2 a 群 a 類 (图163)



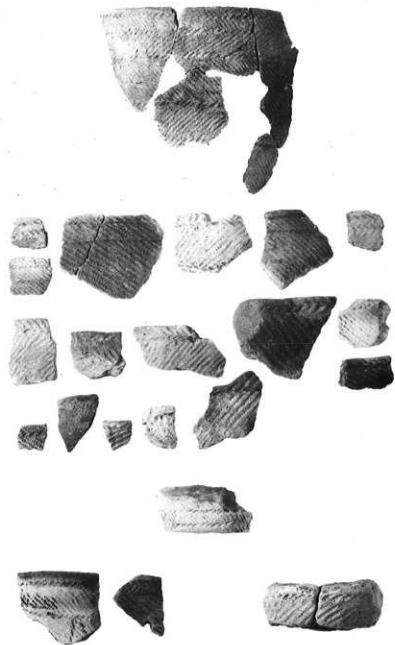
III 2 a 群 d 類 (图164)



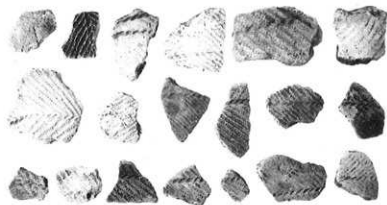
III 2 a 群 d 類 (图164)



III 2 a 群 d 類 (图164)



III 2 a 群 b 類 (图166)

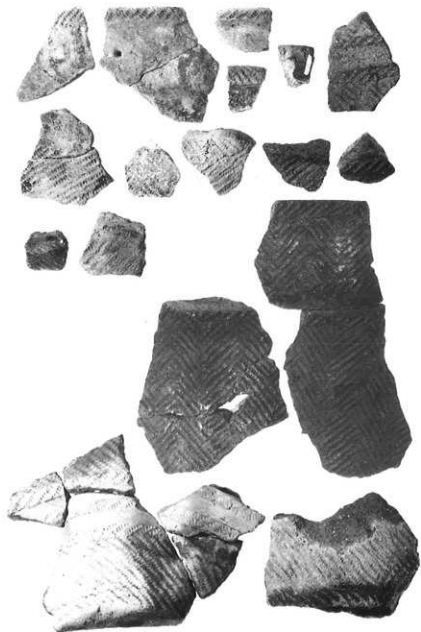


Ⅲ 2 a 群 b 類 (图165)

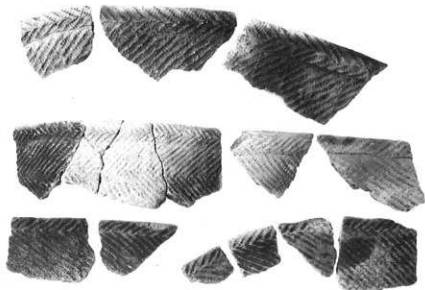


Ⅲ 2 a 群 b 類 (图166)

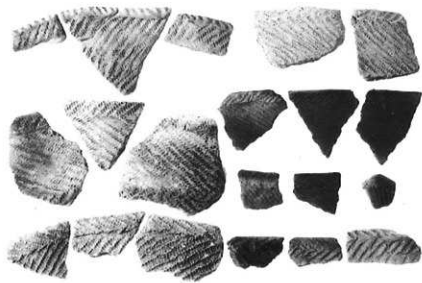
图版88 包含层出土土器



III 2 a 群 c 類 (K167)



III 2 a 群 d 類 (图168)



III 2 a 群 d 類 (图168)